

奇譚クラス

新しい風俗文誌誌

1965・6

6月号



奇譚クラス



6月号

定価三〇〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



6月号

¥ 300

限定版……………写真集

美しき縛しめ

第四集

頒価 一〇〇〇円(送共)

略号(美4)

華々しき女体緊縛の組写真集

最新撮影の新しいモデル、山原清子、木村洋子、玉田美佐子による美しい緊縛写真集。オトなど、この数ヶ月に亘って、フォト・アルバム「美しき縛しめ」用として撮影し保存した写真集を、極めて鮮明なるグラビヤ印刷の特アール紙によって、皆様にのぞんでお楽しみください。写真はすべて未発表のものとなっております。

の傑作ばかりです。各モデルの個性をそれぞれに十二分に発揮した文藝的価値豊かなオト揃いの十二分。春の暖気に匂う花の如く全紙面から、にっこりと微笑みかけています。す。緊縛による苦悶や苦痛も、皆様に頂戴する。どうか、この素晴らしい一冊をお求め下さるよう心からお待ちいたします。

一般書店売りは一切いたしません。直接発行所へお申込み下さい。

◎縛られた美女ばかりの美しいフォトアルバムです。この一冊により、新しいモデルの新しい緊縛ポーズを十二分にお楽しみ下さい。

登場モデル——山原清子——木村洋子——玉田美佐子——大塚啓子

待望久しきアルバム「美しき縛しめ」(第四集)ここに完成、御注文下さいました皆様へいち早く発送いたしましたところ、予想通り、の素晴らしい出来栄と、誠にありがとうございます。目下、本誌に於けるグラビヤ写真の掲載が自粛せざるを得ない情勢です。マニヤの方々のコレクション用として、写真集の充実が叫ばれる所以であります。

本誌内容の充実と相俟って、限定版の写真集によって、部数は極めて少くはありますが、秀なフォトを盛沢山に収めてお楽しみの方々の御期待にこたえたいと考えております。今後、次発売してゆきます写真集を全部お揃え下さいますこと、本誌女体緊縛の主要なものが揃えたいと、文庫集として、有意義なものとなることと致しやう。

◇写真集(アルバム)内容◇

- 刺青女体の逆エビ責め (山原清子)
- 鉄扉に緊縛晒し責め (玉田美佐子)
- ブロッコ石抱き責め (木村洋子)
- 箱子と浣腸器の鼻責め (大塚啓子)
- 両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)
- 古墳後手吊り組写真 (木村洋子)
- 両手吊りに悶える組写真 (山原清子)
- 逆さ吊り揺れる女体 (木村洋子)
- 猿ぐつわ百態組写真 (大塚啓子)
- 革拘束具による組写真 (大塚啓子)
- 柱縛りの庭園晒し (玉田美佐子)
- セーラー服緊縛組写真 (大塚啓子)
- 野外に於ける晒し責め (玉田、木村)
- 刺青女体の柱縛り責め (山原清子)
- 捕獲された女裸身の悶え (大塚啓子)
- 入墨に映える緊縛絵模様 (山原清子)
- 両足吊りの表と裏 (山原清子)

以上緊縛写真八十葉

以上の通り、本誌のグラビヤにして、何れ月分にも相当する豊富な女体緊縛写真を、特アール紙に収めてお楽しみ下さい。必ずしも、写真集を完成したと信じて下さい。限定版につき、御満足を御覧下さい。是非、お早にお申込み下さい。

新人モデル美木乃々子嬢の熱演 日本女性拷問刑罰集

大好評注文殺到

キャビネ版印画紙焼付

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

木馬責め

三枚一組 略号(もと)

後手高小手にきびしく縛しめられた腰巻一枚の女囚が、三角木馬のとがった背に跨がされて、その痛みに髪を乱して泣き叫び、その姿の全身を、刻明に鮮鋭なレンズによって捉えたスチール。若くて美しいモデルの足の爪先から髪にまで、女の哀れさと悲しさが、いきいきと描かれています。

海老責め

三枚一組 略号(もに)

若い女囚に対する海老責めは、まことにエロチシズムとサジズムの極致といっているであろう。又した足首を揃えて縛り、うつ伏せに二つ折りになるまで締めつけられ、美しい両足の指は、くの字にそり反り、その激しい苦痛と羞恥に悶え悶えめくのである。二の腕に胸の膨らみに埋まるように喰い込んだ細目の痛々しさ。

笞打ち折檻

三枚一組 略号(もほ)

白洲の冷たい粗砂の上に引きずえられた高小手縛りの女囚は、首を引くしぼられて白状を強いられたが、返答をしないために竹をさきさきに割った蓋で、後手に縛られていたため盛り上るようにつき出た肩先をしたたかに打たれるのだ。血がにじめば白洲の砂を肌にしり込んで白状するまで、打ち続ける無惨なありさま。

土壇で胴斬り

三枚一組 略号(もり)

新刀の試し斬りに胴を真二つに斬られようとする哀れな死罪相当の若い女囚。今やもがき泣き喚いても逃れるすべもなく、脇を中心とした胸の部分をさらけだされて土壇の上に仰向けに寝かされ顔には白紙で目かくしをされて斬られようとする女囚。観念して静かに身を横たえる女の全身には、サジスチックな静寂がある。

石抱き算盤責め

三枚一組 略号(もへ)

下着のすそをはねのけて、女の素肌をじかに算盤板のギザギザが喰い込むのでさえ耐えられない痛さなのに、正座した膝の上へ更に伊豆石をのせるというのである。その苦痛たるや想像を絶するものがあるであろう。それでも白状しないので更に非人が、その膝の上の石を揺って悶絶するまで責め抜くのである。

竹棒責め

三枚一組 略号(もち)

腰巻一枚にひんめくられた若い女囚の両手は背後で首筋にとどくまで高く持ち上げられ、二の腕と胸には、どす黒い捕縄が情容赦もなく力まかせに、うす汚ない非人の手によって縛られている。そして白洲の砂の上で引きずえられた女囚には更に竹の棒を細目の間にねじ込められて、白状するまで締めあげられるのである。

開股羞恥責め

三枚一組 略号(もめ)

女性というものは、若痛に對して案外しぶとい耐久力を持つていゝものである。身動きもできない高小手縛りの女囚を白洲に引きずえ、腰巻の乱れを必死に防ごうとはかない努力を続ける真白い足を八の字に開かせ、その柔かい足首に非情の細引きを喰い込ませようというのである。女囚の哀願と悲鳴の尾をひくなかで。

白洲に悶える

三枚一組 略号(もは)

均整のとれた奇麗な肢体と肌、殊にすらりと伸びた腰と素足の可愛らしい美木モデル嬢が、白洲の上で厳しく縛られ、悲しさと恥しさに悶える美しい哀婉ポーズを展開しています。これこそ女囚の悲愴美の至極をきわめた好演技といえるでしょう。こうしてS派の皆さまの目に、いつまでもこのポーズを晒したいのでしよう。

美木乃々子嬢の体当りの演技と読者の賞賛は、本誌のグラビヤ写真集の第一回作品をここに発表することに非一見下さい。

玉取姫のモデル山原清子嬢の仕置図

第一回作品発表

キヤビネ版印画紙焼付

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

入墨女賊拷問刑罰集

逆さ吊りの仕置

三枚一組 略号(よき)

荒縄できりきりと縛りあげられた女賊は、両足首に取縄を何重にも巻かれて高々と逆さに吊り上げられる。首がかるうじて床についているが血が逆行する苦しさを耐え忍んでいるところへ、非情な竹の折檻棒が豊満な乳房や咽喉元に烈しい苛責のムチを加える。流石の女賊も氣息えんえんとして、ぐったりと吊られたままである。

答打ち白洲糾問

三枚一組 略号(よゆ)

白洲へ荒むしるを敷いた上へ引き据えられた女賊は、先ず手荒なことをしないうちに有体に白状せよといわれたが、せせら笑って答えないので、打役の手でその入墨も見事な背中を、したたかに竹棒にて打ちまくられる。次第に変化する女賊の苦悶の形相も物凄く、全身を波うたせ、ムチの痛さに悶えるサジスチックな場面。

仰向け木馬責

三枚一組 略号(よひ)

木馬の四つの脚に両手両足をがちりと四方に縛りつけられて、仰向けに固定された女賊。いかに痛めつけても参らない女囚に対して、女の最も無防備な姿をさらけだした刑罰を強要した。女囚は只顔をのけぞらして、この羞恥責めに対して必死になって耐えているばかりである。裂けるような痛さに失神しそうになりながら。

全裸入墨女折檻

三枚一組 略号(よせ)

着ているものを一切むしり取られた女賊は、入墨の裸身をさらけ出して白洲の砂の上にはうり出された。男たちの目の前に裸で放置されるのも、さることながら素早い取縄は女をきびしい高手小手にした上、更に股間縛りにしてしまった。竹棒で追いまくられ、足蹴にされ、女囚は砂の上を転りまわって呻めき泣くのだった。

海老責の拷問

三枚一組 略号(よす)

いかにしぶとい女賊にしても、この海老責めだけは骨身にしみてこたえたことだろう。高手小手に両手首を高々と釣られた上、両足首と連結されて全身が二つ重ねにされた苦しさ。更に盛り上った肩先を竹がささらになるまで打ちのめされる痛さ。喘ぎつつ転った女賊の顔には竹棒の先が、白状せよと容赦なく突きあげてくる。

大の字磔処刑

三枚一組 略号(よさ)

遂に稀代の大罪を白状した女賊は、磔台に四肢をおもい切りひろげた大の字に固定されて、いよいよこれから胸斬り、足斬り、両腕斬り、首斬りの一寸刻み五分試しの断り殺しにされるのである。自分の身に、こんな恐ろしい運命が待っているとわかっていても、荒縄で大の字にハリツケられて女賊はどうすることも出来ない。

全裸四這木馬責

三枚一組 略号(よも)

木馬の四つ足に手足をひろげて四つ這いに縛られた女賊。見事な刺青をさらけて、その臀部も、背中も、肩口も、無防備のまま露出してはいる。力まかせの竹のささが、はっしとばかり豊満な臀部に背中を炸裂する。髪より乱れ絶叫しつづ耐え忍ぶ女賊の凄惨きわまりない光景。尚竹ムチは雨となつて裸身のあちこちに降り注ぐ。

ハリツケの拷問

三枚一組 略号(よめ)

かずかずの拷問仕置折檻に対しても、尚ますますその若さと美しさを發揮して衰れえを見せぬ女賊に対して、その美しさの残っている中にハリツケにしてしまおうと僅かに白布を前に当てた裸の女賊を磔架にかけてしまった。架上の美しい女賊の真白い肌も、やがて錆錆の穂先に貫かれて血汐にまみれることだろう。

背中から二の腕太股にまで刺青を施した稀代の女賊が捕縛されて白洲で厳しい糾問を受けた上、白状しないので全裸に剥かれて砂の上で折檻、更に逆さ吊り、海老責、木馬責、大の字磔と凄惨な拷問が重ねられるという想定である。

◆奇クサロン…編集部選…(9)

○言論出版の自由…編集部選(9)○カメラ・ハント志望「こんな私いいが？」
 …大谷勢津子(10)○読者投稿写真「自刃した婦人」…北原の介(11)○「
 ロン」…大谷勢津子(10)○読者投稿写真「自刃した婦人」…北原の介(11)○「
 写真」…大谷勢津子(10)○読者投稿写真「自刃した婦人」…北原の介(11)○「
 の妊婦が被害者」…大谷勢津子(10)○読者投稿写真「自刃した婦人」…北原の介(11)○「
 物を干すドレイ」…大谷勢津子(10)○読者投稿写真「自刃した婦人」…北原の介(11)○「
 によせて」…大谷勢津子(10)○読者投稿写真「自刃した婦人」…北原の介(11)○「
 夫(17)○「女性」…大谷勢津子(10)○読者投稿写真「自刃した婦人」…北原の介(11)○「
 の出現を喜ぶ」…大谷勢津子(10)○読者投稿写真「自刃した婦人」…北原の介(11)○「
 ヤ通信」…大谷勢津子(10)○読者投稿写真「自刃した婦人」…北原の介(11)○「
 談会の提唱」…大谷勢津子(10)○読者投稿写真「自刃した婦人」…北原の介(11)○「
 志男(21)○オムツカバ(20)○オムツ物話」…大谷勢津子(10)○読者投稿写真「自刃した婦人」…北原の介(11)○「
 奇クへの朗報」…大谷勢津子(10)○読者投稿写真「自刃した婦人」…北原の介(11)○「
 ヤの夢」…大谷勢津子(10)○読者投稿写真「自刃した婦人」…北原の介(11)○「
 レインコート」…大谷勢津子(10)○読者投稿写真「自刃した婦人」…北原の介(11)○「
 流 れい子」…大谷勢津子(10)○読者投稿写真「自刃した婦人」…北原の介(11)○「

△本文▽

孕み犬…羽鳥 水江…(26)
 無題(読者通信でもよろしい)…黒淵賀集子…(30)
 理恵子の罪と罰…原 由貴子…(34)
 ボクの責め方…宝塚二三夫…(38)
 SMカメラ・ハント(志村善子の巻)…辻村 隆…(40)
 「しなやかな女獣」…京都女斗菊…(48)
 山原清子さんの刺青フォートの感銘…山口 広…(52)
 懸賞募集原稿入選作品
 「緑の牝」…草の盛装 第三部…山口 広…(52)
 耽美主義者の手記より
 「夜は妖しく更けたれば」…夜乃 探郎…(72)
 娘相撲物語
 相撲に魅せられた娘たち…海野美津男…(78)
 女腹切譚「花散る里」を読んで…兵頭 庫一…(94)



辞典漫歩…山口 広…(97)

贋作・悩ましのサディズム…芳野 眉美…(101)

△森山美歌夫人に関する小品▽

悲運の皇女アンナ・コムネナ(後)黒淵 嬰一…(101)

「精神分析学より見た耽美の世界」…久我 庄一…(101)

思いつくままに…羽鳥 水江…(101)

――妊婦のことなど――

淪落した悪女の手紙…福田 久文…(101)

あるフェチシストの告白より

お腰と刺青と折檻…富士 春波…(101)

△告白▽モデルを志願したい私…毛利 園子…(101)

マソヒスチック・ストーリー

瑠理子様と私…北林 一登…(101)

洪沢竜彦の「快楽主義の哲学」について…夜乃 探郎…(101)

連載傑作小説

花と蛇 続編第八回…団 鬼六…(101)

悪書と悪映画…山口 広…(101)

――佐藤論文によせて――

「芳野眉美氏のファンとしてのことと、自分

のことと、そして、自分自身のための、CM」…葉山 啓…(101)

「嗜虐の歴史」…三原 寛…(101)

連載サディズム小説

婦人警官シユザンヌ・シヤラ…西条 操…(101)

心傷たむ遍歴 第十章そのかみのこと(十)

ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし…芳野 眉美…(101)

「SM時評」―新刊五月号を見て―

奇クは読者の声の花ざかり…橘 行司子…(101)

おヘソと死刑マニヤ…黒田 寿…(101)

読者通信…編集部選…(101)

玉取姫のモデル山原清子嬢の仕置図

第一回作品発表

キヤビネ版印画紙焼付

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

入墨女賊拷問刑罰集

逆さ吊りの仕置

三枚一組 略号(よき)

荒縄できりきりと縛りあげられ、た女賊は、両足首に取縄を何重にも巻かれて高々と逆さに吊り上げられる。首がかるうじて床についているが血が逆行する苦しさを耐え忍んでいるところへ、非情な竹の折檻棒が豊満な乳房や咽喉元に烈しい苛責のムチを加える。流石の女賊も氣息えんえんとして、ぐったりと吊られたままである。

答打ち白洲糾問

三枚一組 略号(よゆ)

白洲へ荒むしろを敷いた上へ引き据えられた女賊は、先ず手荒なことをしないうちに有体に白状せよといわれたが、せせら笑って答えないので、打役の手でその入墨も見事な背中を、したたかに竹棒にて打ちまくられる。次第に変化する女賊の苦悶の形相も物凄く、全身を波うたせ、ムチの痛さに悶えるサジスチックな場面。

仰向け木馬責

三枚一組 略号(よひ)

木馬の四つの脚に両手両足をがっちりと四方に縛りつけられて、仰向けに固定された女賊。いかに痛めつけても参らない女囚に対して、女の最も無防備な姿をさらけだした刑罰を強要した。女囚は只顔をのけぞらして、この羞恥責めばかりである。裂けるような痛さに失神しそうになりながら。

全裸入墨女折檻

三枚一組 略号(よせ)

着ているものを一切むしり取られた女賊は、入墨の裸身をさらけ出して白洲の砂の上にほうり出された。男たちの目の前に裸で放置されるのも、さることながら素早い取縄は女をきびしい高手小手にした上、更に股間縛りにしてしまつた。竹棒で追いまくられ、足蹴にされ、女囚は砂の上を転りまわって呻めき泣くのだつた。

海老責の拷問

三枚一組 略号(よす)

いかにしぶとい女賊にしても、この海老責めだけは骨身にしみてこたえたことだろう。高手小手に両手首を高々と釣られた上、両足首と連結されて全身が二つ重ねにされた苦しさ。更に盛り上った肩先を竹がささらになるまで打ちのめされる痛さ。喘ぎつつ転った女賊の顔には竹棒の先が、白状せよと容赦なく突きあげてくる。

大の字磔処刑

三枚一組 略号(よさ)

遂に稀代の大罪を白状した女賊は、磔台に四肢をおもい切りひろげた大の字に固定されて、いよいよこれから胴斬り、足斬り、両腕斬り、首斬りの一寸刻み五分試しの断り殺しにされるのである。白分の身に、こんな恐ろしい運命が待っているとはわかっていても、荒縄で大の字にハリツケられて女賊はどうすることも出来ない。

全裸四這木馬責

三枚一組 略号(よも)

木馬の四つ足に手足をひろげて四つ這いに縛られた女賊。見事な刺青をさらけて、その臀部も、背中も、肩口も、無防備のまま露出してゐる。力まかせの竹のささが、はっしとばかり豊満な臀部に背中を炸裂する。髪ふり乱し絶叫しつつ耐え忍ぶ女賊の凄惨きわまりない光景。尚竹ムチは雨となつて裸身のあちこちに降り注ぐ。

ハリツケの拷問

三枚一組 略号(よめ)

かずかずの拷問仕置折檻に對しても、尚ますますその若さと美しさを發揮して衰れえを見せぬ女賊に對して、その美しさの残つてゐる中にハリツケにしてしまおうと僅かに白布を前に当てた裸の女賊を磔架にかけてしまった。架上の美しい女賊の真白い肌も、やがて錆錆の穂先に貫かれて血汐にまみれることだろう。

背中から二の腕太股にまで刺青を施した稀代の女賊が捕縛されて白洲で激しい糾問を受けた上、白状しないので全裸に剥かれて砂の上で折檻、更に逆さ吊り、海老責、木馬責、大の字磔と凄惨な拷問が重ねられるという想定である。



現在日本では雑誌を出版したり、単行本を発行したりするのに、誰の許可もいらぬし、又何処へ納本する必要もない。出すのも止めるのも、勝手である。これはまことに当り前のことのようにあるが、戦前あった新聞紙法、出版法、治安維持法でガンジガラメに拘束されていた時代から考えると、本当に夢のような自由である。

と云って、憲法で何人も検閲はこれをしてはならないという言論出版の自由は、日本国民の教智によって獲得されたものではなかった。前記三法が廃止されたのは、いわば敗戦の落し児のようなもので、若し日本の敗戦という冷厳な事実がなかったなら、必ず存続していたことだろう。

治安維持法第十六条の良風の美俗安寧の秩序を乱す恐れありと認むるときは警察官はこれに対し発

売の禁止を命ずることを得。といった条文が、さしあたり最大限に活用され社会の浄化に大いに活躍するものと思われる。

が、敗戦によって手枷足枷なんにも無くなったと思つたら、大間違いで米進駐軍が日本を占領している間は、きびしい進駐軍の検閲があった。もっとも当時は進駐軍の検閲を受けているということさえ活字にする自由がなかったが、雑誌では創刊号が事前検閲、第二号以降は事後検閲という立て前だった。なにしろ少くとも月に一回多いときは二、三回も呼び出しを受けて油をしばられたわけだ。占領軍を侮辱する記事を載せた

というお叱りである。何の事かと思つと、白人に売春婦がいたというルポルタージュで、白人にそんな職業の女がいるということを書くのは白人に対する侮辱である。白人に対する侮辱は同じ白人である占領軍に対する侮辱である。だから、お前は自分の雑誌に占領軍を侮辱する記事を掲載したというのである。

どうも、白人の売春婦と占領軍に対する侮辱という点に関連が薄いように思えたのだが、議論しても始まらないので、ひたすら平身低頭、二度と白人に売春婦がいるというような記事は載せませんと誓つて許してもらつた。と、言うのは、その米軍の将校が、君が若し沖繩へ行つて重労働をさせられたくないんだつたら、こんな記事は載せないことだナ、と指さすので、四階のビルの窓から下を見てみると、嚴重に有刺鉄線がはりめぐらされた囲いの中で、米軍の古軍服を着せられた日本人が猿のようになうごめいていたからだ。

今でこそ、こんなことも書けるが、あの当時こんなことを書いたら、一も二もなく沖繩行きになつてたことだろう。そのうち、納本した雑誌に附箋がついて戻つてきて、今後納本する必要がない、と簡単に書いてあった。たしか、日本が完全に独立する一、二カ月前だったように記憶する。

何人も検閲はこれをしてはならない。この憲法の条文がひしひしと身をもつて感じられるようになったのは、それからである。現在の日本は自由の天国であらうか。徳川三百年の封建政治から、明治、大正、昭和の軍閥政治を経て日本人の骨の髄にまで官僚統制の枷がしみついていくような気がする。この国民性は十数年の自由の謳歌ぐらいでは、容易に改りそうにもない。しかし、今は過去のどの時代よりも幸福な時代であると言つてよいだろう。

この幸福な時代をいついつまでも享受するため、よし弱腰と蔑まれても自粛を続けてゆきたい。退却ラッパより進軍ラッパの方が勇ましいにきまつている。しかし、進軍ラッパを吹かない時の方が、どんなに困難で努力を要するかということを理解してほしい。

言論出版の自由

編集子



カメラ・ハント志望

「こんな私いかが？」

堺市 大谷勢津子

恋しき辻村隆様——。
勿論辻村様にお淑やかで、御理解のある奥様がいらっしゃる事を承知で、こう呼び掛けずにはおられない私でございます。お許し下さいませ。過去十八冊の奇クが、私を辻村様の虜にしたのでございます。

私は二十二才、独身でございますが、処女であるとは申し上げません。フットした事で許し合った男性が過去におりますが今は関係ありません。故郷は長崎ですが集団就職で大阪へ出て、最初の会社は期待外れで一年でやめ、堺の工業関係の会社の事務をとっております。

す。去年の暮、会社の寮を出て、お友達二人と下宿する様になりましたので、体の自由はききます。奇クも現在下宿の方へ直接送って戴いておりますので、以前の様に羞かしい思いをして店頭で買わずに済みますので助かります。

辻村隆様——。思い切って申し上げます。一度でよろしゅうございますから、私をモデルに使って写真を、とって戴けないでしょうか。今迄の奇クのグラビアは全部きりとして、アルバムに貼ってあり、最近二度ばかり編集部にお願ひして、分譲写真を送っていただきましたが、フットを見るたびに私の胸は弾み、何かわけもなく体中がカアーツと熱くなつてまいります。そして自分も一度でいいから、こんな風に縛られて、羞かしめられてみたい気持ちにかられてなりません。それには紳士でいられる辻村様をお願いするのが、私の夢を叶えてくれる最も手近な方法と考えついた次第でございます。私の希望は次に申上げるようなブレイでございます。

一、私のストッキングかパンティを口中に押しこんでその上から猿轡（形式的でなくほんとうに）をし、乳首を縄目に挟んで強く縛

って、乳首だけが、ポックリと突き出たようにする。

二、同じ様な猿轡で、私の両手足を背で一纏めにして縛り、徐々に体を吊り上げて、かろうじて、胸の隆起でささええている。

三、乳首にクリップを挟んで責め（私の乳首は大きい方で、小指の第一関節ぐらいあります）細針で突くとか、毛抜きでつまんで引張る。

四、乳首にクリップ（強いバネのもの）をはさんで、それに鎖をとりつけ、いろいろのおもしろさをブラ下げる。

五、両の乳首を細紐で強く縛って抜けないようにして、左右の乳首を胸の中央で一緒に縛る。胸のふくらみは大きいから、私が自分でやった時つききました。

大体、右に書きましたように、私は乳房、特に乳首に激しい責めを加えるのを好みます。その刹那が、私にとって一番生甲斐があります。同宿のアツコを誘いこんでこの乳首プレイの対象にしています。若し辻村様にこのお願いを叶えていただけたら、アツコを口説き落して御紹介し、いつかアツコと二人でとって戴ける日を夢見ています。

＜読者投稿写真＞



自刃した婦人

北京之介

カメラ・ハントのお写真は、余り判っきりしていませんので、のせて戴くのは差支えございませんが、なるべく余り顔の判っきりしたのは御勘弁下さい。報酬とかあとかされは決して申上げません。唯、私のフォトの、出来れば、乳首を中心にしたクローズアップのフォトだけは是非共いただきたいのです。

乳首を中心にした緊縛であればどんな縛りにでも我慢し、又辻村

様好みのポーズも致します。アツコにも近頃奇クを見せて、辻村様の文は読んでいますので、貴方様に興味をひかれていたようなので、私がいえばいやとはいわないと思います。又、縛り方やポーズは一切辻村様にお任せしますが、私が乳首プレイを好むことだけは御配慮下さい。

こんな私ですが、如何でしょうか？

私の最近のフォト一枚同封しま

した、身長一五六センチ、体重五〇・五キロ、色は少し黒い方です。もしよろしければアツコのフォトも送ります。辻村様の御返事お待ちしております。もし、辻村様がお忙しくて駄目なときは、乳首責めに御理解のある、紳士の、絶対安心な方を御紹介願えないでしょうか。

尚私の会社は週休制ですが、普通の日でも何とか理由つけて一日ぐらいいは休めますから、私の居間

を利用した方がゆっくりすると思えます。

阪堺線で、堺の宿院で下車して歩いて六・七分です。車でこられる場合、駐車するところありませんが、百米ばかり先にモータープールございます。では辻村隆様、夢を叶えていただける御返事一日千秋の思いで、お待ち申上げております。

かしこ

大谷勢津子

ひとり
病の床に
残された
濃艶な中
年の婦人
は、いま
まで「一
切の希望
を失った
彼女は、
孤独の中
の最後の
希望、美
しい肌も露わに凄絶な痛覚の中の
悶絶を敢然と試みたのであった。
そして……齒を喰いしばって、



苦痛の呻めきに、のたうちながら切り開いた雪白の下腹を着物で蔽いつつ、のけぞっていった。



辻村 隆

関西に所要のあった向井一也氏と、半年振りに会った。青木順子さんが健康を害して、故郷で静養中とのことで、一人の彼は何かなし淋しそうであった。熱海から富士市を廻って二月末、風邪をこじらせて彼女はめっきり衰弱し、相当痩せてしまったらしい。何しろ肉体の消耗の激しいSM劇であるから、これ以上巡業して行くことは、彼女の生命を擦り減らして自滅にも等しい状態らしい。再起を

願うや切であるが、向井氏は万一青木順子が再起不能の場合は、彼女に代るマゾ・プレーヤーを発掘するつもりだと抱負を述べておられた。奇クを通じて呼び掛けて欲しい様にも懇請されていたが、誰方が彼と組んでいただけの女性はおられませんか――。

糖尿病が出て最初はショックだった、食餌療法を続けていると、どうやら健康が回復して、肥満していたあの頃よりも、寧ろ体が軽く動き易い。一時はこの道から足を洗おうかとも悲壮に考えたが、元氣になってくると現金なもので、又ぞろアブの虫がうごめき始める。春と共にぞろぞろ出てくる虫にも似た「啓蟄」という奴であろうか。カメラハント志望の女性で、堺の大谷勢津子さんと仰有る二十二才の独身の女性がフोटオまで添えて、編集部を通じて申して来られたのに、そんな事情から丁寧にお断わりしたが、こんなことなら断わるのではなかった。と悔んでも後の祭りである。もう一度改めて手紙出すつもりでいるが、一旦断ったとなると、さて、色よき返事があるかどうか――。

「魔子」ちゃんに、その後も沢山連絡の手紙がありましたので、全部彼女宛に連絡しました。現在東京のY氏と交際中らしいが、彼女からの電話では満更でもない口吻りである。気尽な女王はチト私にとっても苦手である。

所要で大阪のミナミへ行き、用件をすませて心ブラのつもりで、ぶらぶら戎橋筋を歩いていたら、バツタリと梨花悠起子に出くわした。友達の女の子と二人連れだったが、彼女その人と別れて、久しぶりに喫茶店へ入って、その後のつもる四方山話に華を咲かせた。現在東京におるとかで、住居は浦和市とかいっていた。中央線に毎朝ゆられて通勤が大変らしい。綺麗な線のいい娘だから、チャームガールなんて、うってつけであろう。時にはアルバイトにファッション・ショウなんかに、臨時で呼ばれて行く時もあるらしい。突然でカメラもなし、又、その時は歩き草臥れていたの不思議に意欲わかず、彼女のあの挑発する様な眼差しに、プレイを想ったが、遂々云い出しそびれてしまった。帰宅してから、折角の千載一遇のチャンス逃がした様で惜し

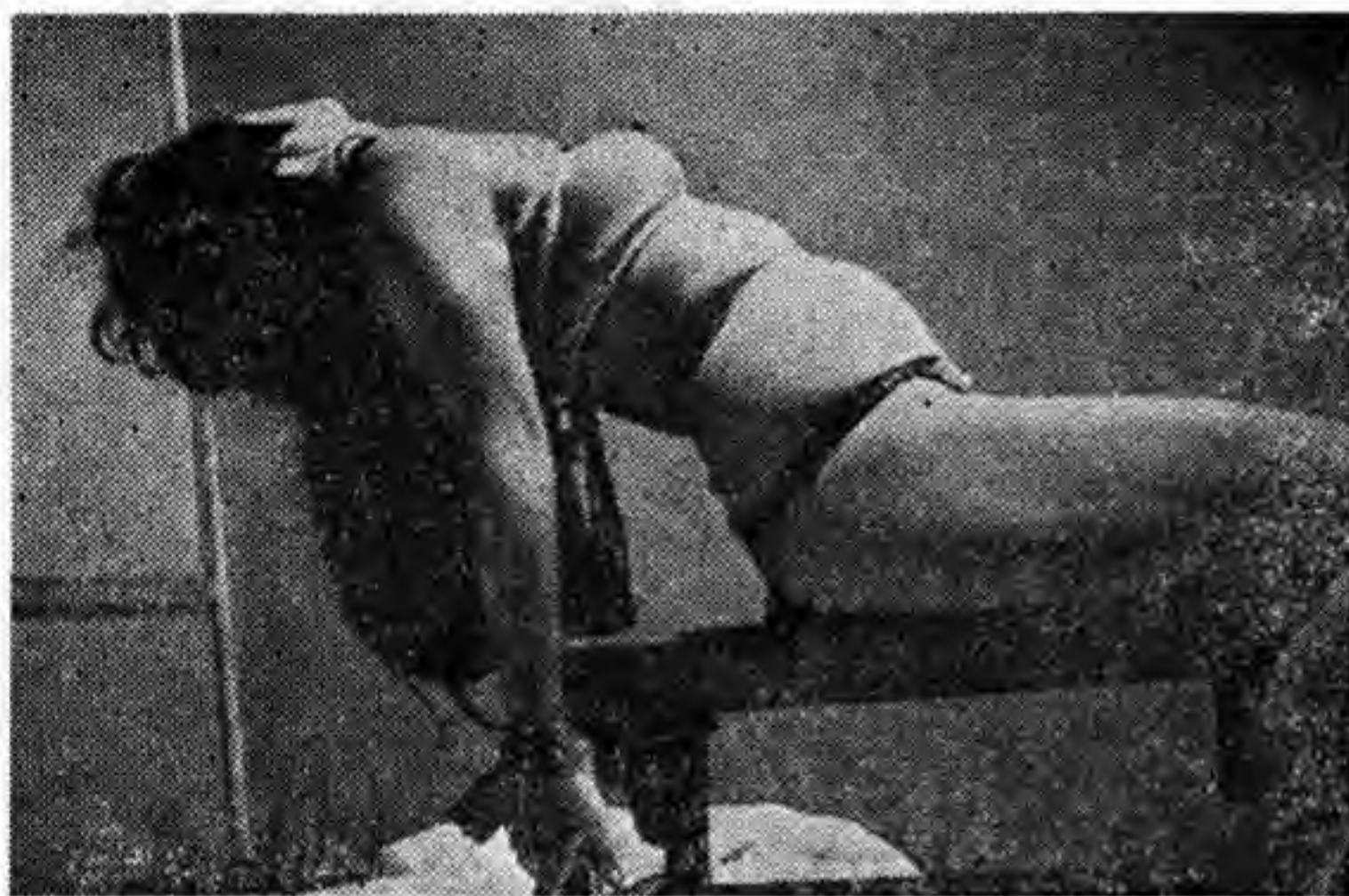
モデル志願者点景

○女性モデルの志願者もボツボツ出現し、シーズンを迎えて大いに楽しみます。大層優秀な方なのに遠方のため、採用できなかったのなんか残念でした。○二児の母という二十六才の女性の志願者、只今授乳中とのこと。何故もう少し早く妊娠中に連絡を呉れなかったのかと悔んだが、今となっては後の祭。○男性モデルの中には、女装して撮ってほしいというのが案外多いんですね。ひとつ文献的資料として保存しましょうか。○夫婦ともどもモデルにしてほしいという希望の読者もあつて写真部をまごつかせていますが辻村隆氏が病をおして出張してきますので、いずれ面白い「サロソ楽我記」の話題を提供してくれることでしょう。○現在訓練中の可愛いモデルさん達も続々と巣立って行くこととでしょう。次号では、その横顔を誌上で一寸紹介してみましようか。なにはともあれ、若くて美しいモデル志願者たちが続々出現してくれることを読者の皆様と共に期待しましょう。

<夫婦のSMプレイ写真>

愛妻ゆう子の緊縛ポーズ

新田 英雄



妻のゆう子をモデルとした第三回目の拙い作品をお届けします。ゆう子は身体全体にポリウムがあり、いわゆるグラマータイプですが、縄をかけた際は殊に臍を中心とした腹部と、乳房を中心とした胸部の盛りあがりが見事なので、私は緊縛の際は、いつもその点に注意して強調するようにしております。

最近では肌に埋もれるように縄がきつく締っても、妻は一向平気でこういった縛り方はどうだろうかと積極的に意見を述べたりするようにになりました。私と結婚するまでは平凡なBGだった彼女も、夫唱婦随というのですか、それとも亭主の好きな赤鳥帽子というのでしょいか、私はだしの凝りように毎日のように写真をとって楽しんでおります。

まれてならない。近々結婚するとの事。彼女の将来の幸福を祈りたい。

× × ×

夜乃探郎様。どうも有難う。私の拙ない「カメラ・ハント」のルポをこんな面から読んでいただい

ていたのだなあと、改めて過ぎこしかたの感懐に耽りました。東京の△泰生▽様。一度お目にかかりたい気持ちです。SMのあり方について、春宵を語り合いい、人生に夢を持ち続けて行きたいと思ひます。

瀬沼四郎様。一度お便り下さい。過去の事(貴方にだけ分る言葉)は一切気にしておりません。同好の士として仲良くしたいのです。瀬沼さんのお好みの妊婦に關し、最近新しいデータがあります。およろしければどうぞ。

おトイレ魔横行

九カ月の妊婦が被害者

大阪市東淀川区で最近「おトイレ魔」が出没。「これでは安心してトイレにもいけないワ」と若い奥さん連や娘さん達を恐怖におとしめている。

昨年暮、東淀川区木川西五町妊娠九カ月の会社員の妻S子さん(32)が用たし中、自宅庭に捨てておいたテレビのアンテナでいたずらされ、三週間のキズを負ったほか、昨年から今年にかけて届出で明らかになったものだけでも二十件、月二件の割で発生しており未届けの分を入れると、かなりの数になるとみられる。

その手口というのは、女性が用便にきたところを汲取口から手を突込み、竹や棒切れでいたずらするというもの。おかげで被害にあった女性は失神するやらケガをするやら、病院に担ぎ込まれるという有様である。犯行時間に夜九時から十二時までの間とあって、婦人たちはこの時間中トイレにもおちおちいけず恐怖におののいているとか。

(K・M生投)



木戸川 健

まず、先月号書かなかった事の理由から書こう。K誌からグラビヤや挿絵が抜かれて、つまらなくなったからである。つまらない、という事は八つまりVという理由のつけようがないという事で、私のように平凡でないものに理論づけをして、その平凡でない立場を支持する事に、一種の生き甲斐を感じている者にとっては、これは大変に困った事態である。

私は、K誌が上品な雑誌になって下さる事を願い願ひはしたものの、決して現在の事態を望んでいたものではない。

グラビヤのSMフォトも挿絵も、あのままではひどすぎるとは思っていた。しかし、私はカメラ

の専門家ではないのでくわしい事はわからないが、絵にも抽象的なもの、更に前衛的なもの、があると同じように、写真にもアブストラクトやアヴァンギャルドがあつてしかるべきである。ヌードを写しても、それを卑猥と感じさせない、又、SMプレーをとつてもそれをエロや残酷と感じさせない、そんな精神や技術があつてもしかるべきだと思つてゐる。カメラの角度や照明や、高度な現像技術でそれは必ず出来るはずである。これは又聞きであるから責任はもてないが、ピカソの絵に女陰をのみ対象としたものがあるそうである。それが、どうもお皿の上は何やら黒い物体がのつてゐるよう

に見える。女陰だといわれて、なるほどそういえば——と改めて観ると、なるほどそう感じられる。二度三度観るとますます強烈にそれらしく感じられる。もはや、誰人もがそれに違ひないと思う。そこにはエロや卑猥などというものは無い。感動があるばかりだ。女陰を観させて感動させる技術にこれくらい程の作家魂、それが芸術である。

そして女陰を観て、これはそれなんだ、と後からいわれてそう思つてもおそくはない、とに角、それをそれとして観賞する努力、それが芸術作品に接するわれわれの基本的な態度でなければならぬ。作者も努力をするものだから、われわれも努力して理解しなければならぬ事、申し上げるまでもない。努力と努力の接点には、必ず感動が生ずる。

SMフォトにしても、SM小説にしても、現時点で努力しなければならぬ部分が多分にある。いや、むしろ努力をおこたつてゐるようには見えぬ。

世論が騒ぐからというので、グラビヤや口絵を抜いていたのは、きりがなくなる。なる程、それは自粛には違ひなからうが、後

向きすぎる。自粛とは、昔はとも角、現代においては決して後向きをいみするものではない。あくまでも前向きの姿勢をもって自粛する、それが現代に生きるわれわれの基本的な態度である。で、なければ消滅してしまふ。そういう厳しい世相を戦後われわれは自らの手によって築き上げ、課してしまつたのである。これはもうどうしようもない。

自粛はいい、しかし、それは後退であつてはならない。前進すべきである。そのために努力すべきである。

話はもとにもどるが、ここに西条操さんという方がおられて、大体私と同じような事を二月号三月号の八想うことVに書かれておられる。西条さんは大晦日の夜、紅白歌合戦を聞かず観ず、あまつさえ、除夜の鐘を聞かず、ベーターベンダかシューベルトだか、私は音楽にはくわしくないのでわからぬが、とに角、ろうろうとした男声二部合唱をお聞きになる程、高尚な魂の持ち主である。

実は、私が西条さんについて抵抗を感じるのはこの部分だけで、というのは例えそうであっても、



洗濯物を干すドレイ

美柳輪生

そういう事はあの場合書かれなかった方がよかったし不必要であると思う。後は西条さんのいわんとして、いる事は充分納得出来る。その通りである。と私は思う。

しかし、どうも五月号の久我庄一さんなどの意見をはじめとして、風あたりが強い。理解されていない。私は西条さんを芸術家だとはいわないが、多少とも芸術性を持っている人は、と角突きとばすようなところがある。理解され

なければそれでかまわない。それが芸術の宿命だ、という態度、立派ではあるが下手である。それにアウトロウは野球の球質ではない。などというのは余計な事で、最初から読者をなめてかかっていると思われる。でも仕方があるまい。西条操という人は、決してそういう人ではないと私は理解している。文章を丹念に読めばわかるのである。

私は心から西条さんの健斗と、

将来に期待している。

それはとも角、グラビヤに対する私の提案はいかがであろうか、決して無理な注文ではないと思うのだが——もって編集部の研究課題とされたい。

女陰でもりっぱな芸術になるのである。ましてや、人間の生命の根源である、性欲の、その両端であるSMというものを、文章や写真に表現したものが芸術にならないわけがない。それが芸術になら

ずして、猥褻になつてしまふのは、そこに何らの努力もなされなかつた故である。かくて、反道徳的、反社会的と指弾されるのも、やむをえぬ仕儀である。

塚本鉄三さんは、数年前、梨花悠紀子さんをモデルにして、縛りのないSFोटを發表されたが、ああした発想を更に一歩前進させて、直接Sを感じさせないSFोटを考案されたら、いかがであらう。



洗濯物を入れる奴隷

美柳輪生



「近況によせて」

梨花 悠起子

箕田京二様御許へ——
本当に御無沙汰しました。相変らず御元気で活躍なさっておられる事でしょう。

私、突然姿をくらましてしまったので、随分お探しになったそうね。此の間我橋の雑踏で、パッタリ辻村さんと出くわしちゃって、その時、いろいろ其の後の皆様方の事をおききして、懐しくあの頃を思い出して、何か一寸書いてみたくなりました。

偶然っておかしなものね。私今東京におりますが、父母の私事で大阪へ帰って来て、久し振りにミナミを歩いていたら、バッタリ辻

村さんに逢うなんて、本当に偶然ですわ。私、同封の写真の様に元気です。今の御仕事はチャーム・ガールです。少し又肥えてきましたが、姿をくらました頃は、すごく痩せちゃって、親が心配し、それと私が親に内緒でモデルになっていたことがばれたもんだから、すごく叱られて、東京の叔父の許に預けられたの。あの頃は自分の心が分りませんでした。塚本さんや辻村さんと過す、あのひどい時間、一番たのしく思われて、もったいなくていじめてと、自分のたえられる限界を試しているみたいな気持ちでした。三日にあけずモ

デルになって、私自身肉体をすりへらしてゆく事を意識しながら、一方の心では、しらずしらず足が向くのです。前の緊縛にたえたのだからと、塚本さんは、次には更に強烈な縛りをなさり、私はあの期間中に、少なくとも、四、五回は失心寸前になったことを今だから申せます。ひどい人だと、その時いつも塚本さんをうらむんだけど、別れると途端になつかしくなるわ。私ってよくよく虐められるのが好きな女なのね。

今でも機会があれば又虐めて欲

しいなあって時に思います。辻村さんに約束した、憲兵とクローニャンの扮装で、どこかの焼跡を探して、そこで散々憲兵に虐められる私を想像し、このアイデアは私から辻村さんに言ったのだけど、遂に実現せずじまいでした。

でも今の私ならあの頃にくらべて骨が硬くなっているでしょう。あの頃のような、逆吊りや、海老貴め、浣腸せめなど、もう無理と思いますわ。

この頃、グラビヤなくなったそうですね。東京でも、奇クを時折



見つけては、人目をはばかって、チラリと頁を開くんですけど、いつでも私のフォトが、小出しに何枚か出ているので、まだ出てるわと、後悔めいた気持ちになったり、そのくせ、忘れずにのせてくれる箕田さんの好意を内心喜こんだり複雑な気持ちですわ。今年中には結婚するかも知れません。相手はごく真面目な人よ。未だべーぜもよ

うしない人。私の過去は全然知らないわ。その点でも、こちらで私がグラビヤから姿を消してしまうのは、奇クファンには残念でも私にとってはホッとした気持ち——。東京の住所、お知らせしますから、若し上京の節は御連絡下さい。本にのらないプレイなら、私いつでもO・K。って、彼氏ありながら、こんな事を考える私って

悪女なのネ。辻村さん昔ほど元気ないのネ。何か御病気の様にいつてらしたけど、若し私、あの時辻村さんが、プレイしたいとおっしゃったら、ついてゆく気でいたのに、全然そんなことおっしゃらず、喫茶店で話してあっさりお別れしました。ガツカリみたい。でもあのあっさりしたところが、辻村さんのいい

ところなのかもしれせんわね。このフォト奥多摩で彼にとってもらったものです。少し齡とった見たいで落付いてきたでしよう。私ももの思う頃になったのネ。一度お目にかかりたいわ。東京へ来られたら是非連絡してね。きつときつとよ。では奇クの益々御健斗をお祈りします。さようなら。

△私のMフォト▽

バンドとおムツ

保田 康夫

悪戦苦斗されながらも、毎月充実した内容の楽しい読物をお届けいただき厚く御礼申し上げます。忙しくきびしい現実生活の中で、生きる楽しみを与えてくれる奇クの発行は全く素晴らしいです。何卒無理をせず今のままで、許される範囲で結構ですから永続できる様心から、多年に亘る一愛読者として願望してやみません。

さて、四月号の編集室だよりの中に、写真や絵の投稿が可成りある由書いてありましたが、M男がズロース、バンド、おむつ等を着用した写真と云うのは非常に少ないではないかと存じまして、甚だ拙い作品ですが、「M男とズロース」「下着の展示」「強制されたおむつ」「後手縛りのバンド責」の四枚を同封いたします。

次に奇ク四月号の読者通信にて大阪の織田信さまより投書されたメンズバンドの斡旋の件、私共月経帯マニヤに対する福音です。何卒御高配下さいますよう御願います。誌上にて型とか色、価格等広告されれば、更に楽しい事と存じます。



美しいお姉さんの手で直接に穿かされるピンクの生理バンド。薄ゴムの柔らかい不思議な肌ざわり。これは毎日のように愛用しているバンドマニヤのみの知る素晴らしい味

わいです。楽しい読物を有難うございました。誌上ででも御言葉をいただければ幸いに存じます。

(写真は筆者提供のもの)

「女性拷問刑罰特集」に期待して

佐渡 喜男 (新潟)

映画「日本拷問刑罰史」論議が大分誌上を賑わしました。腰の重いことでは定評? のあるらしい奇巧編集陣各位も、ようやく動かされたとみえて、近く「女性拷問刑罰特集」が発刊されるということ、まずはSファンにとって、うれしき限りです。

小生もあの映画は二回見ましたが、内容的な細かい欠点は各所に見受けられるにしても、それはそれとして、あのような映画が制作

されたという点に、意義を求めるべきなのでしょう。ストーリーの一部として拷問刑罰が取り入れられているというのは、今までにも数多くありましたが、拷問刑罰それ自体をえがくことを目的とした映画というのは、正に空前のことで全く勇敢なものです。

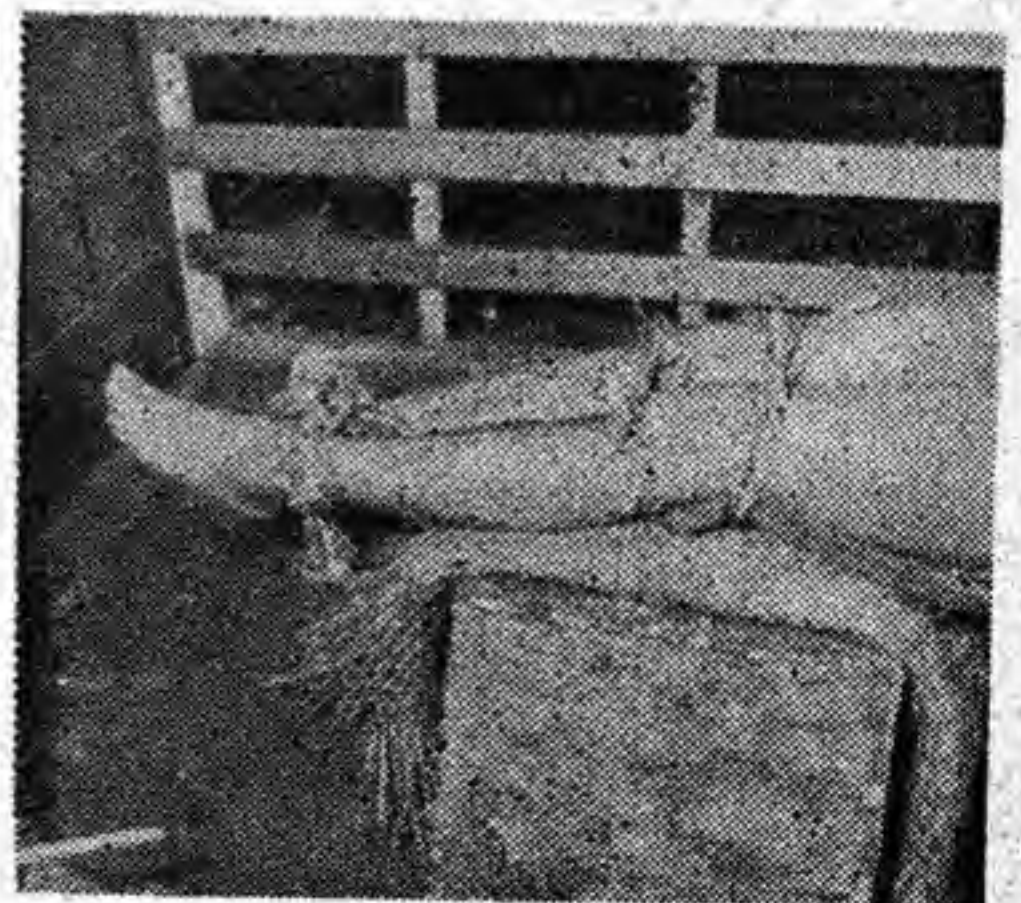
少々血なまぐさすぎる場面もありますが何にしろハリツケ、ヒアブリといった我が国極刑のチャンピオンから、石抱き責め、エビ責め、木馬責めといった今までの文章や絵などでしかお目にかかることができなかった代表的拷問が生身の人間によって——たとえそれが演技であるとしても——血の涙を流し脂汗をしたたがせながら悶え苦しむさまが目にあたり登場するときには、Sマニアたるもの、見のがすべからず、われを忘れたヒトトキだったことでしょう。そして、それが

いつまでも続くことを願った人も、多かったにちがいないと思います。

白々とした映写幕だけが残る映画の終りの味気なさは、悲しみにも似たもので、何とか我がヒソやかな世界にコレクトする方法はないものかと思案した人も少なくなかったことでしょう。しかし、この悩みも「女性拷問刑罰特集」がかなえてくれます。それについて少々意見やら希望やらを申し述べさせていただきます。

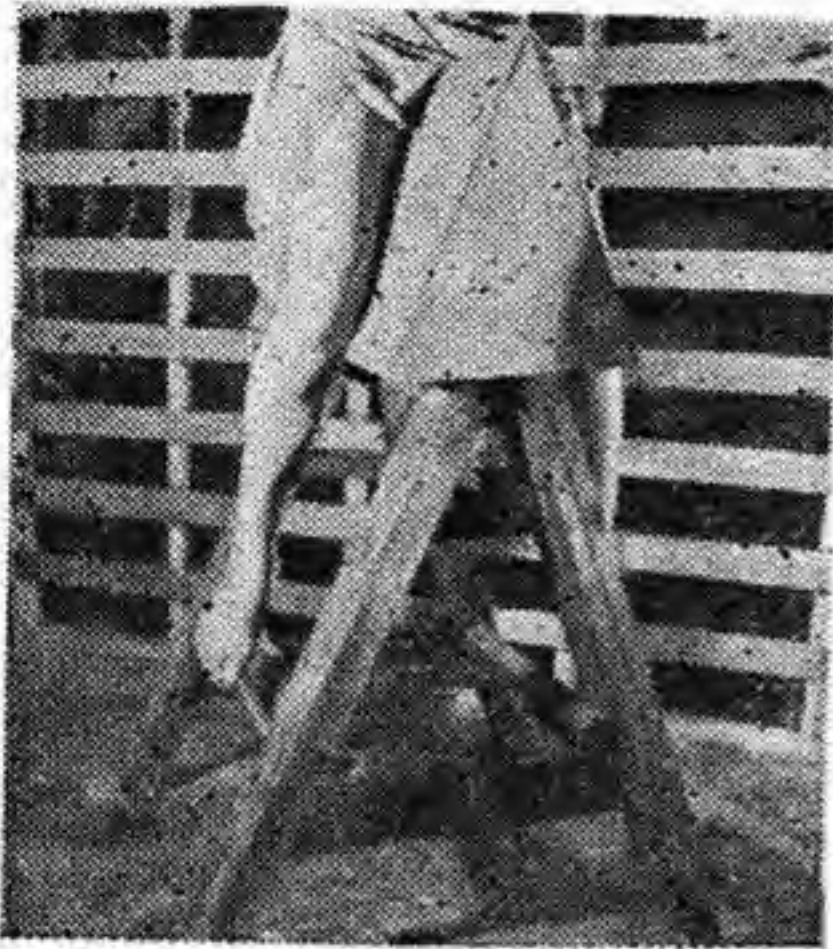
映画ともなれば、公衆の目を相手にするものである以上、ストーリーや場面、俳優のポーズなどに相当の制限が加えられることは当然で、従ってマニヤにとって物足りないという怨みもでてくることでしょう。それで奇巧では、此の物足りなさを補ってくれるような充実した内容を期待したいのです。

映画と同じような角度やポーズの連続では、動きのある映画に太刀打ちできないのは当然です。から、もっと自由な角度、大胆なポーズをお願いします。裸にむかれた哀れな女体にかけられる縄目は必ず菱縄や亀甲縛りのような正規



なものがのぞましく、単に胸をぐるぐる巻きに縛ったというのでは役人の責めではなく、ヤクザなどによるリンチみたいになってしまいます。また、あの映画では拷問を受ける女性の前方からだけ見ていたようですが、背面又は斜後方からの角度もぜひ欲しいところでしょう。うしろ手に背の肩まで締め上げられた縄目のきびしさと拷問の苦しさに悶える両手——殊に指の——表情など胸が迫るものです。

木馬責めも全裸の女囚が欲しいところ、斜後方からの狙いで、うしろ手の縄目のきびしさと女性美の象徴である双臀の丸味に喰い込



「鈴木晃子嬢」の出現を喜ぶ

——鼻責め分譲写真に関連して——

生 田 二 郎

分譲写真「はた」によって初めて我々奇クファンの前に姿を現わした鈴木晃子嬢。絹川文代嬢の鼻責め写真が少なくなつてから、何か不満であつた小生の気持が鈴木晃子嬢の出現によつて一気に晴々としたものになった。

何といつても、鼻責めに於ては鼻孔をたてに伸した時に孔の内部が大きく露出すると同時に孔が伸びきることが何より魅力的なものです。彼女の鼻孔は、この条件に全くよくマッチしたもので申し分ありません。

この度の分譲写真では、山原嬢に鼻頭をつままれて鼻孔が細長く

む非情な木馬の背とは、最高の残酷美を提供してくれるでしょう。それから、拷問にしる処刑場面にしろ、モデルさんには気の毒ですが、「緊縛」ということを忘れないで下さい。いくら激しい拷問でも縄目がゆるんだりしていたんでは魅力半減どころか幻滅です。

あの映画のハリツケなど、まるでダラシなくて、ただ柱を背負つて両手をひろげて立っているみたいでした。全裸にして、しかも三角の台をまたがせて縛りつけたという某藩のハリツケなどにお目にかかれたら、どんなにスバラしいことでしょう。

以上いろいろと勝手なことを書きました。こんなことぐらい編集各位にとっては、百も承知だと思います。ただこうした夢が出版物となつた場合が問題なわけですが大衆の目にふれることが悪いのだということであれば、大衆の目にふれることが悪いのだということ

であれば、大衆の目にふれないなら良いという解決にもなります。われわれマニヤの存在について一層の御理解御協力と御指導を願います。「女性拷問刑罰特集」がわれわれの夢と期待を満してくれ、スバラしいものでありますように——。

をおぼえます。できることなら山原嬢にかわつて彼女の鼻を責めてみたい気持ちになります。これはかなえられぬ望みであるが、今後の山原嬢ならびに編集部の方々の御好意を待つより仕方がありません。

鼻責め専門のモデルさんでしょうか。もしそうでしたら、彼女の鼻孔の接写なども交えて、どんどん彼女の鼻責めの写真を写して戴きますようお願い致します。鈴木晃子さんは、鼻責めにひかれた理由ないしは動機を文章にでも発表して戴けませんでしょうか。山原嬢に責められた時の感想及び写真をみての感じを文章にしてください。





〔最近号の読後感〕

奇ク萬歳！ 〽最近の充実〼

山 本 達 雄

三月二十一日、春分の日。
奇ク五月号拝受。日曜日と祝日のダブった我々サラリーマンにとっては口惜しい日であったが、早々と愛読誌奇クを入手できて、楽しく拝読できた。

最近の本誌は、もりもり充実してきたように嬉しい。殊に三月号四月号五月号と、グラビヤページを廃止してからは、うんと内容に重量感が出てきた感じだ。特に小説によいものが多くなった。これも、グラビヤがなくなったため、本文に力を入れたことと、長い小

説を載せたためだと思う。例えば三月号では、楢の宿、SMレター女子寮と女子事務員、虹のあじさい、花と蛇、ベリサリウスとアトニナ、等の読みごたえのある文章が並んだし、更に四月号では、辻村氏のSMカメラハントで「耳責めに微笑む娘」の新鮮さ、SMより見た世界史シリーズの「美姫ローザモンドの生涯」の波瀾万丈「革の盛装」のサジスチックなロマンが目をつけた。さて、五月号はどうか、巻頭を飾った久我庄一氏の「高級なる遊戯精神に」に先

ず参ってしまった。その気魄に感じいった。このような熱烈なファンが（私もその一人と思うが）本誌を盛りたててゆくのだと思う。革の盛装の第二部である「赤と青の競演」もよかった。この文章もうまくないし設定もまずいし、必然性に乏しい作品が何故迫力があるのか、神戸にいささか土地勘があり、しかも余り詳しく知らずにそのエキゾチックな面に憧れている私が、自分のイメージで補って読んでいるからだろうか。

今月号で一番よかったのは、おもだか・しの氏の「直腸鏡検査の事など」淡々として何の変哲もないこの文章が最も光っていた。SM読物としては随一のものだと思う。雪という名の女も、女のあわれさがよく表れていたが、もう少し熱さない。「本誌の存在価値に対する一私見」こういった真面目な意見は読んでいて微笑ましい。余りにも我田引水的なものは、どうかと思うが（お愛嬌に一つや二つあってもいいが）客観的に論じたものは、私達も啓発される。グラビヤがなくなつて面白くなかったという意見は全く当らない。私はむしろ、グラビヤが廃止されてから、より一層充実してきた

山原清子嬢を囲む 座談会の提唱

編集部

○今月号の四十八頁に京都女斗菊氏の「山原清子さんの刺青フォトの感銘」という一文にて、彼女の刺青の素晴らしさを詳述すると共に、親しく膝をまじえて鑑賞し雑談したいという希望を述べておられます。

○彼女は彫芳一代の傑作といわれる文身に有名であるばかりでなく、SにもMにも、まことに理解のある女性で、多くのMFアン、SFアンのあることが予想されます。

○幸い只今でしたら、彼女の都合がつかますから、山原清子嬢を囲む座談会として、親しく彼女の刺青を鑑賞撮影し体験談を聞く会を催し、兼ねて彼女の後援会を結成したいと思ひます。ご賛成の方は、後援会費一千元もお送り下さい。座談会の日時は、尚、後援会に入会の方には、ご希望により、刺青、MFフォト、緊縛フォトの中一点を八ツ切に引伸しの上、お贈りいたします。

たように思う。それは何によりも雑誌を手にしてよく分る。編集者がグラビヤや口絵のウエイトに依存して安易に墮しては、本誌の充実はあり得ないと思っていた私だ。グラビヤの見た人、写真集を求めることも出来るし、又分譲写真だって、いくらでも求めることが出来るのだ。そういう分譲品を求めないで、グラビヤがないのかこつ気持がわからない。限定版の写真集を全部買ったからもっと企画してくれとか、分譲写真をどんどん充実してくれという

希望ならよくわかる。しかし、今の情勢でなら、本誌にては本文を充実してくれという声が順当だと思ふ。例えば、五月号の沢井和雄氏の「祈りの呻き」を読んでもいい。何頁分のMフォトグラビヤに卓越したMムードが、むんむんとしている。

もっとも、文章よりもフォトの方がピンとくるという御仁もある。その人達は遠慮なく分譲のMフォトを求めればいいのだ。私もその方針に従っている。そして、本誌が益々充実し、確実な発行を続けられることを祈っている。編集者よ、徒らに口絵やグラビヤのないことを心配する必要はない。今のような体裁の雑誌の方に、より魅力を感じている読者が多いことを忘れないでほしい。折角グラビヤを切って、すっきりとしたのだから、復活するようなことは、この際考えないでほしい。一路、本文の充実に進進すべきだ。小説と、奇クサロンと読者通信に奇クの特徴を発揮してほしい。六月号を期待してペンをおく。

〔SM夫婦通信〕

フォトにハッスル

長谷好志男

一月号と二月号の奇クサロンに妻の緊縛フォトを発表しましたところ、多数の読者の方から賛意を得まして大いに心強く思いました。それにも増して誌上に掲載された写真を見た妻は、それ以来俄然積極的になって、提唱者の私の方が今ではむしろダジャツとなるくらいで、毎日楽しい新婚生活を送っております。これも貴誌のおかげと喜んでおる次第です。拙作ごらん下されば幸いです。



異常美への誘い

○「継子いじめ」と「お灸マニヤ」との関係は、奇妙は合致している。同様に「女性切腹マニヤ」と「禪愛好」とが一脈相通じていることが多い。

○「浣腸」と「オシメマニヤ」との関係は、うなずかれるところだが、これは「メンスパント執著」と共に「ゴム・フェチ」という点で共通する。

○女性に対して浣腸したい、お灸をすえたいというSと、女性から浣腸されたい、お灸をすえられたいというMと、いずれも共通点がありそうだ。

○女性切腹の窃視と女装による自己切腹、ここに「切腹」と女装の関連が説明される。

○女性下着フェチは自己を女性に還元してMに近く、ときに女性下着愛好からSに派生する。

○女性のフット・フェチは多くMと解釈され勝ちであるが、足舐めなどと相反して、女性の足愛玩というフェチはSとなる。

○女性の逞ましくも豊かな臀部も、その尻の下に敷かれると見ると、その尻を鞭打ちの対象と見るのでは相反する。



オムツカバーとオムツの物語

おねんねの前

原 由 貴 子

白いタイルの風呂場は湯気でくもっていた。恵美子のはんのり上気した頬を桜色に染めて、湯舟から上ると大きな青のバスタオルにくるまり、スリッパやストッキングを、そのままにしてお部屋にもどった。部屋にはすでに夜具の仕度ができていた。

「あら叔母様、すみません」

「それより恵美子ちゃん、体の具合どう？ きつと冷えたのね。明日の大事なお勤め、大丈夫かしら。さ、早く寝なさいな」

今年の春、短大を卒業し、あこがれのスチュウアデス採用試験にみごと合格した恵美子は養成所での訓練期間を終えて東京本社から大阪空港勤務のため、伊丹にある叔母の家へ着いて二・三日たったばかりなのだが、旅の疲れが十分取

れないまま、叔母に連れられて大阪見物をしたり、デパートで買い物をしたりして冷えたせいなのか、初の勤務を明日にひかえて、今日のお昼少し過ぎ頃からお小用が近くなり、とうとう夕食後テレビを見ているとき、無意識のまま少し粗相をしてしまった。早速叔母は、ばあやにお薬を買いにやらせ、いろいろ飲ませたのだが効きめがあるかわからない。充分温まって、ぐっすり寝たらよいだろうと、湯からあがってすぐ寝る用意をしておいたのだった。

「それから奥さま、ねえ、これなんか如何でございましょう。あの大きなお嬢様にはなんですが、小さな時からよく存じあげてる東京のお嬢様ですんで、おすすめるんでございますが。はい。あの、

角の薬局で、みつめましたんですよ」ばあやが、もそもぞ包みから取り出して、恵美子のお布団の上にひろげたのは、ピンクの花模様にしなやかな薄ゴム引きの大きなおしめカバーだった。

「まあ、これはいいいものを買ってきたわね、こんなもの売ってるなんて、少しも知らなかったわ。大人用なのね。じや早速してあげましょうね。丁度よかったわ。こんなに早く役にたつとは思ってなかったけれど、御近所で赤チャンがお誕生なすったんで、お祝いにと思って用意しておいたのがあったから」

叔母はすぐに立って向こうの部屋へ行くと筆筒の中から一包みのおしめを取り出し、ばあやのひろげたゴムの大人用おしめカバーに重ねあわせ、恵美子にさせようとするのだった。

「まあ、叔母様……。いやだわ、ばあや。いくらなんでも」

「何です、お嬢様。恥かしがって。多分お嬢様は覚えていらっしやらないかも知れませんが、まだお嬢様がお小さい時、東京からお母様と一緒につれてこられた時など、何時もこのばあやがオムツを取り替えてさしあげたものなん

ですよ」

「本当よ、恵美子ちゃん。明日は大事な初めての日なんですよ。今晚これあててそのまま明日オムツしたまま出勤したっていいじゃないこと。飛行機に乗ってる時、もし万一粗相したらどうするの」

「まあイヤ……。叔母様まで」

小さな弱い声だ。

「冗談いつてるじやなく本当よ。ね、恵美子ちゃん、いい子ね。叔母さんとはあやが、ちゃんとあてがってあげるから、さ、横になりなさいな。おネンネするのよ」

「恥かしいわ。赤チャンみたい」「ほらお嬢様。そんなに両足をくっつけてちや、うまく脱がせられないじやありませんか」

明日から、ブルーと白のりりしい制服に身をかため、スチュウアデスとして大空の第一線で働く身が今夜は柔らかな布団の上に仰向けに寝かされ、手なれたばあやと叔母の手によって純白のパンティが脱がされ、オムツを取り替える赤ん坊のような姿勢にされると、まるで本当の赤チャンそのままにオムツからおしめカバーをあてがわれて行くのだった。そして、それと同時に、彼女は下腹がしびれるような、痠痛をとまなう様なゴムの感触に包まれるのだった。

奇クへの朗報

高村 登

四月一日付の「東京新聞」をみると、「不良雑誌五誌を指定」と云う見出しのもとに、次の記事が載っていた。

東京都青少年健全育成審議会（会長・清水長雄都議）は三十一日、青少年に有害な不良雑誌として次の五誌を指定した。この結果、本屋さんは四月一日からこれら不良雑誌を十八歳未満の青少年

には売れなくなる。

▽「グラマーフォト」四月桜花号（三世新社）▽「グラマーとヌード」四月号（文献資料刊行会）▽「実話雑誌」五月号（三世新社）▽「カメラ画報」（同）▽「二〇〇万人のカメラ」三月増刊号（新風社）

とあり、これによると、今回の指定に奇クは含まれていない。或はこれは追加であって、奇クは既に指定されている、というなら話は別であるが若しこの種の指定が毎月一回行われて、而も今回奇クの五月号はパスしたと云うのであれば、「朗報」であると思う。

もともと、私の意見では「映画界に成人向映画があるように、出版界に成人向雑誌があっても一向に可怪しくないのだから、都条例などで、青少年に有害と指定されても痛くも痒くもない筈ではないか」と云う考えなのであるが実際には、指定を受けると、本屋さん

が取扱いをいやがると云うような事情（或は圧迫？）があるのか、この頃の奇クの投書欄などを見てみると、「最近本屋で手に入れにくくなった」という種類の苦情が多い。そんな訳からか、奇ク御当局も、「指定」には氣を使われているのではないかと思う。

ところで、私の考えを更に云うと、「奇クはテーマがテーマだから、仮令グラビヤを廃止しても、いくら編集に氣を配ってみても、余程物の分った人達が、真面目に見てくれるのでなくては、指定から外れることは、ほとんど不可能に近いだろう」と、なかばあきらめていた。

ところが、今回指定をみなかったことは、編集者の努力と、「奇クは煽情を事とする他のエロ誌とは違う」という我々の主張が認められたわけで「朗報」である。

なお、今回指定になった五誌の内容は知らないが、題名から判断して、写真が主なのではないかと想像される。もしそうなら、奇クのグラビヤも、最後の号（一月号か二月号？）のようなものだったら、むしろグラビヤなどない今の方が、すっきりしていてよい位のもので、今の線で、サロンとかその他の内容を充実させて行ったら良いのではなからうか。

映画界耽美の極限

○「あたしとマナミ（富士真奈美）は、同性愛」なの。あたしがサドで、マナミがマゾで、ちようどいいの」とは加賀まりこの言。その加賀まりこが、八千草薫と「美しさと哀しみと」で同性愛を演じている。

○もっとも、女の同性愛だといっても、今流行というわけではない。宝塚では女と女の……と

いって、今更珍らしがるほどのこともない公然の秘密である。

○淡路恵子のヘソ酒も、映画界耽美の極限といっている。ヘソに日本酒をつぎ、お腹をつたって流れてくるやつをナメルというのだから、マニヤでなくたって、こたえられんシーンだ。

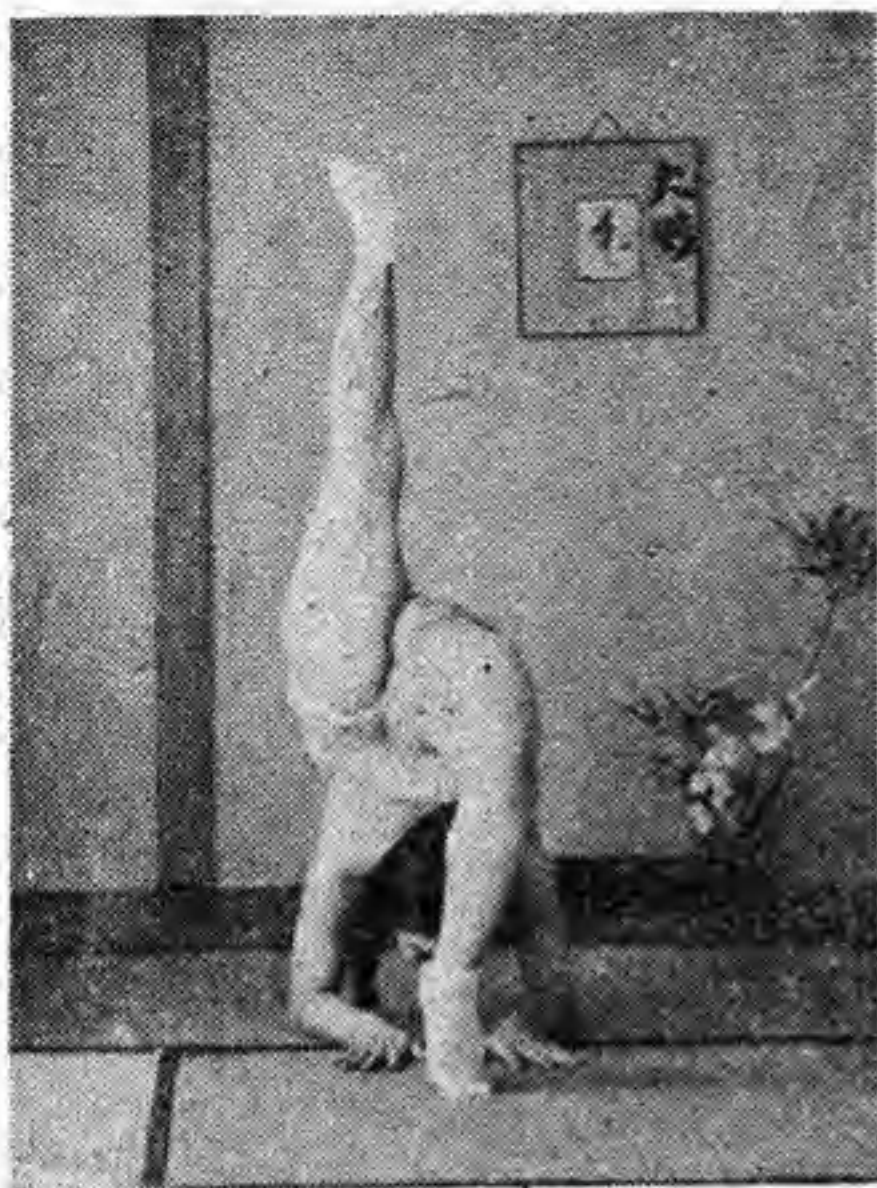
○もっともマニヤの中には、女体で酒のお燗をすることを考えているやつがいるので、勝新太郎の上をゆくかもしれない。



サーカス・マニヤの夢……………

曲馬団の幻想

篠塚 正



小生は六・七年前からの本誌の愛読者です。三月二十五日夜、大宮市でふと見かけた五月号、さっそく入手拝見致しました。久しぶりに見た待ちに待ったサーカス物二篇、本当にすばらしいの一語につきます。

「サーカス団エレジー」雪という名の女——作、牧原信吾
「見世物放浪記」郷愁としての惨

虐——作、夜乃探郎

特に「雪」という名の女はドサ廻りのサーカス団の哀愁が出ていてすばらしいと思いました。しかし乍らサーカスマニヤの私にとつて、二篇とも鞭による曲芸の仕込みの場面が少いのはマイナスでした。それと共に挿絵が少いのも残念でなりません。鞭による曲芸の仕込みの場面のさし絵も是非共お願いします。

(一)、一輪車から落ちて鞭打たれる娘、そばに一輪車がある。
(二)、アクロバットで頭が尻にくく迄おりまげられていた娘のそばで団長が鞭を振りかざしている。
(三)、玉乗り娘が芸をしくじって鞭を浴びて

いる。(四)、ツナ渡りをしている娘、これは××サーカスと書いてある傘で中心をとり乍らツナを渡っている。その下で団長が鞭をしごきながら気合を入れているなどです。一輪車、アクロバット、玉乗り、ツナ渡りなど、いずれもブラジャーとパンティだけの姿が良いと思います。一輪車とか玉乗りは、いずれも娘達が後手に括られているのも面白いでしょう。

たしか貴誌では、この様なサーカスものの物語は昭和三十六年九月号より十一月号に亘って連載されたアクロダンサーの告白「曲馬団の娘」上田隆子、以来のものと存じます。その時はかなり強烈な鞭打シーンがあつて私を喜ばせて下さいました。鞭に依るアクロバットの訓練、悲鳴、今でも忘れることの出来ない作品でした。
(曲馬団シリーズ)として、「鞭にむせぶ娘達」あるいは「買われた娘達」として、

一、一輪車乗り——静子——
二、アクロバット——重子——
三、玉乗り——富美子——
四、綱渡り——朝子——
五、鞭打ストリップ——雪子——
いずれも鞭により無理矢理芸を仕込まれる所。ピシッピシッとい

う皮鞭の響と共に、娘達の悲鳴を全篇に入れて載きたいです。

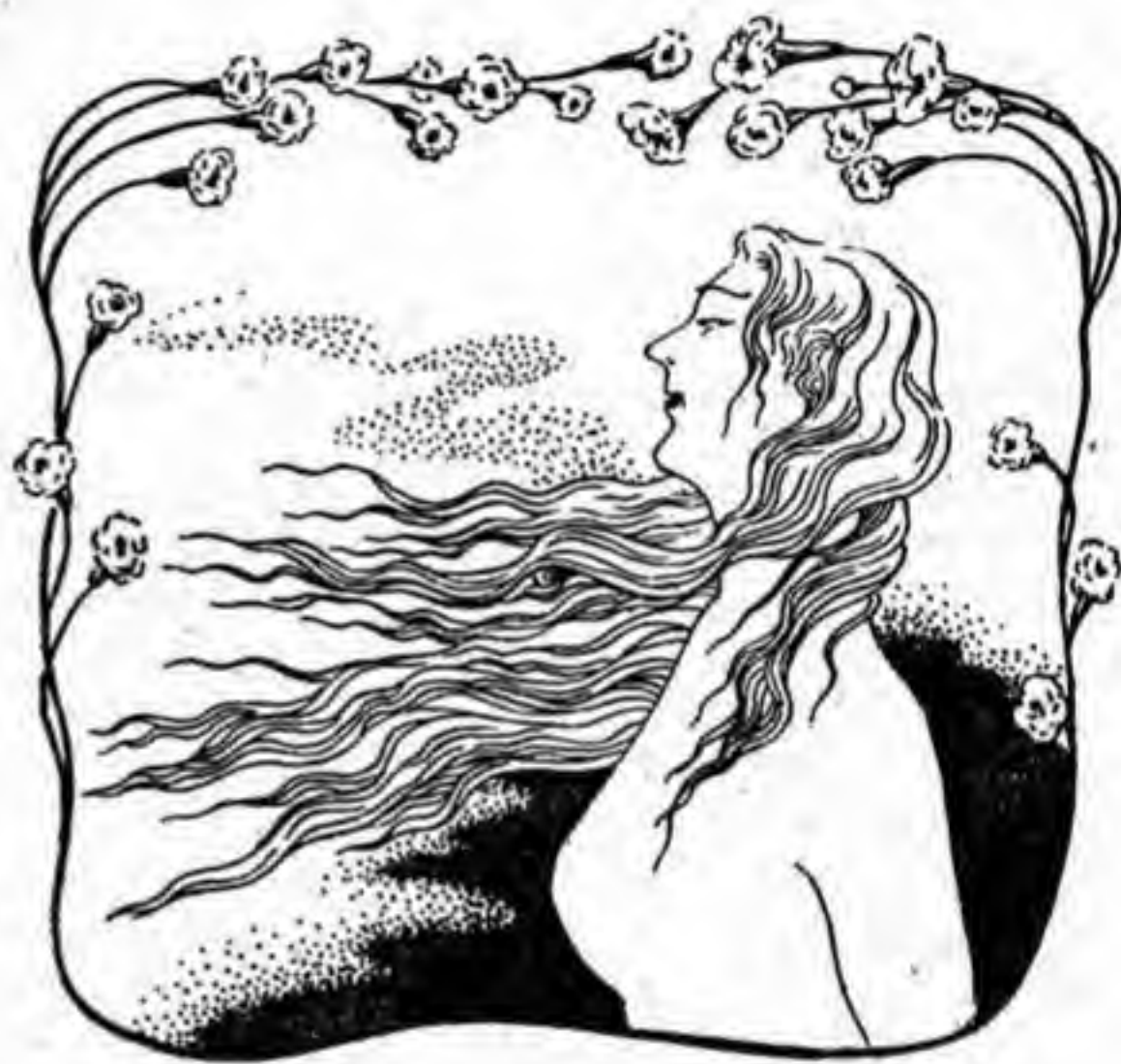
例えば、五、鞭打ストリップでは、普通のダンサーだった雪子が借金のために、継母からドサ廻りのサーカス団に売り飛ばされる。そして、鞭に依る血と涙の猛訓練が続けられる。

私はサーカス・マニヤです。あの華やかな表面に現れた芸ではなく、その裏面にある彼女たちの鞭に依る責苦に憧れます。楽屋は毎日、涙と苦しみで一杯なのだ……と。更に、団長がいかめしい顔で鞭を持って現われると、私の欲望は一層昂まる。あの鞭で娘達が打たれ、泣きながら鍛えられたのだ……と思う事によって。

私のサーカスに対するイデオロギは全くよくしなる鞭に依って代表されると言つても良い。従つて私のサーカスに対する興味は、表面に現れた芸ではなくて、その裏にある仕込みの想像なのである。こんな空想が私を一層深い楽しみに誘つてくれるのです。どうか、今一度私を幻の世界へ誘つてみて下さいませ。裸電球の下に展開される悲鳴と、妖しきデカダンスの数々を——。

(埼玉県狭山市八篠塚正)

犬^{いぬ} み 孕^{はら}



羽 鳥 水 江

妊娠している女にたいしてだけ能力のある男がいる。(シュテークル)

昨年日本でも上映されて非常に評判のよか

ったイタリア映画「昨日・今日・明日」の中で、主演のソフィア・ローレンが、妊娠してお腹の大きくなった姿で登場することは、街角の大きな絵看板などで、先刻ご承知のこと

と思います。この映画はオムニバス映画で、問題の妊婦姿のローレンは、その第一話、ヤミタバコ売りのおかみさんが、イタリアには妊娠中の女は逮捕できないという法律があるのを利用して、次ぎつぎに子を孕みつつけるという話なのですが、有名な女優がお腹をふくらませた不恰好な妊娠姿であられるというところが観客の意表をつくものだったのでしよう。あちこちで話題になり、その写真がライフにものったそうです。そのライフの見出しが *An Ever Pregnant Sophia* (孕みっぱなしのソフィア) というもので、一説によるとこの映画撮影中、彼女は本当に妊娠中であつたが、残念ながら流産してしまったといひます。

大体グラマー大女優が自分の(偽装ではあつても)妊娠姿を写真にとらせる、しかも映画の中で堂々と、すごいお腹の妊婦に扮して不恰好な姿を見せること自体が異例のことです。その上ストーリーの設定が、子を産んで産んで産みまくるといふ奇想天外なものですから、世間の注目をひいたのも無茶苦茶に子を産みまくって、しかも何回も妊娠すればする程、美しくグラマーになるといふのですから愉快です。

日本の習慣では、妊婦は妊娠第五カ月の戌（いぬ）の日にはじめて岩田帯を締めます。

腹の子の位置を固定し、腹の子を保護して、腹の筋肉が伸びて形がくずれるのをふせぐためだといいます。戌の日にはじめて腹帯を締めるのは、犬のように楽に安産するため、というおまじないのようなものでしょう。人間だって本当は、犬と同じように、簡単にパタパタと孕んで子を産むものでしょうし、動物としての体のしくみはそんなにちがうものではないでしょうけれど、犬は人間の身近にあって観察しやすい家畜ですし、一度に（一腹で）数匹の子をコロコロと無造作に産むものですから、人間も犬にあやかって、お産が軽く済むように、という願いなのでしょう。

犬という家畜は、非常に古くから、人間とともに生活し、人間のために役立って来たといえます。人間は犬の生態について、場合によっては人間自身のそれよりも日常見聞きしています。下等動物や植物は別として、比較的人間に近いケモノの中で、オスとメスとによる生殖の方法を、人間のこどもたちは、まず犬の実例によって見るのでしょう。それから、子がうまれる、母親の体のどの部分からこどもが産まれてくるか、人間のこどもたち

は犬によって実地に見ることが出来ます。牛や馬だってそういうことは言えますが、何分にも大きな動物で、犬のようにたくさん、身近に存在するというわけには行きません。ネコは秘密主義です。一番人間に親しい動物、犬の方が機会がずっと多いでしょう。

自然の中でも、ちがった種類の動物の間の相互依存、共存ということはあります。食べられ、食べる関係であれ、平和共存という関係であれ、ことなつた種の動物はおたがいにも他を必要としています。しかし、人間と家畜との関係、これは自然の中では特殊のものです。人間は自然に存在する動物の中から、人間との生活に適応した、人間の役に立つ動物を、長い歴史の間につくり出したのです。人間に従属し、人間から離れては生活しにくい、人間に飼育される動物、それが家畜なのです。「飼育」ということは、奇巧の読者の皆さんにとっては、とくに強い刺激をもつことばではないかと思いますが、この「飼育」される動物が家畜です。

人間が人間を「飼育」する、という観念はあきらかにマゾヒズムに属するものです。そこに、人間を「家畜視」ないし「家畜化」することがマゾヒストにおいて特別の意味をも

って来る理由があるように、わたしは思います。マゾヒズムの裏がわはサディズムですから、サド・マゾヒズムが、とくに「家畜」のイメージを大切にしている理由があるのです。

ところで、サド・マゾヒズムと言っても、サディズムとマゾヒズムでは、もちろんちがいます。すべての動物は生きたいと願う、その点から言えば、サディズムは本能（生存本能）に根ざしていると言えましょう。しかしすべての動物は死にたいと願っている（死滅本能？）わけではないので、一部、フロイトにならって死の本能を説く人もありますが、少なくとも生きたいと願う同じ意味、同じ程度に死にたいと思うわけではないので両者ははっきり区別してかかることが必要でしょう。一くちで言えば、サディズムは実像、マゾヒズムは虚像とでも言ったらよいでしょう。凸レンズの結ぶ実像と、凹レンズを通して見られる虚像とのちがいです。

このところ、十分に議論を展開して説明するとおもしろいと思うのですが、わたしにその能力もないので、第一に、大昔の女権時代をのぞく数十年の歴史を通じて、女性は男性のフェティッシュであったこと、したがって男性にたいするフェティッシュとしての存在の

女性の心の中における反映である女性のナルシズムのことにふれておきましょう。男性の欲望が社会的に是認され、つまり、社会全般に通用するものとして確立されたとき、その公認された（支配者の）欲望の対象としての女性（被支配者）の肉体、精神、人格そのものが社会のフェティシユになり、女性のがわから自覚されたフェティシユが、ナルシズムなのです。ですから、女性は被支配者、男性は支配者、ということになります。この経路を見ると、フェティシズムは第一次的であり、ナルシズムは第二次的である。つまり、段階がちがう、次元がことなるということになります。女性にとってナルシズムが本質的（かならずしも生物学的ではなく、むしろ社会的に）だといわれるのはこのためです。

大分議論がまわり道になりましたが、サド・マゾヒズムは、フェチ・ナルシズムにくらべて派生的だと思います。第一次的に、生存本能——支配したい欲望があります。けれどもそのままサド・マゾヒズムではなくて、社会的に是認されたフェチ・ナルシズムの関係が確立・固定化したときに、固有の意味のサド・マゾヒズムが出て来るからで

す。男性がサディスト、女性がマゾヒストということとは一般には言えません。それにくらべて、男性のフェティシズム、女性のナルシズムは、はるかに安定しています。男性の場合、サディズムは多数派ですが、フェチの段階にとどまっていることも多く、フェチの色あいを濃く残しているのが普通ではないでしょうか。女性のナルシズムに至っては、全く安定的、したがって社会的には本質的、と言っているでしょう。マゾヒズムは、苦痛を避け、死をおそれる人間のほとんど本能的なものとの激しいカットウの中にあります。

最近カッパ・ブックスで出た渋沢竜彦さんの「快楽主義の哲学」という書物は、非常に示唆的でしょう。著者はいうまでもなく、サド侯の「悪徳の栄え」翻訳者として裁判にまでなった人、多数のサド侯の著作翻訳のほか、著書もあり、この方面では第一人者なのでしょう。これまで書かれたむずかしい本とちがって大衆向きに書かれたこの本は、奇巧の読者の皆さんにとっては必読の書ともいえるべきものでしょう。その中で快楽主義の哲学が謳歌されている（その内容の紹介はここではいたしませんので、諸者の皆さんは是非じかにこの書物について見ていただきたいもの

とわたしは思います。この本の内容が材料となって誌上に議論が展開されたら、どんなにうれしいでしょう。ことは言うまでもありませんが、よく考えて見ると、この哲学は実行不可能ではないでしょうか。ある人びとの快楽が完全に追求された場合、他の人たちがかならずギセイになります。犠牲者は快楽主義どころではなく、全く自分の快楽を犠牲にして他の人の快楽に奉仕する、他の人の快楽の手段になるのです。ですから、ここに言う快楽主義は、政治上の無政府主義のようなもので、実現できないもの、一つの実際にはありえない極限状況——「夢」だということが出て来ます。わたしが、派生的だとか、もっとズバリ「虚像」とか申したのは、この意味です。

さて、右のことを念頭において、はじめの論題「孕み犬」ということに話をもどしましょう。

「家畜」の中で、犬は特殊の地位を保っています。多くの家畜、家禽は、その肉が人間に食べられることを目的として飼育されます。他のものは乳汁や卵が、やはり人間の食用として役立つのです。その点、家畜や家禽は、多く動物としての生ま身の肉体、一種の

有機物質として人間に役立つと言ってよいでしょう。しかし、犬はちがいます。犬は単なる有機「物質」としては人間にほとんど役に立ちません。よく言えば人間の友、ありていには人間に従属者、助力者、対象ではないに手段なのです。見張りをする、敵をふせぐ、獲物を追っかける、などの仕事によって、他の家畜にたいしても、野生の動物にたいしても、人間の手先になるのです。その果す役割は、より人間的なもの、より精神的なものです。スパイ、間諜、忍者、警察官、密偵、探偵などをいやしめて「いぬ」と呼ぶのを見ても、犬が人間に密着した家畜であることがわかります。

マゾヒストにとって、犬は心理的な意味で自分の理想像です。自分の分身です。ただ何もわらず「飼育」され、屠殺され、料理されて食べられてしまう多くの家畜にくらべて、また、ただ動力源としてだけ利用される一部の家畜ともちがって、人間に心理的な近親感（といっても支配されるのですが）をもち、人間の感情におもねり追従することを知っている家畜である犬は、何とマゾヒストによく似ているでしょうか。犬がマゾヒストの代名詞になることが出来るのは、その擬人格性に

あります。そのすすんで求める屈辱感にあります。

ただし、マゾヒストとの類似はここで終るのではないのでしょうか。人間のために役立つ犬というイメージは、フェティッシュとしての女性とは大分ちがうからです。女性は一面的には愛玩用であり、一面では子孫を産むため、繁殖用だからです。食肉用の、または乳をしぼり取る（サク取する！）ための家畜は繁殖させられなければなりません。このあとの目的は次でのべることにして、愛玩用という点から見ると、犬は（そういう種類のものことですが）フェティッシュとしての女性ということから来る女性のマゾヒストのイメージにつながります。愛玩用に、美しく飾りたてた犬は、美しく飾りたてた女たちと何とよく似ていることでしょうか。しかしそこには、鑑賞するがわの、むしろフェティッシュはあっても、サド・マゾヒズムの雰囲気は、比較的薄いと言わなくてはなりません。人間の家畜化に関して、つよいサド・マゾヒズムが見られるのはフェティッシュがきれいごとであって、たんに心理的なものではなく、即物的に牛や馬と同じように、ズバリ生身肉の肉として考えられる場合であるとも言えます。つまり、

心理的従属感、屈辱感に加うるに、そのものズバリの即物的な家畜化、この二重の、重層的な、強められたサド・マゾヒズム、これが（このこと自体は、人間がそのまま犬でない限り、心理的なものです）「孕み犬」ということばに、含まれているのではないのでしょうか。

たとえ話はやめて、人間の女にかえりましょう。子を腹に孕んでいる女、侮辱され、虐待されて、屈辱感と肉体的苦痛（肉体的苦痛に悲鳴をあげること自体が非常な屈辱感だと思えます）に、あえいで耐えている妊娠した女、「孕み犬」ということばは、彼女にピッタリではないでしょうか。繁殖するために、孕ませられなければならない点で、女は他のケモノのメスと同じです。孕み女のグロテスクさ。「異常美」と呼ばれる人もあります。女の妊娠中の妙に安定した、そして不安な、矛盾した気持ちは、マゾ・ナルシストとしての自己満足、不安をたのしむという矛盾した点がありますが、自己満足にちがいはりません。

とりとめないことばかり書きましたが、わたしはどうも、あまり理路整然と考える力もないので、気分のままに、あちこちとびまわって、結論のないようなものになりました。

無題 (読者通信でもよろしい)



黒^{くろ} 渚^{ぶち} 賀^か 集^ず 子^こ

無 題

止むを得ない事情のため、恥をさらす事を承知でペンをとりました。

私は三月号「ベリサリウスとアントニナ」に書かれた二十七才(当時)の女です。

「世界史シリーズ」の拙文を書いている黒淵嬰一は年齢に似ず子供みたいな男で、何でもない衝動にふれてすぐ書けなくなったり、急に又書けるようになったりします。今度もその病気が起ったらしく、すっかり元気をなくして沈みこんでしまいました。いつもなら、「好きなだけ責めて」と体を預ければ元通り

陽気になってくれるのですが、今度はどうも深刻なようです。

彼は乗馬を五才から習い、拳銃を小学校五年から覚えたと言っています。本当だとしてら西部劇並でしょう。そのせいか、今でも玩具の銃器を集めて喜んでいます。二月四日の節分など、豆を詰めた機関銃や連発銃を持って私を家中追ひ廻しました。それだけでは足らず、私にも豆入り銃を強制的に持たせました。結局は私が捉って柱に縛りつけられ、乗馬服を着たまま、豆の機関銃弾を全身に浴び

せられて「銃殺」されるのですが、お恥かしい限りですから、あとは想像して下さい。

縛られるのはいつも私です。それで彼は、Sであると自称していますが、本当はMではないかと思っています。歯医者や注射が好きなのですから相当なHです。それでいながら叩く事や殺傷する事、奇巧的飲物は大嫌い。庭でミミズを見つけても殺さずに川へ持って行って捨てています。(私なら形がなくなるまで踏んでしまいます)ただし自分の身体だけは別のようで、足の裏に傷をした時は平気

な顔で焼火箸をあてていましたし、今でも二十年前と同じように、気に入った漢詩などを見ると小指を切って血で書き取ります。

彼は昭和二十年の八月十五日に死にそこなったそうです。(多分嘘でしょうが)作法通りに左下腹に擦り傷をつけ、その次に頸動脈を切ろうとしたので、その隙に短刀を取りあげられたと言っています。彼の性格が異状になったのはそれからとも言います。

彼は「戦時中に特種訓練を受けた」と称しています。私は信用していませんが、年齢の割に柔軟な身体を持ち、今でも空中転回や大車輪などを軽くなします。樹から樹へ飛び移る技など、跳ぶ力自体は大した事はないと思うのですが、技のつかみ方が実に正確なのです。(そのせいで時々私が高い木の天辺近く縛られたりもします)足の指に櫛を挟んで髪を分けたりもできます。

彼は私にアクロバットを教えました。私も学校では体操が好きでしたが、アクロバットをするには年齢が進み過ぎていたので余り上達しませんでした。それでも何とか彼の「観賞に耐える」柔かさになったそうです。「ベリサリウスとアントニナ」に書かれた縄脱けも本当は彼が教えてくれたのです。

銃猟の極限では、実弾を発射しなくても命中の快感が得られるそうですね。私達のプレイもそれに似ています。皆様には馬鹿らしくて御参考にならないでしょうが、彼は日常は縄も紐も使いません。私の手を後ろに組ませて軽く撫で「縛ったよ」と言うと言来上ります。紐を使って縛られた時は必ずと言っていい位、自分で解いてしまうのですが、紐なしで縛られた時は彼が「解く」まで自由になれません。

時には「インスピレーションを得る為」に入念に縛られます。縛られたまま、走らされたり泳がされたりします。その割に文章の良いものは出来ませんが。

私にはMの性がありませんから、縛られる事自体は好きではありません。寧ろ軽度のSではないかと思う位です。縛られるのに彼を喜ばす為です。縛らせさえすれば、あとは何でも私の言う通りになります。本当に大きな子供のようです。

彼の要求は余り強烈でも長時間でもなく、私の弱い体力でも充分耐えられる程度です。最近になってわかった事です。彼と私の先祖は昔、同じ戦場で敵だったらしいのです。彼は私を責める時、「祖国と先祖の仇」

という理由をつけて気分を出します。けれども私には祖国があるような、ないような、とても妙な立場です。

彼の筆名は黒淵嬰一とでも読ませたいのでしょう。私の名は、日本読み賀集子でよろしい。どうしてもいけない方はカズコと読まれても構いません。

彼は金髪に劣等感を持っています。寧ろ金髪女性を見るとやたらに縛りたくなるそうです。私は金髪ではありませんから縛られる時には、かつらをかぶって彼を満足させなければなりません。

彼は「満洲平野を馬で乗り廻した」などと大きな事を自称していますが、大言の割に乗馬が下手です。彼の言う事が本当だとしても二十年も前の事です。古い写真で見ると、黒淵家の馬術は(ダーウィンの説に反して)父子三代にわたり退化しています。

彼は「女性騎士の戦闘」を作品中に書く為(という口実で)私に乗馬服を着せ、ヘルメットと竹刀で武装させ、自分も同じ装備で馬を駆けかわせ、私を突き落して気分の良い間に一気に書きあげたいと思っているらしいのですが、乗馬の技術が段違いの為、実現出来ずにいます。私は二十五年間、落馬の経験

がありませんが、それは二十五才まで馬に乗った事がないからです。私は器用な方だとうぬぼれています、乗馬は仲々上達しました。 (多分教師が悪いのでしよう) 相当なハインディをつけて、つまり私はギャロップで、彼は側対歩で対戦します。ギャロップは右前脚と左後脚というような対角線上の脚が同時に前へ出るのですが、側対歩では右前脚と右後脚のように同じ側の脚が一緒に動きます。

側対歩を用いるのは重い鎧を着ているという設定だからで、馬上の騎士は横揺れになります。ギャロップでは上下動ですから、重い武装だと人も馬も疲れてしまいます。槍のように正面から狙う武器は不正確になります。側対歩は速力が出せず、障害も越えられません、震動が少いので真直に突けるそうです。もっとも私は余りよく知りません。全部彼に聞いたのです。彼は映画などで(プラスチック製の)鎧を着た騎士がギャロップをかけているのを見るとあれはおかしいと言います。

こうして、いよいよ馬上試合となるのですが、私の方は片手をはなして姿を起し、竹刀を構えたとすぐ安定を失い、まだ一と突きもしないのに乗馬ズボンのお尻が土につき、長靴の底は二つそろって天を向いてしまいま

す。彼は大いに不満のようです。私は落馬それ自体は恐しくありません。必ず地面が受け止めてくれます。しかし「落馬スタイルは一流だ」とか「馬が止まっている間だけは麻生保氏を満足させられるだろう」とか勝手な事を言われても、どうする事も出来ません。

それでも彼にばかり威張らせてはおきません。彼は運転免許を持っていないので私が運転します。九十キロでダンブカーを追いつめます。彼の坐席がトラックを擦る位に近寄せてみせます。横眼で見ると、彼は平気を装って微笑していますが唇の色が確かに変わっています。根は小心で臆病な見栄坊なのです。

送附済の或る作品で「砂丘上の女性剣士決闘」を書く必要が起きた時、週末旅行を兼ねて鳥取の砂丘で実演しました。季節が遅く、他に人が居なかったので幸いでした。満月の夜でした。ヘルメットと竹刀と手楯を用意し二十分ほど走り廻ったでしょうか。不思議な事に彼と対していると私まで子供になってしまいます。私はフェーシングが少し出来るのですが彼の自称剣道三段にかないません。何度も突き倒されて砂を噛みました。それでも負けずに起き上り、立ち向っていると、最後に彼が自分で足をふみ外して砂丘の下に落

っこちましたから、追っかけて行って(抱き起す前に)思う存分叩いてやりました。彼は痛い痛いと言って謝りましたが許しませんでした。あとで、本当に足をくじいていた事がわかりました。彼にしては珍しい事で、悪い事をしたと思っています。

六十五キロの彼を四十キロの私が支え、二人共砂だらけ。旅館では恥さらし。彼は風邪をひくし私は財布を落す。散々でした。

こんなにしても出来た作品は御覧の通りつまらないものです。「自分の作品に自身で酔っている」代表みたいなものです。どうか愉快な阿呆共だと笑って下さい。とにかく要一はこのような男で、賀集子はこのような女なのです。

その彼が全然笑わなくなりました。「やっぱり駄目だ」とか「もう書く事は止めた」とか言って、書きかけの次期作品も投げ出してしまいました。理由は申しませんが、奇クの或る記事に赤線が引いてあった事から見ても、どうも最近号からショックを受けたらしく思われます。彼のような作品は奇クに不向きであるという意味を読みとったのでしよう。

繰返しますが、彼は神経質で大きな子供です。被害妄想という言葉が彼の為にあるよう

なものです。誤解があつてはなりませんから先に申しますが、投稿なさった方には責任は絶対にありません。原因はすべて彼の（精神的にまで）弱い性格にあるのです。

彼は故意に難解な語句を使っているのではありません。漢文流の対句や反語は自然に入つて来るのです。受けた教育というより家庭環境の影響でしょう。平易な現代文の書けない一種の不具者です。出来た原稿は私に渡し、仮名遣いや漢字を訂正させます。特に外語の訳文は殆んど私に押しつけます。それでも出来上ったものは、御承知のような、彼の祖国と私の祖国が戦争した頃の文体です。時代の相違だと思つて下さい。本人さえも名作と思つていない作品を読まされる皆様は、さぞ御迷惑な事でしょう。送附済の作品がまだ二つ残っていますから採用されていればあと暫く彼の影が残るでしょうが、それも数カ月です。本人も自身と父親の社会的地位を心配しながら投稿している事ですし、彼のような作者は早く退場させた方が奇クの為によいのかもしれません。

けれども私は何とか彼を立ち直らせたいたです。

或る事情があつて彼は一年以上も沈んでい

ました。それが奇クで作品を採用されるようになって昔のように陽気になりました。有難い事だと思つていました。しかし貴重なスペースを下手な作品で汚される奇クには申し訳ない事です。彼もそれを承知して、不向きではないか、固苦し過ぎはしないか、題材の選定が誤つていないか等と、一作を書くごとに編集部に質問状を送つていたようです。

「自肅」の記事が出た時など、出来上つて送るばかりになつていた原稿を全部破棄し女性の裸体にふれた部分を、大いそぎで衣裳つきに書き直していました。あの時の眼の色の凄かったこと。その位に神経質なのです。彼の拙劣な作品を奇クの片隅にでも生き残らせる価値が僅かでもあると認められる方が、只の一人でも居られたら、元気を出せと彼に呼びかけて下さいますでしょうか。お願いします。何か書かせるなら、その目的を与えらるなら、公私にわたつて彼は元気をとりもどすはずで。

彼が書く氣力をなくしたもう一つの原因は挿絵の廃止のようです。奇クの方針がそうだったのなら仕方ありませんが、表題脇のカット絵が存在を許されるなら、本文と無関係なものにする必要もないだろうにと彼は言っ

ていました。小柄で瘦形の少女が主人公である作品に、九頭身のグラマーを添えたのは何故だろうなどと言つてもいましたが、彼はこんな疑問を編集部に持ち出す勇氣を持つていません。それでも「昭和三十四年頃の目次上や裏表紙に杉原先生が描かれた古代、中世の風俗はよかった」と繰返しています。

彼も私も没落貴族のなれの果て。彼が好んで高貴の没落を書いていたのは、悲劇性の大ききにもよるでしょうが、彼自身と私の過去の追憶や感懐もあつたのでしょう。非才と偏向教育と異常性格。高級な叙事詩など出来るはずありません。しかし奇クとは異なる別の世界では何とか読んで戴けそうな作品が書けていました。温かく元氣づけて一年ほど書かせてみたら、もう少し良いものが書けるようになるのではないかしら。

若しも奇クがアブノーマルを救済する窓口であるのなら、彼、嬰一のような者もその恩恵を願つてもよい一人ではないでしょうか。

此の拙文が奇クに掲載され、彼の眼にふれたらどうなるでしょう。多分私の寿命は半分減らされます。どんな目に遭わされても構いません。私は満足です。それを機会に彼が元通り陽気になるならば。

理恵子の罪と罰

原 由 貴 子



理恵子達の通う女学校ハ聖メリー女学院
はカソリック系のミツシヨンスクールで、寄
宿舍制度があった。そこに入るのは地方から
上京した経済的にゆとりのある家庭のお嬢さ

んばかりで、厳格な規則に反抗して時にはこ
っさり舎監の眼をぬすみ、若い生活のたのし
みを寄宿舎の中まで持ちこむことが彼女達の
最大のスリルだった。しかし、うっかり、そ

れが見つかる早速礼拝室へ呼びだされ、お
説教されるのが常だった。

舎監は榎高子という金ぶちの眼鏡をかけた
意地の悪るそうな、中年のオールド・ミスだ
った。この学校で一番の古参なので、校内で
は校長に次ぐ実力者として勢力もあり、大ボ
スとして生徒のみならず若い先生達からも恐
れられていた。彼女の旧時代に育った心は、
若くて少女達の発洩とした自由な生活をそね
み、少女達の清浄と純潔を守ることに使命感
を抱き、度をこした干渉を行うことにはけ口
をみいだしていた。そして生徒達の抗議をよ
そに、まるで戦前の検閲制度のように定期的
な所持品検査を行い、その際にスターのプロ
マイドとか口紅や外国製の香水など見つけ次
第取りあげてしまうのだった。

初夏に向うある日のことだった。今まで平
和だった寄宿舎に一大事件がもちあがった。
どうしたはずみか、いつもは人眼つかぬよう
にひそかに回覧されていた小型のフランス艶
笑本が榎舎監に見つかってしまったのだ。さ
あ大変、早速校長に報告され、榎舎監を中心
に問題の本が発見された寄宿舎の一室で審問
が開始された。発見されたのは運悪く理恵子
達三人のいる部屋で、その本というのは、パ

リーの女学校生活をえがいたもので、女学生がいろいろな方法で一人だのしんだり、女性同志で愛しあう場面などが出てくる艶笑本だった。

「さあ、それでは正直に答えるのですよ。まずこの本を持ち込んだ人は誰ですか」

三人の少女はしゅんと黙りこくってうなだれていた。正直に、よその部屋から回覧されてきたとは、誰もいえなかった。

「さあ、正直にいいなさい。嘘をついたら承知しませんよ」

「……」

「早くおっしゃい。まったく、折角一生懸命皆さんのためを思って今まで気をつけてきたつもりなのに、こんなに墮落してしまうなんて……。御両親から大事なお嬢さん方をおあずかりしている責任上、どうしても、はっきりさせますからね」

「……」

「じゃあ、一人一人に聞きます。まず悠美子さん、あなた、この本、誰が持ってきたか知っていますか」

「いいえ、知りません」

「本当なの、じゃあ理恵子さん。あなたですか、この本持ってきたの？」

「いいえ先生、違います」

「じゃあ、景子さん、あなたはどうかの？ あなたも知らないんですか」

「はい先生」

「本当なの。しかし、あなた方三人のうちの誰かに間違いないんですからね。誰か嘘をいっていますね。いいですか、皆さん、聖マリヤ様に誓いますか」

誰も口をわらないため、とうとうしびれを切らし、榎舎監は取りあげた本で机をびしゃびしゃ叩いて怒りだした。

「とにかく、このうちの誰が張本人か、わかったら決して許しません。今度の日曜日の礼拝とミサの後でもう一度調べます。それまでよく考えておきなさい」

榎舎監が、あらあらしくドアをしめて立去ったあとを見つめて、さすがに一同はほっとした。

「こわかったわ。景子さん、あなたがいけないのよ。不注意にあんな見つけたりするような場所に出しておくなんて——」

「そうよ。私もどうなるかと思って、ひやひやしたわ」

「まあ、理恵子さんだって、榎先生のくるのに、もっと早く注意してくれば、よかった

のに。——」

三人はがやがやいいあったが、その日は午後の授業をつぶしただけで終わった。

次の日、婦人雑誌の広告欄で何かを一生けんめい探していた榎舎監は、やがて電車で近くのF町まで出かけた。そこには婦人雑誌にいつも広告を載せている赤チャン用品専門のメーカーがあるのだった。そこで、しばらく道をきいたりしていた榎舎監は、やっと探しあてたとある街角の小さなビルの、入口に『ゴム製品一般、羽衣印おしめカバー本舗、エンゼル商会』と看板の出ている中へ入ると、応接間へ通され、出てきた営業担当の重役でもあるか、頭が禿げ、でっぶり肥った中年の紳士と話を始めた。

「そんなわけで、若いお嬢さん方をおあずかりしているものですから、何かと間違いのないようにと思ってくれぐれも注意しております。したんでございますの。どうもよい方法もありませんし、たとえ強制的な手段に訴えてでも悪い癖を矯正したいと思まして……」

「ええまあ、そりや御注文でしたら、特に作ってみてもよろしうございますが、しかし私どもの製品がはたして、そういった方面の目的に役立つかどうか何しろ、おしめカバー専

門でしてね。お嬢さん方の自由を奪うものを作ったりして薬事法違反などに問われても困りますし、どうでしょう。貞操帯などといったものより、いっそ腰紐のところを丈夫にしたおしめカバーをさせておあげになったら？ まあいわば兼用のものですね。問題はゴムの強さとか、サイズとか、赤チャンと違って大きいお嬢さんですし、自分で脱げない様にならないといけませんかね」

そんな話が交されて数日後、一通の小包が女学院気付で舎監の榎先生あてに速達でとどいた。差出人は「エンゼル商会」となっていた。丁度、学期末の試験もすみ、数日後に迫った夏休みで帰郷の仕度が始める人もいる頃だった。理恵子はその日の午後の授業が終って寄宿舎へもどり、早目にお風呂へ入ってさっぱりしようと浴衣に着かえていると、そのままでよいから、すぐ榎先生の部屋までくるようにと呼び出された。

(何かしら)

ふと、あの事件が期末試験に入ったので、そのままになっていた事を思い出し気分が重くなった。が、しかし行かないわけにはいかない。仕方なく勇気をふるってドアをコツコツノックした。

「お入りなさい」

部屋には、まだ日中だというのに校医さんと看護婦さんが一人きっていた。三人ともむつり黙りこくっているの、理恵子はその場の雰囲気にかき押されるものを感じた。

「あなたにちょっと、お話があります。そこへお座りなさい」

やがて榎舎監が気味の悪い優しさで口をひらいた。

「理恵子さん、何のために貴女をお呼びしたか、わかりますか？」

「……」

「あれから皆さんの持物を、こっそり調べました。そしたら、これが貴女の生理用品の間から出てきたのです。これは何ですか？」

榎舎監は奇妙なゴム製品の器具を取り出してみせた。それは理恵子も始めて見るもので、半ば透明に近い柔らかな極薄のゴムで出来た親指位の紡錘型のもので、片方はちょっとくびれ、赤チャンのミルクビンにつける乳首のような形になっていた。

「これ、普通の生理用品とは関係ないものですね。何か、けしからぬみだらな目的のために使用するものではありませんか。このひどい『使用説明書』をごらんください」

△若いお嬢様の青春を充分楽しむために『メートル健康具』をお使い下さい。指で直接大事な箇所に触れるのは衛生上好ましくありません。当社製の『メートル健康具』ですと上質の薄ゴム使用のため、粘膜を傷つけず、初めてのお嬢様にも、痛みを感じさせませんので、安心してお楽しみいただけます▽

「投書があつてわかったのよ、日頃のいましめをやぶった張本人はあなたでしょ。私がいつも口をすっぱくしていつてるでしょう。聖メリー女学院の生徒は神を信じマリヤ様のよいうな清浄な魂であれって。神様の前で罪やけがれのないきれいな心の持主でなければならないと、あれほど厳しくいつているのに、あなたは神聖なこの学院に、こんなものやあんなみだらな本を持ち込んだりしましたね」

「違います。先生、私じゃありません」

理恵子は全く身に覚えがなかった。

「いいえ弁解は許しません。間違いありませんこれが証拠です。貴女にきまっています。人一倍可愛らしい顔をして、まったく悪い子ですね。そうです。あなたの魂は墮落しています。あなたの体にひそむ悪魔に誘惑されて罪を犯したのです。いけないのはあなたの体です。こんな器具まで欲しくなったそのムツ

チリしたお尻です」

「まあ、ひどい！」

あまりのひどい言葉に、理恵子も感情が激して次の言葉も出なかった。

「まあまあ、榎先生、そんなに興奮なさらないで。実は今度の処置は私もあまり賛成じゃないので、気乗りがしないんですがネ」

今まで黙っていた校医の齊藤先生が口をはさんだ。

「まあ齊藤先生、そんなこと、お医者様のくせに。こういう時はちゃんとした処置を取ることが絶対必要ですよ。さあ、小杉さん、お布団敷いて用意して」

理恵子はこんな言葉のやりとりのうちに、莫大な財産を、自分の実の娘である理恵子の妹につがせたいため、彼女に不名誉な罪をきせて家から追出そうとたくらむ義理の母親の魔の手が、学院への寄附金とか、榎舎監や校医の齊藤先生に対する高価な贈物となつてのびているのに、気づかないのだった。

「小杉君、たのむよ」

「はい。さあ、理恵子さん、こちらへいらして、——」

小杉看護婦は、何気ない口調で浴衣姿のままの理恵子をお布団の上にいざなった。

「先生、何ですの？」

「いやいや、別に心配はいりません。一寸身体の様子を診察するだけです。固くならないで楽な気持ちになって……。ほんの形式的な診察をするだけですから」

「先生、あたし、別に何ともありません。どこも悪くないんです」

「ああ、わかってます。わかってます。さ、下着取って下さい」

「いいえ、いやです、脱ぎません」

「まあ、強情なこと。お医者様のいうことが聞けないんですか」

「じゃ、小杉君、例の鎮静剤をわたしで。その方が簡単だから」

「はい、さ、理恵子さん、何でもないので。興奮を鎮めるために、これお飲みになって」

とうとう理恵子は、何やら白くてにがいお薬を無理やり飲まされてしまった。すると間もなく、睡気とともに体中の力が抜けて行くような感じに襲われ、やがて意識がもうろうとしてきた。そしていつの間にか眼を閉じると、自分がお布団の上に仰向けに寝かされ、うつつのうちにショーツを脱がされて行くのを拒む力がなかった。診察が始まっても感覚はなく、ただ齊藤医師と看護婦、榎舎監のき

れぎれな言葉だけが、耳に入ってくるだけだった。

「別にはっきりした徴候はありませんね。発育のいい人もあり悪い人もあり、形や大きさだって各人各様ですしね。まあ健康なお嬢さんのごく普通の発育ぶりだという外ありませんね」

「でも、齊藤先生、どうなんですか。やはりどこか普通と違うんじゃないですか？」

「そうですね。ま、少しくらい悪い習慣があったって、はっきりわかるもんじゃありませんよ。普通ですな。どうだい小杉君、君だって身に覚えがあるだろう」

「まあ、いやな先生」

理恵子は意識が徐々に回復するにつれ、自分が今おかれている立場をさとって、何とか両腿を合せようと、身をもがいた。

「ああ、君、動かないで。」

「まだ駄目よ。これからよ。わかる理恵子さん、いいこと。貴女、罰として、今夜一晩いものして寝るのよ。何だかわかる？ 奇麗でとても可愛いらしいオムツカバーよ。……さ、小杉さん、その筆筒からいそいでオムツ取って下さいな。じゃ、お願いしますよ」

「はい。これですの？」

ボクの責め方

宝塚二三夫



小杉看護婦が筆筒の抽出から取り出したのは、大きさはずっと大きい赤チャン用とまったく同じ形のオシメカバーだった。柔らかなピンクのベンベルグ地に美しいレースの縫取りがあり、やがて彼女の腰を包むであろう

飴黄色のゴムが魅惑的な光をたたえていた。「そう。そこへひろげて用意して——」理恵子が完全に意識をとりもどした時、お尻の下には薄ゴム張の大人用オシメカバーがひろげられ、重ねられたオシメと共に両足の

ボクの夥しい女性緊縛行脚の中で、更にその一頁を加えて、アルバムの一隅を飾ることになったのは、ファッション・モデルの尚子である。二十二才の成熟しきった肌の美しさは、又格別だった。ストッキングの上から眺めた脚の恰好の

よさ、パンプスにかくされた足の指を想像するのも、ボクにとっては愉しい一つの遊戯である。さて、軽い縛りによって、拒否することのできなくなった尚子のストッキングは、ボクの手によって、くるくるとむかれてしまう。

間から前へまわされるところだった。理恵子は恥しさのあまり両手で顔をおおうと、オムツを受け入れまいと、ゴムの上で激しく腰をくねらせた。しかし日頃わがままな病人を扱いなれている小杉看護婦の巧みな手捌きにあつては、こばみ切れない。再びショーツがずりおろされ、丁度赤チャンがオムツをされる時のような姿勢にされると、はずかしさとかやしさにブルブルふるえる白いお尻から両足の間へとうとうオシメカバーをあてがわれてしまった。浴衣の下に腰から下半身、赤チャンのように可愛いピンクのおしめカバーですっかりくるまれ、理恵子は羞恥でふるえた。

「案外、簡単だったじゃないの。ねえ、小杉さん」

「そうですわね。おとなしかったですわね。割合おとなしかったわね。何時頃取りかえたらいいんでしょうか」

「そうね。明朝一度、午後一度くらいでいいんじゃない。前大丈夫？」

「ええ腰紐をしっかり結びましたから、自分では脱げませんわ」

理恵子は頬がほてり酔った時のように胸が高鳴るのだった。オムツ！ まるで赤チャンみたい。しかしそれは夢の中の出来事でなく



案外脂ぎって生々しいフクラハギ。それにも勝って、革の靴でぎゅうぎゅう窮屈な目にあわされていた足の指は、急に、よきによきと勢を得た筈のように盛りあがって、真白くふくれあがってくる。すえたような女の足の臭い、ホルモンの香り。

ボクは親しく手にとって、しげしげと鑑賞する。このとき、彼女の一番恥しがるときだ。ボクの視線が素足に擦った。両足首を揃えてしる。足の拇指がピン

と反りかえる。きれいな爪だ。ボクの掌に足のウラのべっとりとした脂のにじんだ感触がウデ玉子の肌のように迫ってくる。

噛んでしまいたいような小指。ボクの心の中を狂暴な嵐が通りすぎるのは、こんなときだ。でもボクは洗練された紳士、実際の行動は、心の中とウラハラに、至って優しくてフェミニストぶりを発揮するのだから妙である。ボクは猿ぐつは余り好まない。それは文弥節をきくには邪魔になるからだ。縄も余りゴタ

ゴタしたのは好まない。大型のハンカチーフで両手首を背後で揃えて括り、さあ、もう動けないよ、と言え、それだけでも抵抗しなくなるような訓練が必要じゃないだろうか。グルグル巻きなんかは、ボクのしょうには、合いそうにないのだ。

て現実なのだった。たしかに腰をゴムのオシメカバーでおおわれているのだった。

「さあ、理恵子さん、もう終りよ。すっかりすんだのよ。もう悪いことできないでしょ。罰として今夜一晚赤チャンみたいにオムツをして寝るのよ。どう？ もし、まだわからないうようだったら毎晩でも続けますよ」

まるで夢遊病者のように、気のぬけた理恵は、ふらつく足で自分の部屋へもどり、お布団に入ると始めてはすかしさ、くやしさに身をふるわすのだった。お尻からシトリあたるしなやかなゴムの感触、腿の緊縛感。

生れて始めてゴムの感触から眼ざめた理恵子の青春。もう、女学院も寄宿舎も、榎舎監もマリア様もなかった。しらずしらずのうちにおムツがジツトリ濡れて、身をもだえる理恵子の腰で生ゴムがキュウキュウ音をたてるのだった。

こうして、榎舎監の考えだした奇妙な懲しめは、理恵子に対して、オシメカバーのゴムの感触の魅力を知らすことになってしまったのだった。

緑に囲まれた聖メリー女学院は、若やいだ生徒達の声で今日も賑わっていた。朝は何事もなかったように――。

S
M
カ
メ
ラ
・
ハ
ン
ト

………(志村善子の巻)………

「しなやかな女獣」

辻
村
隆

「体の工合どう？」と箕田氏より電話。

「まあまあだよ。一時はショックだったが、糖分抜き食事なら何でもO・Kだから、もともと辛党の私、さして苦にならない。少し痩せて、反って体がラクになった感じだね。でも余り今迄のようなハッスルは出来ない」「カメラ・ハントこれで当分ないと思うと、淋しいからね。塚本君にも話して見たが、これは矢張り辻村君の持味だっていうんだ。ところで、先日載せた刑部典子さんの耳責めのあの日、もう一口先約の志村善子さんの分だね。君が少し元気になったら書いてほしいんだけど、どう？」

「ああ、あの娘の分、書いていいけど、もう撮って三カ月になるよ。構わないかい？。それよりむしろ、一度断ったけど、堺市の大谷勢津子という娘、若しあの娘さえよければ、撮って見たいと思うよ」

「一旦、中絶するといっておき乍ら、辻村隆やはりこの道だけは、どうにも止められないらしいね。いいだろう、あの娘はあの娘として、兎も角読者の手紙でも、志村善子のフォトを見たいという注文が多いんだ。こんな時だから、グラビアにはのせないが、せめてカメラ・ハントでなりと一寸紹介しておくのもサービスのひとつだ。短くてもいいから、ル

ポを頼むよ。それと、読者の中から、女性で二人許りモデル志望もあるんだが、これを募集したマゾ男性と組合せて、SMプレイフォトをとりたいと思うだが「カメラ・ハント」にするつもりなら、いつでも連絡するよ。」

「体のコンディション次第だが、撮りたい気はムズムズとあるよ。でも又、熱でも出すとコトだし、考えておきましょう。シンプルなフォトもつまらないし、撮るとなると凝るようになったからね。体かプレイ……痛しかゆしだなあ。じゃあ志村さんの分大急ぎでやりましょう——」

× × ×

この日、私は大忙である。午後に志村善子、引続いて夕方より刑部典子とかけもちするのだから大変である。妙な工合で、あとで撮った刑部典子を四月号に発表し、五月号で美木乃々子を発表した。志村嬢は棚あげになった恰好で、つい書くつもりが、私の発病で遅れてしまった。しかし結局引続いて彼女を紹介することになるのだから、これでいいのかも知れない。

神戸三の宮から、長田区の東尻池までは相当の距離だが、約束の時間に充分余裕をもって三の宮に降りた私は、バスに揺られて行くことにした。

東尻池二丁目の交差点でバスを降り、約束の打合時間の正午少し前に、彼女の指定して来た喫茶店（それはすぐ分った）の扉を押した。工業地帯の附近の殺風景さとは異って、工員風の客も少なく、案外清潔でシックな喫茶である。私は奥まったテーブルに席を占めると、何はとあれこれ注文して、煙草に



(写真 A)

「ええそうです。志村さんですネ」

「ハイ——。あのう、お待ち申上げていましたわ」

「こちらへお移りになっては……。早速うまく逢えてよかったですね。私は時間前だから、未だ来られていないんだと思った」

正面きって私は志村善子さんを見た。高からず結い上げた髪は芳香を放って、如何にもセツとしたての感じだった。ふっくらとした下ぶくれの、育ちのよさを物語る、つましい化粧もほどでいい。初対面で少々硬ばった眼元は少し細いが、笑うと眼尻が下って愛嬌に富んだ顔になる。身長一五八センチ、体重五二キロ、ヒップ九一センチ、バスト八五センチは先刻承知だが、ウエストは知らされていなかった。

何もかも承知の上でやってきた彼女のことである。話はし易かった。軽食をとったが、彼女はこれからプレイに対して、胸が一杯なのか、ハムサンドを一切たべたきりで手をつ

火をつけた。辺りを見廻すと、斜めむかいの若い女性が、しきりに私を観察している様であった。

（おやッ、あの娘かな？ 若しあの娘なら案外いかすじやないか）

私も視線を向けたので、とまどった様にその娘は眼を伏せて、しばらく凝然としていたか、思い切った様に立上ると私の傍らに近づいて立止った。

「失礼ですけど、辻村様じやございません」

けない。声をかけて私は彼女の分まで載いてしまふ。随分初対面なのに図々しい男だ。私という奴は……。金は勿論私が払うのだから別段構わないといえはそれまでだが。

黒みがかった光る生地花模様をあしらったツーピースが、地味にもかかわらず、白い肌によく似合って、真珠のネックレスが襟足を美しく見せていた。服の下で盛り上げる若い肉体を無理に押えているかの様で彼女の体の線はハチ切れている。

私達の会話――。

「花嫁修業中らしいですね」

「そんな事もないのですが、洋裁学校へ週三日と、お茶お花なんかやってるものですから……。この四月からクツキングスクールへ行くと父が奨めています」

「夜は外出出来ないそうですね」

「家が喧ましいし、それにこのあたり、工員の人なんかが多いので、父母が心配するだけで、車で往復すれば、どうってこともないの



ですが」

「お家は商売しているんだって？」

「ええ、材木商です。近頃は殆んど新建材許り扱っています。二、三年前は相当売れましたけど、最近は大企業が、パネライトのようなものや次々と新製品を出して行くので、一時程ではなくなりました」

「学校では演芸会など、よくやったそうですね」

「好きなんです。新劇の研究部なんかありま

(写真 B)

してネ『どん底』のナターシャをやったり、それにチエホフの『桜の園』、卒業前に、『こわれ甕』をやりました。本当は新劇の研究生になりたかったのですが、父母が反対しまして、駄目になりました」

「一年半許り前から奇クの愛読者だったそうですが、どんな動機で――？」

「演劇の仲間が、凄い本だよと、そっと見せてくれたのです。その人の兄さんが奇クの愛読者だったので、私こんな本がこの世の中にあることを始めて知ったので

す。今でも忘れません。それには辻村様の『奇譚三十九夜』物語の第二十六夜で、水本茂美という方が再び登場した時です。私も水本さんの様にうつされて見たら、どんな気持ちだろう。それはきっと泣くほど羞かしいことだろうなあと考えたのです。その号のグラビヤの、四方清美さんと仰有るモデルの、たしか『首枷の悦虐』と題するフォトでしたが、あの姿に私は激しく魅かれるものを覚え、四日後に本をお友達に返す前に、悪いと思い乍

ら、その一頁を秘かに破って、私の書棚の本の合間にかくしてしまつたのも、今はなつかしい想い出です。それから私は奇クの虜になつてしまいました。私の店で使っている人の中で、雑役の五十過ぎのおじさんは一寸頭の薄い人で、私の頼みなら何でも易々ときいてくれますので、本の売っている書店を探し出してきて、それからその人に買つてもらふ様にしていました。本屋でチャンと包装してシールではって貰う様に命じてきます。阿呆な頭に何か感じているかも知れませんが、喋べっちゃいけないよと小遣を渡してやるので何も喋べっていない様です。父母は私が奇クを愛読している事は全然気付いていない様です。夜ひとりベッドの中で、同じ奇クを何度も何度も読み返す時間が、私にとって最もたのしいひとときです。あれこれと、アラレもない妄想が私の脳裡をかけ廻り、それがやがて現実に実現出来る様な錯覚すらおぼえる様になりました。辻村様のカメラ・ハントをお読みしてから、若し私が誌上で辻村様に呼び掛けたら、ヒョッとしてそれに応じて下さるかも知れない——と、そんな思いを抱く様になつたのです。散々何日も迷い、手紙を書いては捨て、又書いて、挙句に清水の舞

台から飛降りるつもりで投函しました。毎日毎日不安と危惧と期待の衝動で落付かず、辻村様の御返事を心待ちしました。十八日目、半ばあきらめかけた頃、見知らぬ女性名の手紙をいただき、開封するとそれが辻村様のものでした。欲びが湧き上りましたが、その途端、新たな不安が私を包みました。私のようなものが果して辻村様の御期待にそえるかどうか、それが心配だったので。数々の緊縛に責めに耐えられるだろうか、その事許りが四六時中、今日こうしてお逢いするまで私の頭を占めていたのです」

堰をきった様に善子さんは喋べった。私は合槌を打ち乍ら、努めて笑顔で、彼女の話にきき入った。

「カメラ・ハントに撮っていただいて、それが奇クにのつた場合、お友達や、その兄さんが、私だつてこと気付かないかしら、この近くで誰かが奇クを読んでいる、私と知った場合どうしよう——と、その事も心配でした。

だからうんと化粧して、この私が誰にも気付かれず緊縛モデルになれたらなあ、それが私の願いでした。でも辻村様にお目にかかつて、そんなことどうでもよくなりました。辻村様の思う様に、好きな様に構図なさって、

私を自由にとって戴いてもいいという氣になりました。何故だか自分でも分らないけど」

「どうも有難う。ところで、一度でもそんな経験ありますか？」

「いいえ一度も——。でも自分で緊縛を試した事は度々あります。」

「どんな方法で？」

「何だか恥かしいけど言つてしましますわ。例えば若し逆吊りされたらと、その時の事を考えて、こんな方法で試しました。家人の出払った安全な日に建材倉庫の二階に昇り、ボードの並べてある棚によじ昇りまして、建材運搬用の先に鉤のついた太いロープを梁に通します。スラックスをはいた私は両足首を揃えて細帯で縛り、体を倒立させて、梁から垂れ下ったロープの端の鉤に足首の細帯を引っ掛けます。両手でロープをしっかりと握って、徐々に体をずらせ、棚から体を出して行き、思い切つて体を投出してしまふのです。何度も棚で頭を打ったり、ぶついたりしましたがこの方法で、私は逆吊りになり、ロープを両手で握りしめているのです。独りでやると、頭がカッとして、耐えられなくなるまでの時間は、五分は辛抱出来ました。限界がくると私はじりじりロープをゆるめ、それと共に、

私の体は下降して、床に頭がつくのです。別の方法も試みたことがありました。棚の最上段に昇り、梁に鈎ロープを固定させておいて、縛った両足首をロープの鈎に通し、細い縄で自分の胸をぐるぐる巻きにして、縄端を後手の両手で握り、前から見ればいい緊縛の恰好になって、棚から我が身を宙に放り出したのです。この時は体がゆれて、イヤツという程左肩を棚にぶちつけ、その痛みで、ウーンと唸りましたが、兎も角床上一メートル我乍ら素晴らしい逆吊り緊縛のポーズでした。数分後に両手で握った縄を離し、胸の縄はパリと落ち、体に弾みをつけて、棚に縋り、やっとこさで上段までよじ昇って、私のアヴァンチュールは終わったのです。若し吊り下っていた時、誰か二階の建材置場へ上ってきたらどうでしょう。吊り下るまでは夢中で、よじ昇る時は、何かに追い立てられる様に必死でした。口を使って前手縛りにして一時間ぐらい寝床に入っていた事もあります。何とか辛抱出来ると思います。それに私、自分でいうのもおかしいんですが、案外体が柔軟なんです。海老責めのポーズをとったり、両手を背で高手小手にしても相当高く手が背に上る様に思います」

ひそひそ話乍らも善子さんの話は身振りも入って、なかなかの熱心な説明であった。何とか気にいられようと、努力する彼女の涙ぐましい口吻に、私はいつしか胸をうたれた。「じゃあ、そろそろ行きますか——」

三十分も経ったろうか、私は話をこの辺りできり上げて、彼女をうながした。立上った善子さんは、いそいそウキウキしてるかに見えた。

× × ×

夏には芋の子を洗うように混雑する須磨辺りも、今はヒツソリと人影もない。海水旅館や避暑旅館はどこもカンコ鳥がいないに違いない。東尻池から須磨までタクシーで十分。私達は冬の汐風の冷たさに身震いして、思わずオーバーの襟を立てた。別段須磨でなくともよかったが、フト何気なく須磨辺りにしましょうかといった時、善子さんはわけもなくうなづいたので、通りかかったタクシーにのり込んだ次第である。

淡路の島は薄墨色に霞んで、碎ける浪は白く、伝馬船が二隻ポツリと砂礫の浜辺に打ち捨てられてある。

一昨年の夏、海水浴に来て立寄った旅館を想い出して、記憶を辿り乍らゆきついた。今

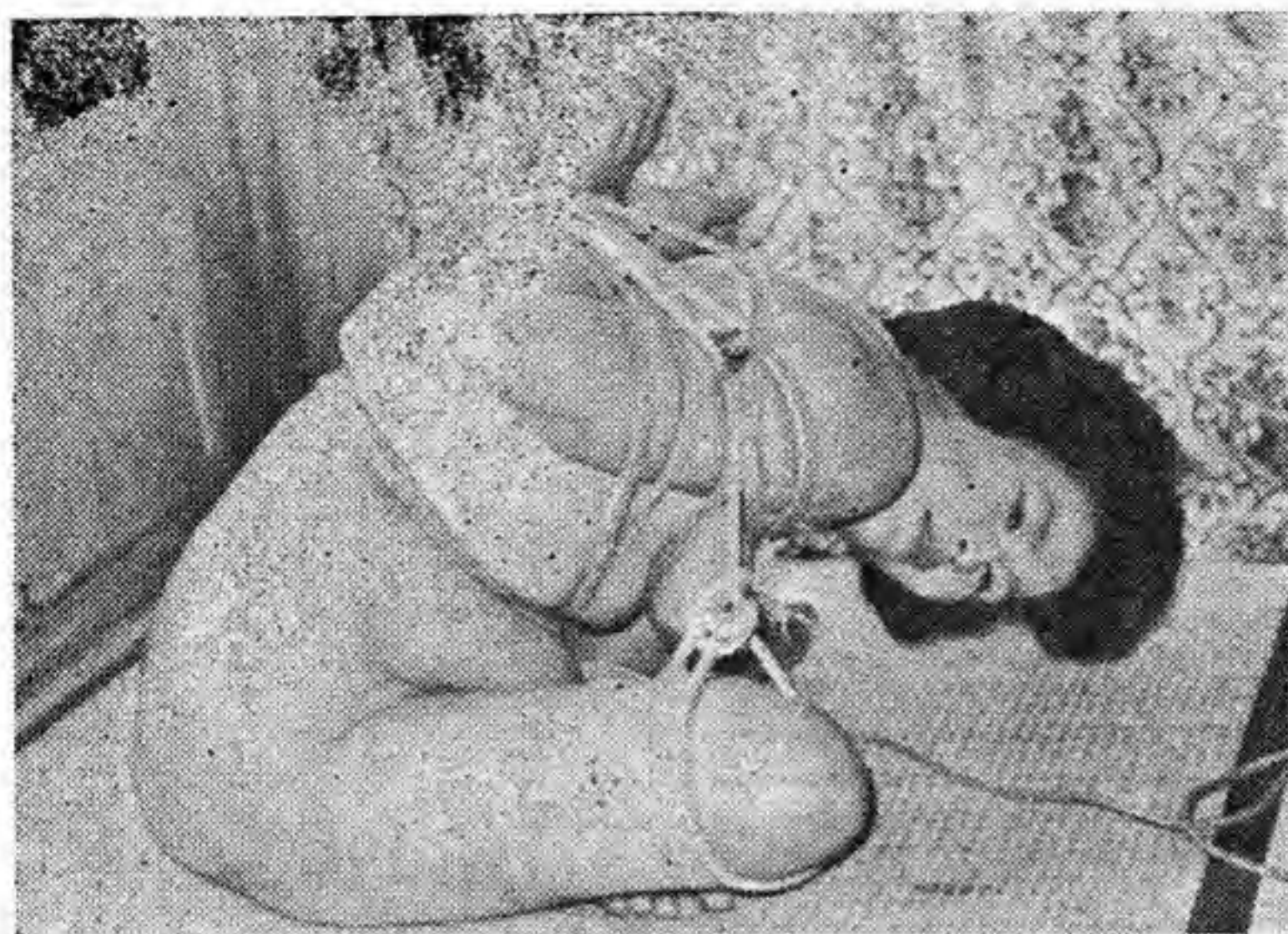
頃の季節のアベックに、おばさんらしき人ややと迷い気味に案内してくれたのは、海の見晴せる和室だった。調度すべて旧態依然とした、如何にも夏向きらしい旅館である。須磨にも立派なホテルが沢山あるのに、こんな旅館をよりによって選んだことを悔まれたが志村善子は一向気にも止めず、窓に面した須磨の浦を眺めやっていた。

「隣りの間も、こちらの三帖も、皆空いてますから、お入用でしたら御遠慮なく使ってくださいや——」

私が携帯用の三脚をとり出して、脚を伸ばしていると、それと察したおばさんは気軽な声をかけて、お茶と茶菓子を置き、ガストープに火を点じて出ていった。察しのいいおばさんである。こちらも気がラクというものだ。

隣りの三帖はガランとして、カーテンの奥は物置の様であった。明るいいこの部屋を使用することにして、ガストープを、その部屋と客間の合間まで引曳って行き部屋に炎を向ける。

「夕方から行く処があるので、少し急ぎましょう。ここを四時頃までに出たいから……。じゃあ早速かかりますか」



(写真 C)

善子はだまってうなづいた。畳の上に倒したり転したりすると、結び立てのセットを崩すので、余りキチンとした髪をしてこられると困るなあ。とそんな事を考え乍ら、私はバツグから太目の縄をとり出すと兎も角、善子を手後に着衣の儘で縛り上げた。服の上から

触れた彼女の肌は弾力性があって、ムツチリと盛り上って感じられた。極くおとなしい初步のポーズ、いやポーズともいえないその儘の姿を一枚とった(A)。

観念した様に彼女は自ら手を後に廻し、かすかに顔を伏せ、ぱっと頬が紅潮した。これから愈々始まろうとする、緊縛のプレイの昂奮に、心なしか彼女の胸は高まり、胸の隆起の辺りは、大きく波打つかに見えた。

「立上って下さい」

私の合図で、後手の儘、彼女はその場に立上る。立姿を左右から後からカメラに入れ、私はカメラを畳の上におくと「そろそろ脱いで貰いますよ。いいですね」

と声をかけた。

「ええ……」

微かな返事があったので、私の手は素早く、スカートの横のホックを外しにかかった。スルスルとそれを足許に落すと彼女は足で跨いだ。薄いピンクの、縫取りのあるシュミーズが、すりと伸びたかもしれないような脚を蔽って、彼女はその場に踞みこんだ。

私は容赦なくパンティも剥ぎとった。別の一条の縄を胸下にかかる縄につないで股縛りにして、猿轡をはめた。覚悟の上とはいえ、彼女の全身に羞恥が走り、軽いけいれんが私の手にじかに伝わってきた。このポーズで数枚シャッターがきられた(B)

序曲はこれくらいにして、私は本格的プレイにかからねばならない。既に彼女の体がそれを求めるかの様に、縄を解いた私の眼前で「上衣を脱ぎましょうか」

と声をかけてきた。うなづくと、忽ちシュミーズもブラジャーも外し、期待に背かぬ豊かな、豊満そのものの白い女体がそこに現出した。ヒップの肉付きはさることながら、その裸に、私は彼女の腹部のたるみが些か気になった。私は呟やくようにいった。

「おなか少したるんでいるね。まるで妊婦見たいだな」

彼女はハッとして真赤になった。そして上衣でその辺りを押えた。

「堕したんじゃないの？」

随分無遠慮な質問だった。志村善子はヌードの身をくねらせ顔を伏して応えなかった。例え、彼女がそうした行為があるうと、なかろうと、今の私には関係のないことだった。

私は自分の愚かな質問に後悔しつつ、急いで次のプレイにとりかかった。

柔軟と自ら称する彼女の肉体を試す気で、私は彼女の両腕を、精一杯握り上げて見た。

両の腕は易々と上って、両手は高々と背で組み合わされた。その両手首を縛って、縄を胸から腹へと強くしめ乍らかけて行く。両の乳房がプリプリと飛び出て、薄く色づいた乳首はピンと張切っていた。

更に両足を組ませて足首で縛り合せ、海老責にした。柔かい彼女の体は相当屈折させても軽々と、さして痛痒を感じないかの如く、私の手の下で思う様に動き廻る。(C・D)

「痛くない?」

私の問いに、彼女は首を振った。彼女のプレイのうち、最も驚嘆して、身の軽さ、柔らかさをつくづく思い知らされたのは、両足を大の字に開き、高手小手の縛られた姿で、頭をたたみにつけたことである。これはちょっとしたや、そっとでは出来ないポーズである。

この部屋が吊りに適していないことに、私は限らない不満を覚えた。

逆吊りに対し、数度自ら実験した彼女であって見れば、或いはこの期待を抱いて彼女は来たに違いなかったのだ。しかし、この部屋

で所詮それは出来なかった。せめて襖の境目の鴨居の上でも隙間があれば、低い乍らも鴨居から吊すという手もあるが、壁になつていてはそれも不可能だった。

全裸のいろいろの緊縛は休む間もなく続けられた。これらのフオートが露出しているだけに掲載の不可能なのは残念であった。しかし撮っている最中、私はすっかりその事を忘れていた。自然の儘の姿で、不自然きわまるポーズが易々としてなされる時、私でなくともよりそれ以上の、他のモデルではなし得ないポーズを望むのではなからうか。

さながらアクロバットにも似た、さまざまな肢態が私のカメラの前で展開した。

時計を見ると三時半になっていた。そろそろ切上げねばならない時刻が迫っていた。これが最後と、私は彼女の柔軟性をいいことに強烈な緊縛を思いついた。

「これで終りにするよ。一寸きついと思うけれど大丈夫だろう、貴女なら」

彼女は一寸脅える眼になったが、微かに肯定した。うっすらと額に汗がにじんでいる。

膝を伸ばして坐らせ、私は彼女の整った髪を崩さぬ様注意し乍ら、頭を押えつけて、じわじわと屈曲させていった。彼女の頭を、太

腿の間に押し込むと、片足で背をぐいと踏みつけて押え、両足首を握って持ち上げ、頭の背後の首筋のあたりまで持ち上げ、そこで素早く両足を縛り合せた。彼女の頭部はすっぱりと両腿部に挟み込まれて、両足が背に出てくる苦しいポーズである。両足首から膝そして腿へかけてじりじり縄をしめ、両手を後で高々と縛り上げると、彼女の体は真二つに折れた様になった。意識してその体を足蹴にして、横倒しに転がした。ウーツと呻いて、苦悶の聲が股の間から洩れ、押し潰された腹部が無惨に喘いでいた。

「苦しいかい?」

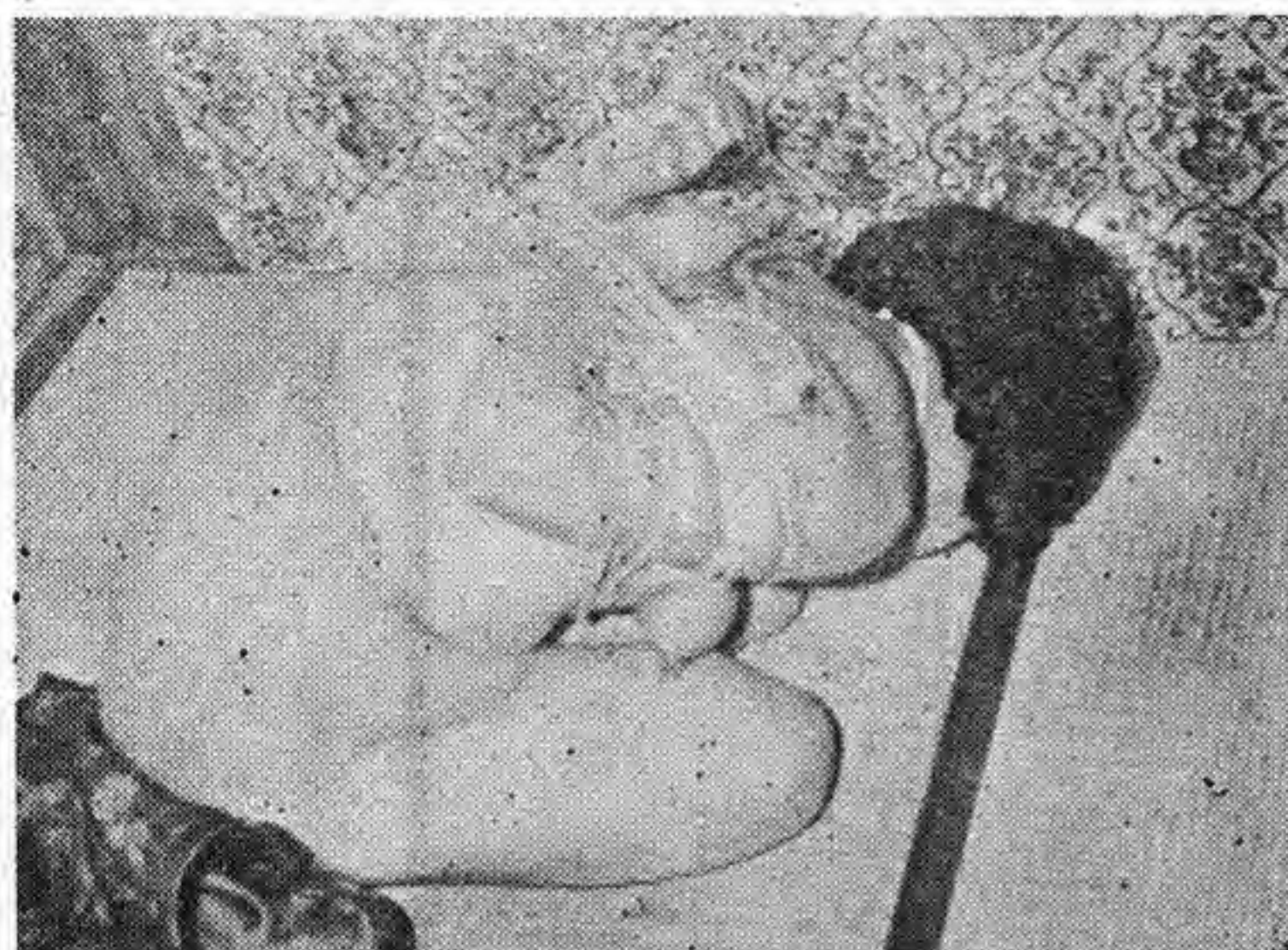
私はわざと冷静に声をかけた。微かにうなづく彼女の顔は蒼白に変っていた。

シャッターがあわただしく切られ、呻きつづける彼女をなめる様に、又俯かんとして、私のカメラは、この責めの極致を細心に捉えていった。

× × ×

思い切ったプレイの出来た後の爽快感は、覚えのある人なら、誰しも味わった事であろう。志村善子の全面的な協力で、私は愉しい数時間を過ごすことが出来た。

「失礼ですけど、辻村様、これ電車賃にして



(写真 D)

「下さいませんか？」

旅館を出て、国道の方へ彼女と肩を並べて歩く私に、彼女はそっと数枚の紙幣を握らそうとした。私にとっても、数多くモデルを撮ったうち、女性の方から金を握らされた事は始めてである。勿論わけを話して押し返した

が、勿論ペイするのは私の方であって、彼女から貰う謂われはサラサラない。

「でも、遠い処をわざわざ出て来て戴いたのですし、旅館代だって、お支払いになったのですから……」

と彼女は申訳なさそうにした。

「とんでもないそんなこと——むしろ私の方が幾らかでも御礼すべきですよ。貴女が受取らないと思ったから、好意に甘えたまでです」

私は彼女の純粋さを可愛いく思った。

往きに冷めたく感じた夕風が、プレイのあとの軽い疲労感を伴った私の肌には快よかった。往來の激しい国道に出ると運よく神戸へ向う空タクシーが来た。のりこんだ私に、善子さんは身をよせる様にして唄いた。

「又、逢って下さいますか？」

「機会があれば、私も是非逢いたいですよ。今度はもっとゆっくと、そしてデラックスなホテルでね」

「それまでに何とか、おなか凹ませておきますわ。辻村様が判っきり仰有るので私悲しかった。墮したなんて、そんなフシだらな事しないわ」

「悪気じやなかったの。唯、ふと口から出ただけ御免なさい。話は変わるけど、読者通信の貴女の御便りを読んで、逢いたいといっている人がいるけど、どう？」

「辻村様さえ、よければ私構いませんけど、大丈夫かしら、その方——」

「それは私にも分らない。逢って見て気に入ればよし、気に入らなければプレイ前に別ればいいじやないの。貴女の自由ですよ」

「そうね。じゃあ逢って見ますわ。どんな連絡すればいいのかしら」

「読者通信で松岡という人、私へのじかの依頼で吉村という名古屋の人と、羽田という豊中市の人と、さあ三人ぐらいかな——」

「お逢いして、私を御覧になったら、どなたも皆ガッカリなさいますわ」

「いや、きっと貴女なら喜ぶでしょう。しかし慎重にね。プレイは所詮プレイ。後悔のない様に——これは私のつまらぬ老婆心だけど。貴女が余り純粋すぎるので、それだけが心配だよ——」

「辻村様は、これからどうなさるの？」

志村善子は媚びるような眼付になって、私を見た。

「五時から、実はもう一人、三の宮で逢うことになってるのです。だから悪いけど、もう

すぐ別れなければならぬ（刑部典子の件参照）

「ひどい方——」

彼女は私の腕をつねった。△痛いッ？△
東尻池二丁目の少し手前で、私は車を止め

さした。

「又、きつとね。きつとよ」

彼女は駄目を押して、私の手に柔かい手を重ねてぐっと押えると未練氣に車を降りた。車から振り返ると、舗道に立った彼女は、

いつまでも私の乗った車を見送っていた。まるで私の姿が見えてでもいる様に、小さくあった彼女の豆粒程の姿が、いつ迄も凝然とその場に佇んでいるのが、やがて交錯する車の浪にかき消されていった。

山原清子さんの

刺青フオトの感銘

京都女斗菊

先般御送付頂きました山原清子さんの刺青フオト、「いよ」「いり」「いお」「いる」「くの」「くな」の六点拝見。こんな素晴らしい結構なものが、御社のお蔭で入手出来、なんとという有難いことでしょう。厚く御礼申し上げます。

いずれも結構な出来栄ですが、仲でも、「いる」の膝立は素晴らしい傑作です。娘島田

もなまめかしく、かんざしが中々よろしい。ほっそりとした頸根の線、両腕をグーツと前で組んでいるのでしょうか。これは見えませんが肩口から背中一面に彫込まれた繊細巧緻の刺青。真白い晒褌が割目にまで彫られた刺青を二ツに分けてグーツと喰込んだ臀部のふくらみ。ズーツと太股へ伸びている刺青。なんとも表現の仕様のない良さです。

これこそ、女性刺青の魅力を最大に発揚されたものと思います。それに立膝の両足を組んでのきまりも程よく、よくぞこれ程の構図を物されたものと感心致しました。只々カラーで無いのが残念です。それと同じく、「いる」の胡坐も小生には大変気に入りました。アノ大あぐらの乳房の豊かさをチラリ見せて可愛い顔を振り向けた所は、中々よろしいが、しかし二十枚全部が左側面の分ばかりで、右側面の分が一枚もありませんのは、いささか不満です。

さて、山原さんの刺青、只々素晴らしいの一語に尽きます。よくぞこれまで彫り上げたもの、よくぞ此所まで辛抱されたものと、大いにはめて上げたい気持で一杯です。入手後はとても楽しくて取出しては幾度も繰り返えし繰り返えし見せて貰っている次第です。流石に名人彫芳師匠の傑作と折紙付きだけあって

構図筆勢共に山原さんの身にはまり、ゾクゾクする様な素晴らしい出来栄です。

これは玉取姫としては珍しい図柄で、むっちりと程良い肉付の背中一面、濃淡鮮かな大波小波が波打ちうねり、波間に見え隠れる海竜の胴体、その真只中にグーッと見得を切った玉取姫。左手に宝玉を力強く高く捧げ、右手に短刀を腰のあたりでグーッと構え、必死の形相物凄く、迫りくる海竜を一突にせんと、の気魄も十分。バラバラと乱れる素晴らしい筆致の頭髮。一転、むっちりとポリウムの右の乳房、左太股の海竜は爪を蹴立てて今にも姫に飛びかからんとして居る、実に繊細巧緻な刺青。よくもこれだけのものが針先一つで彫り上げられたものです。

確かに彫芳師一代の傑作だと思います。音に聞く二代目彫宇之師の傑作「羽衣」注(写真も見ましたし文献に依る)初代彫五郎師の傑作「二正竜」注(写真も見ましたし文献に依り共に女性で羽衣の女性は死亡とのこと)に勝るとも劣らぬ一大肉体芸術だと思われま。実物は朱入の総ボカシでさぞかし美事なことでしょう。どうでも是非共一度親しく拝見させて載きたいですが、如何なものでしょう。御社の企画で山原さんを囲んで、座談会

のようなものを設けて戴けないでしょうか。どうか我々ファンの夢を実現させて下さる様御願ひします。

次いで山原清子さんへ捧ぐ。

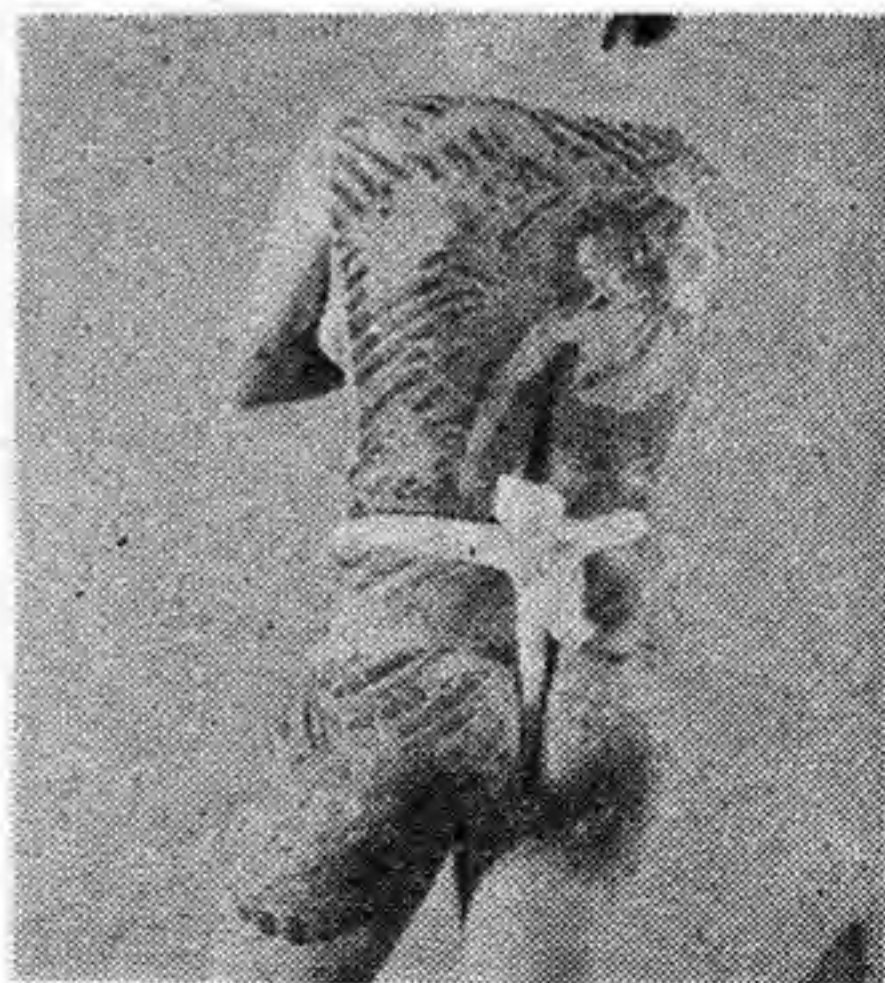
山原さんはグラビヤ・フォトを通じて親しく拝察しますと、肌理の細かい色白の少し肥満型で、しかも年も若く全く文身には理想的な肌の持主と思われ、さぞ彫芳師は精魂を打込んで彫込んでゆかれた事でしょう。でも、なぜ完成間際で止めてしまわれたのでしょうか。只々惜しみても余り有りたい所です。実にもったいない事です。折角これほどのものを此所まで彫上げながら、私どもファンも実に残念に思います。

それはそれで貴女には、言うに言われぬ御事情がお有りでしょう。他人には伺い知れぬ事情が御有りでしょうが、此のままではなんとしてももったいないです。奇巧の読者通信では大ぜいのファンが、貴女の刺青に感心し且つ喜び温い気持を包んで、色々と貴女に注文をしております。又、投稿はしなくとも、どれ程多くのファン(ファンといっても刺青女性のファンですよ)が貴女に注目しているか知れません。貴女は痛さがこらえきれず、モウ我慢が出来ないので途中で止めてしまわ

れたのでは無いしようネ。

此の際、思い切って万難を排して完成に踏切って下さい。三月号の読者通信欄を御覧に成りましたか。「一刺青ファン」氏の投稿は中々面白い案を出して居られます。同氏は名古屋の人らしく、山原さんにモット彫って貰い度いと言う願ひです。それに就いて費用の点や貴女への謝礼金も含めての提案条件等ですが、私も此の点は賛成です。名古屋には喜作さんという刺青の名人が居られる由、その人に彫って貰うというわけです。

フォト「いお」を見て下さい。「女一匹御意見無用」白晒六尺褌一本の裸で、どっかと





アグラを組んだ刺青女の姐御っぷり、両手を胸で交えて、サア女一匹どうでもしてくれと居直って凄んだところ、という見出しですが其のやわ肌には、一とかけらの刺青も写し出されては居りません。ソリヤー今までは後援者の意とされる所で、其の様な注文でそう彫られたのでしょうか、どうやら現在では貴女の気持一つで思うままにやってゆけるのではないでしようか。折角これ程のものを背負って居ながら、前にはなんにもないなんて、本当に釣り合いが取れませんよ。実に勿体ないです。幾度も言いますが、此際思いきってスッパリ仕上げて日本一流の刺青女性と云われる様になって下さい。御願います。それももう僅かな部分だけです。ものの二カ月か三

カ月も有れば十分彫上るでしょう。

先にも一寸言いましたが、彫五郎師傑作の「二足竜」は芸妓をしておられた時分にやって貰われたのだそうで、三カ月で完成されたとの事です。もちろん自分から希んでの我慢だったらしく、こんな短い時間で女性で全身を彫上げた人は他に余り無い様です。名古屋の喜作と言う名人、此の人に依ってあとの部分を完成させて下さい。刺青は一人の名人に全部を彫上げて貰うに越した事は有りませんが、一身上の都合でそうは行かぬ場合も多く有る様です。

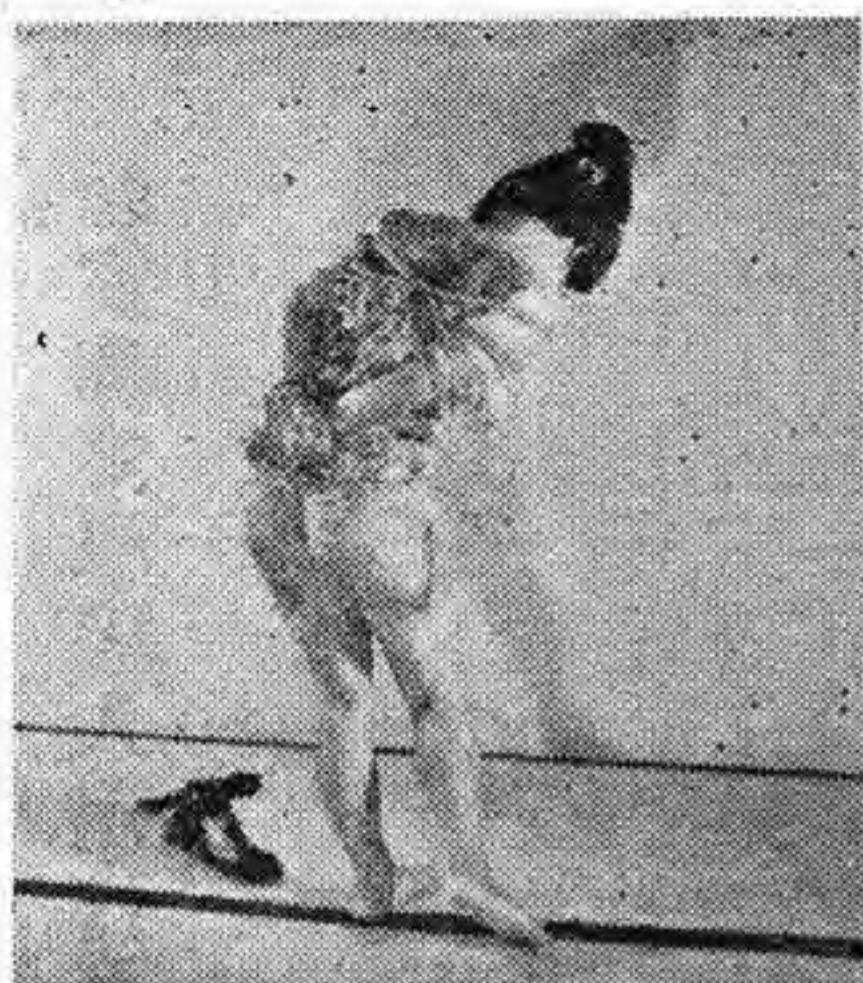
これは受売りですが、大正の中頃東京の浅草に十二階下というのが有って、其の当時日本一の刺青女性と言われた羽衣のお国さんと言う人が住んでいたそうですが、其の人は最初に神奈川の刺青師彫友に事情が有って頼み右腕一本三日間で朱入りで仕上げて貰い、次いで象潟町の彫勇と言う人に背の羽衣を付けて次いで深川の下駄亀と言う有名な人の手に依って牡丹を彫り、神田多町の彫宇之、これは初代に朱を入れて貰った上に、全身を完成させたと言われ、胸は胸割りと言う女性には珍しいものだったそうです。

こうした彫りで全身を完成させた女性もか

なり有るとか聞いて居ります。「妖艶」の二字、女性の刺青は恐らく其の極致を示すものでしょう。別けて肌理の細かい色白の少し肥満した年若の美人が、濃淡の墨色に鮮かな朱色を加えて全身に彫上げてあったなら、申分の無い妖艶さと言ってよいでしょう。

これはあたかも、完成された暁の山原さんへ捧げた言葉のようですね。一寸古い言い回しで行くと、色白な羽二重肌で、朱の色が殊に鮮かに上って居る派手なお召の丹前を被って如輪木の長火鉢の縁に頬杖をついて、にゅうと、両胸の刺青の下側だけを露わした清子さんの妖艶ぶりをと、こんな風に考えてみると、モウたまりません。胸がワクワクしてき





ます。どうか此の際、日本一の刺青女性と言われる様に成って下さい。

両腕一杯、ひじ下へ二寸ぐらい、胸は肩口よりグーツと半円形に張出し乳房にかからぬ方がよいと思います。太股はモット内股深く喰込む様に彫って貰えばよろしいでしょう。

それに未完成の部分、海竜の顔面及胴体。左右臀部より太股へかけては、大体仕上っている様ですが、尻の割目附近と太股へのびる線に未完部分が有ります。右尻部は殆ど未完成、太股かけて、これはどうしても仕上げねば成りますまい。

山原さん、貴女の臀部から太股へかけての線は素晴らしく魅力的です。この美をこわさぬ

様大切にして下さい。自分勝手な事ばかり言って誠に済みません。気を悪くなさらないで下さい。アレもコレも貴女を思うフアンの切なる願いです。終りに両腕などの図柄を一寸考えてみましょう。此れは左右どちらの腕でもよろしい。

『血のしたたる女の生首をくわえた毒蛇が、物凄い形相で腕の上部に、蛇腹が胸の張出しにまで及んでのたうっている。下方から、これも凄い形相の蝮がメラメラと火炎の舌を出しつつ、今やまさに其の生首にとびかからんとしている所。胴体はぐるぐる巻きにまきついて居り、他は雲と波の総ボカシ』

『咲き競う牡丹に狂う唐獅子。これは胸の張出しに磐若の面を持ってゆきたい所です。』

『面づくし、これは磐若の面を胸の張出しにして、以下汐吸き、おかめ、天狗、狐翁、鬼上ろう等適当に配し、それを一本の朱房の紐に連って居る様にし、朱房は下側に掛つていふという趣向です。間は散らし桜がバラバラと落ちかかっている他は雲と波の総ボカシ』
『片腕に登り竜と降り竜、この登り竜は真上向きの青竜とし、降り竜の胴腹は胸の張出しにも及び上部は雲、下部は大波小波の総ボカシ。尾部は下側でピンとハネている。』

『鯉の滝上り。真赤な身体の金太郎が、鯉の背にだきつきグーツと首を持上げている。水勢は物凄く、随所に岩に当って飛び散り、上部に紅葉が鮮かに色づき、その落葉がチラリホラリといった風情、胸の張出しにも波に紅葉が弄ばれているといった風情』

『爛漫と咲き乱れた桜花に、蟒がグルグル巻にまきついていふ。それは先に言った毒蛇と生首の様に蟒と蝮の争斗としても良い』

『弁天小僧を歌舞伎役者の似顔にして、グーツと顔を持ち上げさせ、半片足立ての大アグラで後方にスツとん狂な顔の番頭を配し、右袖も大きく二重彫りに成る刺青を内股まで鮮明に見せ、鮮麗な朱色をフンダンに使い、出来る限り繊細華麗に仕上げる』

と、マアこんな所が私の希みです。

いやもう永々と飛んでもない素人の刺青談義、イヤハヤ面目次第も有りません。勝手な事ばかり言つて、これもマニヤのマニヤたる所以で、どうぞ全てを御宥し下さい。では今日はこの辺で失礼します。何時の日か、御逢い出来る日を楽しみに、どうぞ、呉々も御自愛御大切に。

〔懸賞募集原稿入選作品〕

「革の盛装」

〈第三部〉

(緑の牝)

山 口 広

一、下 検 査

二月も終りに近ずくと、長かった冬のそこ
ここに春の気配が感じられる。休日明けの何
かけだるさの残るMデパートの朝の貴金属売
場、まだ広いフロアに人影はまばらである。

この日の第一の客として、三沢弘子は濃紺
の革のスーツを身につけた体のよく緊った夫
人を迎えた。落着きを見せた夫人の瞳に冷た
さと威厳を感じながら、

「いらっしやいませ。何に致しましょうか。」
「そうね。あちらのプラチナ台の指輪を見せ

て——。」

「はい。少々お待ち下さいませ。——このあ
たりのでしようか。」

「それ位で良いわ。」

「はい、少々。」

五六個並べられた指輪をはめたり、外した
りしながら、弘子の胸の番号札を確かめて、

「あなた、三沢さんだわね。」

「はい左様でございますが。何か。」

「わたくし、小山美代子さんの知り合いなん
だけど、美代子さんの行方は、まだ解らない
の？」

いきなり美代子の事に触れ、いかにも心配
そうな夫人の様子と、美代子の親友である事
を知られているのに親しみが湧いて来た。

弘子は親友の小山美代子が昨年末に突然行
方不明になり、その後の手懸りが全然なく、
家でも警察でも、まして新聞広告などでも尽
す手は全部打った事を話した。適当に合いつ
ちを打ちながら小さいダイヤを散りばめた指
輪を買った夫人は、さり気なくデパートを出
た。やはり電話はかからなかったのだと安心
した。マミの失踪の手懸りがあるう筈はな
い。良い助手であった光彦の死は今もって惜

しまれる。絶対安心だ。しかしあの娘が私がマミの事を話したと、誰かに云えば、或は糸がほぐれないとも限らない。それにしても、あの三沢弘子と云う娘も良さそうだ。ページユ色の制服の上からもうかがえる肩の丸み、胸のふくらみ、緊った足首、そして理知的な顔立ち、マミといずれ劣らぬ良い娘である。あの張り切った肌の理知的な娘を足もとに跪すかせて、革の装具をかけてやったら、どんなにつんとした娘だって、私ならマゾに身をやく牝として馴らす事も出来るんだから………夫人の幻想は三沢弘子の夢にも思わない方向へ展開してゆく。

柄の悪いトラックの運転手が高い座席から野卑な冷かしと、羨望の口笛を投げかけるのに耳もくれないで、夫人のしっかりしたハンドル捌きでボグゾールはすいすいと抜いてゆく。急な坂道の多い神戸では力のある車でないと不便だ。而も形は小さく、女らしい優雅さを出すにはヨーロッパの車に限る。

住みなれた六甲の家、道川家で門から車を乗り入れた夫人は、車を芝生へ乗り上げた。手入れを怠らなかつた芝生に車を乗り上げたのは、もうこの家を手離す気持になったのだろう。手まわり品だけにしようと思ひながら

も車のトランクは勿論、後の座席にも箱や包みが一杯に積まれる。車をまわす。大きな郵便受けも一杯である。手紙を車に移しながらあの二週間余りの牝としての苦しみが想い出される。門柱のかげの牛乳受けにはられた西岡の筆跡に周到な気の配りに改めて驚かされる。私は今旅行から帰った事になるのかと苦笑が湧く。

芦屋の山を夫人の車が上って行く頃、弘子は早番の昼食後にフィアンの細川孝三と電話で話していた。

「——孝三さん、今日は何時になるの。——そんなに遅いの。早く片付けてね。——うん良いわ。今日は私が御馳走するわ。——でも待たせちやいやよ。バイバイ。チュ。」唇を突き出し投げキッスで電話を切った。

二、装具

夫人は革のショート・パンツと半袖のブラウスという軽装である。テニスの服装にした。勿論濃紺の山羊革である。しなやかさはこの上もなく、手触りは全く人間の皮膚に近い。わざとマミを鎖で直立させておいて、ばあやに昼食を運ばせる。その匂いに二日も胃の中に固形物を入れなかつたマミの空腹感

益々強くなり、痛くさえ感じられる。涎も唇の端から流れ落ちる。

「マミ、お腹が空いた？。お前の胃は健康だから下から幾ら栄養を入れても我慢できないだろうね。そうね、胃酸過多なんかならねると手当が面倒だから上からも入れなきや。でも鼻からでは、ばあやには無理ね。私が留守にしても飼っておける様に色々試して見るわ。マミ、歯が動かさないって、どんな気持？」

大きな深皿にスプーンが運ばれる。首を吊る鎖を外されると、その良い匂いに思わず近ずいて口を寄せようとするマミに、
「マミ、良しと云うまでは駄目よ。その前に試して見るわ。」

いきなり形の良い鼻をパンチで挟まれる。思わず口を開けようとしても歯が止められている。唇だけをせい一杯開く。しかしそんなに大きくは開かない。歯をむき出したマミに「マミ、お前は親知らずが、まだ生えていないから奥はすいてたわね。ほほほ。」

歯の隙間は殆んどないが奥歯の後から比較的に呼吸ができる。口の中が乾いてくる。
「マミ、大丈夫の様だね。飲んでごらん。」鼻のパンチを外され、「うううん」意味の

わからぬ呻きを出しながら膝をついて床に置かれた皿に口を近づけた。皿の位置が低いので口をスープにつける前に鼻が浸る。空腹感には羞恥にうち勝った。奥歯の後から味の良いスープが口の中に広がる。鼻孔の奥まで匂いが充滿する。舌袋はつけられているが何とか味わう事が出来る。空腹感がおそろあ苦しみを感じる。舌袋はつけられたい。時々鼻を上げながら、呼吸を続けては、何も忘れてスープを充分に飲んだ。

「マミ、坊主頭って魅力があるよ。丁度まだ声変わりもしていない中学生みたいだわ。それに眉がないのもエキゾチックだわよ。」

ソファに腰を降し、マミを正坐させて言葉でのいたぶりが続く。

「マミ、今朝ばあやが私のメリだった時の拘束衣をほだいたのを見たわね。お前には西岡の気持はわからなかったらしいね。そうよ。こうなる事は予定していたの。マミ、特別訓練の時に私たちが相談しておいたのよ。ほほ。だからお前の抱束衣は、そっくりそのまま、しまってたのよ。今わかって遅いわ。でもね。お前が電話をかけてくれたから、私の解放が早くなったの。有難かったわ。」

そんなに深いたくらみがあったのか。今更

後悔しても追いつかない。意味の通じない呻きをあげて見上げる憎悪とあきらめの瞳を見つめたまま夫人は続ける。指輪を弄びながら「そうそう、電話はやっぱりかからなかった。三沢弘子が云ってたわよ。ついでに、これを買って来たわ。小粒だけど、細工は良いわ。」

「マミ、あの娘も良さそうな娘だわね。お前を一生懸命に探しているそうよ。ふふふ。でもわかりっこないわね。マミ、お前を弘子に会わせてやろうかしら。でも丸坊主では、お前を見ても判らないだろうね。髪の毛で、あんなに人相が変るなんて不思議だわね。そうだわ、あの娘をお前に会わせる事にしよう。お友達が出来てお前も楽しくなるわね。」

弘子さんを私に会わせるって、と夫人のたくらみに気が付くと、大きく坊主頭を振って呻きを高く長く続けた。

「ふっふっふ。マミ、いやかい。その体を見られるのが恥かしいのかしら、生れたままだと云うのにね。尤も、生れた時でも赤ん坊には髪の毛と眉はついてるからね。」

赤く染った顔を尚も激しく横に振るマミへのいたぶりは続く。

「マミ、お前につけてやった首輪や腕輪は外

してまったんだね。あれがなければ固定するのに不便だし、牝らしくないから新しいのをつけてやろうね。今度は剃刃でも切れないのをね。今日車の中でスエーデン鋼のピアノ線を入れる方法を考えついたからね。」

マミは絶望感が強くなり呻きも次第に低くなった。

「マミ、私は材料を買ってくるから、お前は午後のお仕事よ。怠けるんじゃないよ。」

呼鈴がばあやを呼ぶ。正坐しているマミの顔を軽装の夫人の室内履が持上げる。長い時間の為に足がしびれてしまった。

「さあマミ、行くんだよ。おや、足がしびれたの。行儀の悪い牝だわね。ほほほ。」

マミはスープだけの夕食であった。夫人は西岡と楽しそうに話している。

「ねえ、あなた、あの娘も飼育したくなりましてわ。どうかしら。」

「うん、まあ良いけど幸子、人に見つからない様にしなきゃ駄目だよ。ほんの一寸の失敗も許されないよ。」

「はい、わかっていますとも。光彦が居ないのは不便ですが、退け時ならうまく行きますわ。今日も一人で喫茶店に入りましたわ。あの時ならうまく連れ出せますわ。それからね

あなた。やはりマミには首輪や腕輪をつけておいた方が便利ですわ。新しいのをつけますわね。今度は剃刃でも切れないのをね。ほほほ。」

幾分の皮肉をこめたその言葉に

「革の方が良いんじゃないか。金属は落着かなくていかんよ。」

「あなた、わかっていますわよ。見かけは革ですわ。まあ見ていて下さいね。」

訓練室にマミが一時解放された時の室内着であった袖のついた革のワンピースが運ばれた。そこにはもうガスバーナーや色々の道具が置いてある。夫人はしなやかな手にそぐわない大きなペンチを使って焼きなましたピアノ線を、マミの記録書を見ながらコイルの形に作り上げて命じた。

「マミ、轡を踏むの。そんなじや駄目。力を入れて、風がと切れない様に貧乏ゆすりをするみたいに。そうそう、上手だわ。」

「ブー」炎が強くなる。

ペンチで挟んだ二耗のピアノ線を約十巻したコイルが赤熱してくる。その色を見ながら缶の中の油で焼きを入れる。

「チュツ、ジューン。」

缶から九つのコイルを引上げながら、

「あなた、これで輪が出来ましたわ。あとはこれに被せる革を裁って、接着剤で止めますのよ。」

「接着剤で大丈夫かい。」

紫色のコイルをベンジンで洗いながら、

「エポキシ樹脂を使えば大丈夫ですわ。近頃のジェット機のジュラルミンを接着しているのがあるでしょ。リベットより強いんですって。ほらアラルダイトって名で売っている接着剤ですわよ。」

接着剤を調合して、コイルを引伸し、マミの坊主頭を通す。首のサイズにぴったりでも伸びると頭が通る。マミの室内着から切り取られた革が裏表にはりつけられる。

「ほら、これで接着剤が固まれば、もう外れませんわよ。あなた、接ぎ目なしの革ベルトに見えるでしょ。」

金色に輝く小さい環も忘れずに首輪に通されている。

普段着——袖なしのサックドレスの様な革オーバー——を剥ぎ取られる。慣れた手つきでマミは仰向けに押し倒され四肢をナイロン紐で四方に張り伸された。腕輪、肘輪、足輪、膝輪が装着される。時々コイルに肉が挟まれ一際高く呻きが響く。

「あなた、今度は尾錠ではなく、全部金色の環にしますわ。今日小さいけど精巧なエール錠を見つけましたから。」

「幸子、見事なものだナ。」

マミの足もとに立つ西岡の視線をたどった夫人は、嫉妬も幾分あるので、顔を赤らめて「きれいでしよう。あなた、私のは大分回復しましたけど。マミって憎らしい牝だわね。」乳首を思い切りひねられ、その痛みと羞恥に高い呻きをあげて、全身を染めながら目を閉じた。

「あなた、この接着剤は温度が高い程早く固まりますから、明日までに固まる様に、もう少し暖くしますわ。」

「幸子、それじゃ、このままにしておくのかい。」

「ええ、それで良いですわ。お腹だけ冷さなければ大丈夫ですわ。——そうそう洩らされると嫌ですわね。」

夫人は居間から治療箱を持って来て、細いカテーテルを取出す。

慣れた手つきでされる導尿に四肢をつなぐナイロン紐だけが激しく揺れ、呻きが泣声を伝えた。

腹の上に裁ち残りの革がかけられる。

西岡が夫人と手をとって出て行った後に四肢を大の字に張られたマミが暖い空気の中に残された。寒くはないが、誰にも見られていないのに、大きく四方に張られた体が羞恥と屈辱感を強める。呻きが続く。涙が床にこぼれる。

三、準備

手足を張り伸されたまま、朝を迎えたマミは軽装の夫人に体を飾る九つの輪をしらべられた。指で輪をこんこんと打診しながら、

「マミ、完全に固ったわよ。今度こそもう外せないわ。ふっふっふ。」

「マミ、こんな可愛い錠をつけてあげるわよ。これでもエール錠だから鍵をなくしたら開かないのよ。」

ステンレスのピカピカと輝く三纏ほどの小



さな錠を見せつけられる。精巧そうである。「マミ、お前には五つあれば充分だわね。残りのはあの弘子のためにとっておくわ。そうだったね。お前は今朝の用便はまだだったね。」

マミの呻きを無視して、早速固まったばかりの肘輪と膝輪が使われる。大の字に張り伸された右側の肘輪と膝輪の環に紐が通され、引き締められる。手首と足首をつなぎ止めるナイロン紐が一層きつく張る。次いで左側も同様に締められる。手足がもぎ取れるほど緊張する。股が一段と大きく開かれる。呻きだけが苦しさで蓋しさを伝える。腹の上の裁ち残りの革が除けられる。昨夜と同じくカテーテルが使われる。

「マミ、沢山たまっていたわね。楽になったでしょ。今度のは後の方よ。今日は強いのをして見ようね。出来るだけ頑張るのよ。」

尻の下に便器を挿入され、硝子の浣腸器に三十ccばかりの液体が吸い込まれる。不自由な体をよじっても避けられない。呻きが一瞬とぎれて再び高く続く。仰向けの胸に乳房が大きく息づく。首を振る度に

涙が剃り上げられた頭に伝わる。激しい音。
「マミ、完全栄養を入れてるのに、こんなに出て来たわ。ほほほ。」

体を拭かれ、部屋の四隅からの手首と足首のナイロン紐をやっと放される。しかしほととすの間もなく、両脚を合わせるマミを待っていた様に、肘と膝の四つの環が一まとめに集められ、錠をかけられる。首輪に鎖がつながれる。横たわったまま肘から先の自由であるが、首を曲げて掌で剃り上げられた頭をなでる。あの柔くカールをかけたしなやかな髪は一本もない。始めて触れる坊主頭に改めて恥かしさがこみ上げる。

「ううーっ。」

泣き出したマミは、不自由な両手で顔を覆う。指に触れるべき眉もまつ毛もない。自分の手で確かめた恥かしさ、口惜しさ、そして悲しさに、しゃくり上げて泣くマミの尻に、夫人は激しい答打ちをくれて、

「マミ、立てるだろ。早く立って。」

もう一度答が鳴る。マミの大きな尻に二筋の答あとがくつきりと紅に染まる。泣きながら、限られた自由の手と足で起き上ろうと努力する。起き上ったマミの両乳首に別々に電気のコードがねじつけられる。

「マミ、運動だよ。ここを丸く歩くの。止ったり、遅くなるとほら、これよ。」

「むふ——」

電撃に一際高く呻いて倒れる。再び夫人の手がスイッチに、

「早く起きないと、こうよ。」

切角苦勞して起しかかるマミの体がまた呻きと共に倒れる。空腹で渴いているのに、マミは膝から下だけで「家鴨歩き」を続けた。

以前に夫人の家で行われた「アヒル」は膝と肘だけがつながら両脚は別々に動かした。しかし今度は両膝と両肘と一緒に錠をかけられているので苦しみは一層強い。暖房と苦しみの為に五分も経たないうちに汗が全身から吹き出る。眉もまつ毛もないので、頭の、額の汗が目にしみる。涙が潰と共に出てくる。何度電撃で倒れたであろうか。電撃でおびえて家鴨歩きを続けるマミの体は始めはピンクに染った。しかし、次第に血色が引いて行き、蒼白になって、呻きも低くなる。

「マミ、よし止れ。」

夫人の声と共に倒れたマミは、意識を失った。夫人の独り言が続く。

「二十分ばかりしか持たなかったわね。出すものを出しておいたから、汚されなくて良かったわ。少ししほり過ぎたかしら。」

気がついたマミは居間のベッドにうつ向けに横たえられていた。手は背中であぐらがかけられている。汗にまみれた体はいつの間にかきれいに洗われ香水まで振りかけられている。気がついたマミの目に入ったものは、ドライバーやハンダ鋸を器用に使いながらラジオの様な物を組立てている夫人の姿であった。

「マミ、気がついたわね。遅くなったけど、朝食にしてやるよ。」

「栄養浣腸はいや、許して。」
呻きに変って哀願すら出来ないマミの体に排泄の自由を奪うあのNo.14の拘束ベルトが装着された。膝輪を首に紐でつながれて丸くなった尻へ、イルリガートルの嘴管が近づく。

「マミ、今日は少し暖めておいたから楽だよ。朝食は軽くて良いんだから、これ位にしておくといいよ。」

小さな脱脂綿で押えられ、最後の股間ベルトがかけられた。体が引き締まる感じだ。それほど強くはないが排泄感が強まる。ベッドから降され、跪すく目の前で、
「さあマミ、上からも飲むのよ。きつといいわ。」

イル・ガートルに残った黄褐色の液が琺瑯引きの皿の中に嘴管から注がれる。空腹であるが思わず顔をそむけるマミに夫人の冷い声が強制する。

「マミ、お腹が空いてるでしょ。それが飲めないなら、何も飲ませないわよ。もっと痛い目が見たいの。」

肩口に軽く答をあてられ、いやいや皿に口を近づける。排泄感におそれ、液の色、それに下から入れられたそのものであるという連想が咽喉を越させない。塩っぱい味も不快で、何度も戻しそうになりながら涙と共に食事を終えた。

ベッドで休まされるマミに、夫人は冷い微笑を浮かべながら話しかける。

「マミ、さあ出来たよ。お前は明日からこの機械で踊るのよ。いや、その前に今夜にでもお前の友達にさきに踊ってもらおうかしら。三沢弘子って牝にね。ほほほ。」

「弘ちゃんをいじめないで。お願い。」

呻きだけでは夫人に通じない。夫人はマミの眼を見ながらわざと逆にマミをいたぶる。

「そう、嬉しいのね、マミ。お前も二人なら私の時の様に頑張れるわね。」

「さあマミ、お前はお仕事よ。その間に私が

手順を考えておくわ。光彦が居なくても、きつとうまくやるわよ。ふふふ。」

・ 四、捕獲

来週は三月である。四月には相愛の孝三との結婚である。忙しいながらも弘子には、張りのある毎日が続く。二年余の長い楽しい春も四月には終るのだ。今日も式の手順などの打合せで孝三と会う約束である。彼の退社は今日も遅くなる。約一時間をどう過そうかとMデパートの通用門を友達と雑談しながら出る弘子を前の書店の中で、本を立読みしながら夫人は見つけた。商店街のショーウィンドを眺めながらお茶でも飲んで時間をつぶそうと考える弘子達の後から地味な和服姿の夫人の眼が尾行する。弘子は美代子より少し小柄である。しかし体の均勢はよくとれ、しとやかで而も朗らかで、そして女らしいその姿は、退社時のB・Gの群の中にあっても、一際目立っていた。白っぽいウールのオーバーの襟につけた黒い毛皮が如何にも良家の子女の姿を表している。

連れの派手な容姿の女が、ふと行きかう人波の中に彼女を待っていた男を見つけて、二言、三言弘子と話して、手を振って別れた。

弘子はその男をちらと見た。又あの人新しい彼氏を作ったらしいわ。でもあんな貧相な人のどこが良いんだらう。それに引きかえ、孝三さんは………と何でも孝三を引き合いに出しながら歩度をゆるめる。夫人の眼に冷い微笑が湧く。

孝三と待ち合わせる喫茶店コロンパの総ガラスのドアを押そうとする弘子は呼び止められ、無意識にふり返る顔に微笑が浮ぶ。

「まあ、昨日のお客様でしたわね。何か御用事でいらっしゃいますか。」

思わずデパートの躰が出てくる。

「あなた、お時間あって。ほんの少しで良いんですけど。——小山美代子さんの事で少しお話をしたいんですけど。私あちらに車を置いてますから。」

歩き出す夫人の後を追いつながら、時計を見る。夫人の計算し尽した演技に引込まれる。

「はい、四十分ほどでしたら結構ですが。美代子さんのお話しなら、是非おうかがいしたいですわ。小母様。」

三宮駅前の駐車場まで会話が続く。小母様と呼ぶ程の親密感が生れる。夫人の車は信頼感を強める。六三年型のボグゾール、すばらしい。夫人の横にフロントシートにかけた弘

子は、夕映えに影を濃くする東六甲の山麓をドライブしながら、これが帰れない道であるのにも気付かず、車の乗り心地と、夫人の巧みなハンドルの捌きに満足していた。

百米四方もあるかと思われる敷地の深い木立、凝った作りの建物、車と共に夫人にふさわしいと思われた。すすめられたコーヒーも酸味と苦味が少し濃い。インスタントではないらしい。これにも不審を抱かず夫人に惚れ込んだ。美代子さんにこんな叔母さんがあるなんて聞いた事もなかった。

「それで小母様、美代子さんのお話しとは何でしょうか。」

「ええ弘子さん、貴女に見せたいものがあるの。一寸待っててね。」

座を外す夫人の後姿を追った目が、改めて部屋の調度に移される。棚のケースの人形の衣裳がすべて革で作られているのが妙に気にかかる。しかしそれなりに美しい。家具の好みも渋い。何か眠気をもよおす。暖房のせいであろうか。横になり度い様な睡気をこらえる弘子の前に、濃紺の革の短上衣、乗馬用のキュロットスカート、編上の拍車のついた長靴——例の女王の正装の——夫人が答を持って現れた。驚いて立上ろうとしても体の自

由がきかない。

「どうなさいましたの、小母様。」

もつれる口で疑問を発する。

「弘子さん、小山美代子はね、私が飼っているの。マミという名の牝になってね。ほほ。貴女も同じ様に牝にして、飼育してあげるわよ。」

がっくりと首を落し、ソファに横倒しになって眠りはじめる弘子を冷く見下しながら、夫人はハンドバッグをテーブルの上に逆さにして中味を検べはじめた。

「仲々字が上手だわね。十月生れか。」

ばあやに手伝わせて、訓練室に運ばれた弘子の体にさっき脱いだオーバーが着せられ、背中にまわした手に革手錠が、更に目かくしと猿ぐつわを兼ねた顔枷が装着された。

鎖で首輪を吊られたマミの体には拘束衣はつけられていない。両肘と両手が、それぞれ後で小さな錠をかけられている——欧米流の後手である——だけで、豊かな乳房を一層突き出して長い呻きを続けた。夫人はマミの頭を撫でた。短い毛が生え始めている。

「マミ、もう生え始めたわ。何度も剃るのは面倒だからこの次は毛根を焼いてやろうね。ばあやさん、直ぐ剃ってやってね。」

男の顎髭のような短い毛を剃られたマミの頭に赤毛の髪が被せられる。理智的な広い額が覆われる。眉墨でどぎつい眉が画かれる。濃い緑のアイシャドー、それに紫がかった口紅をさされると、それを考えついた夫人ですら、目の前の赤毛の女の顔に美代子のおもかげを見出すことは出来なかった。鏡を見せられたマミにも自分の顔とは思えなかった。

「マミ、ここにも髪をつけてやるわよ。生れた時のままって云うのは、恥しいものだからね。ほほほほ。」

頭と同色の髪がはりつけられる。

夫人は眠り続ける弘子のスカートをめくり上げ、白い太腿に注射器を立てた。中和剤である。暖房のきいた部屋でオーバーをまとっている弘子の体はしっとりと汗ばんでいる。

快い睡りから醒めた弘子は両手をあげておくびをしようとした。手が動かない。口が開かない。はっと目をあけたが何も見えない。夫人の革の正装を見ながら睡りに落ちた事だけがおぼろ気に想い出される。呻きながら体をもがき、自由になる足をばたばたと動かす弘子を見る夫人の眼は喜びの輝きを増した。

マミ——美代子——の時と同じ様に両手の中指を別々に真上に吊られ、つま先立って部

屋の中央に固定された弘子の後にまわった夫
人が耳もとでささやく。

「さあ弘子さん、美代子に会わせてあげる
わ。ふふふ。ここではもう小山美代子では
なくて、マミという牝なんだけどね。」

顔枷が外されると、真赤な革の首輪を天井
から鎖で吊られたどぎつい化粧の赤毛の女が
後手にされているのが目に入った。

「いい痛い。こ、こんな人、美、美代子さん
じゃありません。い、痛い。早くほめて下
さい。お、小母様。は、早く。」

「そうよ。弘子さん、もうこれは美代子じゃ
ないの。マミって云う牝なのよ。マミ、そう
でしょ。ほほほ。」

赤毛の女は、眼に一杯涙をためて、ううと
うなずいた。眼尻からあふれた涙が、頬を濡
らし、形の良い乳房に落ちる。

「三沢弘子。貴女はMデパートの店員……」

正面にまわって正装の夫人は宣告を始め
た。弘子の拒絶とマミの呻きが途中に何度も
入る。自分もあの様にして最後の肌着まで剥
がれ、牝の生活が始まったのだ。メジャーを
あてられる屈辱に泣く弘子の姿が自分の事の
様に思える。マミは泣き声をあげて哀願する
弘子を見て、半ばあきらめの感じと、不思議

な事に一種の嫉妬と、喜びが心の隅に湧いて
来るのに驚いた。

五、緑の牝

翌日出張から帰った西岡の前に革手錠で後
手に締め上げられた弘子が引き出された。見
知らぬ男に前後左右から眺められ時には肌に
触れられる羞恥に全身を染めて身もだえた。
革の箝口具で殺された呻きが長く続いた。

「あなた、この牝の装具は何色にしましょう
か。」

「そうだね。幸子、緑はどうだい。マミの赤
とお前がメリだった時の紺といい対照だな。」
メリと云う牝だった時の呼び名を口にされ
目もとをほんのりと染めながら夫人は、

「そうですね。私も濃緑にしようと思っ
ていましたの。でも、これを一個所だけ生かし
て見たいんですの。」

弘子のオーバーから外された黒い襟の毛皮
を指でつまみ上げて了解を得た。

「それにしても豎だけで、こんなにマミの顔
立ちが違って来たのには驚いたな。」

「そうですね。あなた。私だって驚きました
わ。ほほほ。ほら、ここだって感じがちがい
ますわよ。」

赤い革の普段着（袖なしのオーバー）のフ
アスナーを引き降ろして、もう一つの豎を見
せられて、西岡は興味深く目を丸くした。

「幸子、この牝の名前は？まだなのか。それ
じゃ、『ベス』にしようよ。」

「ベス、良い名前だわ。さあベス、お腹が空
いただろうから、これをお食べ。ばあやの料
理は上手でしょ。マミ、お前にはこれ。もう
ビフテキなんて食べられないんだから。」

箝口具を外されたベスは、まる一日の絶食
に我慢できなくなり、床に置かれた皿に口を
つけてスープをすするマミを見習って大きな
ビフテキに噛みついた。ベスは袖なしであっ
ても全身を覆う普段着を着せられたマミを羨
み、マミは大きく口を開いて、美味そうな肉
に噛みつくベスを羨んだ。

「さあベス、口をあけて。」

食事が終ると嫌がるベスの口にまた箝口具
が噛まされる。まだベスは衣服を剥がれた時
に両手の中指を吊られただけの痛みしか味わ
っていないかった。昨夜はマミが捕えられ、運
ばれた時に使われた大きな革袋の中で寝かさ
れ、時間を見て用便の自由が与えられただけ
であった。しかしマミの様子を見せつけられ
ると反抗の気力もなくなってくる。

「ベス、こちらにおいて。素晴らしい牝の装具をつけてあげるわ。あなた、御覧になりますか。」

訓練室の中央に尿瓶が出される。夫人はマミにふいごを踏ませながら命ずる。

「ベス、それで用を足すのよ。こちらの用意が出来るまでにしておき。」

スプリングに焼きを入れながら、又うながす。

「ベス、まだしてないね。したくなければいいわよ。ふふふ。」

全然様子のわからないベスは羞恥に体を折ってしやがむだけで、コイルの焼入の音などにもおびえた。

「孝三さん、助けて、孝三さん。ひどいことをしないで、お家に帰して！」

後手の革手錠が外され、仰向けに押し倒される。手で箝口具をゆるめる間もなく、四肢を床に張り伸されてしまう。股を閉じ様にもモーターには勝てない。始めてであるのでマミよりも羞恥が強い。全身を染めて呻きが続く。勿論自分だけにしか聞えない。

「孝三さん、助けて、助けて。お母さん。」

体を飾る九つの輪がマミと同じ様に装着された。接着剤ではりつけられた革の色がマミ

の赤に対して濃い緑であり、輪に通された金属環がマミの金色に対して、銀色であるのが対照的であった。ただベスの首輪にはオーバーの襟につけていた黒い毛皮がはりつけられ、白く輝く肌を一層引き立てていた。ふさふさした毛皮としなやかな革の内側に強靱なピアノ線が接着剤で固められているとはどうしても思えない。きれいなアクセサリーである。

「ベス、さっきは、したくなかったらしいけど、本当かどうか見てあげよう。」

高く低く続く呻きを楽しみながら装具をつけ終った夫人は、つと手を伸して白いしなやかな指でベスの下腹部を押えた。尿意に際高い呻きが響いた。ベスは生れて始めてカテーテルを挿入され、異物感に悩まされながら排出を終った。

黄色い液の入った瓶を見せつけられ、小さくなった呻きに夫人の冷い声が、

「ベス、こんなに沢山出るくせに。これから私の命令がきけないなら、きける様にしてやるわ。しっかりマミの訓練を見ておき。お前も明日から同じ事をさせるからね。さあ、マミ。こちらにおいて。」

マミの普段着が剥ぎ取られる。

「マミ、もうこれもないでしょ。」

頭と下の二つの赤毛の髪がはぎ取られる。

青々とした剃りあとのベスの目に入る。自分の事の様に恥しさをおぼえ、同時に恐ろしさも強められ、思わず目を閉じた。再び目を開いた時、タオルでどぎつい化粧を落されたマミの顔を見た。坊主頭にされ、眉も剃り落されたマミの顔に美代子のおもかげを見出して、きびし箝口具の中でベスは叫んだ。

「美代子さん。ミークン！」

「ベス、これがマミの本当の姿よ。ふふふ。」

よく見てごらん。マミの——元の小山美代子の体にはもう毛が一本もないのよ。お前も私の命令がきけないなら、こんなふうに、してしまおうわよ。」

ベスには別に箝口具を噛まされていないのに、唇を小さく動かすが呻きだけしか出さないマミが不思議だった。

「マミの体はすぐ毛が生えてくるから、ばあやの手を省く為にこの次は電気メスで毛根を焼いてしましましょうね。」

わざと聞える様に云う夫人の独り言にベスは背筋を寒くし、マミは羞恥にもだえた。

マミの体に装着されたZetaの拘束衣を恐ろしくベスは眺めた。股間ベルトだけを締めないで夫人は命じた。

「マミ、ここに寝るの、上を向いてね。」

夫人の次の意図ををさとしたが、反抗する気持だけで、体の方がその命令に従うマミだった。後手が背中できりと鳴る。マミの膝輪を首輪の方に締め上げながら、

「マミ、さっきはスूपだけで物足りなかったでしょ。今度は下からも入れてやるわよ。」

両足を高く上に向けて固定されたマミの体がベスの目に入る。革ベルトの乳枷にせかれ、形の良い乳房が一層大きくなりピンクの乳首を中心にして息づいている。イルリガートルを用意した夫人が栄養浣腸をはじめた。反りかえるマミの足指を見ながら、ベスは自分に施こされる様な羞恥を感じた。赤みをましたベスの体の上では、マミに劣らぬ豊満な乳房が呼吸を早めた。

脱脂綿があてられ股間ベルトを締められると、マミの体は早くも冷い液で内側からいじめられる。膝輪を首にしめ上げた紐が外され、両脚の間にメトロノームが装着される。乳首にコードをねじつけられ、首輪が鎖で吊られると、倒れる事も出来ない。

「マミ、さあスイッチを入れるよ。うんとその大きなお尻を振ってベスに見せておやり。」もうメトロノームにも慣れて殆んど電撃を

受けなくなったマミも、親友であったベスに見られる羞恥と、冷い栄養液による排泄感と、締め上げられた股間ベルトの痛さの三重苦に、ともすれば尻の動きが鈍り、何度も電撃を受け、更にその為に他の三つの苦痛も強められた。目の前の四肢を大きく張り伸されたベスの体も目に入らない。温度のあげられた訓練室で全身から吹き出る汗にまみれ、涙を流し、動物的な呻きをあげて尻を振り続けるマミの体はベスには余りにも強烈な刺激であった。その刺激と羞恥にもだえるベスと、肉体的、精神的に苦しめられるマミの共によく発育した体を、西岡は後のソファの上で夫人と共に眺めていた。

六、連縛

細川孝三——三沢弘子の許婚——は朝定時に出勤すると、タイムカードを押そうともせず課長を待った。いきなり四日間の休暇を申し出る孝三は、課長に許婚の弘子の失踪を話した。一昨日も待ち合わせた喫茶店に現れない弘子を家にまで訪ねたが帰宅もしていなかった。警察へ翌朝捜査願いが出されたが、今日になっても一つの手懸りさえない。孝三は自分の仕事を休んでもと、高校時代の友人で

聳合署に居る岸田刑事と一緒に探そうと決心したのだ。

その頃、マミとベスは窓からさし込む早春の朝の光の中で鏡に向って立たされていた。二人とも全裸で天井からの鎖で首輪を吊されている。勿論後手には小さいエール錠が輝いている。鏡にはそれぞれの背丈に依じてゴムの吸盤でつけられた小さいスイッチがある。そのスイッチから伸びたコードが床のラジオの様な箱に、更にその器具から伸びたコードが二人の両乳首に別々にねじつけられている。

「マミ、ベス、少し踊ってもらわ。足でその鏡のスイッチのボタンを押すのよ。ボタンを押さえれば器械の中で放電するから電気はお前たちの体に行かないわ。ボタンが押せなければ、三秒に一度ずつお前たちの体は流れるわよ。時間はこのつまみで調節できるのよ。どう、仲々うまい器械でしょ。ほほほ。さあ用意して、はい始め。」

革のブラウスとショートパンツの——輕装の——夫人が命じた。

スイッチの位置は背丈ほど高い。鏡に映る自分のあわれな姿に、はじめは羞恥を感じた二人であったが、電撃から逃れようと必死に

レビューガールの様に脚を大きく蹴上げた。三秒に一度でも首を吊られ、後手にされていでは、足で目標を蹴上げる事も楽ではない。ボタンを押す度に器械の中で、パシ、パシと放電の音がする。

「ベス、お前の泣き声が聞き度いわ。」

箝口具が外され、その方に気をとられた時「ギャウッ」

ベスは電撃に叫んだ。自分の声でも驚かされる。体が倒れかかり、首輪で呼吸が止められる。体制を立て直すのに手間どり足を上げようとするより早く再び叫びが続く。

「二匹の牝」は鏡の前で自分たちのみじめな姿を見せつけられながら、足を高く蹴上げて踊り続けた。足を上げる度に豊かな乳房がわさわさと揺れ、揺れる度にコードをねじつけられた乳首が痛んだ。呻きと叫びが時には同時に、時には交互に起った。次第に苦しみが増す。息がはずみ、目がくらむ、汗が吹き出る。どれだけ長い時間かわからなくなった。やっとスイッチを切った夫人の声に時間の長さを思い知らされる。

「二匹とも、もっと鍛えなきや駄目だわね。たった二十分でへとへとになってちゃ仕方ないわね。どう、この器械は面白いでしょ。」

乳首のコードを外され、首の鎖を外されるとマミもベスも床につつ伏して泣いた。泣きじゃくるベスに手早く箝口具を噛ませて、後手のまま入浴にかり立てた夫人は、ばあやに二人をまかせた。激しい運動のあとの快い入浴は、無表情なばあやの手で行われるだけに体の隅々まで洗われるのに安心して身をゆだねられた。ベスは普段着を着せられるマミを羨んだが、自分は回転椅子の上に固定された。

濃紺の革のスーツの上に革の白衣をまとった夫人が入ってくるのを見て、マミは思わず自分のうけたおぞましい屈辱に身をふるわせた。ベスには何も想像が出来ない。

まず目が耳が、そして鼻が診察される。まぶたを裏返され、耳たぶを引っばられ、そして鼻孔を拡張される。胸に背に聴診器が当てられる。ベスはあきらめてじっとしていた。

「ばあやさん、猿ぐつわを外して。」

ベスの顎に両手をかけて命ずる夫人とベスの後にまわるばあやを見ながらマミは自分の時と同じ事に気付く。齒と咽喉をしらべ終った夫人は顎をはめ様ともせず、涎を出しながら呻くベスの体を椅子からはどいてベッドへ追い上げた。両脚が膝輪を紐で張り上げら

れ大きく開く。

「おや、ベス、お前は男を知った体だね。そんな可愛い顔をして、何も知りませんと云うそぶりで、相当なものだわね。ほんとに呆れたわ。ほほほ。」

ベスは孝三との秘かな初夜を想い出した。誰にも、孝三以外の誰にも触れさせたくない所を冷い器具が、夫人の指がなぶるのを、どんなに体をもがいても逃げる事は出来なかった。全身を赤く染めるベスの体につけられた手足の緑の輪と、黒い毛皮の首輪が美しいコントラストで輝いた。ベスは死ぬ程の辱しめに涙と涎を流しながら呻いた。

「マミ、ベスにも舌袋をつけてやるよ。舌を噛まれると手当が面倒だからね。仲間が出来て嬉しいだろう。」

自分の意志に反して、うなずくマミであった。約一時間、ベスは奥歯にドリルで穴をあけられる不快と苦痛に呻いた。やっと顎がはめられたが、舌の動きを完全に止められて、「ファマファマ」

意味の通じない音を出すだけの牝になってしまった。マミの話せない理由が半分だけベスに施されてわかった。呑み込んでも次から次へと酸っぱい異物感のある唾が出てくる。

「ベス、お前の普段着はこれよ。マミのと同じデザインで、よく似合うわよ。」

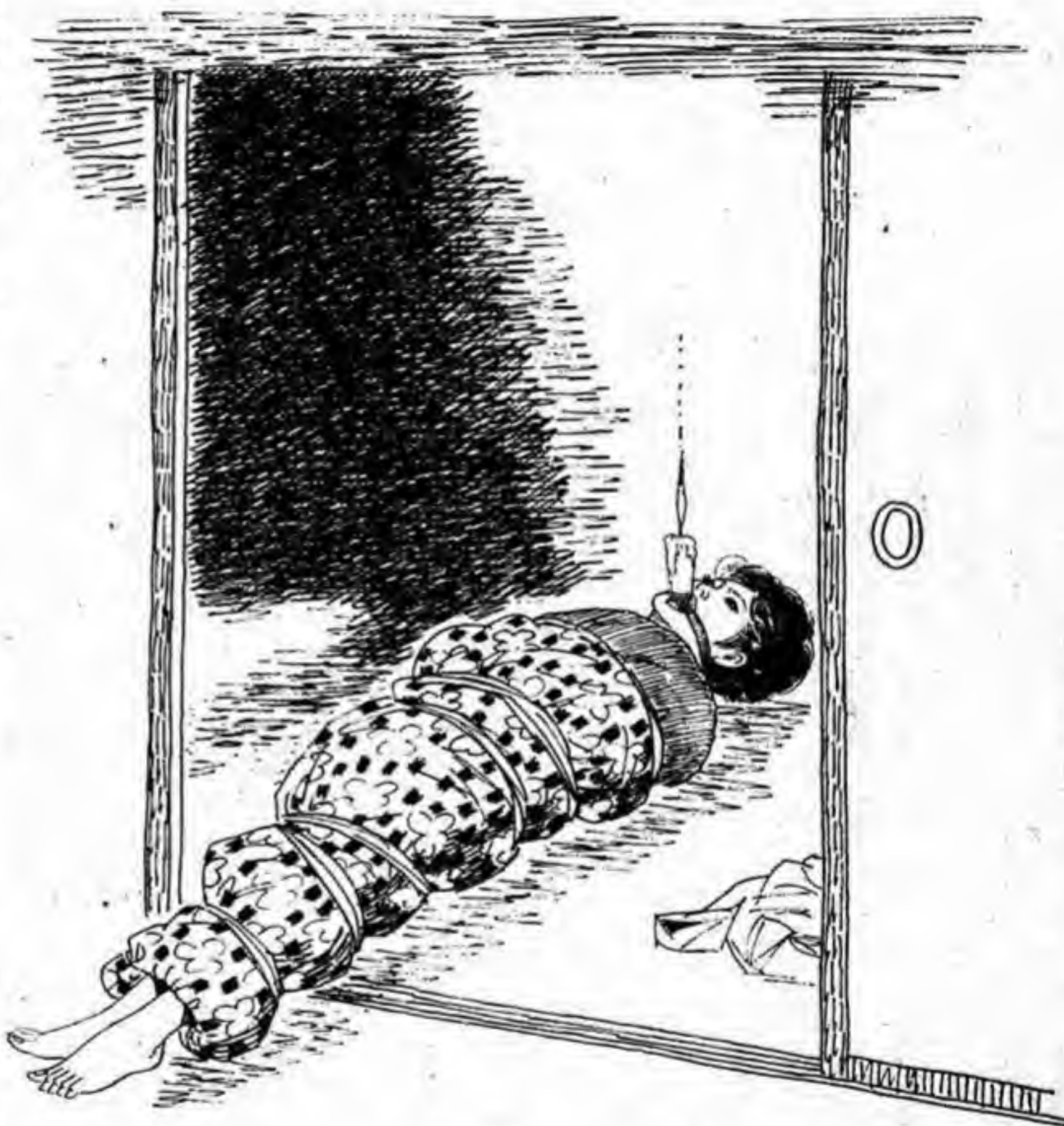
マミのと全く同じ形の緑色の前をフアスナーで止める袖なしのオーバーというより、サックドレスよりも膝をしぼった革の普段着が着せられた。

二日間も裸であっただけに、ベスにはみの虫の様な革の普段着が有難かった。襟元からのぞく首輪の黒い毛皮もよく似合った。それを見ながら夫人は云った。

「マミ、お前の首輪にも毛皮をはりつけてやろう。ここは毛皮の方がきれに見えるわ。」

二人は休む間もなく掃除と洗濯にかり立てられた。

「ばあやさん、今日は私が牝たちを見るわ。あなたは早くベスの拘束衣を仕上げて下さい



ね。」

ベスは後手で仕事をするマミを見習った。たった一個の小さいエール錠のおかげで後手がどうにもならない。これさえ外せればとベ

スは考えをめぐらした。居室で休息をとるマミとベスはソファに並んで腰を降した。顔を見合せて、口の動きだけで何事か話そうとするがうまく通じない。呻きではどうにもならないと見たベスがくるりと背を向けた。後手のままで指がマミの普段着の腿の上で字をかき始めた。「ミーコ、ニゲタイワ、ドウシタラヨイ？」無言でうなずくマミが今度は背を向ける。「ヒロコ、カギヲトルノヨ、バアヤダケノトキニ。バアヤハオシヨ。」「カギハドコニアルノ。」「ニシオカノイマニキツトアルワ。」……

指でする会話は手間がかかった。しかしマミもベスも美代子と弘子の昔にかえた想いで時の経つのを忘れた。壁のマジックミラーの外から夫人が見ているのに気がつかなかった。夫人はばあやに注意する様に話した。ばあやは夫人の唇を読んだ。

みじめな思いでさせられた夕食の後で、マミとベスは普段着を剥ぎ取られた。マミは慣れてはいてもやはり裸にされるのが羞しい。ましてベスはそれだけでも苦痛であった。ばあやが仕上げた最初の拘束衣は No. 14 である。夫人の好みらしい。勿論濃い緑の革ベルトである。「この第三部だけを読まれる読者の為に説明を加えよう。」夫人のデザインした拘束衣は全部番号がつけられている。殆んどすべてが革で作られる。材料も高級な羊の革から、強靱な牛の革まで色々あり、形も、バタフライの様なもの、上半身だけを覆うもの、きついタイトスカートの様なもの、厚い乳枷、全身をきつく締めるタイツ等々、それらの組合せも色々に考えられている。この No. 14 は十糎幅の厚い腰ベルトを中心に、腹の前面を二本の幅約二糎の革ベルトが上に、菱形を二つつないだ革ベルトの乳枷につながり、両肩をまわったベルトが、乳枷の左右のベルトと共に肩胛骨の間の環につながる。その環から下りたベルトが股間ベルトと共にウエストの太く厚い革ベルトにつながる。

ベスの体はこの No. 14 の革ベルトでしっかりと締め上げられた。乳枷で周囲を押えられた乳房が、一段と突き出し、ピンクの乳

首が上を向いてあえぐ。体を縦に締めるベルトが一層みじめな想いをさせる。呻きながら目を伏せてしゃがみ込む体が、ピンクに色づき、股間ベルトが体に喰い込む。

「ねえあなた。ベスにはまだ No. 14 は早すぎましたかしら。ほら、こんなに恥かしがって居ますよ。ほほほ。」

ベスの診察の記録を見ながら、西岡はベスの恥かしがるのを楽しんでいる。

「幸子、ベスがもう男を知っているとは意外だね。あの体つきや顔からは想像も出来ないな。こわい様だな。」

「そうですね。マミの方が真面目ですわね。でも近頃の BG って、みんな、こんなんじゃないでしょうか。」

「そうかな。そうすると僕の会社でもきっと居るな。あの子はどうだろう。」

「ベス、おいベス、お前は何人の男を知ってたんだ。二人か。ふん、三人以上か。はっはっは。じゃ一人だけか。」

むごい質問に益々赤くなり、消え入り度い気持で孝三を想い浮べながら小さくうなずいた。

「そうか、たった一人か。それじゃ僕が二人目になってやろう。いいな。」

半ば夫人に云いかけた。いやいやと拒む言

葉もうめきに変り、思わず後にさがるベスを見ようとせすに夫人はさえぎった。

「あなた、いやですわよ。こんな牝を。」

「幸子、いいじゃないか。牝を使うんだからな。——丁度牝馬に乗るのと同じじゃないか。」

ぐつとつまった夫人は、やっと理屈を見つけて答えた。

「でもあなた。まだこの牝に病気がないかどうか、調べていませんもの。明日から精密検査にかかりますから待って下さいね。大事なあなたに病気をうつされては嫌ですもの。」

欲望をさまたげられた西岡はぐつとつまり急に不機嫌になった。ほっとするベスに、

「それじゃベス。今夜は変わった楽しみをさせてもらおう。」

ベスの体に近づき、後手をつなぐエール錠の鍵を夫人から受取った。右手を背中で逆をとってねじ上げ左手を外した。左手は逆に頭の上から背にねじ下ろされ、両手首の環が紐でつながれる。ベスの肩が肘が、関節が鳴り、筋肉がつっぱる。呻きが高くなり、汗がにじみ出る。

「幸子、これが、鉄砲責めと云うんだよ。きついそうだよ。ははは。そちらがすんだら、

このままで海老にしてやってくれ。」

「マミにも赤い No. 14 がかけられ、こちらは背中であらう手足をまとめられ逆海老にされて、手首を天井の鎖に引き上げられる。」

西岡は愛用のコンタフレックスを持って来た。五百ワットのスポットライトを二個用意する。照らされると体が熱くなる。

天井のモーターで逆海老にされたマミの体が折れそうに反る。首が前にうなだれる。腹が伸び切る。鉄砲責めの上に海老責めにされたベスの体が丸くなる。後に倒されるともう起き上れない。二匹の牝の呻きが部屋中にこもる。夫人が忙しく動く間に、西岡は一眼レフの視野一杯に苦悶する牝の姿を、前から後から、全身を、表情を、胸を、尻をとらえてシッターを押す。マミは苦しみの中にも例の快感をおぼえた。しかしベスはただ苦しんだ。早く弛めてほしいと願った。全身から、冷汗が出てくる。次第に血の気を失うベスの体をあわてて夫人が弛めた。手足を自由にされても起き上る事も出来ないで床の上に長々と伸びてしまう。泣くべき声も出ない。

「幸子、次は連縛だよ。」

「あなた、やっぱりマミの方が慣れているだけに強いですわ。」

「いや、姿勢がちがうよ。男だって鉄砲海老にされたら参ってしまうそうだから。」

「こんな姿勢は女の方が強いものですわ。」

天井の鎖が弛められたマミも手足を解かれた。マミはまだ元気が残っている。

「マミ、ベスを抱き起しておろ。」

自分より少し小柄なベスを抱いたマミの両手はベスの背で錠がかけられる。ベスの手も同じくマミの背へ。肩の丸い尻の大きい、豊かな乳房のマミの姿は坊主頭とそぐわない。何度もシャッターが落ちる小さい音が続く。

形をかえた連縛が続けられた。肘と膝と手と足の環が有効に使われた。革ベルトもナイロン紐も使われた。

西岡は遂にカメラを離し、軽装の夫人を引き寄せた。

ベスは涙も涸れてしまった様に泣かなくなった。自分ほどには恥しがらず、時には喜びさえ表わすマミに嫌悪の感情が湧き、孝三の事だけを想い出した。孝三を想うと涸れた筈の涙がまた湧き出してくる。

七、希 望

翌朝の牝の運動はゴルフである。四方に斜面のついた床から数層上ったホールが置かれ

後手に持たされた三十層ばかりの短いクラブでボールを打ち込む競技である。マミは齒が使えないので後手で打つ様に改められた。しかし却って難しくなった。

「ベス、マミはもう知っているんだけど、自分のホールにボールを入れるのよ。そしたら相手の乳首に電気が行くからね。二匹ともさぼったりするとほら、こちらのスイッチで、こうしてこらしめるからね。」

「ギャオッ。」

「ムフフウ。」

ベスとマミが殆んど同時に叫びと呻きをおげて倒れた。両乳首にねじつけられたコードから短い電撃を受けたのだ。

夫人は好んで牝の責めに電氣を使った。しかし、その電氣ショックも実によく考えられていた。そもそも人体は大きな電流には弱い。蓄電池など大電流に触れて、或は高圧送電線に触れて即死する例は多い。家庭用の百ボルトの電源さえ死を招く事もある。それは線に触れた人の体が痺れて線から離れる事が出来なくなつて死に至るのが多い。夫人はそれらの例をよくしらべて牝に電撃を与える場合に電流の持続時間を極めて短くした。いわゆるパルス（脈動）を使った。その為に真空

管回路が作られている。パルスの電撃を受けると一瞬ガツンと体中に衝撃を感じるが、電氣量が小さいので危険は少ない。そして痛みには慣れる事が出来ない。

「さあ、勝負は三十分にするわ。負けた方はあとでひと踊りしてもらからね。始めていいわ。」

椅子やテーブルの障害物があつたが偶然にもベスの打った緑に塗られたボールが一打ちでボールに入った。ホールインワンである。穴の底のスウィッチが入り同時にマミが呻きと共に倒れた。ベスはマミの方に許してね、と謝罪の氣持をこめた眼ざしを送った。夫人がベスの球を部屋の隅に投げやる。後手で操るクラブではボールは思う方に行かない。ホールの周囲の斜面で、とんでもない方向に曲げられてしまう。障害物に乳首からのコードを引っかけて機械的な痛みに呻きが上る事も多い。さすがにマミの方が上手である。ベスの叫びが多く聞かれる。相手の球がホールに入らない様にと願いながら球を打ち続けた。ベスは電撃に倒れながらマミを見た。マミの眼に勝利の喜びを見て対抗意識を強めたが、ベスはマミの三倍も多く倒れた。何も拘束衣をつけられていない事も、もう羞恥を感じさせ

ない。汗ばむ体を動かし続けた。

ベスには次の苦しみが待っていた。中腰になった姿勢で壁に首輪を止められた。始めは楽だと思われたこの姿勢は時間と共に苦しみが増す。伸ばす事も縮める事も出来ない膝がガクガクと震えはじめる。体重を片足づつ交互にかけてもどうもならない。首輪にかけるわけにもいかない。しかしその苦しみも、午後になって夫人が若し出かけたら昨日のマミとの約束——逃走——を実行する望みで堪える事が出来た。逆に夫人からほめられる。

「ベス、お前は案外強いわね。ほほほ。」

「ばあやさん。お買物に出かけますよ。帰りは三時頃になるかしら。宜しく頼みますよ。マミ、お前の首につける毛皮も、買ってくるよ。何色が良いかしら、ほほほ。」

夫人の声にベスの目が輝いた。夫人はそれを見逃さなかった。玄関ではあやに注意したのを牝たちは知らなかった。

掃除に追い立てられたベスは、隙を見て、後手につかんだ掃除器のパイプではあやの足を横にはらった。倒れるばあやの背に、肩にパイプが飛んだ。両手で頭を抱えて、

「あわわ。」

元来の唾であるばあやの叫びが弱くなる。

ベスは後手ではあやのエプロンのポケットを探った。何もない。ばあやが離れた首輪の紐を引きずりながらマミを呼びにいった。

「ママーアウオ。」マミをうながして、ばあやを倒した応接間に小走りで急いだ。無抵抗であつたばあやが居ない。マミの案内で女中部屋へ、しかし中から鍵がかけられてどうする事も出来ない。玄関も勝手にも同様である。

マミは西岡としばらくであつたが楽しい生活を送った居間に入る。ベスは電話に飛びついた。マミを再び牝に引き降し、ベスを牝にさせる発端を作ったあの電話に。しかし女中部屋でいち早く親子電話の連絡が絶たれているの知らないベスは後手で受話器を外し、首をねじ曲げながらダイヤルをまわす。「——〇」しかし発信音も出ないので外へつながらない。床に置かれた受話器に不自然な姿勢で耳を近づける。空しい努力が続く。電話が通じても意味のとれぬ呻きと叫びしか伝えられない牝であつたが。部屋中をしらべたマミが違い棚の上の煙草セットに気づいた。パイプしか喫わない西岡の居間にシガレットケースがある。後手ではとどかない。マミは正坐して体を倒した。ベスに上に乗れと合図する。ベスの体重で後手の手首のもげる様な痛みも

希望を持たせた。後手でそつとシガレットケースの蓋をとり、首をねじ曲げて小さいエール錠の合鍵の束を見てつかんだ途端に重心を失いベスは倒れた。

鍵束にじり寄った二人は背中合せになって手首の環をつなぐ錠をあけ様と鍵を合わせにかかった。鍵は十個以上もある。二人とも自分の合鍵はこの中にあると信じている。鍵穴にすら合わないものもある。首がねじ切れる程曲げてでも錠を見る事は難しい。時間の経過が恐ろしい。ベスは鏡を使う事に気づき、自分たちの居間に小走りで急いだ。鍵束の鳴る音が希望を持たせた。三時までと聞える。

買物に出かけた夫人は、ふと気が変って美容院に寄った。少し混んでいる。帰りが遅くなりそうだ。電話ではあやに連絡しようとダイヤルをまわした。話し中の信号、そんな筈はない。変な胸さわぎにもう一度かけ直す。あわてて、愛用のボグゾールを走らす。少し急いだが車が混んで二十五分もかかる。ガレージに車を入れもしないで、外から合鍵で注意深く勝手口を開く。ばあやが出て来ない。部屋のドアが全部開け放しである。ことさらに静かに居間へ入る。違い棚のシガレットケースが倒れている。事情は呑みこめた。一層静

かに足音をこらしめて二匹の牝の部屋に近づいた。大きなマジックミラーのカーテンをそつと引くと、マミとベスが背中を半ば向け合つて、後手のエール錠に鍵を合わせようと空しい努力を続けているところだった。

夫人は身をひるがえしてドアを開けた。ノッブの音にふり返ったベスとマミは叫びと呻きを同時にあげた。マミの手から鍵束が落ちる。ベスはあきらめ切れない気持であつたが無意識に腰が床についてしまった。マミは突然右肩を落して夫人に体当たりを試みた。夫人はほんの少しの所で危く体を左に開いた。マミは右肩からソファの背に突っ込んでソファと一緒に転がった。革の普段着の裾が足もとを狂わせたのだ。起上ろうとするマミの背を夫人の足がもう一度蹴倒す。引出しから革紐を取り出すと、ハンドバッグをテーブルの上に置き、ばたばたもがくマミの両足を次々に捉えて足輪の環を手首の環へ引きしぼった。マミは身動きも出来ずに、ぐったりと力を抜いて床に伏した。

「ベス、お前もこちらにおいで。逃げようなんてとんでもない事よ。さあ罰は重いから覚悟をおし。」

おずおずと近づくベスの髪の毛をつかんだ

夫人は、ベスを床にねじ伏せてマミと同じ姿勢に固定した。夫人はハンドバッグから二つの鍵をちらちらと振りながら、

「お前たちの鍵はね、ちゃんと私が持ってたのだからね。ふふふ。そうしてみの虫の様な姿で待っておいで、もう決して反抗できなくしてやるわ。それにしても尾錠でなくて良かったわ。」

高く笑いながら出て行く夫人を待たずに呻きに変った嗚咽が起った。

夫人の笑いの中に底知れぬ恐怖を感じ、失敗に対する後悔が胸を打った。夫人に反抗しなかったベスの方が望みを捨てなかった。マミは衝動にかられて夫人につかかったのだ。が総てをあきらめる気持になっていた。

八、春は？

涙に曇る目で夫人の革の白衣姿を見て、マミもベスも背筋が凍った。夫人の手の大きな治療箱を見て殆んど同時に生暖い液体が革の普段着を、腿を、腹を濡らした。マミは手足を切られたチロを、ベスは昨日の屈辱的な診察を想い出したのだ。

「まあ、汚ないわね。洩らしたりして。ばあやさん、足を解いて脱がせてやって。ふふふ

こわいの。まあ大人しく罰を受ければよいのよ。ほほほ。」

抱き起され、液体の中で尻を落して普段着を剥ぎ取られてしまった。掃除器のアルミのパイプで何度も叩かれたのに、ばあやのベスに対する顔は無表情であった。それでも怖しさがつのる。まだつけられたままの首輪の紐を引かれてよろめく。足あとが濡れている。「さあ二匹とも訓練室に行くのよ。歩けるでしょ。」

ベスは紐を引かれ、マミはそれに続いた。首をうなだれて歩くと濡れた腿や腹が冷い。「ばあやさん、どちらが先に手を出したの。」

夫人の唇を読みながら、手まねを混えて午後の出来事が説明された。

「さぞ痛かったでしょうね。もうこれからは手向いなど出来なくするから安心してね。」

マミを天井の鎖で直立させておいて、幅が五十糎ほどの厚い板が持ち出された。所々にあけられた穴を使ってベスにそれを背負わせる形で取りつけた。額をまわった革ベルトが板の裏で尾錠でしめられる。胸も腹も腰も、更に両肩も革ベルトが締める。板は長さが一米ばかりであるので尻から上の背と頭が板につく。首を振る事も出来ない。夫人はばあや

に手伝わせ、天井からのチェーンブロックを使って椅子を二つ向き合わせた上に、ベスを固定した板をかけ渡した。ベスの両足は椅子の背の後で組まされて錠がかけられた。

「ベス、私はね。体に傷をつけるのはきらいだけど、ばあやをぶつなんて、とんでもない事だわ。少しこらしめてやるわよ。」

鼻孔を指が上に押し広げる。

「アウウアイ……」

悲鳴が、涙が。消毒液で鼻隔壁が洗われるとつんと咽喉の奥まで刺激される。尖った錐の様なメスが鼻隔壁の軟骨のはずれに突き通される。

「グワウーッ。」

麻酔もなしにメスを立てられた痛みに、かつと目をむいたベスのわめきと顔、硬直する体にマミは膝ががくがくと震えた。涙と血の混った涙が咽喉に流れてむせかえる。二度、三度、わめきが部屋中に響く。遂に失神したベスの鼻に手早く止血をし、癒着を防ぐプラスチックを穴に挿入した夫人は、強心剤を注射して目を醒まさせた。

「ベス、終わったよ。お前の鼻にはこれ、マミにはこれを着けてやるわ。」

金色と銀色に光る大きなナス環が見せつけ

られる。ばあやを殴らなかったから、私は許してもらえるかも知れないと、一縷の望みを持っていたマミは、呻きで哀願した。マミとベスは交代させられ、マミはベスの血と涙で汚れた板がつけられるのを逃れる事は出来なかった。

ベスは、ずきずきする鼻の痛みに呻きながらマミの鼻に自分と同じ穴が穿たれるのを見た。ベスの時と同じであったが、口を開く事の出来ないマミは苦痛も大きかった。

「痛すぎて失神するんじや面白くないわね。」注射をうちながら夫人はつぶやいた。マミはまだ解放されなかった。

「マミ、お前には、まだしておく事があったよ。もうばあやの手がかからない様にね。」

高周波電気メスの電極が上膊に巻かれ、食塩水が泌み込まれる。マミの小面積は残されていた部分がチクチクする。続いて眉が。むしろ鼻の、あとをひく痛みの方が強かったが、見せつけられるベスには高周波電源の不気味なうなりと、マミの姿が恐ろしく、暖房のきいた部屋の中で全身の毛穴が立った。やっと解放されたマミは直ぐに椅子に固定された。堅い板と自分の体の間で押えられて痺れてしまっていた後手がびんびんと響く様な痛

みを伝える。頭に電気メスがあてられる。軽い痛みには堪えられたが、夫人の言葉が涙を誘う。

「マミ、これでおしまいよ。さあお前はもう永久に毛が生えない体になったのよ。まだ今は毛根が残っているから青々しているけど、すぐそれもなくなくなってピカピカの禿頭になるわ。金語楼さんの様にね。ほほほ。ベス、この頭がピカピカ光ったらおかしいだろうね。ほほほ、ははは。」

鳥肌を立てているベスに向って、ピカピカの頭を想像して笑いこける夫人と、大粒の涙を頬に胸に、腰にまで伝わらして呻きになって出る泣声をあげ続けるマミの姿は奇妙な対照であった。ベスの頬も涙に濡れ、目が真赤になっている。

夫人のいたぶりは更に続く。

「ベス、お前ももう直ぐマミと同じ姿にしてやるからね。どう、嬉しいでしょう。あら嫌なの。尼さんになった気持ちがするわよ。鼻輪がつけられる様になったら、もう反抗できない様に、お仕事の時は両膝と鼻の間を短い紐でつないどくわ。お尻をつき出して、よちよち歩きしか出来ないわね。」

窓の外に早春の夕景が広がる。寒さに縮ん

でいた樹々の芽がふくらみはじめている。春は直ぐそこまでやって来ている。窓の内側で全裸のまま鎖で天井から吊られて直立したまま、涙と呻きで、夫人にいたぶられているマミとベスの上にも春が間もなく来る事であろう。そしてみじめな牝の上に美しいマゾの花が大きく開く事だろう。

〔第三部完〕

あとがき

第一部の時も、第二部を脱稿した時も、大まかな構想は持っているが、この続きを展開する自信はないと記した。しかし原稿用紙を前に書きなぐっている間に第三部が展開してしまった。そして終った。

自分の奥深く探って見ると、マゾの血もサドの血も混っている様な気がする。マゾと云い、サドと云い、これは人間社会の所産であろう。高度の社会生活のお蔭で、多くの利益が我々の上にもたらされた。たとえ資本主義であろうと共産社会であろうと衣、食、住、交通機関、娯楽、すべて社会生活によらなければ我々は得る事は出来なかったであろう。しかし、その社会生活の為に、お互い同志を守る為に、我々は願望の一部を自ら抑圧せ

ざるを得ない。そうする事がより一層の繁栄を約束させるものである。その抑圧された願望の一部が形をかえて表れたのがマゾでありサドであろうと考えられる。

そもそも人間の生物としての慾望はすべて『生』につながる。食も住も、そして性も。それらは人類発生以来、死を代償として我々に伝えられ我々も子孫に伝えねばならない。石器時代、或はそれ以前には、自分だけの力で慾望がかなえられた。願望のかなえられないのは、その個人（人と呼んで良いかどうか）の力が足りなかっただけである。所が僅か二、三千年の（進化の時間としては短い）間に社会生活が、科学が進み過ぎた為に、取り残された精神の進化、道徳の浄化の歪が次第に大きくなり、色々な形で表れて来た。最大の罪悪は戦争であり、殺人である。最も秘やかに人間の心の奥にひそむサドとマゾはむしろ万人の認める所であろう。当然である。性につながるのだから。

一方人間には見栄があり虚栄がある。自分を他人よりも高級なのだと見せつけたい。さきほど述べた精神面の歪は多かれ少なかれ誰の心にもある。この精神面の歪——反社会的な慾望——を私は持っていないのだ。そして

そんな事を考えてはいけませんよ。と云う自分を偽る空虚な虚栄が現在益々強まろうとする「悪書追放運動」である。その人たちこそむしろ反社会的な行為を（善意に解して）無意識に行っている例が多い。いわく、「子供たちよ。お前を産んで育ててやったのだから、親の云うなりになれ。」「お前は、雇ってもらっているのだから、上役に従え。」等々。

代理部分譲品御注文の榮

○代理部分譲品及び雑誌は、すべて前金にて御注文願います。直接の販売並に代金引換、後払い等は取扱っておりません。

○御注文品はご注文書到着と同時に発送申し上げますが、品切れの時は二、三日の猶予をお願い致します。

○ご送金は、現金書留（現金書留の封筒は一枚三円にて郵便局で売っています）小為替、定額小為替（小額のときは御便利です）振替（振替用紙は郵便局にあります。当社の振替口座番号は大阪五〇〇四二番です）切手代用（四円、十円、二十円、三十円、四十円などの小額切手で、絶対に紙にはりつけないで下さい）等を御利用願います。

○御注文品は、雑誌では何年何月号、或いは略号の附してあるものは略号。フォトの類はすべて略号にてお申込下さい。品名を記されますと間違いが起り易く、且つ発送に手間ど

親子の間柄、主従の（いや考えが古い）雇い主と雇い人の間はそんなものではない。人間同志の心の結びつきが大切なのだ。

それに引きかえ、私たち本誌の読者は、この社会では実行不可能な事を（或は非常に好運な人はお互いの合意の上で行っているが）書き、そしてそれを秘かに読んでマゾ、サドの形で精神のストレス——歪——を解消して

りますから、必ず略号にて願います。

○御注文の宛先は、大阪阿倍野局私書箱第十四号、天星社です。

○分譲品の新しいものは、毎月の新刊誌上で「新版案内」として発表しておりますから、その目録にて御注文願います。

○御注文品の送り先は必ず楷書ではっきりとお書き願います。肩書き（何々方、何々社内など）がございましたら、それもお忘れなくお書き添え下さい。

○発送者の名前を個人名で御希望の方は、その旨お申添え下さい。

○御注文者の御氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません故御安心下さい。封筒注文票は用済後は焼却いたします。

○局留にて郵便物をお受取りになられたい方は、御注文の際、お受取りに行かれる郵便局名（正式の名前）とお名前を御連絡下さい。郵便局は特定郵便局でも集配局でもどちらでも結構です。

いるのである。この方が明日への繁栄への努力にはより効果があるであろう。この歪から生ずるもやもやに気づかず、反社会的な行為を実行する人の何と多い事か。人には好みがあり強制は出来ないが、歪の秘かな発散の場があれば、この世はもっともっと住みやすくなるに違いない。

書き出しからずれてしまった。本題に戻ってマミとベス、二匹の牝の、それをめぐる道川夫人と西岡、そしてばあやの、更に孝三の動きに今後の展開は予想が立たない。（第二部と同じか）ただ今迄の展開はすべて殆んど創刊以来欠かさず目を通して来た「奇譚クラブ」の何処かにある表現しか使えない私の経験の不足により、或る場合には実際よりも誇張され、或は表現不足があるのではないか。きびしい猿ぐつわに殺された呻き、緊縛された手足の形など、自分で呻いて見るか、写真を見た感じと想像しか表現できない。若し幸いに経験がつめたなら、或は新しいモチーフが展開したなら、再び投稿する事をお約束します。この三部にわたる「革の盛装」は、軽い衝動から投稿し、三月号に採用された小品「革の服の流行」が端緒になって展開したもので、勿論すべてがフィクションで、モデルなどありません。

☆耽美主義者の手記より☆……………

「夜は妖しく更けたれば」

夜 乃 探 郎

美少女ハ 愛ラシキ 顔ヲ持ツナレド
 身体ハ イト 不潔ナル 動物ナリキ
 赤キリボン付ケシ 髪ハ 枯草ムレル
 ガ如ク 下肢ヨリ漂ウハ スイタ酸味
 カ ニゴレル牛乳ナリヤ ムキ出シノ
 ウブ毛モ ソノママニシテ 肌着モ汗
 ガニジミ フクラム乳房ニ マトワリ
 ツク — サレド、私ハ ソノ不潔
 サヲ愛ス 生々シキ香りヲ 分泌物ニ
 マミレタ スベテヲ。

神酒拝受式のこと並に
 夜乃探郎眼ざむれば浮
 世は淋しのこと

赤地に、黒文字で「おでん」とか「やきとり」とか書き入れてある提灯が数軒並ぶうら
 陀しい公園の裏通り、そこにN劇場がある。
 いつも「エロ・グロ大行進」 「愛欲にもだ
 える若妻」など、毒々しい色刷の立看板が
 あたりの空気を、よりでかだんなものにして
 いた。自称耽美主義者たる夜乃探郎こと私は
 この映画館の常連で、わらのはみ出たパネが
 露出したこれれ放題のイス席に腰かけ、ぎこ
 ちない姿勢で、煙草をふかし、アンパンをほ
 おばり、観賞するのをこととしていた。

どの映画も、大げさな題名とは裏腹に、た
 だやたらに裸になるという演技も稚拙なまこ
 とにたあいのない物が多かったが、——また

そこに一流映画とは違った身近かな親しみが
 あった。発声法もろくにしないスターたち
 が、水鉢の金魚を連想させるように口をパク
 パクさせた、どこかものうげな動作も、私に
 とってはむしろ世紀末的な妖しき世界を夢み
 させた。それは華麗なフロア・ショウにあま
 り魅力を感じず、アセチレンガスの香りが漂
 う仮設興行物に対する郷愁でもあったのだ。

その晩も、私は「エロと猟奇封切豪華版女
 犯の掟★狂える欲情東京の夜裸の淑女明日夜
 通」の新聞広告の唄い文句につられて、N劇
 場に入った。途中からなので筋書は判らない
 が、木戸口でチラと見たポスターによると洋
 画「狂える欲情」の一シーンらしい。巾の広

い深さの浅い大きなたるに、フランス娘が多勢ぶとうを素足でふんでいた。陽気なバンドの演奏につれて、たかだかとスカートをまくし上げて、すねの白さが、太もものあたりが、健康なエロチシズムを、まき散らしていた。マゾ党なら、私はぶどうになりたい——と、いうところだろうか。私は元来、女のそれも青い果実をおもわせる美少女から発散される生々しい分泌物がまざった香りを、こよなく好むものだ。特にトレーニング・シャツにブルマー姿で、運動する彼女たちを、ふと通りすがりの校庭などで見掛けると、私は激しいこうふんにかられる。——

いつしか、私はセーラ服をきた少女たちにかこまれホテルの一室に立はだかっていた。(私なりの幻の現実世界がやってきたのだ) いつも渴望している美少女たちの体臭がむうっと私をおそった。ロープと鞭をもった黒いチョビひげを生やした中年男を先頭に、どやどやと十人ばかりの種々の服装をした男達が入ってきた。しばらくして、「では、只今から神酒拝受の式を取り行ないます。全員起立ノ」と、ソファに腰を下して雑談していた列席者にむかって、そのチョビひげの男はいった。「神酒」という表現に、私はドキリノ

とした。近頃、愛読をはじめた奇クによくこの言葉がある。それに附随して「人間トイレ」とか、「ユニンを飲んでみたいものだ」など、私の空想をよりたくましくさせるものがあつたからだ。いつのまにか、七・八人程の少女たちは、セーラー服をむしり取られ、シユミーズ一枚の姿も哀れに、後手に縛られ、羞恥に、白い肌を赤くさせてより集っていた。

部屋の片隅に用意されてあつた。スポット・ライトが、さあっと、彼女たちを青白き光の円内にとらえた。私は「神酒」という、その名が示すまことに森厳なる——それを、有難くおすそわけしていただく儀式が、この日本のどこかに早くも実現されたことに、好奇とおどろきを禁じ得なかった。「さて」と司会者然とした顔付で男はつづけた。

「コプロ趣味は、その極致は何んといつてもあの金色に輝く固形物をもって、その第一とするといわれているようですが、また妖しく深き泉に、そっと口付けする神酒拝受の世界も、くめどもつきぬ醍醐味があることは申すまでもありません。ところで、ここにこんな話があります。うら若き乙女の協力? によつて、三日三晩、ただ、高級なるチョコレー

トのみを食させ、やがて、排泄されたこはく色のプレゼント。それをおしただいた——というその故実にかんがみ、いまここに奴隷として、調教された花はずかしき美少女たちを、三日三晩、一室に軟禁し、ただ香り高き香水入りの果実汁のみを与え過ぎせました。そこへまたまたつい先程は、腹がふくれる程に大量の果汁を飲ませて、もう放出はその限界に達しています。これより、人間トイレを御希望された紳士諸君、その甘美なる芳香によわれ給えよノ」

男達の間に異様な熱気がこもる。いくら調教されたとしても、そこは青い実の白い肌をもつ少女たちのこと、いざノ となると、その羞恥にたえる風情は、残酷な被虐図絵を描き出さんとしていた。鞭がとび、責めが前奏曲としてなされた。彼女たちはその痛さよりも、迫りくる生理の要求に、身をよじった。前髪がひたいぎわに、べっとりつまつわり、もう、そのことは時間の問題であつた。

映画はすでに終っていた。私は静かに立上る。後をつづけて見るには、私の夢はあまりにも生々しく「神酒」という文字が、しらじらとした白いスクリーンに現われては消え点



私の少女趣味をやや満足させるウイエットレスがいた。私は真顔でいった。「神酒飲ませてくれないか」彼女は、その言葉をどう取ったのか、すまなそうに「あの、家にはトリス・ハイボールなど洋酒だけで、日本酒の用意は御座居ません」といった。これではポンチ絵にもならない。ああ、眼ざめれば浮世は淋しか……。私は改めて「ハイボール」といったものだ。

（夜乃探郎「神酒」に対する一考察のこと並に美少女導尿をのぞき見すること。）

滅しているのだ。N劇場を出て星を眺める。ぶぜんとして私は立小便をした。男の子の、如何にあじけなき放水よ。私の頭には、羞恥にたえる美少女たちが、その限界もいまは消えて、あーっと小さく叫ぶ一瞬が目に浮ぶ。これから薄汚れた屋根裏部屋に一人冷たく帰るのもつらく、私は行つけの酒場に入った。此処にはかねてより眼を付けていた田舎出の

しみだらけの天井にふうっと煙草の煙りを吐きかける。私は万年床に腹ばいになりながら、神酒についてのあれこれと妄想する。「神酒は甘いか、しよっぱいか」ふと、こんな文句をくちずむ。「奇ク」に投稿しようとして、「夜は妖しく更けたれば」の第一章で、いとも幻想的な「神酒」にからまる物語を書いて以来、どうも、この泉から五色の虹をはなって発散する美しき液体の

ことが忘れかねた。本来からいえば、この二章は、ガラリと場面転回ということになるのだが、未だ「神酒」に未練が数々ござる。それで、今度はひらきなおって、一考察とした。まあ、この前半はいわば第一章のオマケ見たいなものだ。

さて、私は、何かないか——と、ガタピシの押入の方にチラリと眼をむける。そこにはほこりだらけになって、古い風俗文献資料が、積かさねられている。重い腰を上げて、起上り戸をあける。探すときには、仲々見つからないものだ。それでもやっと一冊の雑誌を取上げる。「神酒」と付物の便所に関するエッセイがケイサイされてある号だ。昭和四年九月一日発行、（発行所東京市芝区本芝四ノ十六番地文芸市場社）風俗文献雑誌の出版史をひもとくには、なくてはならないかの伝説的な——梅原北明氏が編集の「グロテスク」九月号である。本題に入る前に、この号の「編集後記」が面白いので、一寸抜書してみる。

「今日、雑誌の本文が全部刷上ったから急いで編集後記を書けと西編輯子からキツイ催促。早速一通り、本文に眼を通したら、アルわアルわ迷茶迷茶の校正だ。誤字だらけでや

り切れない。これぢや編輯後記を早く書けもないもんぢや態ア見やがれ。このテイタラクな誤字は何だい？ 一円出して面白れいとはかり買つて行くお客こそいい面の皮だい。氣をつけろい誰の雑誌だい？ 何ーんだい俺んちのかい。さうかい悪かったね”（作者註原文通り写す）またこの編集後記は、まだアト四拾日も入院を続けないと、完全無欠な日本国民になれないんださうですって”と、北明氏、後記のはじめに記してあるように、いとも通人のかかるお淋しき病氣によって入院そこ（一九二九年八月十七日東京神田淡路町一ノ一、加藤外科一号室）で、書いたものであるから、何をかいわんやだ。脱線ついでに、その当時は、性風俗文献資料を出版するとき、その著書の題名にみずから「大悪書」としたこの道の研究家もいた。その、絶大なる社会に対するユーモアは、知る人ぞ知るだ。

さて、「ぐるてすく」九月号の、一七〇頁に「世界便所発展史」が、梅原北明の手によって記されてある。適当に抜スイして見よう。『「便所の発展」ウィーン大学内にある奥国性的民族学協会編集にかかる「性語百科辞典」の Abtritt の項を見ると便所の発達史に就て左の如く記載されている。即ち訳して

見ると、Abtritt（便所）Abort. Betriade. Klorett. Kabiwet. Toilette. W. C.）人々は不浄を除く為めに行く閉塞し得る小さな部屋を便所と称えている。または便所の発展史は諸々の跳躍的变化に富む形像を示して居る。クレタ島に於ける発掘によって、人々は紀元前二千八百年頃に建造された、ミモス王の宮殿の中にある近代的表象に全く一致する様な便所を見出した。其の便所は、坐席の下に掘割を横たえて水で洗滌する様に構成されていた。第十六世紀頃までは人口稠密な都市にすら便所はなかった。恐らく手桶や尿瓶が窓から街上へ向つて空けられたのである。故に巴里では「寢室用の瓶」を街上に空ける前には、人々は三度、「水に御注意！」と叫ばねばならぬという面白い禁令さえ行われたのである。古代羅馬に於ては、小便は至極大びらで些かも隠す事なく、又何の恥辱にもならぬ許されたところの行為であった。之に対する理由は羅馬人の商業的組織の中にある。即ち彼等は尿を石鹼の製造に利用したが故に、之の製造に用いらるるその他の原料と同様に、公に云わば熱心な競争下に尿が獲得されねばならなかった。――

私はニヤリとする。成程、尿が石鹼に化け

るとは面白い。それでは、美少女たちの尿ばかりを集めて特製「乙女石鹼」とか名付けて販売したらどうだろうか。さぞかし、香り高き？ ものだろう。いや、コプロ趣味の方々は、よろこんで食べるだろうよ。そう、いつか耳にした話だが、昔の我が国の軍隊では、若きたくましく兵隊さんが使用する便所の排泄物は、高額で、取引されたとか（ウソか本当か保証できないが）なんでもホルモンの原料に使うとのことだった。もし、実現できるなら、全国の各女学校と特別契約して尿瓶を各自に手渡し女学生が、そこに放出する液体をいち早く購入新鮮さを失わぬように科学処理して、瓶詰またはかんづめにして、手軽にお好みの味を楽しむようになったら楽しいことだ。但し出張所の設置が大変だがーホイ今日は、都会の女学生の味、ソレ、明日は、田舎の方にするかーとか。また応用は、数限りない。ウィースキーにまぜてカクテル「ピンク」とかに、ぶどう酒にまぜて、「ばら色の人生」とか、ラーメンに調味料としてたらして「神秘的な泉」とか、それぞれ勝手に名付て。私はとりとめもない妖しきことなどペンにたくして走らせる。

◇作者註 風俗文献誌出版華やかなりし昭和

の初期・中期にかけて、梅原北明が活躍していた当時。秘密出版物を除く？ やや合法的な？ 特殊文献誌として知られているものは「グロテスク」「デカメロン」「変態資料」「風俗資料」「奇書」「談奇党」「匂える園」「犯罪科学」「古今桃色草紙」等で、北明がこの種出版物を手がけたキツカケは、はじめは「文芸市場」という左翼的な雑誌を発行（同人制）により、そこから、ついに「グロテスク」がタン生した。なお当時の出版事情から、創刊はハッキリしても、終刊はつまびらかでないのが多々あるが、「風俗資料」は六冊まで「変態資料」は増刊共に二十一冊までは断定できる。私の知るところでは「グロテスク」は、十八冊以後は？「デカメロン」は十四冊以後は？「匂える園」四冊以後は？「奇書」八冊以後は？「談奇党」は、増刊共七冊までか？「犯罪科学」は、めずらしく三〇冊位まで以後は？「古今桃色草紙」八冊位？ これからおして、また戦後の各文献誌から見ても現在発行の「奇ク」の二百号突破は戦前戦後をとおして、風俗文献発行史をひもとくにあたったの記録的なベスト誌であることは、論をまたないのであ

る。

カラリと晴れた秋日和の一日。私は花束持参でA外科病院十号病室にいた。悪友の自称雑文家Kの妹が痔とかで、そこを電気で焼く治療を受けるために入院していたのだ。実は、小説「ロリータ」に出てくるような少女で、とんだカマトト振りをときたま見せて、私をよろこばせる。「あたいキスは駄目！お嫁に行けなくなる」など、いたずらしようとする私に、ケロリとしてこれだ。

彼女（高校三年生だ）と一緒にスケートに行ったり、ツイストが流行るといえば、神経痛の足を引きつってもダンス教室所にかよい、少女とテレビから流れる曲に合わせてツイストを部屋でする。（ただし、その程度まで、それから以後は、もっぱら、私なりの幻の現実世界で、プレイということになるわけだ）そんなわけで、手術の経過もよろしいという話で、いそいそと、美少女御見舞の巻という次第だ。

ピンクのパジャマを着たH子は、とくに可愛く思われた。それに、入院以来十日以上も入浴していないので、たまらなく体臭がただよい、私をよろこばせた。個室なので、えん

りよなく数刻、雑談。そこへ「奇蹟の人」という映画に出てくる女教師に似た顔付の若い看護婦が入ってきた。「たまっているでしよう。さあ、尿を取りましょう」と事務的な口調で、その看護婦は、チラリと強い眼で私を見ながら、少女にいった。判っています。廊下に出ればいいんでしょう。私は羞恥に身をよじるH子をなめるように眺め、また医療器具の入ったワゴン車を横眼で見ながら廊下に出た。（どうなんでしょう、後はカットの部分でしょうか。とにかく何とか書いてみるが、奇ク誌上にノーカットかどうか、ガンバリましょう）のぞき趣味という。私の例の虫が頭の中をかけ廻る。戸からーといっても残念でした。あまりにも人のゆききがありすぎる。こんな事もありやと、実は病室にいたとき、何げなく、周囲の状況を目測していた。向い側に、庭一つをはさんでやはり二階建の第二病棟が立って居り、H子の居る二階の病室の前のあたりは、たしかトイレのようであった。そこに一目散だ。忍者ではないが私の七つ道具の一つに、オペラグラスがしのんでいた。これが役に立つ。やがて「アンモニアの香り、またよろし」と、一人でつぶやきながら、見当をつけて、便所に入った。

〔新版〕 女体悦虐フォト七十選

Z組七十集 大手札印画紙 (9×13 寸) 焼付各組一枚一組 (送料共)

一組 一枚	一〇〇〇円
五組 五枚	四〇〇〇円
十組 十枚	七五〇〇円
二十組 二十枚	一四〇〇〇円
三十組 三十枚	二〇〇〇〇円
四十組 四十枚	二五〇〇〇円
五十組 五十枚	三〇〇〇〇円
六十組 六十枚	三五〇〇〇円
七十組 七十枚	四〇〇〇〇円

Z 1 ゴムの猿ぐつわ	(梨花)
Z 2 囚女第六十三号	(柳)
Z 3 猪型手足吊り	(梨花)
Z 4 逆エビ強烈縛り	(大塚)
Z 5 ローソク責め	(四浦)
Z 6 豊臀への珍責め	(絹川)
Z 7 淫らな変型縛り	(愛川)
Z 8 ザリガニしばり	(梨花)

Z 9 引き回しシーン	(東浦)
Z 10 全裸後手高手小手	(加茂)
Z 11 豊満な肌の被虐	(大井)
Z 12 黒髪いたぶり	(大塚)
Z 13 足吊り媚態責め	(絹川)
Z 14 黒縄高手小手縛り	(四方)
Z 15 強烈荒縄しばり	(梨花)
Z 16 肌に喰込む白い縄	(東浦)
Z 17 くの字の足指苦悶	(桜井)
Z 18 裸身にいとむ縄	(前本)
Z 19 無茶な猿ぐつわ	(竹野)
Z 20 ハリツケの女体	(梨花)
Z 21 おへソなぶり	(大塚)
Z 22 逆手足吊り	(竹野)
Z 23 美肌のいたぶり	(絹川)
Z 24 仰向きの鼻いじめ	(加茂)
Z 25 恐怖の表情一瞬間	(若原)
Z 26 火箸で責める乳房	(梨花)

Z 27 全裸の海老責め	(熱海)
Z 28 ベッド上の痴態	(絹川)
Z 29 足の裏の擦り責め	(大塚)
Z 30 闇の女体飾り縛り	(竹野)
Z 31 首絞め晒しもの	(大塚)
Z 32 鼻孔に加虐	(若原)
Z 33 悦虐責放心状態	(梨花)
Z 34 手枷足くさり	(四方)
Z 35 寝室でのプレイ	(花本)
Z 36 猿ぐつわの妙味	(梨花)
Z 37 首縄、柱しばり	(絹川)
Z 38 巻煙草責め	(大塚)
Z 39 尻立て縛りポーズ	(桜井)
Z 40 厳しきエビ責め	(東浦)
Z 41 ゴムのカバー縛り	(竹野)
Z 42 ワンピースの縛り	(花本)
Z 43 荒縄縛り竹棒責め	(梨花)
Z 44 尻を突っ立てて	(大塚)
Z 45 鏡に映す縛り裸像	(山路)
Z 46 苦悶に喘ぐ柔肌	(大塚)
Z 47 酔後の淫らしばり	(絹川)
Z 48 逆十字エビ縛り	(大塚)

Z 49 全裸縛り猿ぐつわ	(東浦)
Z 50 欄間に宙吊り	(梨花)
Z 51 全裸逆エビ縛り	(絹川)
Z 52 荒縄のお仕置室	(梨花)
Z 53 庭園の惨酷風景	(館)
Z 54 被虐の果て	(大塚)
Z 55 痛められた裸身	(大塚)
Z 56 鏡の中の全裸像	(愛川)
Z 57 セーラー服縛り	(梨花)
Z 58 檻の中の緊縛裸身	(愛川)
Z 59 全裸の股間縛り	(絹川)
Z 60 オムツ逆エビ責め	(田中)
Z 61 胴縄に膨らむ腹部	(桜井)
Z 62 ゴム人形の女	(竹野)
Z 63 荒縄のトゲ責め	(梨花)
Z 64 女子大生恥態責め	(田中)
Z 65 白肌露出の全裸縛	(絹川)
Z 66 強要する開股縛り	(絹川)
Z 67 強烈縛り全裸の晒	(愛川)
Z 68 亀甲縛り乳房責め	(梨花)
Z 69 ベッド上のもたえ	(愛川)
Z 70 恥しさに耐えて	(館)

帰途私は、口笛吹きつつ足音も軽い。「のぞき趣味」と、非難されたまうな。ピンからキリまである。私は、人間の深淵を直視し性の事実をたしかめたいのだ。(ホントかな)かのスリラ映画の第一人者ヒチコック先生は「裏窓」という作品で、のぞき趣味に、芸術

性を与えた。パピルスは、その小説「地獄」で、のぞき趣味に、哲学的な思想まで付け加えた。いまは推理小説界の大御所、江戸川乱歩大人は、初期の妖しき世界を描写した「湖畔事件」で、のぞき趣味をモチーフとしてケツ作をものされた。江戸文学、西鶴の「好

色一代男」の中にヒーローが、屋根の上から、オランダ渡来の望遠鏡で美女の行水姿をのぞき見るシーンがある。さし絵はすでに、大方、おなじみのところ。まだまだあるけど切がない。そんなところで、のぞき趣味もまた悪くないネ。どうだろうか。

相撲に魅せられた娘たち

.....

娘相撲物語

海野 美津 男

1 山野富子は、田舎の高校を出るとすぐ、K市の会社に就職した。

女子寮もあったけれども、何となく一人で生活してみたかった富子は、両親の諒解も得て、アパートに一人住んでいた。一つは、炊事や洗濯など、家庭的なことをきちんとやり将来に備えたかったこと、もう一つは、地味で無口な性格がそうさせたのだった。

スポーツは好きだったので、高校時代にやっていたバスケットを入社してからも続け、今では会社のバスケット部に無くてはならぬ存在になっていたが、職場でも、最も口数の

少ない女性の一人に数えられていた。とにかく彼女は大人しかった。職場で話すことといえば、ほとんど仕事の上で必要なことだけと、いつて良いほどだった。

尤も、親しい友達が無かった訳ではない。無口な人間がよくそうであるように、富子にも、何もかも話せる、深い友情を持った女性が二人いた。一人は中山恵美子、もう一人は佐川久美子と言い、二人とも同じバスケット部で、中山は富子と同じ年、佐川は一つ年下だった。三人は良く富子のアパートに集まって話したり、山へ登ったりした。

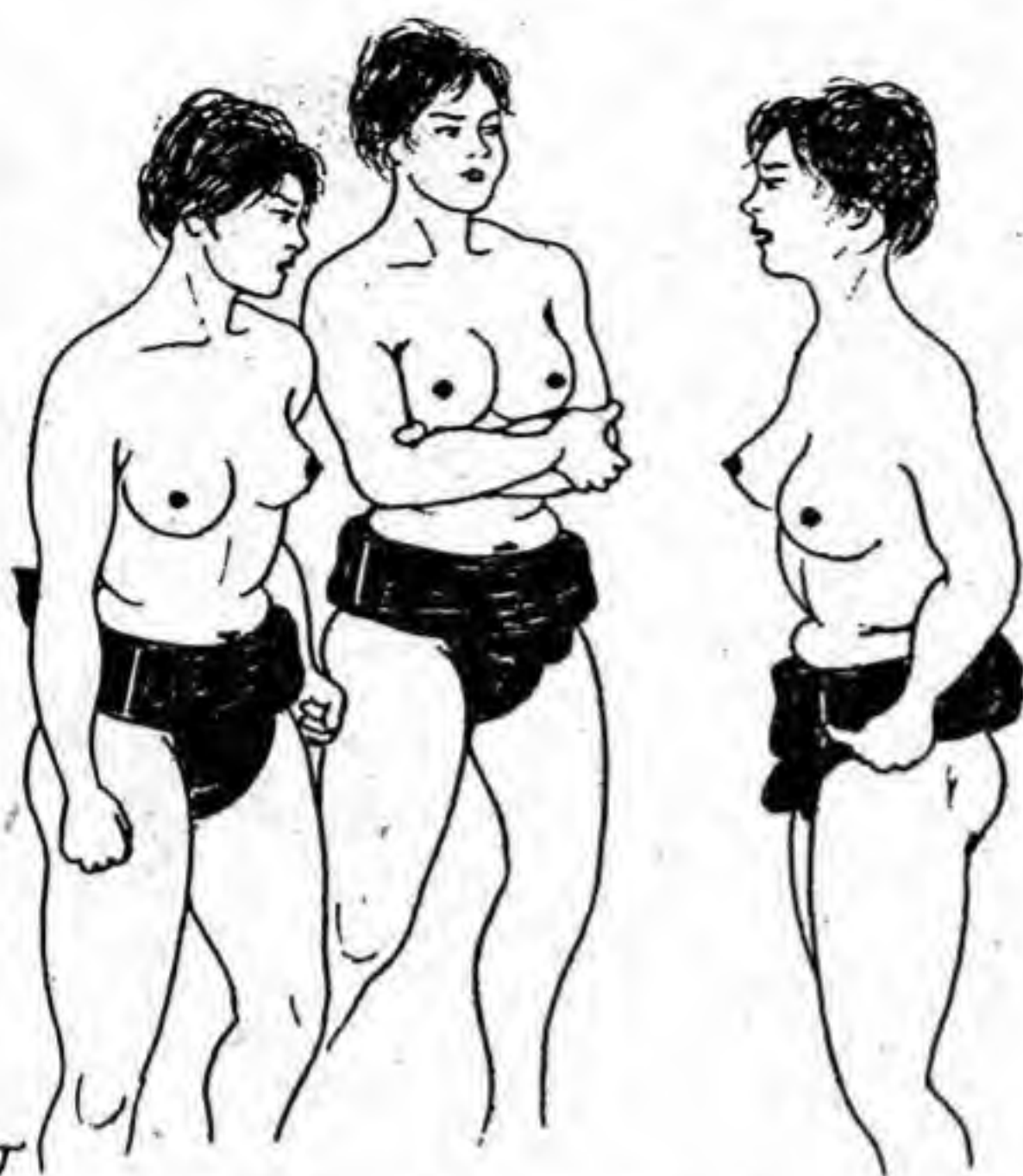
x x x

そうした富子が、相撲のとりこになってしまったのは、BG生活三年目、ちょうどはたちになった昨年の春、高校の相撲大会を見た時からだった。

四月の或る日曜日。午前中、洗濯や繕い物をすました富子は、午後から散歩に出た。

森の多いK市の春は、穏やかだった。富子はお城に登り、見晴らしの良い石垣の上のベンチに坐って、いつまでもうらかな春の陽ざしを楽しんでいたが、やがて腰を上げるとお城の東側の競技場の方へ下りて行った。

競技場の一角では、高校相撲大会が開かれていた。富子は、お城の上まで聞こえていた



M.U

喚声はこれだったのかと思ひながら、何とはなしに見物席に入っていた。土俵では午前中からの試合が進み、ちょうどI高校とS高校の優勝戦が始まるところだった。

富子は、相撲が嫌いではなかったが、特別に好きとまではいかず、テレビで相撲があっても見たり見なかったりの程度だったので、そのまま見物するつもりはなかった。

しかし、優勝戦を見ているうちに、富子は今まで相撲を見ていて一度も感じたことのないものを感じていた。

それは、魅力というような言葉は、まだ生やさしいと感じるほどの、一種の衝動のようなものだった。

富子の眼は土俵に吸いつけられ、そのこぶしは、しっかりと握りしめられていた。

優勝戦が終った時、富子は、

そうして何もかも忘れて相撲に見入っていたことに気付き「なぜこんなに相撲に惹かれるんだろう？ こんなことは今までになかったのに。一体、どうしてなの？」と自分に問いかけてみた。

しかし、それがどうしてもなにか、自分でも全くわからなかった。『まあ！ こんなに汗が出て、どうしたんだろう？』と富子はソツとハンケチをとり出して腋の下の汗を拭いた。『こんなに昂奮するなんて！ 若い

高校生のたくましい肉体を見たせいかしら？』、富子はいろいろ考えてみたが、どうしてもわ

からなかった。

そのうち個人勝抜戦が始まると、富子は再び何もかも忘れて、夢中でひとつひとつの勝負を見つめ続けた。

× × ×

アパートに帰っても、まだ昂奮がさめなかった。富子には、どうしても、なぜ相撲にこれほど昂奮するのかということがわからなかった。しかし彼女は、理由をあれこれ考えるのは、やめることにした。ひとつはっきりしていることは、その昂奮が、何か外からではなく、自分のからだの中からこみ上げてくるようなものであることだけだった。

富子は、それから、相撲大会が休みの日にありさえすれば、必らず見に行くようになった。それは、小学生のものでも大人の相撲でも良かった。しかし、どちらかと言うと、所謂アンコ型の肥満した大人の相撲は余り好きになれなかった。

2

そうして一年が経ち、富子は二十一才の春を迎えた。

『今年も高校相撲がある頃だけど、いつかしら』と、富子はその日を心待ちしていた。

高校の大会は予定通り開かれた。それは、



M. U

昨年よりずっと、すばらしく白熱したものになった。

富子は、自分が相撲好きになり、始終見物に行っているということを、何故か恵美子や久美子にも打ち明けられなかった。だから相撲見物が親友との約束の日とかち合ったりすると、何とか口実をつけていた。この日も、二人には「田舎に帰る」と言っておいた。

富子は、朝早くから会場に行き、土俵のすぐ傍に席を取った。

そこからは、選手たちの眼の動き、細かい筋肉の動きまでが手にとるようにわかり、若くたくましい高校生たちの体臭までが、富子に伝わってきた。

彼女にとって、その一日は、後ろの方で見物した昨年より、ずっとすばらしいものになった。

富子は、アパートに帰り、一人寝ころんで天井を見つめながら、その日の一番一番の相撲を思い起していた。

富子は、突然身体を起し、首を左右にはげしく振った。

E高校とS高校の大将同志の対戦で、土俵際の左四つの揉み合いを思い出しているうちに、急に、自分もまわしを締めこみ、相撲を取ってみたいくなったからだった。

富子は、我ながら驚いた。

「相撲に惹かれたことは何も不思議はないけ

れど、自分でも取りたくなるなんて、どういうことなんだろう？」

「どうして男のものである相撲を、女の私が取りたくなるのかしら？ しかもまわしまで締めてみたいなんて、一体私はどうしたんだろう？」

彼女は、思い悩んだ。

「去年見た時に感じたあの昂奮は？ そういえば、今でもあの気持は、わかっていないじゃない」

富子の頭は混乱した。彼女は立ち上って雑誌を手に取り、それを読んで別のことを考えようと努力してみた。

炊事場に立って、食器を洗ってみたりして忘れようとした。

しかし、どう努力してみても、相撲を取ってみたい、まわしを締めてみたいという気持ちを打消すことはできなかった。

富子の中では、「私、どうかしてるんじゃないかしら？」という気持と、「でもやっぱり、やってみたい」という気持が、交互にあらわれては葛藤した。結論は出なかった。

富子は、もうどうでもいいと思った。そして、やろうと思ったことは、やってしまえばいいんだと自分に言い聞かせた。

彼女は、パツと立ち上ると、西日の差しこむ窓のカーテンをしめ、入口の鍵もかけるとスルスルと洋服を脱ぎ捨て、パンティひとつの姿になった。

富子は、まっすぐに立つと、膝をゆっくりまげ、先ず蹲踞の姿勢を取ってみた。慣れないその姿勢に身体がフラつく、富子はちょっと頬をほころばせた。

しかし、立ち上って仕切りの姿勢に移ると富子の眼は急にきびしくなった。こぶしを固めて畳にぐっと押しつけ、腰を落し、ぐいと窓の方をにらんだ富子は、しばらくの間、仕切りの姿勢のまま動かなかった。

西日のあたる部屋は、密閉されていたせいか、春とはいえ蒸し暑かった。富子の額には汗がにじみ出てきた。しかし、彼女の心には、すでに雑念は無かった。

長いことそうしていた富子は、我に帰ったように力を抜くと、立ち上り、今度は柱の前に立った。そして柱に両手をかけ、腰を落すと柱をぐいぐいと押し始めた。バスケツで鍛えているせいか、柔かい肌の下にかくれていた筋肉が、あちこちに見えかくれた。汗が全身に吹き出し、流れ落ちた。

富子は、言うに言われぬ満足感を味わって

いた。彼女は、日が沈み、部屋の中が暗くなるまで、蹲踞の姿勢をとったり、足の屈伸運動をしたり、柱と押し相撲を取ったりしていた。

X X X

あくる日も、そんなことを繰り返した。次の日も、そうした。

だが、パンティ姿では、どうしても満足できなくなってきた。富子は、もう何も考えず思った通りするようになっていた。

四日目の晩、富子は、着物の帯をまわしに締めてみようといういろいろ工夫した。だが、柔らか過ぎたり固過ぎたり、長かったり短かったりで、どの帯もうまくいかなかった。何とか恰好はまわしのようになるのだが、恰好だけでは彼女には満足いかなかった。

さらしを買ってきて六尺に締めてみた。締まった感じは何とも言えないものだったが、どうも相撲を取る恰好ではないように思えたし、鏡に写してみると、相撲まわしのような美しさが感じられなかった。

富子は、思い切ってまわしを買おうと決めた。スポーツ店に行った。恥かしさをこらえて店に入り、「郷里の弟から頼まれたんだけど」と言っ、まわしを見せてもらった。ずいぶ

ん固そうな気がしたが、「買ってくれと頼まれた」と言ってしまった手前、買わずに帰る訳にはいかず、高校生用のものを、そそくさと買って店を出た。

本当のまわしを締める富子の胸は、否が応でも高鳴った。締め方は凡そ想像がついていた。男もののまわしは、やっぱり固く、柔肌に食いこんで痛かったが、富子は構うもんかと締めていった。

最後に三ツ目に結び終わると、彼女は鏡の前に立った。三面鏡は全身をくまなく写してみせた。彼女の頬は火照り、全身の肌も赤味を増していた。富子は長いこと自分のまわし姿に見とれていた。彼女は、自分の姿を、自分ながら美しく凛々しいものに感じた。

富子は、毎晩、そうしてまわしを締めこみ鏡に写しては、そのあといつものように、いろいろな型や姿勢をとってみるのだった。

X X X

富子には、肉体そのものも、もっとたくましくしようという気持が起ってきた。そこで彼女は、柱との押し相撲の回数をふやし、重い火鉢を抱えたまま足の屈伸をくりかえしたりすることにした。

だが、そうするには、男もののまわしはや

はり固過ぎた。

或る日、火鉢を抱えて足の屈伸をやっていると、股の部分がヒリヒリと痛んできた。皮膚がすりむけてしまっていた。

富子はそこで、まわしを自分で仕立てるところにした。

布地をいろいろ探し廻ってみたが、結局デニムにすることにし、色は自分の好きな濃紺を選んだ。裁縫は比較的上手だったので、まわしはすぐにでき上った。

富子は、どちらかと言うと小麦色の肌をしていたので、紺が似合うかどうか気になっていたが、締めてみると、意外に肌の色と紺とがピッタリ似合った。巾は、男ものよりも狭くしていたので、よく締まった。

富子は、同じ紺のデニムのまわしを、もう一本仕立てた。二、三日締めると汗のために汚れてしまうからだった。

× × ×

まわしを気にしないですむようになった富子の動きはだんだんと大胆になった。幸い、鉄筋のアパートだったので、少々四股を踏んだ位では人に気付かれる心配が無いということもあった。

富子は、フトンを敷き、その上で投げたり

投げられたりしたつもりの、一人相撲を取るようになった。自分の右手を左腕の下に差しこみ左下手のまわしをつかんでぐいぐい引いて四つ相撲の真似もした。前禪を引き上げて土俵際の反り身の真似もしてみた。

時には、「こんなことをやっていいいんだろうか？ 私、やっぱりどうかしてるんじゃないかしら？」という疑問を繰り返したり「若し、こんな姿を人に見られたら、お嫁にもらい手も無くなるんじゃないか」と思うこともあった。

しかし、いつの場合も「まわしを凛々しく締めたい。そして思い切ってあばれたい」という気持の方が強く働いて、そういう心配を打消すのだった。

× × ×

そうして三カ月が過ぎ、梅雨が上がり、夏が訪れた。

じつとしていても汗ばむ日が続いたが、富子は「相撲」をやめなかった。むしろ、全身が汗まみれになっていく、そのことが何とも言えない魅力だった。



M.O

だが、一人で相撲を取ることは、何と言っても物足りなかった。もちろん、それは始めた時から感じていたのだが、始めのうちは、まわしを締めただけでも満足を覚えていたから、それほど物足りなさは感じなかった。しかし、三カ月も経つと、それだけではどうしても飽き足らなくなっていた。誰でもい

い、とにかく相手が欲しいという気持ちを、富子はどうすることもできなくなっていた。

富子はしかし、とうてい親友の、何もかも話せる二人にも打ち明けることはできなかった。

富子は、今までより一層はげしく身体を動かすことで、その気持ちを押さえようとした。だが、そうすればする程、相手が欲しくなった。

そうしてまた一カ月が過ぎ、夏も終りに近づいていた。

3

虫の声も聞えるようになった或る夜。ひよんなことから、富子のその強烈な願いが満たされることになった。

いつものように、富子は、素肌にまわしを締め、鏡の前に立っていた。「さあ!」と、仕切りの型に入ろうとしている時だった。ドアをトントンと叩く音がして

「今晚は。富ちゃんいる? 私、私なの、おそくなってすまないけど、あけて」

と、中山恵美子の声がした。

富子は、本当にあわてた。胸が高鳴り、カッとして頭に血が上って、前後がすっかりわからなくなってしまうた。

恵美子や佐川久美子は、良く訪ねては来たが、それは大抵、職場が退けて直ぐか、せいぜい八時頃までの間だった。二人は寮に生活していて、十時の門限までには帰らなければいけないからだ。そういうこともあって富子は十時からでなければ、決して「相撲」はしなかった。

富子は、まさかと思っていたので、そのあわて方はひどかった。

たしかに寝巻は着たのだが、まわしはそのまま締めたままだったのだ。

恵美子が、門限も構わず訪ねて来たのは、恋人が、その夜急に彼女に冷たくなり、「別れたい」と言い出したからだ。恵美子は涙を一杯ためていた。

富子は「お茶を入れようか」と立ち上りかけたが、「お茶なんかいいのよ。とにかく話を聞いて」と、恵美子は心の痛みを、立て続けにおちまけた。

向うから「愛してる」などと言い寄っておきながら、恵美子が夢中になる頃になって、「別れたい」などと言うその男に、富子も腹を立てた。そして、まわしのことなどすっかり忘れて、恵美子の手を取って一緒に涙を流した。

恵美子は、心のうちをすっかりおちまけてしまつて、少しはホッとしたのだろう。涙を拭くと、「ああ、少しスツとした。富ちゃんありがとう。やっぱり友だちはいいなあ」と言つて面を上げた。

富子も少し明るさを取り戻した恵美子を見てホッとした。そして「今夜は泊まっていきなさい。さあ、お茶でも入れようか」と立ち上った。

だがその途端、自分の姿に気付いて「しまった!」と思った。腰のあたりがふくれ上っているではないか。しかもこていねいに、寝巻の上から帯まで締めているから、そのふくれは一層目立っていた。

しかし、もうおそかった。恵美子がそれに気付いて、「富ちゃん、どうしたの? お尻のあたりがふくれてるじゃない」と言つたからだ。

富子は、恵美子の方に背を向けたまま、しばらくそこに立ちすくんでいた。言葉も出なかった。

しかし、もう、どうしようもなかった。富子は、思い切つて口を開いた。

「実はね……」

「どうしたのよ、そんなに緊張して」

「実はね。私……時々、一人で……。やっぱり言えない……でも……」

「どうしたのよ。親友の私にも言えないことがあるの？」

「思い切って言うわ。私ね……一人で相撲取ってたのよ」

恵美子は、本当に驚いたようだった。眼を丸くして富子の顔を見つめていたが、しばらくして言った。

「お相撲？……取ってるって？」

「うん」

「すると……それは、着物の下に締めてるのは……ふんどしなの？」

「ううん、ふんどしじゃないのよ。まわしよ。本当の」

富子の頬は真赤になっていた。恵美子も赤くなっていた。ずいぶん時間が経ったようだった。

「恵美ちゃん、よっぽど驚いたんだろうな」

「おかしい人間だと思ってるかも知れない」

「どうして私、気付かなかったんだろう」と

富子はとりとめもなく考えた。

しかし恵美子は、意外にも富子の行為を肯定した。

ちよっと頬をほころばせたかと思うと

「女が相撲取ったって、ちっとも構わないのかも知れないな」

と一人言のようにつぶやいた。

富子は、全身の力が一度に抜けるのを覚えた。汗がどっと吹き出して、頬を伝った。

× × ×

恵美子は、富子よりも身体は小さかったが性格はまるで反対で、非常に積極的だった。

しかし、それでいて口数は多くない、そんなところが富子は好きで友だちになったのだった。

また恵美子の方は、職場では全くとってよいほど口をきかないのに、バスケットの時は非常に機敏に動く、無口だが明るさのある富子に惹かれていた。

富子の「相撲」のことを聞いた時、恵美子は「まさか！」と思った。そして本当に驚きの目で富子を見た。しかし、しばらくすると「自分にも、そんなことをしてみたいという気持があるんじゃないか」と思えるようになった。

「そう言えば、今までに何回か、取っ組み合いであばれたいな、と思うことがあった」ことにも気付いた。実際に、夏のキャンプで、久美子に組みついていったことも思い

出した。

恵美子の心は決まった。積極的な性格のせいもあったが、その夜の恋人とのことでくしゃくしゃしていたのが、決心を早めた。

「富ちゃん。私、最初はびっくりしたけど考えてみたら、女だってあばれたい気持はあるのよね。私、あんたをむしろ見直しちゃった。どうかしら、私にもまわしを締めさせてみてよ」

富子は、恵美子がこんなに簡単に肯定するとは思わなかった。そして、何とも言えないほど嬉しくなってきた。

富子は、早速タンスを開けて、もう一本のまわしを手を取った。そして「さあ、これを締めて上げよう」と言った。恵美子は

「その前に、あんたのお相撲姿見たいな」と言った。富子は、もう何の抵抗も感じなかった。そして、寝巻をサッと脱ぎ捨て、すくくと立った。

恵美子は、ホーツと溜息をついた。富子の姿は、かねて感じているものとは全くちがったものだった。圧倒されるような、ふるいってきたような、そんな感じだった。「ようし！ 私も締めるんだ」



恵美子は、負けたような気持にもなって、そう言った。

洋服を脱ぎ、富子に背を向けて素裸で立った時、恵美子は、嬉しいようなこわいような複雑な気持になったが、黙って、富子に締め

てくれという手つきをした。

締めこんでいった。

富子よりも肉付きの良い、恵美子の肉体には、まわしは良く締まった。また、その白い肌には紺のまわしが良く映えて美しかった。結び終わった時、富子は、「さあ、よし！」と恵美子の見事に発達した臀部をポンとはいたした。恵美子は何も言わなかった。

M.U

二人は、向き合って立った。

二人の気持は、何かに感動した時のようにだんだんと高まってきた。

富子は、恵美子のふくらと盛り上る肩のあたりの筋肉や、良く発達した乳のあたりを見ているうちに、恵美子は、富子のたくましく見える小麦色の肌が目に入るうちに、お互いに敵愾心のようなものと、一方でふるいつきたくなるようなものが高ぶってくるのを感じていた。

二人の腰はいつのまにか低くなり両足がじりじりと広げられていた。

最初に恵美子が、

「いくわよ！」

と言った。富子は

「ようし！」

と答え、二人は同時にがっぷりと組みついた。

お互いに、まわしはすぐ許し合い、二人は左四つになった。ピッタリと相手の肩にアゴをつけ、まわしをぐいと引き合った。

相手の肌から、何かがピンと伝わり、自分の身体をぐーんと走るのを感じた。富子は、フト「女同志なのに、なぜかしら？」と思った。恵美子も同じことを思った。だが二人とも次の瞬間には、「生まれて初めて素肌をつければ、女同志だってこんな感じを持つんだろう」と思い直していた。

それより、まわしが肌にじりじりと食いこんでいく感触の方が快よかった。

二人の眼には、お互い、相手のきりっと結んだ三ツ目が、凛々しく見えた。まわしをぐいと引くと、結び目が引きしまっていった。何とも言えなかった。

二人の肌には、見るまに汗が吹き出してきた。富子には、左四つに差している左腕に、相手の腋の下の汗が、ひとしずく流れるのを感じた。

富子は、もっともっと汗みどろになってみたいと思った。そして

「さあ！ 押し合おうか、恵美子！」

と言うと、ひととき強く恵美子の両まわしを引くと、ぐっと寄って出た。

恵美子は

「負けるもんか！」

と答えると、寄り返した。

しかし、富子の部屋は、相撲を思い切って取るのには狭すぎた。六畳だった上、タンスや鏡台が置いてあったので、富子が、ぐいぐい寄っていくと、恵美子の足は、鏡台に当たってしまった。

「危ないわ。鏡台をこわしちゃうわよ、富ちゃん」

「ほんとだ。どうするね？」

二人は、組んだまま考えた。

「そうだ、右側に、あんたの右の方に壁があるでしょう。あそこに背中を押しつけられた方が負けにしようよ」

富子が名案を出した。

壁に押しつけるまで、というのは、しかし大変だった。先ず相手を壁の方に向けなければならぬし、壁に向けたとしても、相手は足で壁を支えて、押し返しやすくなるからだ。

二人は、必死になってもみ合った。

最初、恵美子の方が壁に背を向けてしまっ

たが、足を壁に突っ張って、富子を押し返してきた。富子がそれを、もう一度寄り返そうとすると、恵美子はすごい力で富子を吊り上げ、打っちゃうようにして向きを変え、ぐんぐん押ししてきた。

富子の身体は浮いていたので、忽ち尻が壁についてしまった。そこを恵美子は必死に攻めた。頭を富子の胸に立て、上手を取っていた右手を放すと、富子のアゴに当て、猛烈に押し上げてきた。

富子の頭はじりじりと押し上げられた。二人の全身は汗まみれになった。吹き出した汗は眼にしみ、上気して赤く染まった肌を流れ落ちた。

しかし富子は、汗のことも忘れていた。背中を壁につけられまいと、頭と尻で必死に支えた。そして何とか体勢を挽回しようとして、右手を相手の上手から放すと、ぐっと伸ばして、相手の立禪をつかみ、思い切り引いた。低く落されている相手の腰を、そうして浮かそうと思ったのだ。

自分でも信じられないような力が出たように思った。果して、恵美子の腰は浮いた。彼女は、股に食いこんだまわしが余程痛かったのだろう。思わず「痛いっ！」と叫ぶと、ア

ゴに当てていた腕の力を抜いてしまった。富子は、右上手をとり直すと、すかさず寄り返して危機を脱した。

二人の体勢は、再び四つ相撲にもどった。

恵美子は

「ひどいな、富子は！ 痛かったわよ」と言った。

「ごめんね」

富子は謝ったが、フト、そこで、汗みどろになった身体の感触に気づいた。何か、たまらない魅力を感じた。彼女は、汗のベツトリといった頬を、相手の首筋に押しつけた。

二人の力は、限界に来ていた。しかし、二人とも、自分が先に「やめよう」と言うのはシラクだった。

お互いに引き合ったまわしが、乳のところまでズレ上ってしまったが、どちらも力をゆるめなかった。

富子の胸に、敵愾心がムラムラと湧き上ってきた。「クソ！ 負けるもんか！」……そう思った瞬間、ぐっと吊り身に出た。

恵美子は隙をつかれ、完全に身体を浮かしてしまった。しかし、けんめいにこらえ、左足を外掛けに富子の右足に掛けようとした。だが、富子は許さず、そのまま吊り上げて、

恵美子を壁に完全に押しつけてしまった。

恵美子の乳は、富子の肩に押し上げられて上を向いた。「参った」と言うまでは絶対力をゆるめないぞ、と、富子は押しつけ続けた。彼女の全身の筋肉がふるふるえ、恵美子が必死で引くまわしが、見えなくなる程尻に食いこんだ。



M.U

恵美子の完全な負けだった。

二人は、畳の上に、ドッと折り重なるようにして倒れた。しばらくは声も出なかった。

二人はハーハーと肩で息をしていた。

しかし、二人の心は満ち足りていた。「とうとうやった!」、富子は嬉しかった。恵美子も、最後の吊りで、完全にまわ

しの前が解けてしまっていたが、そんなことは気にもならない程、充足感で一杯だった。

だんだんと息使いもおさまってきた二人は並んで仰向けに寝ころんだ。

恵美子が、汗で額にへばりついた髪をかき上げながら言った。

「富ちゃん、私たち、やったわねえ」

「うん、とうとうやった!」

富子は手を伸ばして、恵美子の腕をしっかりと握った。

フト壁を見ると、恵美子の背中の汗が、じっとりとしみていた。

「ホラ、恵美ちゃん見てごらん。あんなに汗が」

と、富子は指さした。

「まあ! 私たち、あんなに汗みどろになるまで取っ組んだんだね」

恵美子は感動したように言った。

そして

「私、こんなことをするなんて思ったこともなかったけど……女だって、お相撲取れば、こんなに気持がいいんだよね。富ちゃんに感謝するわ。でも、見直したなあ、富ちゃん強いんだね」

と言った。富子は、その言葉がとても嬉しかった。そして恵美子の腕を強く握りしめると

「私、こんなことしたいって考えるの、自分一人かと思ってた。だから黙ってたんだけど。恵美ちゃんに、早く打ち明ければ良かったのに、ごめんね」

と言った。

「いいのよ。……まさか、誰だって、自分からそう簡単に言えやしないわ。やってみなきゃわからないもんね」

恵美子のその言葉に、富子は、カラッとした明るさを感じて嬉しかった。

「この次は久美子を誘おうよ」

「私も今、そう思ってた」

「久美ちゃんは、強そうだから、三人でやったら面白いだろうな」

「うん。……気が強いしね……」

二人は、いつの間にか、そのままの姿で眠ってしまっていた。

4

二人は、あくる日、さっそく久美子に打ち明けた。

勤めが終え、富子のアパートに誘われた久美子は、二人の話を聞いてすっかり驚いてしまった。

「まあ！」

と言ったきり、しばらくはあいた口がふさがらなかった。

彼女は、前の晩、恵美子が寮に帰って来なかった時、非常に心配した。「まさか、恋人と外泊するような、そんなことは絶対しない恵美子だから」とは思っていたが、どこへ行ったかわからなかったので、夜中で起きていた。

出勤してみると、恵美子は来ていた。ホッとした久美子が尋ねると、「ゆうべは、恋人にあんまりしゃくにさわったので富ちゃんのところへ泊まったの」と言い、「あとでゆっ

くり話すわ」と言っていた。

だから、彼女は、そのことで「一緒に富ちゃんのアパートに行こう」と誘われたのだとばかり思っていた。

ところが、話の本題は「久美ちゃんもお相撲取ってみたい」ということだとは夢にも思わなかった。そして彼女には「女が相撲を取る」などと言うことは、とうてい考え及ばないことだった。

久美子は、三人のうちでは一番背も高く一六三センチもあり、体重も五八キロあって、見かけは女丈夫に見えたが、性格は富子よりも大人しく「女らしさ」が、その身边には溢れていた。身を飾ったり言葉を必要以上に気にしたりする、そんな意識のしかたではなかったが、彼女は、いつも「女らしく」ということを意識していた。

しばらくして久美子は口を開いた。

「私、驚いたわ。二人で……お相撲なんか取っていたの。……とっても私には考えられなかった。だって女だもん。……どうしてそんなことになっちゃったの？」

二人は、答えられなかった。

富子は、「久美ちゃんに話していいかどうか、ゆうべも考えないでもなかったのに。や

っぱり話さなければ良かった」と思った。また、「お相撲なんか取った私は、やっぱりおかしいのかな？」と悩んだ。そんな富子を、久美子は、「あんた、大人しく見えるのに、お相撲なんかどうしてやるの？」というような眼をして見つめた。そうでなかったかも知れなかったが、富子にはそう見えて、顔が赤くなるのを覚えた。

恵美子はしかし、少し違っていた。彼女は自分で相撲を取ってみて、「女が相撲取ったって、少しもおかしくないのに」と思うようになっていた。「女も男もおんなじ人間じゃないか。どうして悪いの。久美子は、今はあんなこと言っているけど、必らずやらせてみせるから」と、一種の反感のようなものを久美子に感じていた。

沈黙が続いたが、恵美子がそれを破った。「久美子ちゃんは、ワーツと叫んでみたり、あばれて見たいと思うことはない？」
久美子は答えた。

「そりゃああるわ。だけど、お相撲なんて男のスポーツをやってみようなんて、そんなことが考えられないのよ」

「私ね。無理にあんたにお相撲取れって言ってるんじゃないのよ。親友のあんたにかくし

ておけなかったのよ」

「うん、それはわかる。打明け合う友だちって本当にいいと思う。打明けられたのもとても嬉しいわ」

「それでね。あばれたいっていう気持があるって言ったけど、私は、それがたまたまお相撲にあらわれただけだと思っているのよ。富ちゃんだって同じだと思う」

富子はホッとした。やっぱり恵美子は積極的でいいなあと思った。

恵美子は続けた。

「私は、あばれたいっていうのは人間の本能のような気がする。久美ちゃんも同んなじよ。だって、去年の夏のこと思い出してごらん。富ちゃんが、海の中であなたに組みついていった時、恵美ちゃんは負けずに組みついて、取っ組み合いをしたじゃない。あの時は、私の方が驚いたわよ」

「うん……それは。あの時は夢中だったもん。水の中に沈められそうになって……」

「それなら、ヤメテ！ って言えば良かったと思うな。久美ちゃんの中にも、男みたいにあばれたい気持があるんだと思う。私たちがうべお相撲取った時、とにかく夢中だった。ほかに何も考えなかったのよ。夢中だった、

ただそれだけなのよ」

久美子は、富子との、水の中の取っ組み合いを思い出していた。

汀で水をかけ合っていた時だった。二人はワイワイはしゃぎながらだんだんと近寄っていったが、富子がまともに正面を向いた時、久美子はうまくねらって、富子の顔に思い切り水をひっかけた。

すると、富子の顔が泣き出しそうにゆがみものも言わずに組みついてきたのだった。

富子はぶつかってきて、右腕で久美子の首を巻いた。彼女も相手の首を巻いて、しばらく揉み合っていたが、富子の足がからんできたのか、押し倒されたのかわからなかったが組んだまま久美子は水の中に仰向けに倒されてしまった。そのあとは、水の中で上になり下になりしていたことしか覚えがなかった。

友達が集まってきて、何かはやし立てている声が聞こえて、我に帰った。富子もそうだった。二人は助け合って立ち上ると、お互いにニコッと笑った。

『そういえばあの時、私、取っ組み合ったことを何とも思っていなかったわ』
と富子は思った。むしろ、何かスカッとし

た気持だった。

『そうか！ 私も二人と同じようにできるかも知れないんだな』

久美子は顔を上げて二人を見た。富子は、何か心配そうな顔をしていた。

「私、考えてみたけど、恵美ちゃんの言う通りかも知れない。裸になってぶつかるっていうのが、まだ私には抵抗があるんだけど、お相撲取る気持っていうのは、バスケットの試合の時と同んなじかもね。みんなでぶつかるか、それとも二人でぶつかるかだけの違いみたい。いいわ！ 思い切ってぶつかってみようかな」

久美子は続けた。

「でも、まわしまで締めてとなると、やっぱり……。そうだ、先ず二人のお相撲見せてよ。それから考えてもいいでしょう」

恵美子は

「良かった！」

と思わず手を叩いて喜んだ。富子はもっと嬉しかった。

「私、あんまり久美ちゃんが否定するから自分が変わってんのかなあ、とまた思っちゃった。さっきも話したように、ずいぶん悩んでたんだもの。でも、とにかく理くつじゃない

●よ

と言って笑った。そして「冷汗かいて損しちゃったな」と思った。

恵美子は

「それなら、ともかく見てなさいよ」

と富子を促がした。

富子は立ち上って、窓のカーテンとドアの鍵をしめた。そして「今の場合、私の方が先にまわしを締めるべきだな、久美子に対しても、大人しい私の方が先に裸になった方がいい」と思い、さっさと洋服を脱ぎ、恵美子に手伝うように言って、まわしを締めにかかった。

久美子は、富子がまわしを締める姿に眼を見張っていた。「自分より大人しく見えたのに、すごいなあ、凛々しいところがあつたんだな」と思った。

恵美子が続いて締めこんだ。

富子は、覚悟はしていたが、女性がそうして真裸になり、その上まわしを締めていく姿を見て、やっぱり驚いた。何とも複雑な気持ちだった。

しかし、しばらく眺めているうちに、その気持は羨やましさに変わっていった。

まわしをきりっと締め終った二人は、だまっただま、がっぷりと組んだ。久美子は「右四つだな」と思った。テレビの相撲を見ていてその位のことにはわかった。

恵美子の張り切っていた筋肉がちょっと弛んだと思うと

「ちょっと待って富ちゃん、久美ちゃんにルールを教えてなかった」

と恵美子は言い、壁に押しつけた方が勝ちという二人のルールを教えた。

「さあ、いいわよ富子」

二人の身体にみるみる力が入り、部屋の隅に坐っていた久美子の目の前で、富子の太モの筋肉が盛り上がり、グリグリと動いた。

久美子の気持は昂ぶってきた。

二人は、相手の身体を浮かせようと、ほとんど同時に吊りに出た。太モがブルンとふるえ、お互いの胸と腹がピッタリとついた。やや背の低い恵美子は、頭を富子のアゴの下に当て、ぐいぐいまわしを引き上げた。

富子の身体の向きがじりじりと壁の方へかわり始めた。富子は必死でこらえたが、爪先が浮き、完全に壁に背を向けてしまった。

久美子は、富子の、今まで一度も見なかったくないきびしい表情を見て、完全に彼女を見

直していた。また、同性の想像もしたことがない相撲を見て、すっかり昂奮しているのが自分にもわかった。

富子はまわしをつかみ直し、ぐんぐん引いた。恵美子のまわしの三ツ目が、パラッと解けた。富子は、右足を外掛けに掛けようとしたが、それが却っていけなかった。その隙を見て恵美子が一挙に寄り立てた。

久美子は思わず

「恵美ちゃんの勝ち！」

と叫んでいた。彼女の身体はカッカとしていた。そして、自分だけが取り残されているような気持がしてたまらなくなっていた。

恵美子がまわしを締め直しながら

「どう？久美ちゃん」

と言ってニコツとした。

久美子は

「まるで、自分が取っているような気がしたわ。何とも言えないわね。私も、やるわ」と言った。

富子が

「良かった！それなら今度は久美ちゃんと私が取ろうよ」

と、久美子を促がした。ところが、まわしが男もののしか残っていないことに気付いて

ハタと困った。しかし「構うもんか、私があるを締めちゃえばいいんだ」と決心して、タンスの奥からそれを取り出し、自分のまわしをスルスルと解いた。

「今、こっちがぐずぐずして、富子の決心を変えたらいけない」と思ったことも、彼女をそうさせた。

「私が締めていたのでいいかしら。人のもので気持ち悪いかも知れないけど、こっちの方は固くて締めにくいのよ」

と久美子を見たが、久美子はそのまわしを手を取って

「構わないわ」と言った。

富子は、高校生用のまわしを、なつかしうに見ながら、「久しぶりだなあ、これ」とつぶやき、恵美子の手を借りて締めこんだ。

デニムのまわしに慣れている肌には、それはやはり固く感じた。

いよいよ、久美子が締める番だった。

やはり恥かしいという気持ちが強く働いて彼女はしばらくためらっていたが、それを振り切るように、勢よく洋服を脱いだ。

富子の汗がしみこんでいたまわしを前に当てた時、ちょっと抵抗を感じたが、さっと股

をくぐらせると、ぐいぐいと締めていった。

三人の中でも一番身体のいい久美子のまわし姿は立派だった。

腰まわりも大きかったので、富子のまわしは少し短か目で、三ツ目に結んだ時ほとんど余裕が無かったが、却って、ぎゅっと締めた結び目は凛々しく見えた。

恵美子が

「久美ちゃんの身体、たくましいねえ、バスケットしてる時もそう思うけど、こうしてみると、いよいよ立派ね」と言った。

「久美ちゃん。鏡に写してごらんよ」

と富子は言った。

「恥かしいから、いいわよ」

と言いながら、富子が部屋の中へ持ち出した鏡に久美子は自分の身体を写してみるのだった。

「久美ちゃんの身長幾らだったっけ？」

恵美子が尋ねると

「一六三でしょう。体重は五八だったと思うけど」

と富子が答えた。

「そうしたら、私が一五六で五三。富子が一六〇で五四だから、やっぱり久美子が一番

だ。鍛えたら、すごく強くなるだろうなあ」

恵美子が言った。

久美子は黙っていたが、何だか誇らしいような気持ちになり、恥かしさはいつのまにか無くなって、一刻も早く富子に武者振りについていきたくなった。そして

「さあ！ 取ろうか！」

と向き直った。

富子は、久美子のそうした大きな変化に一瞬、たじろぐほどの驚きを感じたが、それはすぐに、相手をぎゅうぎゅう壁に押しつけたくなるような気持ちに変わった。

二人は低く構え、ダツとぶつかった。

右四つになっていた。富子は相手の身体に圧倒されそうになった。力も強かった。だが彼女は、「自分が先にやりだしたことだ」と思うと、絶対に負けられないという気持ちで頭が一杯になった。

富子は、やや背が低いことを逆用して、相手の肩に当たっていたアゴをぐいと引いて頭を下げる。久美子の前陣をつかんで思い切り引き上げた。そして僅かに久美子の身体が浮きかけたところをねらって左で上手投げを打ち、一気に向きを変え、すかさず寄っていった。だが、久美子は壁に足がつくと、それ以上

にはびくとも動かなかった。

相手の前襟がじりじりとずれ上って、力が入らないと見た富子は、右手を前襟から離し、久美子の乳に当てて必死に押し上げた。それでも久美子はびくともしなかった。

だが、乳をつかむようにして押し上げられた久美子の表情は、痛みで歪んできた。しばらくそれに耐えていたが、たまらなくなった彼女は、左手をまわしから離し、乳をつかんでいる相手の腕を、下から思い切りパツとふり払った。

二人の腕がはげしく争ったが、久美子は強引に左を差して双差しになった。

富子は、右上手をつかみ直しにかかったが思い直し、左手もまわしから離して、両手を相手のアゴに当て、あらん限りの力で押し上げた。

久美子の頭は後ろにのけぞった。だが彼女はまわしをつかんだ手を放して相手の腕をアゴから外そうとはせず、双差しのまま一層強く富子のまわしを引いた。

男ものの富子のまわしは、ぎりぎり肌に食いこんだ。だが富子はがんばり抜いた。遂に久美子の背中は壁に押しつけられてしまった。

「久美子の負け！」

と恵美子の声がかかると、二人はヘタヘタとそこに坐りこんでしまった。

「やったわね、とうとう！」

恵美子が久美子の肩を叩いた。

「うん、やった！ 私にもできたわ」

と久美子は、嬉しさに溢れた眼で恵美子を見返し

「何とも言えないなあ、お相撲って。富ちゃん、良く教えてくれたわね」

と富子の手を握った。

「でも富ちゃんて、強いわねえ。三人のうちで一番大人しいと思っていたのに。私、驚いた。尤も、女らしくなんて思ってた私もお相撲取っちゃったんだけど」

三人は、声を立てて笑った。

x x x

フト、久美子は、恵美子の内股から血がにじんでいるのに気付いた。

「富ちゃん、どうしたのこれ？ そうか、私があんまり引っ張ったから、肌が擦り切れたんだわ、ごめんね」

久美子はやさしかった。

「あんたのせいじゃないのよ。まわしがいけないのよ。固いもん」

富子は、痛みは感じていたが、まさか肌がすりむけているとは思わなかった。まわしを解き、薬を塗りながら

「やっぱり、こんな時、女だったなって思うわね。小さい時から男のようにしてれば大丈夫かもしれないけど」

と言った。

恵美子は

「仕方ないさ。そんなこと言っちゃって。女は、女物のまわしを作ればいいのよ」

三人は、笑って、久美子のまわしを仕立てることにし、恵美子と久美子の取組みをやってから、布地を買いに行くことにした。

二十分ほど休んでから、久美子と恵美子は対戦した。

二人の相撲は、あっけなく傑作だった。

動きの鈍い久美子は、すばやく動きまわる恵美子に対して力を入れる暇がなく、右に左に身体をゆすられていくうち、壁に足をつけてしまっていたが、恵美子は、余り低く組み過ぎていたため、上から久美子にのしかかられて、パツタリと畳に押しつぶされてしまっていた。

x x x

三人の次の夜、久美子のまわしをみんなで

仕立てた。

久美子は、黒を選んでいた。一番色の白い久美子には、黒のまわしがよく似合った。

恵美子の提案で、三人は、一晚に同じ相手と三回づつ取組むことにし、星もつけていくことにした。余り毎晩のように出て、寮でおかしく思われては、と、週に二回にし、退勤後すぐ富子の部屋に集まり、十時の門限までには必らず帰ることに決めた。一日目の成績は、富子が四勝、久美子が二勝、恵美子は僅か二勝だった。

ハッスルした恵美子は、次の日には四勝した。

回を重ねるに従って、当然のことながら三人の相撲は、動きの大きいものになっていっ

臨時増刊号「花と蛇」

売切れました。

好評を得ておりました臨時増刊号、団鬼六作「花と蛇」は、先般来お蔭さまで売切れとなりました。この分の再版の予定はございませんので、お申込みにならないで下さい。続篇と一括して単行本化の時は、改めてお知らせします。

た。ルールは同じで、ほかに狭い部屋でのルールを考えられなかった。だが、負けそうになると、思わず相手を投げ倒したくなり、それをこらえるのは大変な努力だった。

数えて七回目の日のこと。

星数は、合計で、富子が二十三、久美子が二十二、恵美子が十八となっていた。

大きく引き離されていた恵美子の、その夜のがんばりは目を見張るほどだった。

久美子と取組んでいる時、恵美子は、我を忘れて大きな上手投げを打ってしまった。さすがの久美子もこらえ切れず、もんどり打って壁際に倒れてしまった。

その音は大きかった。ドスーンと言うと、隣の夫婦ものが驚く声が聞こえ、戸を叩く音がして

「どうしたんですか？」

と、外から大声で尋ねた。

三人は

「何でもありません」

と答えたものの、どうしてよいかわからなかった。

× × ×

そのことがあってから、三人は部屋を探し歩いた。

鉄筋アパートの、八畳と六畳と炊事場のついた広い部屋がひと月目に見つかった。久美子と恵美子は寮を引き払って、三人一緒に住むことにした。

もう、大分秋も更けて肌寒い日が続いたが三人は、それからは思い切った相撲が取れるようになった。

隣は、それぞれ夜の勤めで、早くて十二時にしか帰らなかったもので、何の気兼ねも要らなかつた。

八畳間には家具は何も置かず、相撲を取る時は、まわりにフトンを敷きつめた。まわしも夫々二本づつ作った。

そうして思い切って取組めるようになると動きの早い恵美子が、意外と強く、引き落されたり、はたきこまれたりして、久美子と富子を悩ました。だが、動きの鈍かった久美子も、だんだんと動作がきびきびとしてきた。

富子もぐんぐん力をつけてきた。

三人の相撲は、きびしい寒さの冬の夜も続けられていった。

☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆

☆ 女腹切譚 ☆

「花散る里」

を読んで

兵 頭 庫 一



△本誌四月号所載 瀬川 泰子 作 「花散る里」 読後感▽

閨秀作家瀬川泰子女史の七十三枚（奇俱誌としては十三頁）に亘る大作で、蓋しこの種の作品としては、その長さに於ては嚆矢の物と云えよう。これまで女史は時代物に数々の名作を奇俱誌上に発表されているが、今回は珍らしく現代物で、しかも実話の形式を取っ

ている点感銘深いものがある。

我日本国にとっては、恐らくこれほど大きな出来事は、なかったろうという大東亜戦争が、無惨な敗北に終ってまもない頃に必然的に発生した、二女性の切腹心中の物語で、民子、美恵子という旧制女学校の同窓の間に花

と咲いた同性愛が切腹という形式を取って昇華したという設定である。

会津若松市の東山温泉という土地では維新史で有名な十有九名の白虎隊士の飯盛山上での集団自決の潔さを記念して今でも温泉芸妓に依る白虎隊ショーが行われているらしいが、民子と美恵子の二人はこの白一色装束の若武者姿の芸妓が着衣の上から腹一文字に掻切つて仆れる悲愴美を目にしてひどく感動してから、民子が土産物の竹光で素腹を切るプレーに興味を持ち、美恵子も亦これに同調したという事になっている。

ここで私は一つの疑問にぶつかった。というのは、この二人の女性は結果に於ては切腹に依る同性心中を企てたのだが、その中間行程に於て切腹マニアになっていたということである。切腹マニアが切腹自殺を企てることにはさして不思議がることもなからうが、只の一回白虎隊ショーを見ただけで果して若い女性が直ぐ切腹マニアになる可能性があったか、どうかという疑問なのである。

この疑問はさておいて、若くして愛する夫を亡くした民子が、処女的美恵子にその愛情のはけ口を求め、戦災で天涯孤独となった傷心の美恵子が民子の求めに応じて、この二人

の間に同性愛が芽生えたことは無理からぬ話である。男同志の同性愛では眉目秀麗な優男が女性の役割を果たすが、この場合は性に未経験な美恵子が受身の立場になったことも肯かれる。

余談ではあるが、私も曾て旧制中学の高学年時代に一人の親友が出来て、上級学校への受験勉強と一緒にしたことがある。女同志の関係は知る由もないが、男同志の関係でも親

☆男性モデル募集☆

○左記要項にて「男性モデル」を募集いたします。○年令、職業、身長、体重、好む傾向、連絡場所（局留は不可）など記載の上お申込み下さい。○当方の求めているものは、禪美、男性ヌード、同性対象Mモデル、異性対象Mモデル、女装扮装などです。○口絵には掲載しません。○分譲写真として可能の方。○日曜祭日を除く昼間（10時から20時）出演可能の方。○時間の都合上、京阪神奈良和歌山在住の方を望みます。○お申込次第、撮影の日時場所など、お知らせします。

（編集部）

友の間では好きで好きでたまらない感情が交流するもので、私はその親友と三疊位の小屋に冬の火鉢を囲んで勉強もそのけに色んな話に耽って時の経つのも忘れる位だった。従って別れるのがとても辛らくて若し許されるなら同じ部屋に寝起きを共にしたいと思った。若しそうなれば当然男同志でも肉体との触れ合いに依る交歓がなされたに違いない。こうした私の経験から考える時、女同志の民子、美恵子の二人が一つ床に肌と肌とを触れ合い唇を重ねて交歓した同性愛の感情はよく理解出来る。

然し乍ら分らないのは二人が切腹プレーに興ずるに至った経緯である。切腹マニアが特に女性に多いということは、マゾヒズムの関係から理解出来るけれど、単なる同性愛の関係にあってマゾヒズムの傾向が見られない二人が、只の一回白虎隊ショーを見ただけで、直ぐ切腹マニアとなったという設定には、どうしても合点がいかないのである。

というのは、マニアとなる女性の多くは、その少女期に何かの機会に自分の腹部に軽い刺激を受けることがあって、或る特異な感覚を生じるとその年頃に有りがちな燃えるような好奇心も手伝って、今度は自分から腹部に

軽い刺激を加えてその味を試し、それが何となく心持の良い感覚であることを知ると、何回も同じ実験を繰返すようになり、遂にはそれを無上の快感と感ずるようになって抜きさしならぬマゾヒストになってしまうものらしい。こうした自虐症的な性癖のある少女が、たまたま白虎隊ショーのような刺激的な物を見た場合は、特異な亢奮状態となって、そのショーの醸し出す悲愴感、その少女を陶醉境に誘入れて、切腹という行為にマゾヒズムの極致を開眼させられるに至る。

女性の切腹マニアは多くはこのような経過をたどって誕生するものと私は考えている。以上のような理由で民子、美恵子の二人の女性、突然変異的に一夜にして単なる同性愛から転じて切腹マニアになったという設定には一寸抵抗を感じるのであるが、一旦そのような傾向を生じたならば最早や単純な同性愛ではなく、死を賭する程濃密な関係にまで進展したとするのも無理からぬ事である。況んや民子が気の進まぬ縁談を強いられて義理の柵から断り切れずに死を思い、一方天涯孤独の美恵子が熱愛する民子との離別を悲んで同じく死を思うに至った経緯も理解を妨げる何物も存在しない。更に又夜毎毎の衾の中

で白虎隊ショーまがいのプレーで無上の快楽を共にしている二人が、最期を飾るに切腹に依る相対死を企てたとしても当然すぎるほど当然の成行である。

近松の心中物では大抵男が愛する女を刺し殺してから、その跡を追うことになっているように、女性を開眼させられている民子が男役となって処女の美恵子に介添切腹をさせてから、その跡を追おうとした設定も決して無理ではない。この設定は女史が曾て「悲風磨上原」という作品で、手負いの年下の女武者に年上の女武者が介添切腹をさせてから、自分も切腹するという筋書にしたのに良く似ている。あの場合は女性とは云え戦に出た武者であるから、この場合とは異って立派な最期を遂げているが、やはり女同志の同性愛的なリビドが巧みに描写されている。

今回の「花散る里」に於ては実話となっているので、切腹の模様も芝居でやる判官の切腹のような形式的な美しさはなく、切腹がいかに凄惨な物かが如実に表現されている。即ち切腹に陶醉し得る美恵子ではあったが、実際民子に依って腹を割かれると獣のように咆哮しうしろから抑えている民子をはね飛ばそうとする程苦悶して、民子をしてその切腹を

半にして断念させ、あわてて美恵子の左乳下への止めを刺さざるを得なくさせたのである。幸いにして民子の一突きが首尾良く美恵子の心の臓を貫くことが出来たから良かったものの若し急所を外れでもしたら、更に惨澹たる光景を呈したに違いない。

一方、美恵子の後を追わんとして美事に切腹をしようとした民子は、引廻しも終らぬ中に失神して未遂に終ってしまっている。勝気な民子にしてこの態だから弱気な美恵子ならば尚更であろう。やはり昔の武家の娘のように平時から母親から厳しい躰を受け女子の嗜として白装束に着替え端座の両膝を扱帯で縛った上で懐剣逆手に左乳房の下又は咽喉を突きして立派な自害を遂げる修練を積んだ者でなければ、見事な最期を遂げるという事は蓋し至難の業ではあるまいか。況んや切腹となれば一文字に掻切って体力・気力の大半を傾けて後の止めであるから、余程気丈夫な女子でない限り介錯なしの切腹は完遂し得ないであろう。

哀れを止めたのは美恵子であってサド気味の民子の手で切腹のお仕置を受けたような結果に了っている。その心情を察すれば、花散る里に独り淋しく眠る美恵子の墓参をした女

史の双眸に一掬の涙が宿ったであろう。

興味あることには、その後の民子が孤閨の中で思いを愛する美恵子の傍に寄せる時は、やるせなくヘヤピンを抜いて秘かに腹部加虐に耽って心の空虚をうずめているということである。あわれにも切なく私の共感を呼ぶ話である。

最後にこの文のたった一枚の挿画のことに言及すると、白無垢の前を開いて両膝を白い扱帯で縛った垂れ髪的美女が、右手に白布で刀身を巻いた短刀を逆手に持って今や下腹にその鋭い切先を突き立てようとしている姿が横描きにされている。このお姫様のような女性の画はいかにも私好みの物ではあるが、現代の二人の女性の中の一人が後から前の女性に介添切腹をさせている姿態とは似ても似つかぬ物で、本文の挿画としてはふさわしくない。もっと原文に忠実な挿画はこの場合は両膝を帯で縛って端座し胸腹を大きく寛げた美恵子の姿を正面向に、その後には左手は美恵子の豊かに盛り上った左の乳房を掴み、右手の刺身庖丁で介添切腹をさせている民子の姿を配した構図で凄惨の中に悲愴美を漂した美しい絵を載せて貰いたかったと思う。

(終)

辞典漫歩

山口 広



いか。後手、高手小手に麻縄でひしひしと括っても、これは表現の間違いではないと思われる。但しこれは旧制中学校でいやいや受けた国語の授業の程度しか国語の知識のない私の勝手な解釈である。

しかし現実には『縛る』はひしひし、『括る』はゆるゆると、感ずるのは私だけであらうか。

綱Ⅱ植物繊維または針金などを長くより合わせたもの。物を結び、またはつなぐに用いる。

縄Ⅱ藁、麻または棕櫚の毛など、植物の繊維を細長く綯い、物を結びまたは縛るなどに用いる。

紐Ⅱ①物を束ね、または結びつなぐ太い糸。または細い布、革など。

打紐Ⅱ二筋以上の糸で組んだ紐。組紐。

以上通常使われる縛る材料であるが、より合わせたものは綱であり、特に材料が藁や棕櫚のものを縄と云うらしい事がわかる。麻で作る時は綱も縄も両方使われている。絹は植物繊維ではないので、より合わせたものでも紐と云われている様である。又より合わせてあっても、糸の太い程度のもは紐と呼ばれるらしい。布や革は全部紐と呼ばれるのである。

本誌の創作、体験、手記などに表れる表現には殆んどが『縛る』とあり、『括る』と云う言葉は非常に少ない。私たちの受ける感じの『縛る』は縄や綱、紐など強い材料で、恐らくは後手に堅くしぼる様な感じを受け、

『括る』は柔いあまり強くない材料で、例えば手拭とか布切れで前手を弛くくると云う光景を想像させる。私たちは案外に日本語の正しい意味を知らないことが多いので、普通に使われる辞書のうちでは詳しいと云われて

いる『広辞苑』をくって見た。広辞苑は約二千四百頁もある大冊であり、隅から隅まで目を通すような本でもない。ついでに興味にかけられてばらばらとめくって見た。

縛るⅡ①紐、縄などでゆわえる。②物に堅く結びつける。③縄などでからみましめる。捕縛する。

括るⅡ⑤束縛する。不自由にする。

これを見ると、縛るのは括るの中に含まれるその限りでは同じだと考えても良いのではな

ろう。真田紐の様に組んだ、或は編んだものは、より合わせた綱に対して紐と総称されている。

最近、合成繊維で綱が作られている。ナイロンやテリレンなどであるが、メーカーは綱と紐を厳密に区別している。より合わせた綱をロープと呼び、組み合わせた紐をコードと呼んでいる。私たち素人はコードと聞くと直感的に被覆電線の事を想像しがちである。

本誌のグラビヤを飾っていたモデル嬢たちを縛っていたのは殆んどが綱であり、紐が使われていた例は非常に少なかった。

緊縛という言葉は本誌の創作ではなくて、ちゃんと出ている。本誌から取入れたのか？
緊縛Ⅱきびしくしぼること。

広辞苑は昔のことがかなり詳しく説明してある。私の感違ひも随分多い。

高手Ⅱ臂から肩までの間の称。たかうで。
小手Ⅱ手先。腕先。肘と手首の間。
とあるが、高手小手は詳しい。

高手小手Ⅱ人を後手にして脰を開け、頸から縄をかけて嚴重に縛り上げること。

これによると、高手小手とは首縄が必要であり、首縄がなければ、たとえ高手と小手を縛っても緊縛ではあるが高手小手ではないらしい。

また、『高手小手首縄』などと書くのは重複した表現かも知れない。こうした緊縛に関するものには、次の様なものがある。

猿轡Ⅱ声を立てさせぬため、口にかませて後頭部にくくりつけるもの。手拭などを用いる。

手拭などの、などの中には時にはパンティやストッキング等が入ると想像するのは楽しい事である。

猿轡Ⅱ猿をしぼるように、ぐるぐるまきに縛ること。

猿はそんなにぐるぐるまきにしないで縛っておけないのか。辻村氏なら要所を極く短い紐で縛るだけで完全に拘束されるのではなかろうか。

足枷Ⅱ二枚の厚板に、足首大の半円孔を穿ち、前後から合わせて罪人の足にはめて、自由を束縛する刑具。

「てかせ」は「てかし」を見よとある。手枷ではなかった。

手桎、手械てかしⅡ罪人などの手にはめて自由にならぬようにしておく刑具。てかせ。手錠。

手錠Ⅱ① 手に加える刑具。犯人などの両手をつかねてはめ、錠をおろして手のはたらかぬようにしておく鉄製の腕輪。てがね。て

ぐさり。② 江戸時代に庶人に科した閏刑。罪の軽重によって三十日、五十日、百日と定め、百日のものは隔日、五十日以下のものは五日毎にその錠を検した。

足錠というのは出ていない。拘束衣、箆口具も、拘束、箆口があるが出ていない。

手錠の②のように、江戸時代の刑罰はかなりくわしい。

責めⅡ① 責めること。くるしめること。せっかん。かしやく。

仕置Ⅱ③ 懲戒。みせしめのため、こらすこと。④ 江戸時代、法にてらして処分すること。処罰。刑罰。成敗。

石抱Ⅱ江戸時代の拷問法。数本の三角稜の木を並べた上に犯罪容疑者を坐らせ、膝の上に重い石材を積んで自白を強要したこと。いしだかせ。そろばんせめ。

拷問Ⅱ罪の有無、真否がまだ明らかでない者に肉体苦を与えて自白を強いること。いためぎんみ。拷責。

海老責Ⅱ江戸時代の拷問の一。罪人にあぐらをかせ、伏せて両手を後に縛し体の上部を前に屈ませ、両足を首に接しさせるもの。

木馬Ⅱ② 昔の拷問の具。木造の馬の背の形のものに、罪人を跨がらせて、両足に石を

吊下げるもの。

本誌の読者ならよく御存じの、駿河責や鉄砲責、逆海老責なども見当らない。まして乳房責や浣腸責も勿論ない。

私が驚いたのは「縛首」である。西部劇などの感化で縛首とは綱で首を吊して殺す刑罰であらうと思っていた。ところが、

縛首Ⅱ戦国時代の刑罰。麻縄で罪人の両手を後方で縛り、その首を前方に引出して斬ること。

とある。つまり縛ったうえで打首にすることだとなっていて見れば、それまでであるが、ハンキングだと思ふ様では、まだ若いのであろう。

本誌にしばしば見かけ、私自身とくに衝動を感じる股間縛なども見つからない。

この中で、海老責だけが絵入りであった。残念な事に、責められている正面図が、いかにも悪人面をした男であったので、がっかりする。

なるほど、正しい古来の日本語とは、こんなものかとあらためて感心させられる。今までに描いていたイメージとは少し違うようである。しかし私は本誌の読者として、大判から脱皮して現在の判になった頃から、十数年にわたり本誌に培われたイメージは、独特のものとしてこわしたくはない。そしてこうつけ加えたい。

股間縛Ⅱ女を高手小手に縛し、胸をくびる縄にて股間を縦に縛る羞恥責の一。

さらに同じ「むち」にしても、答と鞭があり、答の方は棒状の竹または篠などの弾力のある杖であり、鞭は太い革紐のような長いむちを表すことが察しられる。答打つのは自分の乗馬か手もとに坐らせた罪人であり、鞭打つのは何頭立てかの馬車を曳く馬が、遠くに立つ柱に縛りつけた罪人であると想像するのが妥当であらう。

以上見て来た様に、日本語は案外正確に把握されておらず二十万語も集められた大きな辞書の中にも、私たちが見聞きする言葉が洩れていたり全く「ことば」は難かしい。たんなんに読めば、もっと面白い言葉もあるのではないだろうか。

(終)

新発足 懸賞／告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、事実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさ、求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

贗作・悩ましのサディズム

△森山美歌夫人に関する小品▽

(最終回)

芳野眉美



W 月曜日午前零時

午前零時、バー『黒いダイス』の前に、シルバークレーのオールズモービルカトラスが止まっていた。

暗い歩道を寄り添った和服と背広の男女が歩いてくる。

その足が車の横で止まった。二人の前にドアが開けられたのだ。

運転台の男は振り向きもしない。深夜というのにサングラスをかけている。

「どうぞ」

その時、うしろで声があった。

『黒いダイス』のドアが開いて、ミッドナイトブルーのスーツに着がえたチーフバーテンの山城義秋が立っていた。

カトラスのまっ赤な室内に三人がおさまると、

「飲みますか」

と義秋が美歌夫人にいった。

「それとも、ドライブ」

「ドライブは朝になったら、お願いするわ」

「GBに行こう」

義秋が運転台の男にいった。

「GB」

「ゲイバーですよ」

「英子はいるのかい」

と古城真が義秋にきいた。

「いる」

「こいつ、英子というゲイボーイを生きうめにしたことがあるのですよ」

「生きうめ」

「うそですよ」

「アパートの床下にね」

「床下」

「うそですよ」

「床板をはがして首かせにしたそうですよ」

「首かせ」

「うそですよ」

「こいつは悪党ですよ」

「悪党というのは、運転している奴のことをいうんだ」

と義秋がいった。

「この車だって、ちょっと拝借してきたんだから」

「拝借」

「ことわってきましたよ」

と運転台の男がいった。

「うそつけ」

「カトラスはパワーがあるんで一度運転してみたかったんだ」

「何をするかわかったものじゃない」

「そういえば、ライフルで撃たれたことがあったな」

と古城真がいった。

「いつか新聞で読んだことがある」

「狙撃されたのは子爵だ」

と男がいった。

「俺じゃない」

「同じことだ」

と義秋がいった。

「子爵って、どなた」

と美歌夫人がきいた。

「山城のことですよ」

「山城さんが子爵」

「戦前まではね」

「紹介して下さらないの、子爵さま」

と美歌夫人が義秋にいった。

「運転している方」

「失礼、忘れていました。さつきは私用でバーにいませんでしたか」

「カトラスを借りに行ったんだ」

「バーテンの真、古城と同じ名前なのが気に入らない」

「勝手なことをいっていやがる」

「一本松という妙な姓で」

「おかしい名前が悪かったね」

「奴の先祖様が、明治維新のときにつけた新しい姓で」

「一本松の木の下に家があったんでね」

「山城さんは」

「俺ですか」

「禄高わずか一万石、どこの藩だか知らねえけど、藩主様の嫡だそうだ」

と古城真が解説した。

「世が世であれば大名だ」

「うそつけ」

「子爵、GBに着いたよ」

一本松真がいった。

ゲイバー「GB」はネオンが消え、ドアはシャッターが下ろされていた。時間外営業はうるさい。

義秋は横の人が一人かろうじて通れるぐらゐの細い露地に入って行った。バーに裏口があるらしい。

ガラス戸を開けると、

「ああら、子爵さま」

と奇妙な声が返って来た。

「二階、借りるよ」

「どうぞ」

バーに入らず、そのまま階段を上がっている。

六畳の部屋の壁には、和服や柄もののブラウスがかかり、三面鏡に日本人形と、まったく女の部屋である。ただ、本物の女の部屋と違うのは、化粧品と男の体臭がミックスしていることだろう。

「少し窓を開けろよ」

義秋がビールを運んで来た和服のゲイボーイにいった。

「輪投げしましょう」

イブニングドレスのゲイボーイが一本松真にいった。背中がざっくり割れた露出的なドレスである。

「輪投げ」

「入らなかつたら、一枚ずつ服を脱ぐのよ」

「脱ぐほど下着を着ているのか」

「あら、レディにむかって失礼ね」

「レディか、野郎の裸を見たってしょうがねえよ」

「裸になりたいなら、見せてくわよ、英子」と義秋がそのレディにいった。

「御婦人の前で」

「そうさ」

「はすかしいわ」

「はすかしがるがらかい」

「同性に見られるのって、とてもはすかしい

のよ」

「何いっていやがる」

「いいわ」

テーブルに置かれた札がきいたらしい。英子は隣室の唐紙を開けた。

「見せてあげる」

三畳の部屋にダブルベッドが置かれてあった。赤い洋掛けも悩ましい。

四人に背中をむけたままドレスを脱ぎ、前を見せずベッドに横になった英子は、知らない人が見たら男とは気がつかないだろう。

ブロンドに染めた髪も魅力的な、ウェストが細くくびれお尻も可愛いハイティーンの女の子が寝ているとしか思えない。

男につきものの毛が無いのは、脱毛に注意しているからだろう。本物の女より女らしい肉体がそこにあった。

シンプルなブラウスにストラップスのゲイボーイが階段を上がって来て、四人に軽く会釈した。彼が男役をやるらしい。ボーイッシュなヘアスタイルも中性の匂いがする。

「子爵さまのお好み」

と美歌夫人がいった。

「別に」

義秋は美歌夫人にビールをすすめた。

「酒の肴ですよ」

「優雅でしょう」

と一本松真がベッドの二人を見つめている美歌夫人にいった。

「優雅ね」

「俺はあなたが抱きたくなった」

「真」

「いいのよ、子爵さま」

美歌夫人が、にっこりして一本松真にいった。

「いいわ、あとで抱かせてあげるわ」

X 月曜日午前二時

ホテルの部屋の壁を背にして、三人の男が突っ立っていた。三人とも何も着ていない。ただ、はなれて立っている美歌夫人だけは和服のままであった。

「いいわね」

と美歌夫人が三人にいった。

「輪は六つあるわ。二回ずつ投げて、輪を受け止めた人にわたくしを抱かせてあげるわ」

美歌夫人はケイパー「GB」から輪投げの輪だけを借りて来たらしい。

「入っても、落としたら失格」

女一人に、男三人でホテルに入るのは勇氣

のいることだ。このホテルは義秋の顔なじみらしい。女中に、

「麻雀だ」

とすましていった。

女一人に男二人とか、その逆だったりするときは、義秋は女中に鼻をこすって見せるだけである。

花札だというのだろう。

輪を持ったまま、美歌夫人はしばらく、三人の裸の男を見つめていた。ゲイボーイの女になろうという努力のあとを見たあとでは、三人とも男の強烈な体臭が感じられる。

一本松真のかなり分厚い胸にへばりついて、いる十字架のネックレスを見たとき、美歌夫人はこの小悪党を責めてみたいと思った。

そして、シミひとつない女のような肌を持つている義秋を憎らしいと思った。一本松真の眼はきらきらして美歌夫人をにらんでいるが、義秋の顔には変化がなかった。

バーで客を応待しているときにも、ゲイボーイの実演を見ているときも、ポーカーフェイスで、今も、つまらなそうな顔をして突っ立っている。

一人、古城真だけが元気がないのは、美歌夫人と激戦してから、まだ二時間とたってい

ないのだから無理はない。それに、土曜日の昼から責められ続きでは、疲労が濃いのも当然であった。

「少し興奮させてあげる」

美歌夫人はバンドを取るとひと振りした。

「うしろをお向き」

「何かするんですか」

と一本松真がきいた。この質問は間が抜けている。

「あなたがたの背中を打つの」

「打つて、その皮のバンドで」

「そうよ」

「痛いな」

「そりや、痛いわ」

「傷がつく」

「——でしようね」

「でしようね、って、ひどいな」

「すぐ消えるわよ」

「消えないと困る」

「困るような顔をしてないわ」

「してるつもりですけどね」

「わたくしを抱きたくないの」

「そりや、抱きたいですよ」

「それなら、打たせなさい」

「何かいってくれよ、子爵」

「なぐられましょう」

「いつもこれだ」

「声をたてたら、承知しないわよ」

美歌夫人が皮バンドを振り上げた。

三人の男の背中に、ななめ右に、一筋の赤い線が走った。

それから目茶苦茶だった。

声をたてるなど、命令するほうが無理である。

三人の男の背中から、どっと汗が吹きだした。

三人の男を集めておいて、かたはしから鞭をふるう遊びに美歌夫人は熱中した。

三人の男たちの背中に造られたみみず腫れに汗がたまり、それが光線に映えてまるで虹のように輝いていた。

美歌夫人は男たちの肌にはられた虹をゆっくり鑑賞する。

そのあとでおこなわれた輪投げゲームに、全員が失格したのは、鞭に打たれることに全精力を放出してしまったからだろう。

「だめねえ」

汗とみみず腫れの男たちに美歌夫人はいった。

「汗を流してからにしましょう」

浴室で、美歌夫人は、一本松真を四つ這いにさせて台のかわりにしている。

古城真には背中を流させ、

「子爵さま、足を洗って下さる」

義秋の前に足を突き出した。

美歌夫人が湯を浴びるたびに、四つ這いの一本松真は悲鳴をあげた。傷がしみるのだらう。

湯舟につかったあと、美歌夫人は三人に湯舟に入るようにいい、一人ずつ湯の中にもぐるように命じた。

「お湯の中に、……しちゃったの」

頭から湯舟の湯をかぶった三人に、美歌夫人は笑いながらいった。

「味がよかったでしょう」

一本松真があわててシャワーを浴び、古城真は知っていますよという顔をしてあがり、義秋は平気な顔をして、湯舟で顔を洗っていた。

湯上り後に再開された輪投げゲームは、三人を興奮させた。何故なら、輪を投げる美歌夫人も、今度は何も着てなかったからだ。そして、美歌夫人は三人に豊満な裸身をあらわしたのである。

顔を古城真に、胸を義秋に、足を一本松真

に、という風に。

このわりあては順に繰り上がって繰り返された。

「男だって一人より二人、二人より三人と、多いほうがいいのは、快楽の倫理の常識ですわ」

という美歌夫人の手紙の一節を古城真は思い出した。

「わたくしは彩色の絵を持っていますの。数人の男が一人の女性のあらゆる性感帯を、一人一人専門に受け持って献身しているという凄いのなの」

「どのような堅固な貴婦人でも、男数人に愛されたら、精神なんていくらえらそうなことをいったって、すぐしびれてきて、ほかほか燃えて、あとは……」

あとは……

古城真は美歌夫人に、犬の首輪をはめられて、裸で檻の中に閉じ込められているSを思った。

美歌夫人は檻の中のSを忘れていたのではないかと思った。いつ檻からだしてやるのだろう。気になった。

「快楽に限度があるかしら」

これは美歌夫人の手紙の一節である。

美歌夫人は、男たちを責めるのを、

「遊戯」

といい

「耽美主義的サディズム」

と書いている。

Y 檻の中のS

裸のまま檻の中に閉められるとは思ってもいなかった。

女王様は何を考えたすかわかったものではない。もっとも、それが女王様の最高の魅力なのだが。

女王様の責めのアイデアは天才的だ。

犬の首輪と檻、シンプルなコンポジションではないか。

檻に閉じこめたまま、女王様は外出してしまっただが、明日、会社に遅れるようなことはあるまい。公的な社会生活と、私的な遊びとは区別する約束だった。明朝になれば、檻の戸は開けられるだろう。

そう思っても、暗い部屋の中で、檻に一人でうずくまっているのは、いくらそれがプレイだといきかせても、あまり気持のいいものではない。不安がないといったらうそになる。やはり、こわい。おそろしい。

火事になったら、このまま焼け死んでしま
うのではないかと、考えたこともないくだら
ない不安がつきまとう。そういえば、生命保
険の受け取り人も、女王様を指定してあるの
だ。

女王様はそれを知っている。

奴隷は、雄犬は、死んでも女王様の肥料に
ならなければならない。

私を檻の中に閉じ込めてから、女王様は思
い出したように古城君にいった。

「あら、古城さんのお約束を忘れていたわ」

「約束」

「わたくしの……を飲みたいでしょう」

「ああ」

「いま、飲む」

「それなら、シャンパングラスでいただきま
した」

「間接でなく、直接によ」

「それは、まだ」

「SとMに飲ませておいて、古城さんに飲ま
せないなんて不公平ね」

そういうと、女王様は檻の上に乗った。

「坐って」

と古城君に命令した。

「口を開けて」

「もっと近くに寄って」

私は檻の中からその光景を見つめていた。

「よくて」

しぶきが私の顔にもかかった。

古城君は頭から濡れそぼった。

アリサを起こして、三人で外出したのは、

それからである。

檻の中の私を見て、アリサは笑って笑って
顔がくしゃくしゃになった。

「おじさまったら」

「もうベッドなんかいらさないわ」

「よくお似合よ」

私はどんな顔をしていたのだろう。はずか
しそうにしていたのか、困ったような顔をし
ていたのか、それとも、快楽に陶酔していた
のだろうか。自分でもよくわからない。

いろいろな感情がミックスした複雑な感情
であることは間違いない。

女王様の寝室で、カーテンレールに吊るさ
れている古城君を紹介されたのが、初対面だ
った。そのとき、女王様がすでに古城君の肉
体を奪ってしまったのではないかという気が
した。妙な直感がそこにあった。

そして、みどりの部屋で集団遊戯が行なわ
れて、女王様が古城君にたわむれたあと始末

をされたとき、本能的に、はじめの直感があ
たっていると思った。

三度目は、私の眼の前である。

今頃、ホテルの一室で、女王様はある美し
いまっ白な裸身に、古城君を抱いているかも
しれない。

おかしい関係だと思う。

愛人を他人の男に抱かせる。ジェラシイは
わかないのか。なんともないのか。それで平
気なのか。

かるい快感を感じる。それが私のSEXな
のだ。

そう、これが、私のSEX。

これが結婚生活なら、どうだろうか。女王
様と奴隷の関係は、こうも長く続いただろ
うか。こうも刺激的に発展しただろうか。

愛人関係だから、成功しているのではない
か。

いや、妻を縛ったフォトを、公刊紙に発表
している男もいる。

また、夫にかしづく忠実な奴隷だと告白し
ている女もいる。

SMに関係なく、宗教的に、夫のいいなり
になっている女の話をきいたことがある。夫
のいいなりに、SMになれる女、何事も献身

的に夫につくす女、こんな女が現実にいるの
だろうか。理想ではないか。

そういえば、妻妾同居している例を知って
いた。妾と同衾している夫を妻は横で見てい
たという。そして、その逆もある。

日常生活と、SMプレイは区別したほうが
いいのか。自分のSEXとSMプレイは一致
しなければならぬことは知っている。が、
しかし、その方法がまだ混同してよくわから
ない。

静かだ。無気味だ。

尿意だけはがまんしなければならぬ。絨
氈を汚すことは出来ない。失禁したら、それ
こそ女王様の責めがおそろしい。

身体を傷つけることは注意しているが、快

楽に限度は無い。

「女王様と離れることが出来て。どっちだか
はつきりいつてごらん」

いいえ、女王様、私は女王様のとりこで
す。女王様から離れることなど考えたことも
ありません。

女王様がいなくては、私の人生は考えられ
ません。女王様、どうか私を見捨てないで下
さい。

女王様の甘美な快楽のメロデーで、私を包
んで下さい。

女王様に、私の一生を捧げます。

女王様、もっともっと私を責めて下さい。

檻の中で私を飼って下さい。

Z 月曜日午前六時

オールズモービルカトラスは、国際空港に
むかつて高速道路を飛ばしていた。

美歌夫人が命じた朝のドライブであった。
美歌夫人は空港の入口で車を下り、責めぬ
いたばかりの三人の青年と別れている。

空港のロビーで、美歌夫人が出迎えたのは
ブリテッシュスタイルに身を包んだシックな
中年の紳士だった。

誰かあの貞淑な夫人が魔性を秘めていると
思うだろうか。

美歌夫人はしとやかに夫に連れ添い、背中
の傷を気にしながらカトラスにもたれている
三人の青年の前を、ゆっくりと通り過ぎてい
った。

(完)

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビヤ印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円(送共) 略号「限二」

「モデル」

長野 良子——大塚

啓子——五月亜紀子——新井マリ子

限定版第一号として、グラビヤ写真集の
「美しき縛しめ」第三集、略号(美3)を
本年二月に刊行しましたところ、多数のマ
ニヤの方々のお求めを頂き有難うございま

した。嘗て十数年前コロタイプ印刷の女体
緊縛写真アルバムとして刊行いたしました
「美しき縛しめ」第一集、第二集は忽ちの
うちに売切れとなり、今では見ることさえ

かなわぬ稀少な文献となっています。

皆様のご熱心な要望によりまして、ここ
に限定版グラビヤ写真集刊行に踏み切りま
した。本誌グラビヤ口絵では種々な制約の
ため、思いきった企画編集を遂行できませ
んのので、直接販売の限定版写真集によって
ファンの方々のご期待に応えたいと思いま
す。

今度、限定版第二号として、前集とは、
いささか趣を変えた緊縛女体アルバムを作
製いたしました。若々しい豊満な肉体を誇
る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美し
さを最高度に発揮した縛られポーズの大胆

奔放のかずかずを、画面いっぱい、所狭ましと活躍させました。特に迫力を増すためとグラビヤ印刷の効果をフルに運用するためにも、写真面を大きくしました。加うるに清楚にして純情なフェイスと初々しい肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

緊縛フォト・アルバム

限定版第二号 豊満と清楚 内容

△美しき縛しめ (第四集) V

(一)、豊満をくびる……………大塚 啓子
胸と胴をくびった縄にもだえる女体。
(二)、グラマーの縄目……………長野 良子
むくむくと肥った肌に縄目も埋もれて。
(三)、豊満裸身の陶醉……………長野 良子
うっとりとした表情は、縄にか紐にか？
(四)、鼻をいためつける……………長野 良子
指にて鼻を弄ばれて恍惚とした表情。
(五)、荒縄の緊縛感……………大塚 啓子
とげとげとした荒縄が柔肌を痛める。
(六)、黒と白の対照……………大塚 啓子
白い晒と荒縄のケバとのコントラスト。
(七)、責めに疲れて……………大塚 啓子
責め抜かれてぐったりとなった女体。
(八)、戯れの縄プレイ……………新井マリ子
アパートの一室での緊縛プレイの一コマ。
(九)、襲いくる魔手……………新井マリ子
恐怖のまざなし、黒い触手が迫ってくる。

(一)、首締め縛り……………新井マリ子
のびやかな肢体が痊れんする首絞め姿態。
(二)、猿ぐつわ非情……………新井マリ子
開股しばかりの上に非情の猿ぐつわが……
(三)、開股棒しばかり……………新井マリ子
革の口枷が頬もくびれよと締めつける。
(四)、絶叫のワンカット……………大塚 啓子
縄目が埋もれるような凄惨な緊縛感の味。
(五)、痛さに喘ぐ……………大塚 啓子
責められて急所の痛さに思わず呻めく。
(六)、首縄と足縄……………大塚 啓子
首に掛った縄と足の縄が女体を変えろ。
(七)、縄に狂う……………大塚 啓子
悶えても拘束された麗身は逸脱しない。
(八)、足首の縄目……………大塚 啓子
反りかえった足の指が縄目に可愛い。
(九)、縄による姿態の変転……………大塚 啓子
二筋の縄がかくも美しい姿態を現すか。
(一〇)、緊縛美の誇示……………長野 良子
誇らかな成熟の匂を十分に撒きちらす。
(一一)、美しき肢足……………長野 良子
投げ出された肉づきのよい肢、足、脚。
(一二)、全裸緊縛の羞ら……………長野 良子
はにかんで見せた美しい全身のポーズ。
(一三)、両手吊りと足首……………五月亜紀子
両手両足を縛られて一本棒に晒らされる。
(一四)、けがされぬもの……………五月亜紀子
清純な美しさが、この全身に漂っている。
(一五)、猿ぐつわを噛ます……………大塚 啓子
晒の白布が鼻も口も一緒に掩って締める。
(一六)、荒縄への誘致……………大塚 啓子
荒縄をさばいて次第に捉らわれる蝶々。
(一七)、噛まされた猿轡……………大塚 啓子
珍しく完全に噛まされた息苦しい猿轡。
(一八)、猿ぐつわと縄……………大塚 啓子
厳しい縄目と息づまる猿ぐつわの烈しさ。

(一)、緊縛女体操縦法……………大塚 啓子
縛りに変化をつけられた女体はどこへ。
(二)、くねらす豊満女体……………大塚 啓子
瑞々しくて柔らかな女体が縄にくねった。
(三)、棒責めの序曲……………新井マリ子
両足首の両端に縛られて、さて、
(四)、答打ちのポーズ……………新井マリ子
さあ、打って、とながし目の艶なこと。
(五)、素晴らしき美身……………長野 良子
輝くような美しい裸身もあらわに……
(六)、ポリウムを縛る……………長野 良子
縄をはねかえす素晴らしい女体の重量感。
(七)、むくれた双丘……………長野 良子
情容赦のない縄は巨大な乳房をへしゃぐ。
(八)、開股しばかりの表情……………大塚 啓子
開股しばかりになった女の顔のアップ。
(九)、開股しばかりの全貌……………大塚 啓子
両肢を開けて縛り上げられたポーズ。
(一〇)、伸ばされた足の表情……………大塚 啓子
ぴんと一直線に伸ばして縛られた脚。
(一一)、開股ざらしの表情……………大塚 啓子
放置されて全身の痛さに耐えるシーン。
(一二)、強盗侵入の構想……………新井マリ子
押し入った強盗は女を縛って転した。
(一三)、緊縛女体の鑑賞……………新井マリ子
自宅侵入した賊の目的は美体の鑑賞？
(一四)、炊事場の嗜虐場面……………新井マリ子
台所で縛られていたぶられるシーン。
(一五)、美しきトルソ……………大塚 啓子
胸、臍、ウェストが縄によって捕捉。
(一六)、逞ましき臀部……………大塚 啓子
くねらせた見事な臀部を捉えたレンズ。
(一七)、全裸の背面緊縛美……………大塚 啓子
後手高小手の美しさは素晴らしい。
(一八)、ビニール・コード……………大塚 啓子
柔肌を喰いちぎるようにくびるコード。

〔SM〕より見た世界史シリーズ

悲運の皇女

アンナ・コムネナ

(後)

黒淵 嬰 一



五、

大管領に対する皇女の挑戦は狂的だった。今回はアンナの方が焦っていた。凡ゆる機会にギスカルドを怒らせて死を受けようとする如くに見えた。大管領が前役より寛大なのはその立場が前回よりも良い事を意味したから皇女にとって望ましい事ではなかった。大管領はアンナの挑戦を受けると返報に縄を与えた。時々は一晩中拘束された姿勢で放置される事もあった。併しそれ以上の罰は加えられなかった。

アンナとマリヤの管理は概ねボヘモンドに託された。この騎士的な男は乏しい物資の中から栄養物や薬物を皇女に届けたが、厳寒に向って燃料も事欠く状態が続き、病める皇女を温め得るのは、マリヤの体温だけという夜が幾度もあった。アンナは次第に衰弱して行った。

春になるとギスカルドは侵略を再開した。ケファロニア島を奪取し、コリント湾沿岸を荒掠した。此の航海に於てアンナとマリヤは手足を縛られてギスカルドの旗艦の舳に縛りつけられ、裝飾に供された。制海権がノルマン側にあったから、大管領はエピルス山地越えの困難な作戦を回避し、海路エーゲ海に入

〔前篇の梗概〕

東ローマ帝国の開祖アレクシウス一世の皇女アンナ・コムネナは、父皇帝に従って各地に転戦、あるときは敵の手に捕えられて城壁上に晒されたり、乱戦の中に捕虜となったりしたが、常に勇氣と雄弁とを武器に陣頭にあつて戦った。戦い終り病む身を病床に呻吟するアンナに獻身的に仕える侍女マリヤがあつた。しかし落着いて病を癒やす暇はなかった。帝国と大管領の艦隊は激突し乗艦の沈没のためアンナは三度捕われの身となつた。

って直接に東帝国の首府を衝かんとした。ギリシヤ近海の掠奪は物資集積の爲だった。武器を持って抵抗したギリシヤ人が捕虜になるとギスカルドは直ちにこれを去勢した。以前のように無差別な虐殺はしなかったが考へ方によっては一層残酷な処刑だった。

「アレクシウスに宦官を供給してやるのだ。」ギスカルドはそう言つて陰惨に笑つた。

或る交戦の後でギスカルドは祝宴を開き、手中に入つたギリシヤ人達には例の如く去勢手術を宣告した。アンナとマリヤは何時もの通り椅子の背板を後ろで抱く形に縛られ、無

理に酒を飲まされた。鞭や棍棒には耐え抜く皇女も此の刑罰には辟易した。併し屈伏はしなかつた。胃の中が空になる程の症状を起す事も、二日間頭痛と眩暈で苦悶する事も承知で受けて立ち哀願だけは決してしなかつた。

此の席に一人の狂乱女が^{マイナデス}闖入して攪乱した。宮門を押し入ろうとしたこの女は衛兵に抑えられ、太綱で上半身を縛られた。それでも髪を振乱し、両頬を血で染めて嗷鳴つていた。罵倒されている当人はギスカルドだった。彼が惨虐・横暴・強奪者と呼ばれるのは当然だし、彼自身平然と聞き流した。併し女の迫害者と言われると黙つて居られなくなった。

「余は未だ女を殺した事は勿論、傷つけた事も無いぞ。」

大管領は狂乱女を引据えて詰問した。但しアンナとマリヤは椅子の上からマントを被せて縄目を巧妙に隠された。そしてアンナは此の席で始めて、然も生涯に只一度、彼女よりも優れた雄弁女と会う事になった。

「私達女が何よりも大切に愛撫し、子孫を得る希望を託して夫に預け、歓喜の源泉として尊重する一物を奪い去るのが女に対する傷害でないと言えますか。食物や家畜の掠奪なら回復出来る故我慢します。併し取返しのか

ない暴行には忍耐出来ません。全能の神よ、大管領の上に嚴罰を下し給え。」

ノルマン人は憐憫の一片も持っていないが、此の野卑な雄弁には手離しで喝采を送つた。

「大管領様。此の者は雄弁の褒賞を授けられる資格があると存じますが。」

アンナは上目遣いに言つて片目を閉じた。縛られている態は素振りにも見せなかつた。ギスカルドは狂乱女の夫を含む捕虜の釈放を命じ、狂乱女の縛を解かせ動産も返還した。狂乱女は今度は歓喜で狂乱し、先ずアンナを次にギスカルドを拝礼して踊り狂つた。

「全能の神よ。寛仁大度な大管領に祝福を垂れ給え。」

併しギスカルドは、彼女の夫が又武器を持つて捕虜になったら何うするかと念を押すのを忘れなかつた。

「そのような場合の爲に夫等は手足を二本宛眼と耳を一對、鼻も一つ持つて居り、男自身の物ですから失うても不服はございません。只女の共有財産だけは御容赦下さいませ。」

狂乱女は夫と手をつないで意気揚々と去つて行つた。それを見送ってからアンナは猛烈に絡んだ。

「大管領様は、女を害しないと仰言いましたね。私も女ですよ。」

これを皮切りとして、毒舌の濁流が注がれた。酒が入っていた為でもあるが、女の一言で捕虜も動産も失った甘さや平常の惨虐を完膚無き迄に罵倒した。そして皇女は望み通り罰を受け、終夜縛られる刑を宣告された。但し同じ刑にマリヤも巻添えを喰った。

而してその晩、誰もが予想しなかった事態が起った。ギスカルドは過度の飲酒か又は皇女から挑発された憤怒の為にか血管が破裂した。ギスカルドの急死は生前の彼が如何に偉大であったかを証明した。ノルマンの大軍は主将の死が知れた瞬間に解体した。帝国側に帰順する者や元の賊に戻る者が続出し、領主達はイタリヤの本領を保全する為に慌てて逃亡した。コルフ島に居たボヘモンドも例外ではなかった。大管領の妻は夫の棺を守って帰る途中難船沈没した。後でギスカルドの棺と称するものが海から拾われてヴェヌシヤに葬られた。後継者で次男のロージャールは未だ若くて父の遺領を治め得ず、見る間に一介のアプリヤ管領に零落した。ボヘモンドは相当な人物だったが彼の父はタレンツムの領主としてしか過していなかった。此の小領土で

は何をする事も出来なかった。アソクシウス帝は思い設けぬ救済に狂喜した。

未だ救われないのは、アンナとマリヤだった。ノルマン軍が如何に狼狽散乱したかは、東帝国の皇女が陣中に置き忘れられた事でも解る。処がアンナもマリヤも昨晚の罰の結果として嚴重に縛られていた。ケファロニアの陣中には獄舎の設備が無かったから吹き曝しの厩舎が利用された。アンナは手を後ろに縛られた上、馬繋ぎの木柱に立姿の儘縛りつけられた。皇女が今夜こそ帝国に殉ずる名誉が得られると信じた位に厳しい拘束が加えられていた。胸・腹・膝・足首の他、頸も柱に固縛され、呼吸は圧迫されていたが、衰弱と疲労に加え酒の影響もあって昏睡していた。マリヤは皇女の身近に侍らされたが、手足を背中の一箇所に纏めて縛られ、藁束の上に寝かされた上、船舶用の碇に鎖で繋がれていた。アンナは何も気附かなかったが、夜中眠れなかったマリヤは夜半の騒動と早期の静寂から異状な空気を感じとった。錨を曳き擦れる範圍で外を窺うと人馬の影もなく、物音一つしない陣営は森閑と静まっている。併し真相を知る由もないマリヤは軍の大部分が何かの理由で一時的に移動したのだと考えた。

それにしても監視が遠退いた今、万一縛が解けるなら脱出の機会は有る。マリヤは大努力を払い、重い錨を曳いてアンナの足下に逼り寄った。そして全身で皇女の脚を揺すって醒ませようとした。アンナは途端に多量の血を吐いた。マリヤは皇女の脚の部分だけでも縄を噛み切ろうとしたが、彼女自身、地面から体を上げる事が出来ない。目的を果せなかった。マリヤの唇が破れ、縄が血で染っても膝から上の方は如何とも出来なかった。

二日後、ノルマン軍の退去を知った貧民の一家が、無人の陣営に遺棄された物資を拾得する希望を以て現れ、皇女達を発見した。その中に、皇女の口添えで助かった狂乱女とその夫の夫婦が居た。彼等は大恩人の顔を覚えていたが素性は知らなかった。皇女は柱に縛られた儘失神し、侍女は皇女の下半身だけでも温めようとしたのか、膝立ちの姿勢で寄りかかった形で意識を失っていた。

× × ×

一〇八五年から数年間に亘るアンナに就いては何も解らない。アンナ日記は皇帝や重臣に就いて詳述しているが、著者自身の事は殆んど何も書いてないのだから想像するより他にない。アンナの雄弁を必要とする大事件は

一〇九四年迄起きなかったから、東帝国の臣民と皇帝の一家は比較的静穏な十年を送ったのだろう。そしてアンナは多分その前半期間を静養していたものと思われる。救出された当時のアンナは重態だったから回復に数年を要したに違いないし、アレクシウス帝は皇冠と国家を救ってくれた愛娘の為に全帝国の資源を蕩尽しても惜しまない医療を与えたと考へたい。

マリヤは一〇九〇年に、二十二才で結婚した。相手はアンナの兄イサクだった。当時としては晩婚で、多分此の五年間がアンナの療養期間であり、マリヤは此の期間中皇女に付き添い、看護に献身し、アンナの全快を確認して始めて結婚したが、功として皇族に嫁がせられたという推定が成立し得る。

尚十一世紀の東ローマ帝国にはマリヤという名の有名な婦人が少くとも八人居る。コムネヌス朝第三代皇帝マヌエルの後妻もマリヤだし、マヌエルと前妻の間に出来た娘もマリヤである。本篇のマリヤはアレクシウス帝の次男イサク（アイザック）に嫁し、後にイサクがトレビゾンドの君主になった時に皇子となるべきヨハネス及びアンドロニクスの二子を生んだ。弟のアンドロニクスは小説

以上の冒険で有名であり、筆者も機会があれば彼の伝記を書いてみたい誘惑を覚える。

而して筆者の推定が正しいなら、皇女アンナは十九才から二十四才迄、即ち「女性」を形成且つ發揮するに最も重要な期間を、性生活不能な重症で病床にあり、更には十五才から十九才に至る間も一年間の闘病生活と使命旅行及び通算二十箇月以上の監禁の交錯だった。要するに最も多感なるべき期間も亦失われたのだ。此の反動が史上に顕然たる皇女の文才を練磨する一方、公言を憚るような性格も成長を促進されたのではあるまいか。

六

本篇は真正の中世史を記述しなければならぬにも拘らず、筆の赴くに任せて相当に暴走した。何しろ種本になる西欧側の記録はロマンの原流騎士物語で、怪物や超人が無制限に登場するし、東方世界の女性観察者が残した記述は太平記以上の誇大形容詞を濫用しているのだから、これを足して二で割ったら脱線する他はない。故に筆者が可能性の範囲で皇女アンナの私生活を覗き見したとしても怪犯罪法に触れないで済むだろう。

アンナは病臥中もマリヤを離さなかった。コルフ島での監禁中にマリヤが皇女の体温

保持の目的で捧げた抱擁は、少女同志の微妙な感触を通して純粹清浄な愛情へと高翔していったらしい。併しマリヤは余りにも軽くなった瘦身のアンナを抱いては秘かに涙を流した。侍女は皇女に命ぜられ、安眠と静養を名目として余人を遠ざけ、寝室に鍵をかけた。最初は寝台上に横臥した俣手を後に廻し、軽く手首を縛る事から再開された。眠れない夜も、皇女は縛られると安眠に入った。マリヤはアンナの熟睡を確認してから紐を解き、姿勢を正常な上向きに直し、掛布で掩って退いた。此の状態が一年。

上半身を起して坐れるようになると、肩や脇の下に紐を通して手首を吊ったり足を揃えて縛ったりした。但し胸部を圧迫するような施縄は絶対に回避されたし、縛る材料も弾力ある絹紐に限られた。尚皇女は如何なる場合にも裸体にはならなかった。尤も体格は自信のある筈も無かったし、病中は一層酷かったから自分で見るのも幻滅だったろう。そして絹の夜着を通して擦れる感触は恐らく性に合ったものと思われる。皇女の地位では発汗すれば何時でも寝汗と称して夜着を取換える事が出来た。充血や圧迫を起さない程度の被虐は、皇女に軽い興奮と、それに由来する循環

促進及び代謝効果を起させたのだろうか。此の一見不健康な秘戯が行われながら、アンナの症状は漸次快方に向っていた。

三年目には立って室内を歩けるようになった。病室の大理石柱や寝台の脚が新に遊戯の補助手段に加えられた。アンナはマリヤに支えられて歩いた。但し通常の肩を貸す要領でなく、手を縛り、両脇下を後方から支える方法で行われた。これは保持者にとって重労働となるものだが、皇女と侍女は充分な体力差と体重差があったから可能になった。皇女は手を動かせない状態にされた上で食事を一口宛与えられるのを殊に喜んだ。椅子の背板を利用する拘束は姿勢を正す効果があるので最も愛用された。中世の學術不振時代だったが、東帝国に居住するアラビヤやユダヤの医師は肺患の療養に静養と栄養が必要な事を経験的に知っていた。アレクシウス帝は愛娘の為に、ミユンステルのチーズやサルマチャの蜂蜜やガデスの海鰻や東洋産の仙薬を取寄せた。

四年目には戸外に出られるようになった。皇女の保養地に指定されたプロポンティスプロポンティスの小島は、往昔コンスタンティノポリスを建設する際に大理石を切出した所で、その跡と廃

材を利用して離宮が建てられていた。同じ島にアルテミスの小祠が廢墟となつて残り、神像も倒れた儘認められた。此の島は冬季も温暖で樹木に富み、海岸は砂浜が美しかった。離宮は小さいが豪華で、前は入江、後は山に面していた。山頂の小亭に立てば欧亚兩大陸が眺められた。歐洲側には皇女に新鮮な肉類を供給する目的でキクレ鶏を飼う場所が新設され、若干の漁舟も皇女用の指定を受けた。鳥飼や漁夫は特別手当の他、時には皇女自身から愛嬌ある謝辞を賜る事を無上の光榮とした。離宮には後年有名になった哲学者のエウゲニウスや既に引退した修辭学者のゲンティウスも居たし、一隊の宦官と侍女が交替制で常置されていた。気分の良い朝は皇女は絹張りの轎こしに載せられて山上の小亭に運ばれた。山に上る道は見通しのよい石段一筋だけだった。アンナは、何時もマリヤ一人を残して他を退け、夕方迎えの来る迄遊戯を楽しんだ。寄りかかれる幹や、体重を支えるに足る枝、体を挟み得る岩の割目等、要するに展望の効く自然のすべてが皇女の陶醉境に利用された。アンナは縄尻を把られて林中を散策するのが好んだ。施縄が不完全で解けたり緩んだりすると、罰としてマリヤが縛られる事になっていた。

たからマリヤの「技術」も上達した。但し經濟法則ではないが「最少苦痛で完全な施縄」は難しいものである。皇女は縛られた儘で林中を逃げ隠れ、マリヤに捜させて喜んだ。夕方になって出迎えの宦官が間近に来てアンナが見つかからない時は侍女は大いに困らされた。そのような時、皇女は必ず木陰から眺めて一人で楽しんでいたのであり、最後の間際に現れてマリヤを急せきたてた。解放する時間が余りにも少く、マリヤは慌てに慌てた。或る時、一本の長い縄の両端に環を作り、引けば締るようにして三重に折返し、二人で両方から後ろに廻した両手を突込み、引き合つて自縛した。後ろ手の綱引き然と引いている内に環は固く締つた。マリヤは手加減して引いていたのだが、曳き廻されて足が縛れた途端にアンナを引き倒して了つた。皇女は周囲を駆け廻つてマリヤの体に縄を巻きつけ、締め上げて面白がつたし、侍女は丈夫になったアンナの為に喜んだ。其処へアレクシウス帝が見舞に來臨されたと言つて宦官達が迎えに來た。二人は狼狽して互いに相手の結び目を後ろ手の俛解ひきこうとしたが、慌てている上に固く締つて仲々解けない。仕方なく林中に遁げ込んだが宦官達が捜しているのを身近に感じ

ながら困り果てた事もあった。V

以上は筆者の空想だが一部筆者の实地観察に依る連想も入っている。

清澄な空気、適温の軟風、軽度の興奮と歓喜により増進した食欲、これが皇女の健康と容姿を回復させた。

然も皇女は怪しい遊戯にばかり耽溺していたのではない。天性の美貌は更に磨かれた。合間の時間はすべて哲学の洗練や修辭学の向上に使用された。皇女の智識と才能は斯くて入神の域に達した。

此の時期のアンナに関し、只一つだけ公認の記録がある。トルコの大王マレク・シャーがアンナの美貌と聡明を聞いて求婚して来たのだ。アンナはトルコ語もペルシヤ語もアラビア語も自由に操る事が出来た。そして政策的に考えれば、東方の大敵を当分平静にさせるのみか、同盟者とする事も可能という最高の手段が此の結婚だった。但しトルコ王の妻というのは三人の正妻及び多数の第四夫人の中に伍した一人という意味である。多分肖像の交換だけでなく、王族を加えた使臣を介しての見合程度は行われたのだろう。アンナは絶大な嫌悪を感じつつも父帝と帝国の為にはトルコ行き止むを得ずと考えた旨、書き記し

ている。併し宗教の相違と多分アンナの健康に依って成立は永引き、遂に娘の真意を察知した皇帝の拒絶によって破談となった。これを根に持ったか、自らアンナに惹かれたかは知らないが、小アジアのトルコ王族ソリマンは帝国辺疆に対し頻々たる小侵攻を開始した。トルコ族が航海技術を知らない間は、アレクシウス帝も卑屈な安心を抱く事が出来た。併し捕虜になったギリシヤ人の技術指導で二百隻の艦隊が建造され始めたと聞いて、皇帝は首府の城壁内で慄え上った。

一〇九二年、アンナはブリエンニウスと結婚した。尤もこれは形式的な結婚だったと思われる。トルコ王の求婚を拒否する為の口実を作る為だったかもしれない。アンナの健康が夫婦生活に耐え得る迄に回復していたか否かの確証はない。但しアンナは此の年二十六才で、当時の標準では明らかに婚期を逸していた。

同年、アレクシウス帝の上には又しても天佑が下った。強敵ロバート・ギスカルドの場合と同じく、今度は大王マレク・シャーが病歿したのである。彼の大領土は遊牧帝国の常として、忽ち無数の小王国に分裂した。併しアレクシウス帝は、これを知らなかつ

た。宗家の支配を受けなくなったソリマン王の活動は一層盛んになったから、東帝国の上ののしかかった危険は寧ろ増大して見えた。

皇女は此の危機を、トルコ王の求婚を拒否した事による彼女自身の責任と考えた。今になって勇壮な美勇士ボヘモンドが思い出された。既に七年間会っていない。今度はアンナの方がタレンツムに私的使節を送った。併し返事は来なかった。アンナは既に諦められたものと思った。併し零落したボヘモンドが現在の地位を恥じて応答しなかったのかもしれない。

一〇九三年、危険は一層増大し、且つ緊迫した。アレクシウス帝は全歐洲の有力王侯に援兵を求める嘆願的使節を送った。併しフランスもイギリスも内紛に忙しく、同情はしたが来援してくれそうになかった。嘗ての同盟者ハインリッヒ四世は女伯爵マチルダに大敗戦し、皇太子に叛かれた事と、妻の恥辱とで地位を失墜し、法王ウルバノス二世に対して全くの劣勢に追い込まれていた。

残された手段は一つしかなかった。アンナは言った。

「旧怨を棄てて、ローマ法王に懇願するのです。」

皇女の雄弁の必要が今度程痛感された事はなかった。

一〇九四年秋、アンナは法王庁に向って出發した。時にアンナは二十八才。健康も容姿も回復し、嘗ての清純可憐な美に代り、艶麗円熟の魅力を湛えていた。皇女は二十才丁度位にしか見えなかったと記されている。

帝国の主要文官は全歐洲に派遣されて皇女の副使や随臣には余り有能な者が残っていなかった。併しアンナは意に介しなかった。

二十六才のマリヤは既に二子を生み、皇族の一員として地位もアンナと同格になっていたにも拘らず、皇女に懇願されると一議にも及ばず、嘗ての主人兼善友兼悪友の單なる侍女という資格で使臣に加った。

七

アレクシウス帝の嘆願書をアンナから受け取った法王ウルバノス二世は、ギリシヤ教會をローマ法王の権下に統合する好機と判断し東遣義勇軍の勧誘を皇女に確約した。

一〇九五年三月、北イタリヤのピアツェンツィア（プラケンチャ）に於て大宗教會議が開かれた。法王の召集に依り、イタリヤ、フランス、ブルグンデイヤ、スワビヤ、ババリヤから二百名の司教、四千の僧侶、三万の群

衆が集った。市の大教會も此の人数を收容する事が出来なかったから、七日間の大會議は野外に演壇を設けて開催された。アンナは此の會議で東ローマ帝国の窮状とトルコ族の暴虐を訴えるよう勧告された。

紫袍を纏い、軽い金冠を戴いた東帝国の皇女は法王の紹介を受けて演壇に上った。聴衆はアンナ皇女の雄弁を噂に聞き知っていた。

皇女の瘦身は体に密着した衣裳に依って一層纖細に見え、これが嘆願者の効果を引き立てた。すべての者が先ず皇女の美貌に驚いた。併し聴衆の期待にも拘らず、アンナは頭を垂れて黙然と立ち、一言も発しなかった。

ウルバノス二世が待ちかねて東帝国の現状に関する質問を發し、返答を促した。皇女の第一声は嗚咽だった。聴衆の間に驚愕の衝動が拡った。

哀哭暫時の後、アンナは漸く涙を拭いた。

そして噂にも似ず、咄々と話し始めた。

「とり乱して申し訳もございません。併し皆様は私にローマ帝国の現状を語れとお命じになります。女性の身にとって詢に残酷な事です。言わんと欲しても涙が先に立ちます。お許し下さい。それでも私は申し上げねばなりません。帝国臣民と東方キリスト教徒同胞の

為に。」

皇女はトルコ族の侵略に就いて語った。ニケーヤの陥落、アンティオキヤの炎上、スミルナの破壊、エデッサの暴行、ロードスの掠奪、キオスの虐殺。最近二十年間の惨状を、皇女は年代順に述べた。アンナの声は次第に熱を帯び、高い調子と、女性のものとは思われない鋭さを以て全会衆に響き渡った。幾多司教の名とその殉教態度。改宗を拒否した教徒民衆の殺戮と奴隸化。至聖所及び聖遺物に対する冒瀆、皇女は泣きながら訴え、東方の惨禍を天空に、各聴衆の心内に、鮮烈に描き出した。マリヤが側から差出す絹布は次々に絞る程濡れ、足下に散乱した。（群衆は後でこれを争って拾い、細片に切つて分配し、接吻した。）

聖市エルサレムと聖墓巡礼者に対する暴行に演題が移行するや、皇女の舌は俄然急速調に変った。聴衆は既にアンナの發する雰囲気、に席巻されていた。巡礼に課せられる重税、聖墓の破壊、トルコ政府の故意的な聖冒瀆。コンスタンティノポリスに宿泊した豪盛大巡礼団の壯觀と数箇月後に再び首府を過ぎた同じ一行の残骸、少数且つ悲惨な乞食僧の群との比較。巡礼達を掠奪せんものと聖市周辺

に蟠居する回教徒無頼漢達。そして諸教会の受けた被害。皇女は天を仰いで絶叫し、群衆はアンナの一句毎に憤激し、悲泣し、怒号した。

併しアンナの目的はエルサレムではない。

聴衆の悲憤が絶頂に達したと観察するや、再転トルコ族の戦備と脅威に移った。回数の世界改宗計画、嘗て全ヨーロッパを震撼させた、サラセンの猛威と、それを阻止したシャルルマーニュ・マルテルの武勲及び東帝国の堅守。その追憶。回教徒はトルコ王の下に再統一し、大団結し、キリスト教圏は小邦分立して異教に抵抗するのはコンスタンティノポリスの二重城壁のみ。而してトルコ軍はポスフォラスの狭海面を隔てた至近のアジャ岸に雲集し、東帝国を併呑せんものと窺っている。

「噫、千八百四十八年の歴史を誇るローマ帝国は、罪の推積によって今亡びようとしています。大天使の乗物聖ソフィヤ大寺院は回教モスクに変えられようとしています。東方キリスト教徒は異教徒の奴隷にされようとしています。勿論、アレクシウスは屈伏致しません。若しもトルコ人が侵入し、力及ばずの時が来たらヨーロッパとキリストの為にビザン

チウムの廃墟下で人柱になるでしょう。私とても回教徒に汚されるよりは半月刀の錆となる方を選びます。それ迄はヨーロッパは安泰です。併し皆様は回教勢をヨーロッパの真中に引き入れてから討つ方が良いとお考えでしょうか。今ならばヨーロッパの絶端に、往昔サラセン人を排撃したビザンチウムの塁壁が辛うじて立ち、偉大なるコンスタンティヌス大帝の末裔がこれを守っています。回教徒の重圧に喘ぎながらも。」

此の時マリヤが金属音のする一塊の重量物を持って皇女の方へ歩み寄った。鎖だった。

「御覧下さい。これが桎梏下のローマ帝国です。嘗てユーフラテス河岸に金鷲を立て、回教発出の地を制したローマ帝国の現状です。」

アンナはマリヤから鎖の一端を受取り、右手でそれを自分の左腕に巻きつけた。

「トレビゾンド、カマシウム、砂金のリリス河、銀のタウルス山、キリキヤの関門、このすべてはトルコ族に奪われ、百万のトルコ兵はアナトリアに満ちています。」

皇女は更に鎖を引き寄せ、自身の肩、胸、胴を幾重にも締め上げた。

「キプルス、ロードス、レムノス、キオス、美しきイオニヤ、伝説の島々。トルコ人は其

処で軍艦を建造しています。」

当時ドミニック教派は贖罪の手段として自身の体に鞭を当てる方法を採用していた。断食、徹夜して戒律を守る苦行に代るものとしてだったが、或る狂信的数学者は鞭三千は一年の苦行に等しいという高等数学方程式を電子計算機も無しに解析した。教祖ドミニックは六日間に鞭三十万を自身に加え、百年分の贖罪を済ましてから布教に着手した。斯かる時代だったからアンナの奇怪な自虐行為も帝国救出を悲願とする極度の苦行と解釈され、群衆は斉しく感動した。

「トルコ兵は遂にポスフォラスの対岸を占め帝国の咽喉を斯くの如くに締めています。」

皇女は鎖を頸に巻いた。マリヤに握らせた鎖を張らせ、自身は回転して腕の上から何度も自縛した。

「トルコ族に海軍力を持たせたら。プロボントイスの関門を明け渡したら、コンスタンティノポリスの城壁が、如何に堅くとも斯うなるのは旬日の問題です。これが締め上げられたローマ帝国の姿です。」

群衆の中から堪りかねた二人の男が駆け出した。

「皇女様。よく解りました。もう止めて下さ

い。」

一人は騎士で、他の一人は僧侶だった。二人は左右からアンナの鎖を解いた。皇女は軽く一礼して二人の名を問うた。騎士はウォルター、僧侶はピエル・バルトロメオと言った。皇女は自由になった両手を高く差し伸べ最後の嘆願を行った。

「回教徒をポスフォラス対岸から斥ける事が出来れば、ローマ帝国は尚アレクシウス一代の間トルコ族を寄せつけません。キリキヤの向うに討ち払うなら数世紀はコンスタンティノポリスがヨーロッパの防壁となります。若しユーフラテスの彼方に追うならば、キリスト教世界千年の安泰が確保出来ます。ローマ帝国は衰えたとも、金銀と食糧は充分に有ります。今なら間に合います。どうか援軍を送って下さい。罪深きローマ帝国君臣に、現世で懺悔する機会をお与え下さい。」

アンナは長時間の演説にも拘らず、乱れない声で聴衆の心肝を貫いた。

「東方キリスト教徒を」

左右の手首から外された金腕環が群衆の中に飛んだ。先刻の騎士と僧侶がそれを拾い上げた。

「同胞を、お救い下さい。」

皇女は差し上げた双手を静かに曲げ、胸の前で固く組んだ。

「行くぞ。コンスタンティノポリスへ。皇女の為なら生命も要らぬ。」

ウォルターが抜剣して叫んだ。

「拙僧はマルセイユの民を動かそう。」

ピエル・バルトロメオも言った。後は裏々と湧き返る渦巻だった。すべての声がコンスタンティノポリスと呼び、答え、即時東方出陣を宣言する者相次いだ。

群衆が静まるのを待ってウルバノス二世が演壇に上った。法王は東道義勇軍を正式に提案した。アンナによって既に興奮させられている会衆にこれを決議させるのは容易な事だった。東帝国の使臣は確実な保証を与えられて退出した。

法王は即時出発の意見を抑え、今年の秋にフランスのクレルモンで再度の大会議を開き全ヨーロッパの武力を集結して東征する事を命じた。アンナは使命の成功を確信していたから、次の大会を待たず、父帝に結果を報告し、援軍を迎える準備をする為、マリヤを伴って帰還の途についた。

時期は熟していた。騎士道の完成により充実したヨーロッパの力は反撃力を内蔵してい

た。イベリヤ半島でもアルフォンソ王の臣、勇士^{コンペアドール}ロドリゴがヴァレンシヤの壘に拠りエル・シドと呼ばれて一〇九九年に死ぬ迄此処を守った。所謂再征伐^{レコンキスタ}の先駆で本篇と同時に属する。

ウルバノス二世はアンナが望んだ以上の大計画を抱いていた。コンスタンティノポリス救出はエルサレムを含む全東方の奪回という野望に包含された。東ローマ帝国救出だけなら大きな軍隊は要らなかった。嘗て騎士八百を中核とする一万五千の軍に危く潰されそうになった東帝国は、救出に於てもこれより小さな兵力で事足りた。併しパレスチナ、シリヤの全面攻略には大兵力が必要になる。そして神聖ローマ帝国のハインリッヒ四世とドイツの騎士団は用いる事が出来なかった。ドイツの次に有力な軍国はフランスである。これがクレルモンで次期大会が開かれた理由だった。

法王は煽動使^{エクシタトリア}を各地に送って民衆^{エキサイト}を煽動させた。聖市奪回の軍に参加する者は一切の贖罪が得られる保証が附けられた。十一月に開かれたクレルモン^{クレルモン}の大会はウルバノス二世の雄弁を待たずとも成功すべく運命づけられていた。聖市奪回の提案は、忽ち、群衆の「神

意」と呼ぶ大合唱で是認された。

遠征軍は十字軍と呼ばれた。出発は明年の聖母昇天祭、即ち八月十五日と定められた。軍士は胸に赤い十字を附けた。斯くて此の紋章は現代のそれとは甚だ異った目的に使用される事になった。

騎士・従士・兵卒は奮い立った。彼等は東方の富裕を信じ、金銀珠玉に満ちた王国や宮殿を剣一本で計り取れると考えた。より下層の雑兵共はギリシヤやアラビヤの婦人が美しい事で夢を満たした。農民は年貢から、債務者は追求から、修道士は戒律から、犯罪者は刑罰から、遁れる希望を以て十字軍に参加した。十字軍は見る間に膨れ上った。アーネスト・パーカーの言う如く「新しく発見された金鉱に向って殺到して行く群衆」と似た衝動と意志が其処に働いていた。

八

ギボンは十字軍を迎えたアレクシウス帝をインドの羊飼いに譬えて嘲笑している。

昔、或る羊飼いは自ら努力をしないで水を得る事を祈願した。神は彼の願望を大々的に聞き届けた。即ちガンジス河が彼の牧地に流れ込んだので羊も小屋も一掃されて了ったのである。

ピアツエンツィアの宗教会議に於て、アレクシウス帝がその娘を遣して懇願せしめた援軍とは、皇帝の権威と東帝国の財力によって自由に操縦し得る一万人程度の軍隊だった。併しアンナは余りにも雄弁だった。期待に依りて殺到した侯伯、騎士、従士、兵卒、小姓、侍女、旗手、楯持、馬丁、鼓手、司教、僧侶、尼僧、百姓、狩人、商人、巡礼、無頼漢、脱獄者、雑多な群衆の総数は六十万人を越えた。斯かる大軍は東帝国を救出するよりも押し流して了う可能性の方が大きかった。皇帝は仰天し、皇女は卒倒した。

アレクシウスとアンナの驚愕狼狽する様が目に見えるようだ。「蜂の群、野の草、河の砂、天の星、蜜蜂の群。」皇女の豊富な語彙も遂に尽きた。そこでアンナは「全ヨーロッパが土台から揺るぎだしてアジアの上に襲いかかった。」と絶叫している。

最初にやって来たのは、「先発十字軍」又は「民衆十字軍」と呼ばれる雑多な群衆だった。疲れ果ててコンスタンティノポリスに到着、というより寧ろ逃げ込んだ巡礼隊の先導者は一頭の山羊と、一羽の鷺鳥と、フランス国ピカルディ州アミアンの隠者ペートルスと、勇敢且つ清貧な騎士「一文無しの」ウォ

ルターはピアツエンツィアで皇女から賜った金腕環を、聖遺物か護符のように胸に飾っていた。アンナは此の騎士がその日の食事にも困る程な貧乏でありながら下賜品を手離さなかった態度に感激した。

先発十字軍は八月十五日を待ち切れずにローヌから動き出した群衆で、一〇九六年三月に先ず六万人が出発し、その後を僧侶ゴスカルが百姓二万を連れて追い、更に三隊二十万の無頼漢と、多少の戦力を有する郷士、山賊隊三千が掠奪の希望を以て従った。彼等は「神の子」の殺害者ユダヤ人に対して最初の安易な戦争を行い、モーゼル河沿岸地帯で商業を営んでいた此の民族にハドリヤヌス以来の大迫害を加え、虐殺の上掠奪した。続いてハンガリヤを通過したが、巡礼隊は食糧も金も持っていなかったから住民に食物を強要しこれを当然の権利と考えた。ハンガリヤはキリスト教を受け入れてから日が浅く、蛮風を残し、巡礼隊はマジヤール語を解しなかった。巡礼隊の大部分は此処で殺戮されるか又は追い散らされた。

漸くコンスタンティノポリスに入った群衆は皇帝から物資を供給されて生き返った。恐怖と疲労で暫くは静かにしていたが、間もな

く兇猛の本性を表し、宮殿や庭園や教会に押し入って宿泊し、汚物を撒き散らし、食物は何でも没収した。皇帝は辟易した。皇女は高貴な身体を群衆中に曝し、煽動演説を行って彼等をアジア側対岸に出発させた。皇帝は巡礼隊に、後続の軍隊が到着する迄待つよう命じたが群衆は少しも留まらなかった。ペートルスは逃亡し、ウォルターは無秩序な群衆に少しでも統制を与えようとしたが無駄だった。トルコ王ソリマンは間諜を放ち、巡礼の先鋒がニケーヤの掠奪品で豪遊しているという流言を放って彼等を誘き寄せた。トルコ軍は優秀な騎兵隊を持っていたから此の乱雑な群衆を眩野の只中で包囲し、殲滅した。否、寧ろ虐殺した。白骨のピラミットが出来上り、後続の十字軍本隊は此の場所で先発隊の全滅を悲歎するか又はその殉教を讃美する事が出来た。

十字軍本隊の脅威は一層大きかった。帝国の富裕は掠奪を招く恐れがある。アンナは斯かる脅威を帝国内に招いた責任が自分にあると考え、皇帝の苦境を全力を尽くして助けた。併し皇子二人は今度も殆ど働かなかった。皇太子ヨハネスは単に首府に居たというだけだったし、イサアクはギリシャ治安に

赴いたと言うのは名目だけで逃げていたとは思えなかった。嘗てのアンナの忠実な協力者マリヤもイサアクの妻という立場の為、不本意ながら皇女の傍を離れていた。

アレクシウス帝は十字軍の皇帝となる事を考へついた。フランスやイタリアの侯伯騎士をローマ帝国の臣として東方に進軍せしめ、東帝国皇帝の手から封土を授ける。少くともそう見せかける。この為には諸侯の弱点を握って各個に屈伏させる事が要だ。

先ず、フランス王の弟ヴェルモンドア伯ユークが来着した。併し彼の乗船が難破し、指定外の地に上陸したので捕虜として突き出された。皇帝は出先官憲と慣れ合いで存分に酷遇させ、漸く素性が解った態をして今度は皇女アンナを遣し、最大限の優遇を与えた。ユークは名誉心の強い男だったが、忽ち陥落し皇帝に対する臣従礼を行った。

次に到着した、ロートリンゲン侯ゴドフロア・ド・ブイオンはドイツの皇帝ハインリッヒ四世に臣従した事のある勇将で皇帝の神聖を始めから承認していた。彼が玉座の前に進むと金の獅子が一声咆哮し、金銀の樹木に止まっている宝石細工の小鳥が囀った。ゴドフロアが一礼して頭を上げた時には、皇帝と玉座

は機械仕掛で天井の方へ捲き上げられ、皇帝は輝く様な衣裳に着替えていた。此のゴドフロアは、次に到着したボヘモンドやレーモンがコンスタンティノポリス横領の野心を持ち掛けた時、断乎抑えつけた。アレクシウス帝は彼に養子分の名誉を与えてやった。

三番目がボヘモンドである。タレンツムの小領主ではあるが彼の武勇は未だ忘れられていなかった。アマルファイルに於て彼は自身の紅戦袍を引き裂き、多数の十字章を作って衆に分ち、騎兵一万、歩兵二万の義兵を得て、嘗て征伐者として入城しようとした東帝国の首都に今度は救出者となる為に乗込んだ。

アンナにとっても十一年目の再会である。彼女も此の男だけには幾分興味を持っていたらしく、十字軍に関しての酷評の中で、数少い好意的描写を試みている。「フランク人は何れも大男だが、ボヘモンドは更に二フィート程高い。腰は締って細く、肩は広く、胸は厚い。力量感に溢れ、古代ギリシャの彫刻の如くである。白色、金髪、碧眼で高貴と威厳を保ち、顔は綺麗に剃り、頭髮は耳の辺りで刈っている。高い鼻。自由の息吹き。断定的発言。武勇と智略。味方として彼程頼もしきはなく、敵としてこれ程恐ろしきはない。」何

と現代的な勇士である事か。併し皇女は最後に一行書き加える事を忘れていない。「才能、幸運、雄弁に於て此の男に勝る者は世界中に只一人。それは皇帝陛下である。」

軍事的指導力、弁舌、武技、それに強慾に於てもボヘモンドは偉大な父を凌いでいた。

アンナはボヘモンドを演技的歎喜と作意的尊敬を以て迎え、首府と宮廷を数日かけて案内した。ノルマンの貧士は嘗て征伐せんと夢想した首府の偉大な二重城壁や、弩砲や、擲射器に驚嘆し、宮廷の豪華に瞠目した。皇女よりも三フイートは高い頭が次第に低くなった。或る一室の扉は開け放しになっていた。

皇女は故意を装いながら、その室だけは素通りした。ボヘモンドはその室を覗いて肝を潰した。床から天井迄、無数の金銀器、宝石細工、骨董類、蓋を外した金貨の箱、絹布、高貴な染料、貴金属地金類が積み重ねてあった。ボヘモンドは「これだけの財宝があったら何んな征伐でも出来るのに。」と叫んだ。アンナは強慾漢の心内を見透かしながら、卓上の目録を取った。

「これは貴下の物です。」

目録には「皇帝より帝国の騎士ボヘモンドに贈る」と書いてあった。此の一撃でボヘモ

ントも陥落した。即日皇帝の前で臣従礼が行われた。併し葉が効き過ぎてボヘモンドは帝國軍司令官の官職を欲しがった。そして内心ではアンナと結婚したかったらしい。

「そのようなつまらないものを望んではなりません。貴下はアンティオキヤかダマスクスで公爵か国王になられる方です。」

皇女は巧妙に煽てた。更に

「私も東洋の大国で女王になりたいのです。」と附け足した。ボヘモンドはこれを、彼が一国を獲得して支配者になった時、アンナがその後になってくれるものと勝手に解釈し、無邪気に喜んだ。

猛毒は使い方で良薬になる。ボヘモンドは智勇に於て十字軍中の尊敬を集めて居り、次々に到着する諸侯を説得して片端から皇帝に臣従させた。ゴドフロアの後続隊を率いた二人の弟ユーステスとボードアン。英國征伐王ウィリアムの長男ノルマンディー侯ロベール。フランドル伯ロベール。彼等はアレクシウスの玉座に向つて最敬礼した。シャルトル・ブリア・トロアの領主エティエンマの如きはアレクシウス帝の事を世界中で最も寛厚大度量の人物と書いている。勿論彼はそれ相当の恩寵を蒙った。トゥルーズ伯レイモンは十

万の兵を卒い、最も頑強に臣従を拒否した。故に、遂に屈伏した彼の服従は貴重な価値があった。アンナはレイモンを、群星中の太陽の如く輝いたと書いている。

最後の従者はボヘモンドの従弟タンクレドだった。彼は服従を強要したブリエンニウスを撲り倒して退去した。ボヘモンドは条理を説き、東帝国の船舶と黄金と食糧が此の遠征に必須である事を承認させて皇帝の御前に連れ戻した。

ローマが帝国になってから、千年が経過した。これに対する十字軍の非礼無作法は平安貴族と鎌倉武士の比ではない。フランドル伯ロベールの如きは玉座に上りこんで皇帝の隣に坐った。ボヘモンドが非難すると怒った。「全フランクの勇将が起立している中で一人だけ坐っている此奴は何者か。」

皇帝はフランス語が解らなかったが大意は察した。それでも憤怒は抑えた。十カ国語に精通しているアンナが穩当なギリシャ語に直して通訳した。ボヘモンドが諭して臣従礼を執らした後、皇帝は勇士の素性を聞いた。

「拙者の居住致すフランドルに一つの教会が御座る。其処は武勇を誇る者共が相手を求める祈願を籠める所で御座る。拙者は度々其処

を訪問致したが、遂に拙者と試合致す豪傑は一人も現われなかつたので御座る。」

フランドル伯は朴訥に言い、皇帝はその武勇をトルコ相手に發揮するよう諭した。皇女は流麗なフランス語で彼を煽て、本来貴婦人を尊敬する騎士は單純に感激した。

春になると帝国船舶は動員され、十字軍をアジア岸に送り込んだ。皇帝は十字軍の二隊以上を同時に首府城下に集中せしめなかつた。一軍を対岸に送った船舶は直ちに召還された。一〇九七年五月、十万の戦闘員を含む六十万の群衆はニケーヤに向つていた。

小アジアを支配するトルコ王ソリマンの首府はニケーヤにあった。両帝国の拡大を以て比較するなら、本州と九州を以て敵対する二大国の首府が、下関と門司に有るようなもので、静電気でなくても、火花放電が起らぬ筈もない。歐洲の大連合軍は犇々とこれを囲んだ。

トルコ王ソリマンは妻子や財宝を城内に残し、自ら五万騎を卒いて椅角の陣を張った。十字軍は六マイルの攻囲陣を敷き、ローマ帝国軍は主として輜重と工兵の任に就き、防禦側は三百七十の高塔と城壁に凡ゆる防禦兵器を備え、トルコ王は遊撃戦を反復して十字軍

を苦しめた。攻防は激烈を極めた。十字軍は勇氣を帝国軍は技術を發揮した。帝国の資源は海峡を渡つて持ち込まれ、坑道、攻城機、希臘火、弩砲が使用された。

アンナは陣外で先発十字軍の白骨を見た。トルコ兵は貧民の群を虐殺したが掠奪を諦めたので所持品は残っていた。一箇の骸骨は黒く汚れた金腕環を持って死んでいた。皇女は腕環に見覚えがあった。そして此の下賜品が勇敢な騎士を死なせたと思つて悲しんだ。

ニケーヤの西側は幅七マイルのアスカニウス湖で、トルコ側は湖上艦隊を以て自由な補給を行ひ得た。アレクシウス帝は糧を用いて多数の艦艇を湖上に運ばせた。包囲は完全になった。ニケーヤの陥落は迫った。十字軍は全市の掠奪を希望し、ソリマンの後は同様の恐怖で戦慄した。

七月の或る夜、城内の最高権者ソリマンの後は緊急の報告を受けた。アスカニウス湖に面した西門外で怪しい少年を捕縛したが、その者はローマ皇帝の密使と自称し、講和条約を持参したから縄附きの俣でも王后と会見したいと言つてゐるとの事だった。既に落城近きを察していた王后は自称密使に会う事を承認した。

粗い外袍を纏い、頭巾を被った少年が曳かれて来た。そして王后に人払いを要求した。両手を後ろに縛られ、柱に繋がれた密使は、余人が居なくなると帝国皇女アンナと名のつた。王后が驚いて頭巾を奪うと果して女の顔が現れた。宮廷にはマレク・シャーと交換した肖像が置いてあつたので皇女である事は間もなく確認された。粗袍の下からは絢爛たる紫衣が現れた。アンナは縄を解かれ、正式の使節として待遇された。

皇女はフランク人の兇暴を説き、ニケーヤを東ローマ皇帝に引渡す事を勧告した。皇帝もニケーヤの破壊を阻止したかつた。皇女の雄弁を待つ迄もなく、王后も原則的には同意した。然も皇女は、王后、大臣の無賠償送還を確約した。トルコ側はその保証を欲しがつた。聖書による宣誓ではなく、何か実質的な担保を。アンナは言下に言つた。

「私を人質として保留しなさい。」
ニケーヤの西門は帝国軍に開かれ、アレクシウス帝は兵と共に入城した。十字軍は攻略直前と信じていた時に、城頭高くローマ帝国の双頭金鷹旗が立ったので驚愕した。掠奪の希望が失われたので憤激した。皇帝は各隊長に金品を送つて慾心を満足させ、ニケーヤの

保有を確実にした。

帝国側は信義を守ってトルコ王后や大臣を放免した。アンナは自ら望んで皇衣の俤縛られ、七日間同行した。そして半日行程隔てて追隨した帝国騎兵隊に無事収容された。

皇女の身で斯かる冒険を決行したアンナの勇氣と責任感は感嘆の他ないが、同時に何か被虐趣味的なものを感じるのは筆者だけだろうか。皇女は帝国軍に収容された時にも、未だ縛られた俤だったし、これは自ら望んだというより要求したのだ。そしてアンナが公衆の面前で縛られたのは、これが最後ではなかった。アンナ皇女の被縛は私的なものに於ても、被虐文学の極致を描いた古川女史に必敵し、公的なそれに於ては凌駕していたものと思ぜられる。

九

アンナ・コムネナ。それは不思議な女である。学識と雄弁を別にすれば、三十一才の少女とでも言うべきか。天才的な権謀術策を施す一方、彼女自身は一寸した純情に触れても容易に感激する。責任を感じた時は全生命を賭して遂行する。容姿も何時迄も子供らしかった。それに異常な感受性。彼女が駆使する誇大形容詞も半分は実感なのかもしれない。

女としての性的なものを明らかに欠いているにも拘らず、これが彼女の堪らない魅力の源泉である。ボヘモンドもまた此の魅力の為に捕虜となった。彼は十二年前に皇女を縛ったり解いたりして以来、アンナの肉体には一指も触れていないのだが、それにも拘らず皇女の精神的奴隷となり、一生涯解放されなかった。その心理が解るような気もする。

ニケーヤはアレクシウス帝が回復した最初の帝国領土だった。十字軍も掠奪後は此の都市を帝国に引渡す心算だったから敢て異議を称えず、九日の滞在の後ドリレウムに向って南下した。アレクシウス帝は帝国軍の主力を揮いて海岸地方の征伐に向い、十字軍とは別行動を採った。但し強力な野戦弩砲隊は、その護衛隊と共に十字軍に随伴したし、案内を兼ねた偵察騎兵隊は先鋒に加わり、且つ連絡將校の形で皇女アンナがボヘモンドの司令部に同行した。皇女は始めて正式に男装した。紅袍を着用し、金色の半長靴を穿いた。頭は金冑を戴いたが、それは実用よりも装飾に適した。短剣を帯び、トラキヤ産白馬を駆ったが勇ましいというよりは美しい少年に見えた。

トルコ王ソリマンは首府の喪失により、戦

意を喪失するよりも燃え上らせた。王は十字軍に対する反十字軍の編成を回教諸邦に懇請した。一〇九七年七月、ドリレウム附近に集結したトルコ軍が若し古記録の言う如く三十六万騎であったなら、此の狭隘な戦場は奉夫会戦の二倍の兵力を包含した事になる。

十字軍は二縦隊となって漸進していた。トルコ軍は左側の人員数の少い方の縦隊に全力襲撃を敢行した。行軍縦隊に対する迅速果敢な襲撃は一五八四年の小牧役や一八一四年のマルヌ河畔戦に見る如く、時として重大な結果を現す。十字軍は非武装な巡礼や輜重車を方陣の中に囲い、ボヘモンドやタンクレドやノルマンディーのロベール等の暴勇に支えられて防戦したが、トルコ騎兵の数と戦意に圧倒されて正に潰乱せんとした。

アンナ皇女は襲撃の兆候を見た瞬間に居なくなった。危急な戦況の間、ボヘモンドは皇女を顧る隙もなかった。逃げたのか、とも思った。併し何処に逃げたというのだ。

十字軍の危機は右縦隊からの急援で救われた。ゴドフロアとユーグが六万を率いて戦列に参加した。その後にはプリーの司教アルデマールの軍も続いた。ボヘモンドは此の迅速な来援がアンナの急報に基くと聞いて皇女の敏

捷に感嘆した。併しアンナは戦列の何処にも見えなかった。

激戦は能力一杯の兵員を溢れる程呑み込んだので高等戦術を施す余地が無かった。勇氣は彼我对等であり、装備と技術は対照的だった。スペイン銅の重鎧対軽快な革鎧。穂先を揃えた長槍と投擲も出来る短槍、重量で破壊する大剣に斬味を主眼とする曲刀^{ナイベル}、十字軍騎士は敵が白兵戦距離に入ると見れば蹂躪的突撃^{コンバウンド}を行い、トルコ軍は後方展開の上で複合^{ボウ}弓を乱射した。ギリシャ人の操作する弩砲^{バリスタ}がこれに応射した。彼我共に損害は甚大だったが概して十字軍側が不利で、雑多な巡礼は追いつかれて味方の邪魔になり、重甲の騎士は目標とされて四千が殉教した。

然るに、夕方両軍共疲れきった時、一山の麓を廻ってレイモンの軍が出現した。東帝国の皇女はミカエル皇の遺した地理模型によってアナトリアの地型を暗記していたから、トルコ軍の背後に有力な一隊を誘導する事が出来た。これが勝敗を決した。トルコの名ある武士三千が戦死し、雑兵の首は数が知れなかった。

十字軍は夏の炎天下を南下した。北国出身の巡礼たちは続々と倒れた。疫病が流行し

た。一杯の水が同量の銀と交換される砂漠も通った。タウルス山を越える際には伏兵から大打撃を受けた。レイモンは担架で運ばれ、ゴドフロアは猪を獲ようとして重傷を負わされた。併しこの中であって繊細な皇女は常にボヘモンドの軍を嚮導していた。

ボードアンはエデッサを横領し、近東に初のフランク族国家を作った。タンクレドはタルスとマルミストラを攻略した。十字軍本隊はシリヤの首府アンティオキヤに対し、冬季を物ともせず攻囲戦を仕掛けた。十字軍の人員は三十万だった。

攻防戦は殆んど一年続いた。他に信頼すべき記録が無いので昔の武勇伝を信用するしかないのだが十字軍の騎士は幾多の武功を此の城下で現した事になっている。ゴドフロアはトルコ人の隊長を肩から股迄斬り下げ、その男の半身は地に落ち、半分は馬上に残って門内に運ばれて行った。ノルマンディのロベールは戦斧を以て敵將の頭を胃諸共に割りつけ、胸の半ば迄打込んだ。斯かる偉大な武勳は東洋の講釈師の張扇からも出て来ない。

西欧の侯伯が如何に勇猛であったとしてもアンティオキヤの城壁に対して剣や槍は無効果だった。帝国軍と皇帝はエーゲ海沿岸地方

を討伐中だったから、攻城手段は貧弱で、食糧は次第に欠乏した。ボヘモンドの兵站に潜入したトルコの間諜は串の上で焙られている数箇の人体を見た。馬は次第に食糧となり、最初の六万頭は二千頭に減じ、その中騎士の重量に耐え得るのは二百頭だった。

ボヘモンドは遂に城内の改宗キリスト教徒を内通させて城壁を奪取した。守備隊は衛城^{ポリス}に籠った。其処へモスルの王ケルボガが、二十八諸侯と六十万と号する大軍を率いて来援した。十字軍は逆に包囲された。

十字軍の戦意はピエル・バルトロメオの信仰又は策略に依って振作された。彼はキリストの脇腹を刺した槍の穂先が聖ペテル教会堂の祭壇下に埋まっていると言いつ出した。早速それを掘り出す作業が行われたが何も出て来なかった。暗くなつてからバルトロメオは一人で穴に下り忽ち一本の槍穂を掘り出すか又は衣服の下から取出した。この神聖な遺物はレイモン軍の先頭に掲げられ、その偉力は敵、味方に等しく感得された。ケルボガの大軍は十字軍士の死力を奮った突撃で寸断された。折から、アレクシウス帝の軍もキリキヤ海岸を通過し、回教の大連合軍は旗を捲いて退散した。一〇九八年六月の事だった。

危険が去ると、バルトロメオの行為が奇蹟か詐偽かで問題になった。自ら神明裁判を買って出た彼は例の槍を持って燃えるオリブの推積上を駆け渡った。十二日後に彼は死んだ。ボヘモンドは嘲笑した。レイモンは歓喜した群衆に揉み潰されたのだと弁護した。

皇女は、バルトロメオが死ぬ直前に見舞った。彼は焼けて黒く煤けた金腕環を皇女に返し、己の無罪を訴えながら死んで行った。

十字軍はアンティオキヤをボヘモンドに託し、此処に公園を建て、更に進撃した。ボヘモンドは独力でマラの城壁を奪取した。アラビヤ語とトルコ語を話せるアンナはボヘモンドに頼まれて通訳をした。「降伏する者は宮殿に集れ。」翌朝ボヘモンドは全市を掠奪し、男を悉く殺し、女は悉くアンティオキヤで奴隷に売った。此の虐殺の後、アンナはボヘモンドと別れて父の陣へ帰った。但し皇女は将来帝国の手中に奪回すべきアンティオキヤを充分に偵察して行った形跡がある。

ゴドフロア、レイモン、二人のローベル、タンクレド等四万はエルサレムに向った。十字軍は多大の出血を払いながら攻城櫓を用いて城壁を突破した。一〇九九年七月十五日金曜日の午後三時、即ちキリスト受難の同時刻

に聖市は陥落した。当時の従軍記者は絶大な得意を以て記している。十字軍士は先ず回教徒の虐殺と掠奪を行った。回教徒は金貨を呑んでいるというので鋸で腹を割った。七万人が殺された後、殺し疲れた十字軍士は掠奪品の中から献上品を選び、聖墓に参拝した。

ゴドフロアがエルサレム王国の支配者となり、レイモンがトリポリ伯に、ボヘモンドがアンティオキヤ公に、ボードアンがエデッサ伯になった。併しウルバノス二世は此の偉大な報告を受ける直前に病没していた。十字軍はその目的を達したが被害亦甚大で、一八二年にナポレオンの行ったモスクワ遠征の損害より大きく、一九四二年のガタルカナルの如きは、人的損害に関する限りでは兎戯に類した。然も、此の近東のガタルカナルは半歳の代りに二百年、三回に代り七回、大攻防戦を繰返し、一人の皇帝、二人の国王、多数の侯伯騎士を含む数十万の軍と数百万の民衆が失われたのである。

ギボンはアレクシウス帝を、「獅子の後を追って喰べ残しを頂戴する豹」に譬えた。皇帝は十字軍の遠征から莫大な利益を引き出した。アレクシウス帝とアンナ皇女の共謀に成る連繫動作は帝国を救った。皇女はボヘモン

ドを介して十字軍を煽動し、前方へと驍進させた。トルコ兵は沿岸地方から呼び返され、十字軍は進路の後方及び側方の土地を遺棄した。皇帝は空巢に侵入してエーゲ海地方を接収し、艦装中乃至未配員の軍艦を捕獲した。十字軍士はシリヤやパレスチナに数国を建て、皇帝に対する臣従礼を破棄したがアレクシウス帝は時効にかかったような此の地方の所有権復活を始めから要求する気はなかった。皇帝が欲しかったのは黒海からキリキヤに至るアナトリア沿岸で、プロポンティス南岸、ヘレスポントス一帯、ロードス島、キオス島、コス島、エフェソス、スミルナ、サルディス、フィラデルフィア、ラオドキヤの諸都市は再び帝国領となった。そしてシリヤも亦、間もなく帝国の勢力圏に入った。アレクシウス帝は嘗ての強敵ボヘモンドを利用してシリヤを取らせ、彼から更に此の遠隔領土を捲上げようとした。補給の無いシリヤを西欧勢力圏として維持する事は不可能だった。

前からアンナに惹かれていたボヘモンドは皇女から密会を誘われ喜んで出て来た。但し皇女はボヘモンドが未だ知らない不吉を秘めた例の金腕環一对を贈った。アンナとボヘモンドは当然の結果として、帝国軍の伏兵に包

囲まれた。ボヘモンドは容易に捕虜となり、騎士の名譽を尊重して鎖で手を繋がれた。アンティオキヤ公は皇女の不信を憤慨しようとした。併しアンナは彼女自身の面目よりも帝国の体面の方を重視した。ボヘモンドの見てゐる前で皇女は叛逆者と宣言され、後ろ手に縛られた。慣れ合いではあったが皇女の許可というより命令が出ていたので兵士は遠慮せず、厳しくアンナを拘束した。尤も鎖の重量を皇女に負担させない為に、通常の縄が使用された。真相を見抜けなかったボヘモンドは皇女の為に弁解し誘惑の罪は自分にあると叫んだ。護衛の隊長は縛ったアンナの上に皇族の紫袍を着せ、外見的恥辱を免れしめた。

アンティオキヤの公爵と東ローマ帝国の皇女はエフェソスに檻送された。此処で父帝臨席の下に慣れ合い裁判が行われ、ボヘモンドは十数年前の海賊行為と臣従破棄で有罪の宣告を受け、アンナは密通未遂を「自白」し謀叛罪は否認した。但しアンナの自白はボヘモンドを不利にするものだった。

火刑台が設けられ、二人の犯罪者は鎖で連縛された。アンナは内心で笑いながら、悲愴の演技を見せ、火刑柱を背に負って手を柱の後ろに廻し、鎖で固く縛られた。ボヘモンド

は完全に欺かれていたから、既に自由を失っているながら、皇女だけは許してやるようにとアレクシウス帝に懇願した。アンナは横目で隣のボヘモンドを眺めながら「私の為に」身代金を出して助かって欲しいと頼んだ。更に小声で男だけ許して女を罰する筈がないと附け足した。ボヘモンドは遂に屈伏した。皇帝は償金を受諾し、莫大な額を吹掛けた。皇女はそれを値切った。縛られた皇女が隣の男の為に償金を値切る雄弁は詢に妙な光景だった。父娘の慣れ合い大激論の後、減額された償金はそれでもアンティオキヤの幼稚な国家経済を破産させるに必要な金額だった。

身代金が到着するとアンティオキヤ公は放免された。アンナ皇女は「死一等を減じ」首府に於て皇帝直接の監視下に「監禁」される刑に服した。アンナは絶妙の演技を以てボヘモンドとの別離を泣いてみせた。但し男を抱く必要がないように、両手は後ろで縛ってあった。ボヘモンドは皇女の形見として例の不吉な腕環を握りしめ、涙を流した。

一場の喜劇の後、皇女は首府に護送され、父帝は娘を、宮殿の最も豪華な室に「監禁」し、父娘二人、水入らずの祝盃を傾けた。アンナが父に頼んで手を縛って貰ったかどうか

筆者は知らない。

十

ボヘモンドは面目と財産を失ってフランスに去った。アンティオキヤ公の空虚な位はタシクレドに譲られた。彼は維持出来なくなった北部領土を放棄し、公国の八割はローマ帝国に「回収」された。

ボヘモンドの西方帰還に関するアンナの記録が信用に価するなら、彼は死体として棺に密封されて帝国の領海を通過したのである。然も皇女は、ボヘモンドは死んだ雄鶏と同封され、その死臭によって死体を装ったと書く程の非常識を犯し、且つ蛮族なればこそ斯かを悪臭に耐え得たと自ら感心している。

ボヘモンドは復讐を欲していたからアンナの悪態放言の肴にされるだけでは済まなかった。フランスでは大歓迎を受け、国王の娘と結婚した。併し本当はアンナと結婚したかったのだろう。彼は国中を遊説して東ローマ帝国討伐の義軍を募った。そして四万五千の軍を以てドウラツオを囲んだ。だが、アンナが構和使節として派遣され、懇願すると、忽ち僅かな保証金で休戦が成立した。ボヘモンドはその直後に急死し、アレクシウス帝の恐怖は永久に取り去られた。ボヘモンドの死因は

解らない。但し彼は死ぬ時に、アンナから贈られた不吉な金腕環を胸の上に抱いていたという。

小説家ならアンナとボヘモンドの史実から悲恋物語か又は邪恋物語を作り出すだろう。併し筆者は冷静である。

アレクシウス帝はトルコに対する攻勢的國家を遺贈して一一一八年八月に崩じた。皇帝は憲法を改正してでも皇位を皇女に譲りたかった。実にアンナだけが、多年に亘り父帝と

文献資料を求む

本誌上に紹介して価値のあるS・M・F等各種、資料を御所持の方で御提供可能の方は御連絡願います。誌上の発表につきましては、出来るだけの謝礼を差上げたいと存じますので、文献誌としての本誌の価値を高めるためにも何卒新古多少に拘らず御提供願います。

写真、絵画、文章、パンフット、広告、スクラップ・ブック、チラシ等なんでも結構です。御希望により使用後資料は御返却いたします。

「奇クサロン」原稿募集

読者の皆さまの共通の広場として、「読者通信欄」と共に、皆さまに親しまれていく「奇クサロン」の欄をこれから益々発展

艱難を共にし皇帝と帝国の為に危険を冒し、健康と青春と名誉を犠牲にして尽してくれたのである。皇后イレネも同意見だった。併し文武官は一致して男系相続を固執した。皇帝が軍力強化の為に採用したプロノイア制は封建諸侯のような地方官の発言権を増大させていた。皇子二人は久しく首府に在ってその党派は多く、皇女は父の偏愛を受けた以外に支持者が無かった。皇帝は臨終に際して遺言を変更し、皇后はこれを怒った。

充実させてゆきたいと思います。マニヤ通信、モデル通信、短信往来、編集者執筆者モデル投稿者などへの呼び掛け、文通交際写真、絵、告白の便り等々、なんでも構いませんからお気軽に寄せ下さい。

「読者通信」へ

読者の皆さまの共通の広場としての読者通信は、毎月多数の投稿文によって賑々しく飾られておりますが、広く読者の方々が読んで楽しい家庭的な雰囲気味わえるものの中から、つとめて選定してゆきたいと思ひます。従って三行広告的なものや自己宣伝に類したものは、ご遠慮いただきたくのです。誌上に於ける公明正大な文通交歓こそ、本誌読者通信の使命だと考えます。どうか、その意味あい、どしどし御投稿下さるよう、お待ちいたします。

(本誌編集部)

「陛下、貴下は生前と同様に偽善者として逝くのです。」

ヨハネスが皇帝となって皇太后を引退させた。イサアクの妻になったマリヤは既に亡かった。アンナの夫ブリエンニウス迄が皇女を援助しなかった。アンナは叫んだ。

「自然は誤を犯した。私には男の精神が、ブリエンニウスには女の魂が与えられている。」

アンナは二人の兄から、謀叛罪を着せられた。抵抗は出来なかった。父帝から譲られた莫大な私有財産は悉く差押えられた。皇女は又しても公衆の面前で後ろ手に縛られ、公開法廷に引き出された。併し筆者は如何に童顔美貌の皇女と雖も更年期を過ぎた女性の縛られた姿には最早魅力を感じないし、アレクシウス帝の死と共にアンナ皇女の政治生命も終わったのであるから、この忠孝両全なる皇女の物語も結論を急ぐ事としよう。

ヨハネスの臣アクスークの諫止でアンナは許され、財産も還附された。アンナはブリエンニウスとも離婚して敬虔、孤独、平穩、富裕な私生活に引退し、文筆に託して父帝の追憶を綴りつつ余生を送った。斯くて今に残るアレクシウス伝の名文が鑑賞出来る次第である。

(終)



久我庄一

『精神分析学より見た耽美の世界』

奇ク四月号のサロンでの、平野広氏の「試論と呼びかけ」『耽美的な事象を他方で社会的事象、歴史的事象としてつかまえなおし、その意義や位置を確認しようとするところ』み『精神分析学の方ではこれらの耽美的諸事象をどう分類整理してみせるか』という提案に対し、私はわがこといたれりと、快心の意味をもらす者である。私は過去二十数年に亘

り、風俗文献雑誌史を研究、またSMの世界に対する文学的なる一考察、及び『真言立川流』についてなど、性の極致の追求など、オースドックス的な姿勢で探求してきたものだからだ。ただ、これらの研究を、奇クに発表しようと考えるとき、これをキッカケとしていわゆる編集の傾向が専門家と自称する独善的な（現在の読者を中心としたパラエティーあ

る親しみやすい独自の編集がそこなう）ものにかきまわされる弊害を恐れることと、数枚程度ではとても、ナットクできる原稿を書くことができないこと（限られた紙数）で、二の足をふんでいた。それで『ページの設定』程度、あくまでも（一分野として）ならばと、まず、試作メモ程度にまとめてみた。幸いにして、好評なれば、本腰を入れるつもりである。

◇有名な「天才論」の著者である（精神医学者）ロンブロオゾオは「天才とは、一種の精神病者で、肉体変質者」だと極論している。彼の偉大なる哲学者のアリストートルは、「頭脳の充血作用のために、多くの人々が詩人・予言者・神占者となるのである」といっている。パスカル（『考える葦』）という言葉で知られているキリスト教的哲学者は、「極端な智力は極端な狂異と兄弟なり」といっている。ミラボウは「常識というものは凡て力強い情熱のないことをいうのだ、然るに、異常な情熱の人のみが偉大となる事が出来る。ロンブロオゾオは自分の説の裏書をするものとして、ドレビエルの「狂者文学史」（一〇六〇年）レリウの「ソクラテスの奇魔」（一八三六年）クロポトキンの「ロシア文学史」ワイニンゲルの「天才と性格」フロイドの精神

分析法

(作者註、このフロイドの動物的本能説に対して、現在は心というものと精神的な面にその分析的傾向が移りつつあり、カール・メンジャーニーの「人間それにそむくもの」「愛憎」などが翻訳出版されているのがめだつ)

◇世界の耽美的な作家を「変質的」な面から見ると、フランスのデカダン詩人、おなじみのボオドレイル。「モルグ街の殺人事件」というゴリラの出る作品といえば、ああとうなづけるアラン・ポー。イギリスの「サロメ」という耽美小説で有名なオスカ・ワイルド(ああ、狂人のみが幸福である。何となれば、彼らは現実の感情を喪失して了っているからだ)と叫んだギイド・モウパッサン(「女の一生」という作品が有名)痴人の告白(現在も世界文学全集の一巻として出されている。河出書房? あたりで四、五年前に出版)の人間嫌いな陰惨なニヒリスト者、ストリンダベルヒ、もう説明などいらぬ大作家、ドストイフスキーは、てんかんの疾病がある。続いてトルストイ、イプセン、フロオベール、ゴーゴリ、ハイネ、ゲイテなど、みなそのようだ。

◇オスカ・ワイルドの「ドリアン・グレイ

の肖像」と「サロメ」は、前者は、耽美的享楽狂の記録であり、後者はサチズムス(虐待性)なサンプルを読者に提供する。また「ドリアン・グレイの肖像」には、ピグマリオン・スミス(偶像を汚染するアブノーマルな心理)が描写されている。

(作者註、二著とも新潮文庫に入っている)

◇マゾヒズム(受動的淫虐性)は奥国の小説家マゾッホの小説から出た言葉で、男女をとわず、相手から残虐な目にあわされると、ますますアブノーマルな快感を深める——サチズムスと共に、SM的な世界の二大区分をなしている。

◇江戸文学に眼を移して見よう。馬琴の「弓張月」「三七全伝、南柯夢」等の作品も、いわゆる読本的形式なるも、耽美的なるまんが、にじみでている(心理学的には、異常な世界を見せてくれる)徳川三百年の鎖国制度は、かの元禄時代(NHKテレビの「赤穂浪士」をみられた方も居りましょう。あの時代です)を頂点として、まさに好色と酒落本と黄表紙のはんらんせる時代で、当然、社会的にアブノーマルな要素が強かった。だから、この時代の作品は仇討物にしろ、なんであれ、社会的、人生的にはSM的だ。

(作者註、赤穂浪士のストーリーには、華やかな色模様が、かかせないのも時代相である。大石蔵之助のうかれ遊びは芝居、映画の見世場だ。最近、東映で風太郎原作の「忍法忠臣蔵」が映画化し、封切されているようだが、これもSM的、一見をすすめたい)

さて、西鶴の「好色一代男」はまさに耽美的傑作だ。

◇日本で、アブノーマルな性格の為に自殺した作家は多いが、その時代を何んらかの意味で表徴している「事件」的なものは、まず芥川竜之介が上げられる。彼は、迫りくる灰色の時代を、最も敏感に察知したインテリ文学者でもあったのだ。代表的な作品としては(特に、現在のSMの世界から見ても)「地獄変」を傑作として、記して置く。大宰治、田中英光の二作家はもう、あまりにも生々しく先刻承知の事実なので、作品のみ上げておこう。前者は「人間失格」その自虐的な意味で後者は「さよなら」及び「野狐」その異常性格的な生活記録。

(作者註、現在田中英光の著者が、手もとに無いので、作品題名と説明の点に不備を、断っておく、なお、この作者のは、いま全集として街の書店で眼に付く筈だ)

△愛読者の皆様へ▽

○電話にてのお問合せや照会並に直接の御訪問は固くお断り致します。ご連絡はすべて書面にて住所氏名明記の上お願い致します。必要のある方には、編集部から電話連絡或は面会の日時場所などお知らせ致します。面識のない方の直接のご訪問は御容赦願います。

○編集部又は編集者に対して、ご依頼或はご相談などがございましたら、事前に通信にて、その旨お申出下されば、時間の許すかぎり、つとめてお逢いするよう致しておりますから、ご遠慮なくお便りを下さい。

○分譲品のお問合せも、必ず通信にてお寄せ下さるようお願い致します。

○本誌では、投稿者やモデル嬢の住所氏名の照会には一切応じておりませんし、手紙の転送、文通幹旋なども原則として致しておりません故、はつきりお断りしておきます。読者間の交歓は、すべて読者通信欄にて行って頂くようお願い致します。

○読者通信は用紙は問いませんが、必ずタテ書きにお願いします。尚切手を貼らずに投函される方も時々ありますが、入手に手間どり遅延のもととなり、場合によっては「受取拒絶」することがありますから、ご留意願います。

年代をさかのぼって、有島武郎を見逃すことは出来ない（女流記者との情死）「或る女」を代表作として上げて置く。当時のろまんの風潮を彩る一頁でもあった。

（作者註、記事のハンザツをさける為、年代を明記せず。御理解乞う）

◇大正時代は、あの関東大震災を中心としてまさに「おれは河原の枯すすき」という、浅草十二階をバックにしたでかだん的な世相でもあった。そこから、谷崎潤一郎の「刺青」「富美子の足」「異端者の悲しみ」などの、

あまりにも耽美的なる後世に残る傑作が生れた。また福島県はK市でその不遇なうちに世を去った鈴木善太郎の「暗示」井東寛の「餓鬼の足跡」中村古峯の「殻」、現在もその詩集が出版されている村山槐多の「槐多の歌へる」菊地寛の「順番」。いまなお文庫本として愛読されている、放浪の作家葛西善蔵の一連の飲酒小説。中年の方なら、ほほうとうなずかれるだろう。鳥田清次郎（誇大妄想狂と早発性痴呆で松沢精神病院？で死亡す）の「地上」など、みな、この時代が生んだS

M的産物だ。（作者註、いま奇クでは山原清子嬢の刺青緊縛フオートが、評判になっているが、遠くは、大正時代に、いまは文壇の大御所的存在の谷崎氏が、それをモチーフとして、作品を書き上げたことがあったことを考へ興味深々たるものがある）

◇とにかく、この稿は、試作的にただ押入れの中にはこりをかぶっている秘蔵の風俗文献を、あれこれとかきまわし、手当たり次第に、抜き書き、そこに私の考えを付けたした程度で、まとまったものでないことは前記した通りである。本来ならば、分類し、年代も入れ参考文献も明記するのがこの種の原稿を草する常道であり、先駆者に対する礼儀でもあるけれど以上の意味で、御理解願う。なお「真言立川流」については、印度のバラモン教との関係その他とても生のままでは内容が特殊であり、よほど構想をねることなしでは奇クに発表できかねるので、割愛した。乞う、平野氏よ、時間を与えて下さるよう。では、この一文が、一つの捨石ともなることを願って――。

（了）

× × × × × × ×

思いつくままに

妊婦のことなど

羽 鳥 水 江

四月号以来、羽村京子（K・H）あらため羽鳥水江（M・H）としてあらたにお目見えしました羽鳥水江です。

よかれあしかれ、十余年の間に、非常に変わっているのではないかと自分でも思うのですが、奇クの中のかなり特異な傾向を代表して来たK・Hの特殊なイメージが、わたし自身の中にも、読者の皆様の中にも、出来上って来ているように思います。M・Hの新しいイメージをつくるために、せいぜい投稿しようと思っています。

四月号では、なつかしい安原さゆりさんが再度の妊娠で登場していらっしやいます。さ

ゆりさんは三十八年十二月号の読者通信で、「妾の不格好な妊娠ヌードを奇クの愛読者の皆様にお目につけはすかしさと、こうふんに身も染まる想いです。夫に嫁いで六年、ノーマルだった妾は今日では完全にアブノーマルな飼いなされたためす大同様な生活を送っております。……皆様私の妊娠ヌードをぜひごらん下さい。そして私をさげすんで下さい」と書かれました。わたしはこの「メス犬」ということばに非常な共感をおぼえました。big-bellied bitch（孕んでいるメス犬——孕み犬）ということばが、すぐうかんできました。大きな腹をしたメス犬——これほど

マゾヒスティックな、すばらしいことばがあるでしょうか。わたしはまた、bitch（ビッチ——メス犬）という単語が魔女 witch（ウィッチ）という単語と語呂が同じのためもある、とても好きなのです。わたしは機会があったら、一度「ソドムの魔女」という題でわたしの自己解剖をしてみたいと思っています。少し前にフランス映画に「サレムの魔女」というのがありましたが、サレムならぬ「ソドム」の意味は皆様ご承知ですわね。

さて、横道にそれるのはやめて、三十八年十二月号の「ナルシスの発言」以後、三十九年二月号の奇クサロンにのった「風船腹についてなど」以外には、すっかりごぶさたしてしまいましたので、三十九年一月号にのった瀬沼四郎さんの「夢の中の妊婦」や、四月号、芳野眉美さんの「贗作『妖花』」など、さらに言えば、三十八年十一月号、影浦栄さんの「妊婦フォトに関連して」の中で、K・Hに言及して下さったことにたいして、またその他の方々のK・Hにたいして示された数多くのご厚意に、心からお礼を申し上げなければなりません。芳野さんがこのようなものをお書きになるということは、大分前の「妊娠娼婦」を見れば想像できることですが、

やはりちょっと意外な感じがしました。でも、失礼ですけど、出来栄えは非常に素晴らしいもので、まるでわたし自身を書いたもののように、実にうまくまとまっていた。すっかり感心いたしました。

瀬沼さんの「夢の中の妊婦」を読んで、とても面白く思ったのは次の点です。

あの中に、品胎で臨月というおそろしく大きな腹をした妊婦（K・H）の腹の中を覗くと（あるいは透けて見えるのですが）「三つの胎児がヘソの緒でつながって、まるで風車の羽根のように、水族館の水槽の中のように明かるい羊水の中をグルグルと廻っている。……」

という空想的な着想がありますが、これについて、まんざら絵そらごとばかりとは思えぬような記事を、ある週刊誌で見たことがあるからです。



三十八年の秋、アメリカ合衆国と中南米のベネズエラで、同じ月（九月）の間に二組の五つ子が生まれたことは、当時新聞にも出ましたから、覚えておいでになる方もありましょう。そのうちのベネズエラの方の母親が、「わたしは五つ子を生んだ」と題する文章を日本の週刊誌によせたのです。その資料が今残っていませんので、文字通り引用できないのは残念ですが、たしか、イネス・ブリエトという名前の女性でした。臨月が近づくと、「お腹がムチャクチャにふくらんでしまいました。脇腹から背中にかけてものすごく大きくなっているのです」

というように、この「ベッドの上に上を向いて寝た切り」起き上ってベッドから下りるのにも人手を借りなければならなかった、という

ます。五つの胎児がひっきりなしに胎動するさまは、

「まるで数羽の（五羽の）鳥がお腹の中で羽搏くよう」というのです。

ちょうど瀬沼さんの夢の中の妊婦の腹の中で、ヘソの緒でつながった三つの胎児が、風車の羽根のようにグルグル廻りながら、羊水の中に浮かんでいる光景と同じ（？）ではありませんか。

五胎というような妊娠は非常にめずらしいものでしょう。何しろ新聞にのるくらいのもので、最近、のむ避妊薬とは反対に、妊娠する薬というのが出来て、これをのんだ人たちの間に、双胎や品胎、さらには四胎もの妊娠が、異常な頻度であらわれることがわかったと言います。そんなに簡単に多胎妊娠が引き起こされる、ということは大変面白いことです。

わたしは、本屋で立ち読みした医学書の中で、品胎臨月の女の全裸で立っている側面からの写真を見たことがあります。元東大教授長谷川博士の「産科学」の上巻か下巻か、だったかと思えます。顔は隠してありましたが、おどろくべき大きさの膨れ上がった腹が、まる

で巨大なコブをつけたように見えました。形はひどくイビツな感じで、西洋梨そっくりと言ったらいいでしょう。異様な感じがしました。大変めずらしいものでしょう。

なお、多胎ではありませんが、しばらく前、これも資料が手元にはないのではっきりしませんが、一児で六キロもある超巨大児が、マレーシアに住む、中国系の女によって分娩されたという記事を読んだことがあります。わたしが五月号に「帝王切開分娩のこと」を書きましたが、超巨大児——骨盤のせまい母胎——切開による分娩、という一連の連想がうかびます。

一昨年から昨年にかけての奇クを読み直してみますと浣腸マニアの方々の投稿も多くあり、中には、一リットルから二リットル（三リットルが一例あります）もの大量注腸の報告もあり、空気浣腸による蛙腹とか、牛乳浣腸その他いろいろあって、世の中にはわたしと同じ傾向の方々も少なくないことを知り、書いてみたいことが沢山ありますけれども、残念ですが次の機会にゆずりたいと思います。また、昨年六月号の嶋田雪子さんのように、「女体解剖」（解剖されること）に強い関心をもっていらっしゃるという「解剖マニ

ア」の方々にも、申し上げたいことが数々あります。嶋田さんはまた、妊娠とか妊婦にも興味をおもちです。しかし今日は、これぐらいで失礼して、これも次の機会にゆずりたいと思います。わたしとしては解剖だけでなく、まるでお魚や鳥のようにハラワタを出して「料理」されて食べられてしまう、というような空想にも興味をもちます。また、もとかえって、蛙腹のいろいろなアイデアについても考えていることがあります。いつのことになるか知れませんが、書けたら書いて発表したいと思っています。

最近の奇クの、「悪書追放」によるピンチ状態にたいして、読者の皆様から多くのアドヴァイスが寄せられています。わたしも、四月号のサロンの平野広さんの言われるように、耽美的で知的な方向へ行くべきものかと思ひます。けれども平野さんのように、あまり学問的（？）になってしまったら、わたしなんぞついて行けるかしら、と心配にもなりますわ。わたしはそうむずかしく考えるよりは、自然にたのしめるようなものであることを、奇クに求めているだけなのですから。

最後になりましたけれども、わたしの一番心にかかっていたこと——辻村様、勝手に文

通を打ち切って、わがままな女だと、腹をお立てになりましたでしょうね。わたしはここに、公に、辻村様のお許しを乞いたいと思います。三十九夜も完結して、カメラ・ハントにお忙しい辻村様、一時はお怒りになったかも知れませんが、これからほんの時々でよろしゅうございますから、K・H——今はもうM・H——水江のことを思い出して下さいませ。わたしも、毎月おなつかしく拝見しております。辻村様にお会いする勇気のなかったわたしをふがいなく思いながらも、やはりどうにもなりませんでした。しかし、しばらくの直接のおつき合い（文通だけです）を通じて、辻村様からいろいろなことを教えられ、わたしにとっては大変なプラスだったことは申し上げるまでもありません。そのお礼も、ここであらためて申し上げますとぞんじます。

☆ ☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆ ☆

《愛読者原稿》

淪落した悪女の手紙



福田 久 文

前略ご免くださいませ。

先日は本当に有難うございました。あなたがお立ちになったあとも、腰からうえのマトレスを起したまま、締めて行かれた明り障子をぼんやりと見詰めておりました。いまでも

頂いたメロンの芳香を口にして目を閉じ、久しぶりにお目にかかったお顔、長くお聴きしなかったお声を思い浮べますと、わたしの胸が少女のそれのようにまた新しく鼓動するのでございます。お帰りの間際になりまして

も、キス一つようお願いしませずに、ただお礼の言葉を繰り返していましたことは嘆きますまい。よい夫、すぐれた学者におなりになるために、もう決して誘わないと誓ったわたしです。でも見舞いにきてくださった日から三日がかりでこのお手紙を書き綴り、いまま見て頂くために浄書にかかったわたしをどうかお許しくだいなませ。畳と建具の紙だけが真新しく、柱も天井も床の間の飾り物までが百年以上の年月に古びて人気のない屋敷の奥に、ギブスに動かぬ体を横たえている初老の寡婦は、このお手紙の草案を鉛筆でしたためながら、あるときは卑しい情欲を燃えたたせ、あるときはそれを鎮めて、みずからいたわりかつ励ましたのでございます。

この部屋に赤い毛氈を縫いつけた敷布団を敷いて再度湯から上げたあなたを置き、疲れたあなたの体力が回復するまで、太い長煙管を使って苛めたことがございましたね。

いまでも僅かに市販されているようなものではなく、もっと長くて太く、雁首も吸口も真鍮でできた頑丈な長煙管。それは喫煙具であるとともに、用途の多い責道具だという、日本人の考え出したためずらしい小道具ではないでしょうか。わたしにはそれがまた、江戸時

代から戦前まで、水商売の経営者が薄幸の女たちに示した権力の象徴のように思われてなりません。高手後手縛りの遊女を吊るして一服したのち、突く、打つ、こじる……。果てはまた一服吸いつけて、その火口を当てたこととでございましょう。

二の腕二つを背中中で縦に並べて太い釣糸で縛ったままのあなたを湯に入れ、ここに連れ戻って片足首を床柱に繋ぎました。残る片足はわたしの片手に捉えられ、辛うじて動く手を振りながら、火で炙った吸口を鼻孔に受けて悶えておられたあなた。赤い毛氈のうえで、焼く白哲な体、美しい顔の、深い輝きを湛えた眼。わたしはああしたときのあなたの眼に卑しい情欲を恥じ、悲しんでいる清らかな精神をみ、ふと情欲を忘れて泰西の名画をみるような思いがすることがございました。

でもそれは長煙管でああなたの体を弄んで次第に身をほてらせて来た者には、嵐のなかに現れるほんのひとときの青い虚空に過ぎません。あなたがおっしゃっていたように、絶えずしっかりと持ち続ける祈りによって、情欲を離れたすがすがしい領域に心身に移さぬかぎり、あの素晴らしい空の青さとそれを見る智力とは、わたしたちのそばに留っていてはく

れないものでございますから。このごろ、かつて教えて頂いたことがやっと分るようになって参りました。あの智力こそ真実であり、あの虚空こそ本当の喜びですのに、わたしのようなのは、怜悯な動物と大差のない智力でたやすく手にできる重苦しい喜びを求めてあの虚空も真実の智力も焼き尽してしまうような情炎に身を沈めるのです。

仰向いているあなたを裏返しにし、柱に繋いだ片足のしたに束縛していない片足を差し入れて足をX型に交差させますと、両手を鞍のように乗せた臀部が浮き上がります。わたしは女にもあなたのような美しい手を見たことがございせん。人並はずれて大きく、付け根から指先まで太さの変らぬ十本の指が、ほんのりと赤味を帯びて白い花びらのように開いていたのをまさまざと思ひ出しますわ。片膝立ててそこに馬乗りになったわたしは長煙管の管を打ちおろしました……。

あのころのわたしは、家の体面を守って長く苛酷に情欲を虐げ、異常にそれを昂らせていた中年の女に過ぎませんでした。蔵から取り出した残酷絵のコレクションを独り寝床に臥して眺め、拷責を加える遣手婆や女将と、責苦に悶える若い遊女たちとを描いた、あの

極彩色の浮世絵に身をほてらせたものです。

湯文字一枚にされ、大きく股を開かせられて板敷の髪部屋に仰臥した若々しい遊女。手は後手に縛られているのでしよう。胸を小高く盛り上げて腰のしたに差し入れ、一筋の細い猿轡で口を塞がれて、眼を閉じています。それは新床で夫を目捷の間に迎えて悶える小心な花嫁のように美しく描かれていますのにその脇腹に寄って腰を浮かし、片手で遊女の喉を掴み、煙を上げる太い線香を振りかざす遣手婆は安達ヶ原の鬼婆のような醜い顔を憎々しげに口を歪めて引きつらせています。対照の妙によって美しいもの、哀れなものを際立たせる手法なのでございましょう。この一対の人物は、しかし、この絵を書いた敏腕な浮世絵師にとっては、点描した気つけ用の大きな湯呑や火種に使う手火鉢とともに主題の補助物に過ぎないのです。画面の半分に大きく描かれているのは、遊女の足元に厚い坐布団を敷いて、片膝立てた中年肥りの女将です。目を細めて私刑の執行を眺めるこの女は左手を袂に隠れて乳房のあたりを脹らませ、右手で長煙管の吸口を握って、その雁首は乱れた着物の裾に差し入れているのです！ 古い長煙管の太くく脹らんでいる吸口が口に啞

えて快いのは気づいていましたが、火口や羅字竹に比べて不自然に大きな雁首の脹らみは、吸口以上の効用をもっていたのを知りました。

吸いつくした長煙管の火口の巻煙草を枕元の煙草盆に払って、眼を閉じ、悶える遊女を美しい青年に、それを眺めて快げな亡人の女を、わたし自身に置き換えては、身を仰向けで長煙管を寝床のなかに持ち込んだものでございませう。

こうして現実の若い男性の体を求めようとする決意がようやく抑え難くなってまいりましたところ、たまたま遠縁になったのがあなたのお家でした。あなたには物心ともにご負担をかけてしまいました。わたしには本当に好運なこととございました。つまらぬ者と関係をもっていましたら、外聞や金銭はいいとして、心を下賤な女同様穢していたこととでございませう。

わたしはあなたにボウのプローズ・テイルを読んでくださるようお願いしました。もう三十年の昔、在学中に独りで読んだことのあのものですが、はたち前後のまる三年間埋め込まれた英語が身につけていたのは幸せでございました。これがなかったらあなたにお近

づきにはとてもなれなかったこととでございませう。あなたにわらわれたくないために、おいでになるまえには、いつも時間をかけて下読みをしていたのでございます。

選んでくださった「妖精の島」や「エレオノラ」などで、テキストから目を離してわたしに話しかけられる、あなたのお顔に見入っておりますと、女には近づきがたいあの世界、象徴によってしか伝えられない形而上の領域を、おぼろげに垣間見るような気持ちがいたしました。

予定の数枚を読み終えたあなたが、窓辺のピアノに向われたのは、三回目のご講義の日でした。夕暮れの迫る新緑の庭の彼方に、間近な山々がすっかり暗藍の色を帯びていました。あなたの指の動きにつれて流れ出た旋律は、小学唱歌「ふるさと」、兎追いしかの山——に始まる懐しい歌でした。わたしもテールを離れてあなたのおそばに立ち、小声でピアノについて歌いました。弾き終えたあなたは、ピアノに向ったまま、すこしわたしの方へ顔を向け、わたしはご覧なさらずに呟かれた言葉を、あなたの典雅な横顔とともに憶えております。それは少年そのままでの色艶と輪郭をもちながら、長い眉毛をもった眼が孤

高な高僧のそれのように鋭うございました。「都心で生れて育った僕には、こんなふるさとはありませんが、僕自身の肉体を含めて、目で見、肌で感じているこの世界の背後にあって、それを支えている形のない世界のことを考えると、胸に響くような郷愁を覚えることがあります。血と肉をもってたまたま、この世界に出てしまったために、ふるさとの英智、調和、確かさから遠く離れ、悪い夢のような異境に来て、力を失い、身を穢している自分に気づくのです。楽しかった子供の頃が過ぎて、ふるさとをぼんやりと思い出せるだけの智慧が出て来ますと……。僕には詩も数学もこの世でふるさとの調和を見ようとするあがきのようなものです。ふるさとを思い出せない人たちのなかにいる孤独の寂しさを救ってくれるし……。わからない……。あの世界への郷愁が深まれば深まる程、いやなこの世界に溺れてそれを忘れてしまいたい気も強くなる……」

わたしが初めてあなたを抱きしめたのは、そのときでした。あなたは計らずも不用意な言葉を口にされたのです。若い娘にふるさとの調和を、その孤独を癒そうとして、心に傷を負われたあなたは、わたしにそれを求め

ようとなさった。末っ子のあなたを溺愛されたお母さまと死別され、姉妹もなくて、女のことをすこしもご存知ないのをいいことに、努めて期待に添えるよう振舞いながら、わたしはあなたを捕えて欲しいままに餓飢を満たす機会を初めから窺っていたのです。事実あのとき、いかにも優しい母親のように、またプラトニックな恋人のようにあなたを抱きしめながら、しばらく頬摺りをしておりますと、わたしは抑えようもなく異常に昂って来たのでございます。

だからこそ、あなたをかかえてかたわらのソファに誘い、前後のみさかいかもなく、唇を求め、片手を下賤な女同様はしたなくまさぐらせてしまったのです。そして、そのままあなたを押し倒すや、まさぐった指先と口とに兇暴な力を加えてしまったのです。

直接わたしの口に伝った呻きにはっと自分を取り戻して身を浮かせたとき、ただ胸を激しく鼓動させて身を竦めておられるあなたを見出して、中断されたその昂りは歓喜に変わりました。

由緒正しいお家柄、受けられた最高の教育、そして何よりも聖らかな性格とそれを維持しようとなさる強い意志とが、健康な

満二十五才のお体を幼児のそのようにみずみずしく護っていたのですもの、わたしはあなたを抱き起し、眼前の現実を確めるように、喜びを抑えて泣きました。

「今夜は、ゆっくりしましょうね……。いいでしょ」

揺すられてうなずいたあなたをみ、また新しく込み上げる喜びに、目を閉じ、深く息をついて、手を離れたのを憶えています。

あとはもう、子供が垣根の赤トンボを捕えるように慎重になって、あの日は束縛も責道具も差し控えましたが、純潔の化身のようなあなたが、目に見えぬ鎖に繋がれて、身悶えるさまは、なんの鎖も青空も心にもたず、恣いままに攻めたてるものにとって、どんな呵責や凌辱に耽っても得られない充足感を与えたのでございます。

あなたもまた、鬼女そのまま胸もあらわに髪を乱し、顔を歪めて吐く息を荒くしたわたしを見上げて、純潔を噴む力そのものを見たように目を睜っておられました。その魅せられたまなざしがまた一層わたしを有頂天にしたのでございます。

わたしたちは異極の磁石のように互いに強く接合し、触れ合った電線が青い閃光を発す

するような身を灼く一閃を覚えたのでございます。まことにそれは凄じいこの世界のあらわな表現でございました。でもその背後には摂理と呼ばれるあの世界の力も働いていたのではないのでしょうか。呵責と凌辱を恣いままにしながら飢餓を鎮めたわたしは、三年数カ月ものあいだ犠牲に身を供してくださったあなたの清らかさに次第に目覚めてまいったのでございますから。それは亡夫もついにわたしに与えてくれなかった尊いものでございませう。どうか大袈裟だとお笑いにならないでくださいませ。もう二年以上もお逢いせず折に触れてあなたを思い返しておりますと、なにかあなたが、わたしたを救うために遣された菩薩のような気がしてならないのでございます。

三年を超えるおつき合いの間に、ついにわたしは敬愛する夫へのそれもただならぬ甘美な情感を胸に満して、ツァラトストラの（これもあなたに頂いたご本でした）歌う理想の婦人のように1) あなたに身を寄せることを知りました。かつての情欲の悶えなど比べるすべのない、心の奥深くひびく悲しみでございませう。あなたによってわが子をもてぬという！ どうかぜひ一度わたしに、幸せな奥

様の手から、アームチャアのうたた寝に現われたラムの幼児のような嬢ちゃんを抱かせてくださいませ。2)

続いて心に浮んでいるものが適当に表現できないままに、さきほどから、この間送って頂いた岩波の雑誌「数学」を開いておりました。男女の絆を離れて爽やかにお示しくださるご厚情の有難さ。涙が溢れそうで、それについて心楽しいのでございます。わたしなど見たこともない記号を使った数式の間に処々数行、十数行続いている文章を、立派に世に出られたあなたの喜びをとくにさせて頂きながら、なんども繰り返えして拝読するのでござ

います。

すこし、字が読みにくくなってまいりました。落葉した庭木の向うの水平線上に盛り上る濃い鼠色の雲がいましたが夕陽をのみこんで、その縁をくれないに染め、あたりの青い空をうすこがね色に透き通らせています。「ふるさと」の調和がこの世界に影を落しているようでございます。つたない即興の短歌を贈らせてくださいませ。

夕ぐれは わきて君こそ 恋しけれ

夕ぐれなみに 染る雲見つ

外は寒暖の変化のひどい今日此頃でございませ。どうかお風邪など召しませんように。

あるフエチシストの告白より

お腰と刺青と折檻

富 士 春 浪

窓のものの

毎朝、同じ道を通り、ある家の二階の窓の上に出ているものを毎朝見るです。大阪の福

島で、この辺は中以下の住宅地が多く、お世辞にも高級地帯とはいえませんが。春から夏にかけて、私が見たままを記してみましよう。

四間位いの道路で、西側は小住宅と空地です。朝夕は通勤者の足も少くありませんが日中は人足もなく、たまに御用聞き自転車が通る位です。

1) なんじらの愛のうちには、一つの星が輝いてあれ。なんじらの希望は「われ超人を生まんとねがう」というにあれーツァラトストラかく語りき、第一部、老いたる女と若き女(竹山道雄訳)

2) チャールス・ラムの恋人アン・シモンズは富裕な質商の妻となった。生涯独身で過した彼のうたたねに、アンに生き写しの幼児が現れていうーアリス(アン)の子はバートラン(質商)をお父さんだといっている。わたしは夢だ。生れ出るためには、レテの河辺でながく佇んでいなければならぬ。(エリヤ随筆、夢の中の子どもたち)

二階の窓の上、初めて見た時は別に興味もなく、ただフェチシストの私は「とろけるような赤さだな」と眺めて通り過ぎました（もともと、立ちどまって見ていては、通勤者に変に思われるので）。

翌朝も翌々朝も出ています。洗ったばかりということとは、濡れているから分るのですが、前日と同じものではなく、一日おきに同じものが出ているようです。この持主の女は毎日とり代えるのか、潔癖だな……と思いましたが、女のものばかりではありません。言いおくれましたが、女のものとは並んで、仲よく男のものも出ているのです。毎朝、濡れて。

夫婦か、情人か知りませんが、仲のよいのを人に見せる為めか、他に干し場もなく、ここに出すのか。然し、毎朝洗って干すのは、一寸分りません。

潔癖性と断定してしまえば、それまでですが、妙に好奇心をそそります。何れにしろ、年よりではなく壮年の男女でしようが、私だけでなく、通勤者も、目につかないことはないではないでしょう。

この、ふたつのものは夕刻には、とり入れられます。そうでしょう、乾けばいいのですから。

小さな表札をのぞくと「白川」としか記してありません。階下二間、二階一間位の構造で、古い建物で、何人家族か、同居人の在否も分りません。

みなさんも、窓の上に何が干してあるのかも分りでしょう。

真赤な腰巻と、真白な六尺褌です。

腰巻はモスリンのようで、巾広い白い褌が上についていて、紐はない。褌は晒しです。

男女は、夜はそれを締めて寝るのでしょうか、その他のことを知りたいのでした。

情事だけなら、ありふれたことで、想像力は不用ですが。

フェチシストの私は、女の下着はパンティやロングズロースなどは好まず、純日本式の腰巻礼賛です。近頃は洋化して、ほとんどパンティ類ですが、腰巻も大都市でも時折、見るのは見ます。東北地方の小都市、町村には夏でもネルの腰巻を用いています。ほとんど赤です。

関西から九州へかけて昔は赤一色（若い女）でした。古い川柳に遊女の色気は緋縮緬の湯文字（それも二十七才迄）と言った句が多くあったが、正に至言でしょう。

前年の本誌上で「ネルのお腰の感触」を記

したのを見ましたが、私はネルより薄いモスリンを望みます。現在はベンベルグとか化繊類がでていますが、シワになり、やはり純モスリンの感触が第一です。

冬でもモスリンの赤い腰巻を締めている女も、あったのですが、感触は、ほんのりとした肌温かさです。現代のように、腰巻の下にパンティを重ねたりしては、色消しです。

男の六尺褌が、すたれ消えていくと同じで腰巻も影を薄めているのは、何となく淋しいかぎりでしょう。

余談に亘りましたが、この二階家の男女の干物は、むやみに私の好奇心をかりたてるばかりで、褌はとにかく、腰巻の妖気に覚えるような私は、探りたくなったのです。

責め女

朝、何時頃、干すのか……と私は五時に家の附近をブラブラしながら目を配っていたのです。初夏だし、明るさは申し分なく、人の目からは散歩と思えるでしょう。やがて六時五、六分過ぎたか、二階の窓が開き、髪を乱した女の上半身が現われた。私はハッと物影に隠れて、窓の方を鋭く偷み見ました。

下の道の方を、チラと見遣って女は、手に

かかえた褌と腰巻を、悠々と竿に掛けます。洗濯したてでしょう、水で重くなっています。

女の顔を見ました。二十五六の顔の蒼い瘦せた体、然し仲々美人です。勿論、人妻でしょう。乳のあたりは低く、浴衣の間から、手を動かすたびに、ちらりちらりと、のぞき見えます。

女は分った。男は夫だろう。見なくてもかまわないが、夜から朝へかけての、ふたりの生活が知りたい（同衾でなく）何かがあるのだと……私は強く想像しました。単なる潔癖による毎朝の洗濯ではない。半ば人に見よがしに、男女のものを並べて、掛け干すのも露骨過ぎるようです。

異常神経の持主でしょう——その異常神経の持主と判明したのは、すぐでした。なぜってというと、彼等の人知れず行っている、あることを、苦心の末、偷見した私は、こうしか思えないからです。

アブとかSMとか——という言葉は初めて聞き、知った私でしたから。要するに変わった生活の体験者のことを言うのでしよう。ですから、異常な生活の耽溺とでもいうべきでしょう。

世の中に、こんなことがあるのか、こんな人間がいるのかと、奇異でなりません。女のくせに裸の夫なり、男を打ち据えて笑い、楽しむなんて……又、男もそれを喜ぶような変った風景を目の辺りに見ると、知らず知らず身体の中が熱くなってきました。

だが私にはその心理は難解です。当人たちは自身の告白を聞いても——

裏手の四畳位いの湯殿で、この家の夫が、壮年の骨格逞ましい男が、六尺褌一本で亀甲縛りにされ、天井の梁から太縄で吊られていた。それを背から腰へかけて、桜の刺青した女が、赤い腰巻一枚で、一間余の竹片をふるって、男の全身を激しく打ちつつけるです。「ウッ……」

男は苦しく悶え、大きく揺れ回る。ギツギツと梁が軋む音を立てて。

男の白い皮膚に、朱線が散りだす。よく見ると、全身に薄黒い傷痕もあるのです。

今日が初めてではなさそう。

女の刺青は凄いほど、綺麗です。素人女ではなさそうです。打音と呻り声が交錯する湯殿の三十分。ぐったりする男へ、女は浴槽の冷たい水をバケツで汲み、荒々しく男の体へブツかけます。二度、三度と。

ホツとしたような男へ、又、女の竹片が連打されます。男も女も、水びたしで、憑かれているように、加、被虐の愉悦に酔っているようです。

愉 悦

世のなかに、こんな人たちが……打ったり、痛い目に逢いながら、喜ぶような変態趣味。不思議な思いでした。

おそらく、彼等は連日行っているのでしょう。それで分った、濡れた褌や腰巻を翌朝乾すということが。

彼等は、加、被虐によって夫婦関係を満足しているのでしょうが、常人の私には判断はつきません。

そう人のことを気にするほど、私自身も常人ではないかもしれません。

モスの腰巻の感触に酔う、変った性格であるからには……。

この毎朝干される、女の赤い腰巻もネルでなく、薄い布ですから、モスカ絹でしょう。そばへ寄って、触れることは不可能ですし、見た目の感じですか。この腰巻の主も、見たし想像通りの、文身の艶治な若い女でした。

加虐性、サジストとしては典型的なタイプ

でしょう。女自身は、このモス（そうとしか見えない）の布を腰に巻いて、どういう感触があるのか、女体と男の体は違うのですからチョット想像はつかない。女は何の変哲のない、感触でしようか、ひきかえ、男は又、性的な衝動を全身に感じるのです。

色などは何の興も起こらない。現在、公然と女体にまとわれた、赤やピンクの腰巻姿を見ようと思えば、ストリップ劇場で見られますが、もちろん、肌に直接ではなく、下には白パンティをはいているので、腰巻からくるムードは、ピンときません。しかし、腰巻をした女としてなら、公然と

現在在庫本誌既刊特集号、限定版案内

○臨時増刊号「写真と絵画」——文献——特集号

定価 五〇〇円 略号「文献」

○昭和37年10月号「読者」告白、手記、体験——特集号

〈夢の緊縛特集号〉………定価 二〇〇円

○昭和35年6月号「哀憫美形特集号」

定価 三〇〇円

○限定版写真集「美しき縛しめ」第三集

定価 一〇〇〇円 略号「美3」

○限定版写真集「豊満と清楚」女体緊縛グラフ

頒価 一〇〇〇円 略号「限二」

○限定版写真集「美しき縛しめ」第四集

頒価 一〇〇〇円 略号「美4」

ここに発表しました以外の特集号、限定版は、旧号に広告してありましても、すでに在庫はございません。お申込み下さらないようお願い致します。

見られるわけです。戦前なら絶対禁止されるべきものです——

さて彼等の褌、腰巻が雨の日も風の日も干竿にかからない日はなかった。が、三月、四月、半年と、私は毎朝見てきていましたが、ある日から、パツタリと、見えなくなった。移転したわけでもない、この家に住んでいることは違いありません。

さすがに、私も心配になって、ある日裏の方にある家の人々に、何気ないようにして尋ねてみました。

「ご主人が骨を折って、入院中なんですよ。奥さんも一緒に、ずっと付き添いです。さあ詳しくは存じませんが、なんでも二階の段から落ちて、腰骨と足を折ったそうです、危いですねえ」

という返事です。

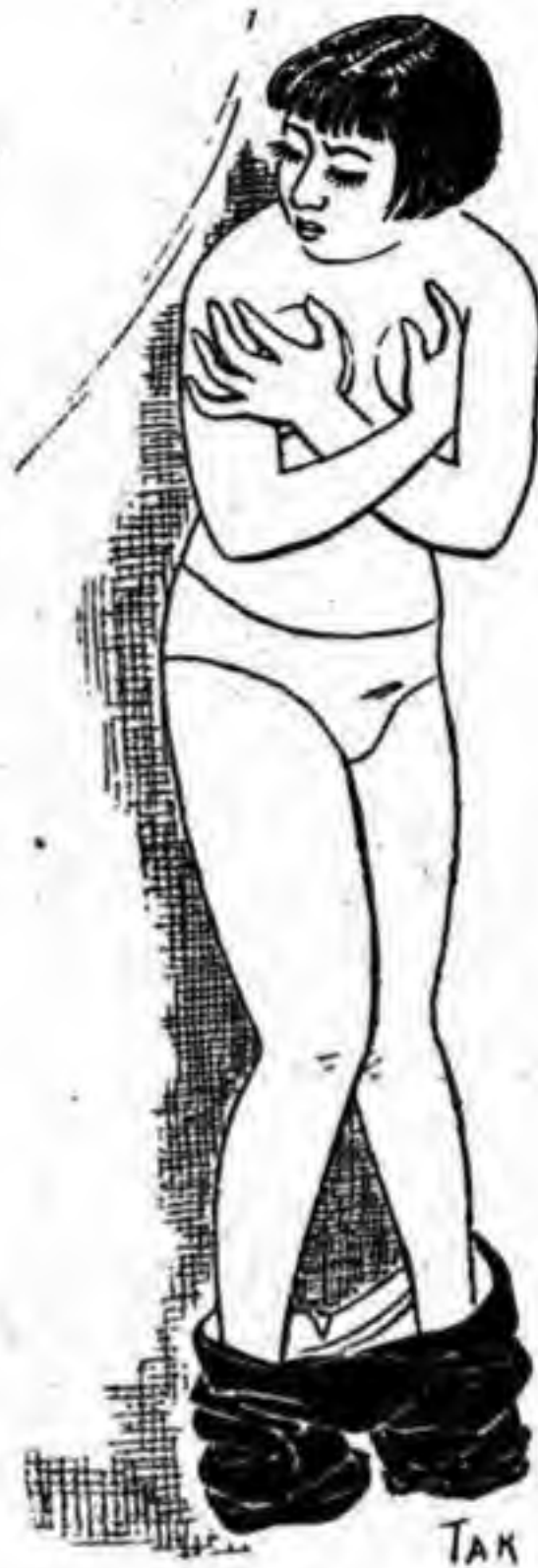
私には分ります。階段から落ちたのではなく、被虐のプレイ中、縄でも切れて、落ちて、打ちどころが悪かったのでしょう。

災難です。全快する迄は、ご当人たちは、むろんのこと、私も窓に干される腰巻も見られず、淋しい限りです。

はやく、全快することを祈って、この筆をとめます。

告白

モデルを志願したい私



この頃の奇クには、毎月のように「女性モデル募集」の記事がでています。私はこの文章を見るたびに、自分も志願してみたいという強い気持ちにかられるのです。この僅か二十数行に満たない文章が、私にとっては何のどの文章よりも強烈な刺戟となって胸に迫ってくるのです。

もう二度と見まいと誓って、ほかへ目をそらしていても、自分の手はいっしか、そのページを開いていてしまうのです。そうして、もう、何度も何度も繰りかえし読んで、空案じしてしまっている文章を、改めて読みかえ

してみるのです。

分譲写真用「女性モデル募集」○本誌では代理部の分譲写真用の女性モデルの方を募っております。口絵には発表いたしません故、御安心の上、勇をふるって御遠慮なくお申込み下さい。——この文句が私の目を離さないのです。口絵には出ないのだから、分譲写真のモデルとしては是非応募してみたいと思うのです。公立高校を卒業して一年目の女事務員。年令二十才、身長一六一センチ、体重五三キロ。この身体をモデルとして、多くの人達の目に晒してみたい、というのが私のたっ

毛^{もう}
利^り
園^{その}
子^こ

ての願いなのです。

もし、次のようなアルバイトがあったら私は第一番に志願したいと常々考えているのです。「思春期女性の身長度測定モデル」とか「生理時女性の身体的変化を測定するためのモデル」とかいうものです。病院には施療患者とかいう制度があつて、金に困っている患者は無料で診療を愛けられるかわり、医学生の実験材料や教材に供せられるそうですが、現在の私は、至極健康体だし、両親も健在で資産もありますので、そんな実験材料になんて望んでも得られないのです。

それで、せめて日曜日だけでも、私の身体をモデルとか、実験材料にして使ってもらえたらという強い気持が湧いてきます。こんな気持を起す私って、ほんとうに異常なのでしょう。時折私は、自分は結婚しても夫一人を素直に愛してゆけないのではないか、という心配がおこってきます。

私の思春期は先ず自分の身体の変化に注目することから始まりました。中学生上級の頃「貴女は色が白くていいわ」とよく言われました。その言葉で私は自分は友だちよりも色が白いんだなあと感じ、いつとはなしに次第に変化してゆく自分の身体に注意するようになりました。

鏡というものが、自分の身体各部を客観的に眺めることができる道具だということを知った私は、いつのまにか、この孤独の遊戯の虜となっていました。誰にも迷惑をかけることもなく、このとろけるような甘美なひとときを愉しむために、私の家の環境はそろいすぎているようでした。

最高学府を卒業して二十数年の公務員生活を経た父は、関連会社の重役として仕事に忙しく、且つ自由主義の権化のような性質から私の生活に干渉するようなことはありません

でした。中学から高校時代も抜群の成績を示した私に対して、母は信頼しているというよりも自慢の種だったのです。そんなわけで私が勤めに出るといったとき、母は少し難詰しましたが、父が、まあ社会勉強のためにやってみるさ、と許してくれたのです。

そんなわけですから、私が与えられた南向きの六畳の部屋で、人知れず孤独の遊戯に耽っていたとしても、誰一人不審に思う人もいなかったのです。そのうち、私は自分の行為がナルチズムというものだったことを、書物によって知りました。その頃の私は、異性にも同性にも関心はなかったのです。私の愛の対象になるのは、自分自身の美しい肉体だったのです。でも、まだその頃の私は、ただ視覚によって、自分の肉体の美しさをたしかめたいということだけだったのです。そのために鏡が唯一の小道具になったわけです。

私は自分の足の指、手の指、腓、膝小僧、お臍、乳房、踝などなどが他の誰よりも美しく可愛くて仕方がなかったのです。自分の身体を見ていると、異性なんて、なんとつまらない存在だろうと考えるのです。私が自分で自分を恐ろしくなるのは、こんなときなのです。まだ、同性だったらいいいのです。異性の汚い、醜い身体のことを考えただけでも全

身虫酔が走るのです。こんなことではいけない、こんなことではいけない、と理性では考えるのですが、そんな感情は、とても理性だけでは押さえきれないのです。

そして、そんな気持が起ったとき、いつも後味のわるい淋しさと自己嫌悪が起ってきました。でも、そんなときでも、自分の美しい身体を眺めると、甘味な花園をさまよう愉しさを味わえるのです。乙女時代の私の胸の中に巣くっていた秘密は以上のようなものなのでした。それが、高校を卒業した頃から、次第にそんな気持にも変化が起ってきました。

今までは、自分自身で自分の身体を見て愉しむということでしたが、それだけでは物足りなく、自分の美しい身体を他の人の目で見たいという気持が起ってきました。勿論他の人というのは異性のことで、それも只見られるということではなく、なにかの目的で自分の身体を実験材料に使ってほしいという気持が強いのです。ですから、単なるヌードモデルというのなんかは不満で、緊縛ヌードモデルというのが私の希望なのです。

例えば全裸にむかれて、これ以上身体が曲らないというような厳しいエビ責めにされて放置し、数人の男たちの監視の中で身体的な変化を記録されるのです。手の指や足の指の形や色の変化も、刻明にカラー写真で記録さ

れます。その他顔の表情をはじめ、身体的な苦悶が写真や文章で記録されるばかりではなく、体温、脈膊、呼吸、など内臓の調査もされます。こういったことを想像するときは、私の一番楽しいひとときです。

そして、そんな写真に記録されても、十分に男の人達の目を愉しませ、鑑賞するに耐えるだけの美しさを具えていると自惚れではないに自分でも思っています。

又若い女性の尿には多量のホルモンが含有されているので、製薬会社の実験室の中で私

が実験材料となって、直接カテーテルで採尿されるという空想なんかもします。

これは週刊誌かなにかの記事からヒントを得て、それをもとに自分勝手な夢を描いてみたので、実際は、至極健康な私は、病院へ通ったことさえなく、それがかえって、欲求不満の種となったのかもしれない。

今日も又、私は何にくわぬ顔をして会社へ通っています。誰も私のこの心の秘密を知っている人はいません。洋装をまとうて通勤電車に乗った私は、ありふれた女事務員でし

かありません。こんな大それた願いを抱いている女なんて夢にも考えないでしょう。でも私は、緊縛モデルになりたくて仕方がないのです。今ではもう、ひとり秘かに孤独の遊戯に耽っているだけでは、飽きたりなくなってしまう私です。こんな私をモデルに使っていただけるでしょうか。

日曜日だけのモデル。まことに身勝手なお願ひですが、そのかわり、十分に私の身体の隅々まで写して下さって結構です。その方が私も嬉しいのですから。

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

臨時増刊 写真と絵画 文献 特集号

直接お申込を、定価五〇〇円(十共) 略号「文献」

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女体切腹、女相撲、浣腸、とあらゆる趣向を網羅した本誌臨時増刊号の決定版。今後二度と再び集録出来ない特殊文献を掲載いたしました。売切れまらずと補充がききません故、今すぐ直接発行所まで御注文下さい。着金次第折返し急送いたします。

〔第一グラビヤ〕 (十六頁)
自己愛の女神を写す……………塚本鉄三、構成
「私の乳房を見て」……………長野 良子
露出癖の充足……………長野 良子
後手縛りのワンカット……………大塚 啓子
転ったエビ縛りの女体……………大塚 啓子
新井マリさんと共に……………由岐敏夫・構成

〔巻頭口絵〕 (オフセット八頁)
△絵物語▽白ターパンの女……………四馬孝・画
第一図章△捕獲▽……………第五図章△美容▽
第二図章△飼育命令▽……………第六図章△洗腸▽
第三図章△調教▽……………第七図章△矯正▽
第四図章△訓練▽……………第八図章△仕上げ▽
棒責め愉悅……………新井マリ子
ムチ打たれる肌……………新井マリ子
サテンの責衣緊縛……………東浦ひかる
顔なぶり、踏みつけ……………大塚 啓子
押しつぶし、足逆取り……………大塚 啓子
餅肌はくびれて……………東浦ひかる
柱縛り首縄……………梨花悠紀子
海老責二態……………梨花悠紀子
黒いアンネパンティ……………遠藤百合子

〔第二オフセット〕

(八頁)

女体切腹、城主の姫君切腹……………四馬孝・画
女相撲、御前相撲……………雪崎京人提供
マゾ画、犬になった男の告白より……………
マゾ画、谷崎潤一郎「富美子の足」の幻想、
女相撲「海辺にて」グラマールの対戦……………雪崎
女体切腹「侍女の奮戦」……………四馬孝・画

〔第二グラビヤ〕

(十六頁)

五月亜紀子さんの場合……………由岐敏夫・構成
軽い拒否と羞い……………五月亜紀子
美しい諦観のポーズ……………五月亜紀子
恐怖と怨嗟のまなざし……………五月亜紀子
鼻責「鼻孔測定」……………大塚 啓子
緊縛俯瞰姿態……………大塚 啓子
憶れの優美ポーズ……………長野 良子
両手吊りの構成……………新井マリ子
ズベ公天使(トカゲグループ)……………由岐 敏夫
1、「みんな剥いじまいな」
2、「その顔をめちやくちやにしてやる」
3、「それだけは止めておきなさい」
4、「トカゲ団の掟をよく覚えておきな」
投げ出した脚線美……………絹川 文代
悶悦ポーズ二題……………絹川 文代
嚴重な本縄掛け……………梨花悠紀子

〔写真版アルバム〕

(十六頁)

裸女斗争場面……………絹川・大塚
浣腸器を握って……………大塚 啓子
縄にくびれた柔肌鑑賞……………大塚 啓子
女やくざ一本刀姿……………大塚 啓子
女ネズミ小僧次郎吉……………大塚 啓子

高手小手二ツ折り……………松本アサ子
エビ縛り二種類……………松本アサ子
血紅使用女体切腹連続フォト……………大塚 啓子
サジスチン宮井美佐子の近影……………宮井美佐子
縛り過程の構成……………大塚 啓子
鼻責めシーンの点綴……………絹川 文代

〔本文・解説〕

(三十二頁)

新人撮影行、五月亜紀子さんの場合……………由岐
絵物語「白ターパンの女」……………辻村 隆
新しいモデルを写す……………由岐 敏夫
(告白) 宮井美佐子の略歴……………宮井美佐子
(告白) モデルとしての私……………大塚 啓子
自己愛の女神、長野良子撮影記……………塚本 鉄三

〔第三グラビヤ〕

(十六頁)

台所のめしうど……………新井マリ子
飼育のヴァリエーション……………新井マリ子
椅子に呻めく……………新井マリ子
長襦袢と腰巻……………遠藤百合子
豊満への擦過……………遠藤百合子
美しき小鳩の緊縛……………長野 良子
ポリウム自慢絵模様……………長野 良子
床柱縛りに耐える表情……………大塚 啓子
煙草一服の鑑賞……………大塚 啓子
組上の鯉と料理の仕方……………五月亜紀子
二ツ折り縛り……………大塚 啓子
鼻料理と鼻掃除……………大塚 啓子
上からと横からと……………梨花悠紀子

〔第一オフセット写真〕

(十六頁)

神さまへの人身御供……………絹川 文代
腕と脚の双曲線……………梨花悠紀子
足首の縄を解く……………大塚 啓子
緊縛女体モザイク模様……………愛川 悦子

光と影の表と裏……………梨花悠紀子
縄に狙われたポーズ……………梨花悠紀子
女相撲「四ツに組む」……………A氏提供
女相撲「吊り合い」……………A氏提供
爪切りと白足袋……………浜 千代子
高手小手腰縄……………梨花悠紀子
底園の塑像……………絹川 文代

〔第四グラビヤ〕

(十六頁)

女奴隷の飼育効果……………新井マリ子
ゴム衣着用中……………梨花悠紀子
バンド着用後後手縛り……………東浦ひかる
荒縄さらしと折檻場……………梨花悠紀子
下着の散乱する中にて……………新井マリ子
用意周到なる馴致……………新井マリ子
白刃に狙われた柔肌……………大塚 啓子
浣腸器の恐怖と幻想……………梨花悠紀子
くさり、くさり、くさり……………長野 良子
団子鼻をいためる……………長野 良子

〔第二オフセット写真〕

(十六頁)

美しき乳房……………長野 良子
愛らしき羞らい……………長野 良子
仰角のいたずら……………長野 良子
顛倒した瞬間の表情……………大塚 啓子
森の中のニンプ……………絹川 文代
緊迫の演技(斬られる女)……………愛川・田中
ヘッドロックと首絞め……………春日・愛川
SMの魅力プレイ……………三木・浜本
前手縛りと後手縛り……………梨花悠紀子
黒フンドシと白フンドシ……………大塚 啓子
Mフォト陳列——長靴にもだゆ。鉄鎖と手枷
の下で。凌辱される男ドレイ。煙草とローソ
クで——……………絹川 文代
愉快ポーズ二景……………絹川 文代

マゾヒスチック・ストーリー

瑠美子様と私

北 林 一 登

私とその女、瑠美子を知ったのは東京の盛り場にあるトルコ風呂に於てです。友人と酔いざましにと、ひやかしのつもりで飛び込んだトルコ風呂で私の番についたのが瑠美子でした。最初は馬鹿に突っけんどんに扱われて、いささか業腹であった私も次の彼女の一言で、俄然関心と興味とが昂っていったのです。

「この頃、おかしなお客が多いのよ。この間も足舐めさせて呉れなんて……………」

「それで、どうしたの？」

「勿論断ったわよ、気味が悪いもん」

「いいものらしいよ、一度ためして見たら。」

「そういう所をみると、あんたもその気があるんじゃないの。さあお風呂へ入って……………」

最初はいとも簡単にこれ位の所でしたが、私には急速に、この瑠美子という女が神秘的な美しさに満ち溢れているように思われて来ました。そう思って改めて見直して見ると、目鼻立ちのはっきりした顔は、濃い化粧によく映えてきついいけれども美しい。やや太り気味の身体の線もウエストがきゅっと締まっています。見事なスロープを描いています。髪を茶色に染めて銀色のマニキュアを手と足の爪にしている姿は、見れば見る程惚れ惚れするよくな美しさでした。こうなると突っけんどん

に冷たくあしらわれる事までもが、何となく嬉しいような快感が溢れてくるから不思議です。それに瑠美子の身体から匂ってくる体臭の素晴しさは何と云ったらいでしょう。

「いい匂いにするね」

「皆、そう云うわ」

「香水の匂いとも違うようだけど……………君自身の匂いかな」

「あたしって体臭が強いからね。あまり強すぎて、いやだって云う人も居るわよ」

「へえ、勿体ないな。こんなにいい匂いを嫌だなんて…。一寸よくかがせてくれよ。」

「エッチね。あとでよくかがせてあげるから

おとなしくマッサージさせるのよ」

マッサージが終ってからブラジャーの紐の喰い込んだ腋の下やショートパンツの股の間に首を突込んでみると、瑠美子はたいしていやがりもせず、一寸軽蔑したような素振りをして、何くわぬ顔で煙草を吸っていました。私にとってこんな女性は始めてでした。身体全体から一種の芳香を放っているようです。勿論分泌の強い場所は頭がくらくらするような強烈な匂いの交響楽を奏でているのです。

さあ、それからと云うものは、私のトルコ風呂通いが始まりました。瑠美子は決して私に対するサービスなどはしてくれませんでした。むしろ、献身的にサービスしたのは私の方でした。スペシャルサービスなどなしにスペシャル料金を払ってゆくのですから、瑠美子にとっては、いいお客だったかも知れません。私は行く度に心ゆくまで匂いの交響楽を楽しみました。瑠美子の体臭の強烈さは瑠美子の身につけているものの総てに匂いを移しているのです、下着類は勿論の事、セーター、スカーツの類まで匂いだけで彼女のものである事が判別出来る程の素晴しさでした。

女に迷うという事は、こういう事かも知れません。それまで殆んど道楽らしい道楽をし

た事もなく、三十八才の今日まで平凡に過してきたこの私が、始めて知った迷いの楽しさであり甘美さでした。瑠美子と親しくなるにつれて色々と注文も出来るようになり、又それを許して貰う事も出来るようになって来ました。使い古した七色パンティの一枚を三千元で譲って貰ったのもその一つでした。愛らしくも可憐なそのパンティは完全に匂いが消え失せるまで、どんなに私を慰めてくれた事か。美しい桐箱に入れておき、毎晩とり出しては一人寝る夜の寂しさを、どんなにかまぎらわして心暖まる思いをした事でしょうか。

「あんたも変ってるわね。私の身体より、そんなものの方がいいの。一種の侮辱よ。」

「そんな事はないよ。僕は女の人を尊敬しているからさ、特に瑠美子さんをね。僕にとって貴女は神であり女王であり、そう信仰の対象なんだよ。誰だって自分が信仰している観音さまを抱くわけにはいかないだろう。お守りを肌身離さず持って押し戴いている心境なんだ。つまりこのパンティは貴女の分身、僕にとってはお守りと云うわけだ」

「へえ、あたしが、あんたの観音様。笑っちゃやうな。一体、あたしのどこがいいの、そんなに——。」

「全部だね。目と言いい口と言いい髪といい、この美しい足といい、手といい、ああもう神々しい程に素晴らしいよ。頼むよ、時々は拝ませてくれよ。」

「拝んだらいいじゃないの、勝手に……。でもこの観音様は慾が深いから、おさい錢を沢山持って来ないと拝ませないわよ。」

一年も通ったでしょうか。その頃になると本当に観音様を拝ませて頂けるようになりました。私はもう只々感激して伏し拝みくちづけをしたいた衝動にかられて、どうしようもありませんでした。そんな心の動きを瑠美子は冷静に計算しながら、見つめていたようでした。私の狂態ぶりが、このように大分度を越して居りましたので、瑠美子の心の中にある計画が芽生えて来たのは、この頃からだと思ふのです。

私は当時、最初の妻に死に別れ、たった一人で一軒の持家に住んで居りました。給料は外食をする費用さえ別にすれば、殆んど遊興費に使えると云う、結構な身分でしたので比較的金廻りがよく、そこが瑠美子の狙い所であつたようです。

トルコへ通いはじめて一年以上経過するといふのに、彼女の身体には指一本ふれず、只



瑠美子の使い古した持物を有難がっている中年の男。ある時はペッチャンコのサンダルを三千円も出して買ってゆくし、ある時はガムの吐き捨たたたのを百円で買ってゆくと云う有様。或る日、瑠美子は私にマッサージをさせながら云いました。一寸断っておきますが、一般のトルコ風呂での女が男にするマッサージは、私達の場合とくく逆になつて居り、

を喰つて困ちやつてんの」
「えっ瑠美子さんが、いいですとも。願つてもない事だ。殺風景な家ですが、よかったらどうぞ。一番いい部屋を空けますから。」
「それで部屋代は月いくら？」
「部屋代なんか、瑠美子さんから頂くわけにはゆかんですよ。只で結構ですから、いつまでも居て下さい、お願いします。」

行く度に、私が瑠美子にマッサージをして居りました。
「あんた、いつか家の空き部屋を誰かに借したいって云つてたわね。」
「ええ、一人で住むんじや勿体ないんですよ。部屋が五つあって私一人ですからね。」
「下宿人を置くんだったら、私を入れてくんない。今いる所、追い立て

「只つてわけにゆかないだろうけど、じやその事は後できめるとして二、三日うちに引越してゆくわよ。」

と云うわけで彼女の押し掛け女房のような引越しがあつて、私の居間にしていた南向きの八畳の間は、瑠美子の派出な長襦袢やネグリジエで飾られる事になりました。私は近所の人やら親戚やらの思惑を、始めのうちは気になりましたが、そのうちにどうせ私の変人である事は知れているのだからと気にしない事にして更に愚かな迷いのうちに没入していったのです。

それからの私の毎日の生活は幸福に満ち満ちて居りました。あの事件が起る瞬間までは、とつけ加えて置きましょう。私の部屋は北向きの三畳の間に代りましたので、全くこの家には女主人が新しく出来て、召使か下男が一人仕えているといった形が、無理せずに出て上つたわけです。

私の瑠美子に対する奉仕も実に献身的なものでした。只私の勤めの時間と、彼女の勤めの時間が喰い違つて顔を合せている時間が少いのが残念でしたが、食事の世話から洗濯、掃除等、瑠美子は一際面倒な家事はやりませんでしたので、結局強制されたのでは

ないのですが、私がするようになっていました。性格がルーズなのか面倒くさがりやなのか、パンティなども一寸気付かないでいると二週間でも三週間でも洗濯をせず押入の中に山のように洗濯物をつっ込んであると云う仕末です。それが私の又楽しみの一つでもあるのですが、しようがないね、などと云いながら欣喜雀躍、洗いにゆくわけです。

口紅のついた煙草の吸いがら等も部屋中に散らかしてあり、ちり紙等も満足に屑かごに捨ててある事はありません。彼女が仕事に出かけて居ない留守に、それらを片付けながら、私の楽しいコレクションはどんどん増えてゆきました。彼女の使用した鼻をかんだちり紙、メンスに使用した生理綿やアンネナプキン等ショーツやパンティ類は無論の事、ハンカチの古いもの、ストッキングの足むれで甘酸っぱい香りが一杯のお古、又頼みに頼んでトイレで使用した京紙等、一つ一つが彼女の体臭、分泌物がしみ込んで居り、香ぐわしい芳香にまぶされた私の宝物であるわけです。私の三畳の間は、それらのコレクションで一杯になって居り唐紙を開けた瞬間にプーンと瑠美子の体臭が匂ってくるし一步その中に入れば、そこは正に匂いの花園と云うこの

世の楽園と化すわけです。

ある夜、瑠美子は私を部屋に呼んで云いました。

「あんたは、私を神様だとか女王様だとか、崇拜しているとか、なんだかんだ云うけど、どの位崇拜しているのか見せてよ。」

「いいですとも、私に出来る事なら何でも致しますよ」

ここで瑠美子は、いたずらっぽく笑いました。

「私の観音様に接吻できて？」

「出来ますとも……それこそ私の一番望む所ですよ。今まであまりにおそれおおくて、云い出せなかったんです」

「おやおや、可愛い坊やだこと。じゃ仕度をしなさいね」

瑠美子は私に洋服を脱ぐように命令しました。自分も脱ぐのだから、お前も脱げと云うわけです。そして手を後に括りあげ目かくしをしました。こうしないとお前の目がつぶれるから、と冗談をいって、私をそんな恰好にさせてから、おもむろに自分は身体を横たえたのです。約一時間程、私は懸命になって奉仕を致しました。昔の支那の宦官の苦勞もさぞやと思われました。そしてこの行為が、こ

の行為こそが私の全存在を彼女に屈服させ跪まづかせたと云えるかも知れません。

私はもう頭が狂いそうでした。日夜瑠美子の白い幻想にさいなまれ、その妄執から離れる事は出来ませんでした。私は自己の全存在を否定して只瑠美子への奉仕にのみ生きようと決心し、そう思い込まされてしまったのです。一度この味を知った私の狂いそうな思いを瑠美子は冷たく計算していたのでしよう。

その後は一回このお相手をつとめさせて頂く度に一万円ずつ要求するようになり、私の貯金は目に見えて減ってゆきました。

現金で百万円程あった私の貯金が、あと幾許もなくなった頃の事です。私はいつものように一万円を用意して女王様のお帰りを待ち受けて居ましたが、その日はいつもより大分遅い御帰還でした。瑠美子はお酒を飲んで居り足がふらついて居りました。それでも機嫌よく、いつものように気だるそうに身を横たえました。私は目かくしのまま、むせかえるような芳香に夢中になっていました。アルコールの入っている彼女にいつもより大胆でした。

そのときでした。いきなり部屋の扉ががらりと開いて誰かが入ってくる気配でした。私

は動天してしまいました。何しろやっている行為もそうですが、私の恰好の奇妙きてれつさ、更に目かくしをしているので相手が誰か見る事も出来ないのです。

「誰だ、何の用があつて他人の家へ入ってくるのだ。」

それでも私は強気に怒鳴っていました。しかし、又なんという哀れな姿でしょうか。所がその男はこう云つたのです。

「用があるから来たんだ。この女は俺の女房だ。なあ瑠美子、それを承知で、あんたはこんな事をしてゐるのか。」

まだ若い声でした。二十才前後の子供っぽいようなやくざじみた声で、それでも精一杯私を嚇かすのです。

「瑠美子さん、それは本当ですか？」

私は必死になつて叫びました。

「御免なさい。でも、この人、この三年間、刑務所へ行つていたのよ。だから、私つい云いそびれてしまつて……」

私は青くなりました。刑務所帰り、ドス位持っているかも知れませんが。私は裸で後手に括られ目かくしです。どう見ても勝味がないので、私はそこへへたと膝をつくと頭を床にすりつけていました。

「許して下さい。知らなかったんです。今瑠美子さんが仰言つたように、私は聞いてなかったのです。御主人様が居られると知っていたら、こんな事はしません。勘弁して下さい。許して下さい。」

私は泣かんばかりにして頼みました。あとで判つたのですが、これらの事は皆瑠美子と、その情夫が仕組んだ芝居で最初から計画的に演じられたワナであつたわけです。刑務所帰りと言ふのはつくり話でした。

私はそのままの恰好で柱にくくりつけられ目かくしをはずされました。男はやはり二十三、四才のバーテンのような男でした。考えてみれば三十八才の男が二十才前後の二人の男女にいためつけられているのですから、情ない話です。そこで私はさんざん男に嚇されたあげく次の事を約束させられました。

一、夫が三年間、刑務所に行つてゐる留守の間、妻瑠美子をおもちゃにした代償として北林一登は、この家と土地とを無償で瑠美子に贈与すること。

一、それ故に今後は瑠美子とその夫が、この家に住み、北林一登はこの家を出なければならぬ所であるが、二人の特別なお情けに

より、台所脇の二畳の間を一室貸し与えられること。

一、その部屋代として月々五千円を支払うこと。

一、北林一登は、この室に住んでゐる限り、瑠美子とその夫に下男として仕え献身的に奉仕しなければならないこと。

一、瑠美子夫妻の気が変れば、いつ追い出されても一切文句を云わないこと。

以上がその約束文ですが、私はこの契約書にサインする約束で、やっと縛しめをといひ貰つたわけです。

このようにして、私の全財産である土地と家屋、時価六百万円位する、この家は瑠美子の物として登記されてしまいました。こうなると法律的にいつでも私は非常に弱い立場に立たされてしまつたわけです。前の契約書の通り私は現在の奥様御主人様の為に献身的に奉仕をしないといつ追い出されるか判らないわけですから、今までのプレーとしての奉仕ごっこではありません。必死になつて二人の御機嫌を損じないようにつとめて居ります。瑠美子様は最近益々美しくお太りになつてこられたようです。何しろ近頃はトルコ風呂

もやめてしまい若い御主人様と二人で昼間からごろごろ家で遊び呆けているのですから、ぜい肉がついてくるわけです。生活費はどうしているのかと云うんですか？ 勿論私の稼いでくる給料が殆んど全部瑠美子様二人の生活費になっているわけです。部屋代やら相変らずの瑠美子様の使い古し品のコレクション代やら又一回一万円のあの行為やら……私から金をしぼりとる手段はいくらでもあるわけですから。又私もこのような状態になっていれば、私がこの家から追い出される心配はないので非常に満足しているわけです。

瑠美子様は、やっぱり私の美しい女神様です。どんなに崇拜しても尊敬しても、したりない位に気高くも尊いお方なのです。今は男神様とお二方になれましたが、これも又止むを得ないでしょう。私は馬鹿と云われようと痴れ者と云われようといいいのです。私がこれです。でも私は一向構いません。瑠美子

様のお側にお仕えして、瑠美子様の芳香を嗅ぎ、瑠美子様のために全身全霊を捧げている時、私は他人には絶対にわからない幸福感に酔い痴れているのです。

いかがですか、皆さん。私の愚かな繰り言をお聞きになられて、どうお感じですか。さぞかし羨ましくお思いでしょう。

ああ瑠美子様、瑠美子様。今夜も私は貴女の分身を抱きしめながら悶々として寝るのでございます。

ああ瑠美子様——。

〔最新版〕 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙 (9×13 種) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B 1	全裸エビ責仰向け (関谷)
B 2	逆エビ責め全裸像 (水本)
B 3	乳首ペンチ挟み (竹野)
B 4	後手十字縛肩口上 (梨花)

B 5	足の裏擦り責め (竹野)
B 6	おへソいじめ大写真 (関谷)
B 7	剃いだバタフライ (関谷)
B 8	貴方に捧げた裸身 (大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶 (大塚)
B 10	無防備双手吊り (絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り (水本)
B 12	糸纏わぬ股間縛り (水本)
B 13	全裸亀甲股間縛り (関谷)
B 14	足踏付け二つ折り (大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち (関谷)
B 16	手錠にもだえる (竹野)

B 17	尻突出エビ責め (水本)
B 18	椅子開股鼻責触手 (梨花)
B 19	息もつかせぬ猿轡 (竹野)
B 20	投げ出した全裸 (関谷)
B 21	美しき尻部の露出 (絹川)
B 22	猿ぐつわ悦虐境 (竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美 (竹野)
B 24	強制鼻挟水吞ませ (梨花)
B 25	苦悶にねじる裸身 (関谷)
B 26	責めに気を失って (関谷)
B 27	さアどうでもして (関谷)
B 28	豊麗乳房膨隆縛り (竹野)
B 29	投げだされた女体 (竹野)
B 30	裸身をくびる麻縄 (梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ (梨花)
B 32	全裸逆エビ片脚拳 (東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地 (東浦)

B 34	すべてをさらけて (関谷)
B 35	ムチ打ち失神寸前 (関谷)
B 36	クリップ鼻挟み (絹川)
B 37	台上のマゾポーズ (大塚)
B 38	吊られゆく美体 (絹川)
B 39	拷問に無惨な美貌 (梨花)
B 40	マゾ女性の表情美 (東浦)
B 41	喰い込む股間縛り (絹川)
B 42	灸責めに悶える (梨花)
B 43	犠牲台の人身御供 (大塚)
B 44	美肌無茶苦茶縛り (絹川)
B 45	裸身に立つ蠟燭 (大塚)
B 46	手枷足枷大写真 (四方)
B 47	鎖に悶える足首美 (柳初)
B 48	蛇責めに柔肌栗然 (梨花)
B 49	鼻の玩弄恍惚境 (大塚)
B 50	女囚愛縛さらし (絹川)

SM図書紹介

澁沢竜彦の「快楽主義の哲学」について

夜 乃 探 郎

澁沢竜彦の「快楽主義の哲学」について

ベストセラー作りの王様とまで定評される光文社の虎の子は、なんといっても「カッパ・ブックス」であるが、その中から今度は澁沢竜彦の「快楽主義の哲学」が出版された。

この書物はまったく人を喰ったもので、著者も、カバー裏の「ことば」で「この本のかで、わたしは、「情死の美学」を讃美したり、「乱交のユートピア」に思いをはせたり「性感帯の拡大」を呼びかけています。気の弱い人が卒倒するようなことも書いてあります」と言っている。では、この内容をつらぬ

く作者の思想は何か——。「快楽は発見である。コロンブスのたまごと同じように、快楽とは、自分で発見しなければ意味がないものだ」——ということらしい。

以下、単なるダイジェスト的なものでなくS・Mマニアの立場から比較検討し、私なりの感想を折りまぜて、この書の紹介を試みたい。澁沢氏と言え、もうすでにサド裁判のスター？で、その名一世にとどろかした人物だ。作家、三島由紀夫氏の言葉をかりると「珍書奇書に埋もれた書齋で、殺人を論じ

、頽廃美術を論じ、その博識には手がつけられない」そうであるから、うれしくなってしまう。

現在、青少年非行化防止のために悪書追放の風吹きまわるとき、では、このサド文学研究のオーソリティの彼は、この問題について何んと考え、意見を述べているか。本文の第六章「あなたも快楽主義者になれる」から。「悪書追放」などといって先ごろ、婦人会や音年団が音頭とりになって、エロ雑誌や不良マンガ本をポイコットする運動が行われた



ようですが、あれもどうかと思います。あんなふうにして、日本国じゅうを清潔なサナトリウムみたいに消毒してしまったら、日本国民はすべて弱々しい病人のような精神の持ち主になってしまうのではないでしょうか。日本国民がすべて純潔な処女と童貞ならば、話はべつですが、実情はそんなものでもありませんまい。エロチシズムというばい菌を根絶やしにしてしまうのは、人類が地球上に繁殖している以上、とうてい不可能ではないかと思う。むしろ「悪書」なんかを目にしても平気でいられるような、強い精神を養うために、子どものうちからエロチシズムの免疫注射でもしておいたほうが、気がきいていると申せましょう。

なお、河出書房刊の「文芸」三月号の「文芸内閣」に「悪書ノススメ」として、やはり、この問題にふれている。タイトルの脇に「読書人の皆さん、クスリになる良書ばかりでなくドクある悪書もお読み下さい。読書の味がわかります」となっている。本文に関係のあるところだけ、抜書してみよう。

「作者 註」

（第一線の作家が各大臣となって、毎回、一つのテーマを、種々と発言、閣議を進めると

いう企図である）

吉行国務（作者 註、吉行淳之介のこと）
「いまは子どもの話をしているから子どものほうを言うが、免疫というより、実際問題として害があったかどうかということだな。どうだろう……」
「作者 註」（これについて二、三の発言あり）

北厚生（作者註、北杜夫のこと）「良書というのはみんなある程度を含んでいるんで、ぜんぜん毒がないのは良書ではないでしょう。」

吉行国務「そういう高級なことではなくして（笑）——以下略——」

平野自治（作者註、平野謙のこと）「ネ、しかしそれはぜんぜん、ああ、これはまた出てきた、ということ、たいして刺激は受けなかったけれども、僕らの中学校は、ああいう小説類を読んじやいけないということをはつきり禁止しなかったように思いますけれどもね。——中略——官房長官がさっき言ったような、国禁の書というもののばかり読んだので、ふつうの意味では悪書ばかり読んできたんだけれども、それでご覧のようなものになっていくんだけれども、実害があったかなかったか、どうでしょうかね」（笑）

（作者註、平野氏が言う「あういう小説類」とは立川文庫、ラディゲの「ドルジェル伯爵の舞踏会」、ゾラの「居酒屋」江戸川乱歩の「パノラマ島奇談」ATC）

要するに、悪書追放の側面をのぞくと徐々にはあるが、良識ある文化人、文学者が、文学的な、芸術的な立場から、その行過ぎの難を、ユーモア的に、または直サ的に種々の機会をとらえて、発言するようになったことを注目したい。閑話休題、本論に移ろう。
「第六章快楽主義の巨人たち」リベルタンの放蕩——サドと性の実験——の中で「マルキ・ド・サド（一七四〇—一八一四年）はサディズムの元祖として知られるフランスの文学者ですが、性犯罪に類するささいな事件を起したため、警察に追われ、生涯の三分の一以上を牢獄のなかで過した不幸な人です。彼の有名な小説は、ほとんどすべて、暗い牢獄のなかで書かれたわけですよ」

このサド文学が、牢獄という、制約された特殊な世界から、創造されたことに、私は興味がある。よく「空想」とか「耽美」「幻想」という文学のジャンルは、ややもすると、現実離れした作品と思われるが、むしろ「虚構を構えて真実に迫る」もっともオーソ

ドックスな文学の本質をわきまえたものであることをこの際、図書紹介をかりて言いたいのだ。かえって、現実を知り、イヤになって虚構の世界をもって、現実を批判する——これがSM小説の、私なりの耽美的なる文学観でもある。

サドの小説が、単なる悪書でなく、S的な素晴らしい文学作品であるという評価は、この点にあると私は思う。波沢氏の文章を見ると「もともと、リベルタンという言葉には、宗教的な意味があつて「信仰および宗教的義務に従うことを拒否する自由な精神」を意味しており」このリベルタンなるサドの作品は、このことを、よく判らないと、正しい読後感が生れない。また波沢氏は「サディズムとか、マゾヒズムとか叫ばれる傾向は、ふつう、性の倒錯、変態的な異常な行為と見なされておりますが、近代の性科学者や心理学者も証明しているとおり、どんな人間の心のなかにも、ひそかに存在している普遍的な傾向です。これは、私も常に思っていることで『奇ク』の新しい風俗文献誌としての、評価は、その実態を理解ある編集ぶりで追求、さらけ出し、アブノーマルな世界にオアシスを提供し、その記録が、後世までも残る——ここに

あると考えるのだ。

「現実の世界で快樂を求めることが不可能になったサドは、やむをえず、空想の世界で快樂を追求するようになりました。こうして、作家としてのサドが誕生したわけです。牢獄のなかで、彼は膨大な量の作品を書きました。この一節なども特別に興味を引かれた。ついでにもう一つ。これは、同じ章で、「血と太陽の崇拜者——反逆児ワイルド」についてふれているところ。ワイルドが「きのうから何をしていたか。」とジイドにきくと、きまじめなジイドは、日常のつまらぬことしか答えられませんでした。話の種がなかったのです。するとワイルドは、額をくもらせて「ほんとうか。」と念をおしてから、つぎに、こういいだした。「ほんとうのことをくり返してしやべったって、しかたがないではありませんか。だいいち、ちっともおもしろくない。二つの世界があることを知らねばなりませんよ。その一つの世界とは、現実の世界で、これは話さないでも存在している世界、話さないでもわかっている世界です。もう一つの世界は、芸術の世界で、これは話さなければいけない。話さなくては存在しない世界なんだから。」と「どうでしょう。私は、とても気

に入った。オハヨウ、コンニチハ、イイオ天気デーなど、日常のことはつまらんですネ。この場合、現実のことは、私なりにこう考える。表面に出た世界のこと。だれでも判っている。「働らいて、食べて、ねる」でしよう。秘められた世界、例えば、SM的プレイの世界は、現実の世界の中にあつて、異常な別の天地を形成している。そこに美を感じ、悦虐のスリルを味おう——それを告白、手記、創作、フォートナりの方法で、誌上に再現する。これは、もう芸術の世界であると思う。ワイルドの言葉をかりると話さなくては存在しない世界なんだから。

はじめにもおことわり書したように、私なりにかたよった、とんだ図書紹介ではあるが『奇ク』の読者の一見を勧めるために書いてみた。終りに同書のカバー裏にある言葉をもって、この稿をとじたい。「幸福ではない断じて幸福ではない、快樂だ。——オスカー・ワイルド」。

△参考▽

波沢竜彦著「快樂主義の哲学」

光文社刊 (定価二四〇円)

【新版】女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ (愛川)
E 2	仕置を受ける裸身 (大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌 (愛川)
E 4	ムチに耐える美肌 (関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり (愛川)
E 6	捨身の後手観念像 (大塚)
E 7	足から眺めた裸身 (水本)
E 8	全裸エビ責尻強調 (関谷)
E 9	ハリツケられた娘 (大塚)
E 10	強烈後手高手小手 (愛川)
E 11	責め抜かれた疲労 (梨花)
E 12	逆エビにもだえる (大塚)

E 13	拘禁された美囚女 (大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛 (愛川)
E 15	海老責に泣く足首 (大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ (愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘 (大塚)
E 18	美しき全裸股間縛 (大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ (関谷)
E 20	ベッドにもだえる (関谷)
E 21	身体中に強烈な縄 (愛川)
E 22	放置された海老責 (東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる (東浦)
E 24	ローソクで責める (大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ (絹川)
E 26	足指先に漂う媚態 (関谷)
E 27	後手吊り正面裸像 (関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛 (東浦)
E 29	女体の全部を晒す (愛川)
E 30	激しいムチ打の果 (関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ (東浦)
E 32	投げ出した脚線美 (絹川)
E 33	脐中心の腹部緊縛 (梨花)
E 34	セーラー服の哀歓 (梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部 (関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女 (梨花)
E 37	制服の女学生縛り (梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻 (関谷)

E 39	痛打にくねる裸身 (関谷)
E 40	乳房に加える金具 (大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔 (大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む (大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身 (梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶 (大塚)
E 45	敷布の上ののびて (絹川)
E 46	鼻いじめのアップ (梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄 (東浦)
E 48	縄にくびれる裸身 (東浦)
E 49	椅子に晒された女 (大塚)
E 50	脐そうじをされる (大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う (絹川)
E 52	火のついた煙草責 (四方)
E 53	踏みつけられた胸 (梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘 (大塚)
E 55	手足猪吊りの美態 (絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛 (絹川)
E 57	諦めた観念全裸像 (水本)
E 58	縄にもだえぬ姿 (絹川)
E 59	黒髪を吊られた女 (大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ (絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身 (竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す (竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目 (大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会 (絹川)
E 65	野外の後手宙吊り (梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中 (四方)
E 67	室内の後手宙吊り (梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態 (梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ (大塚)

E 70	足の裏ハネ操り責 (梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み (竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責 (梨花)
E 73	梯子責にあう美女 (梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる (梨花)
E 75	娘十六しぼり加減 (花坂)
E 76	踏みにじられた顔 (大塚)
E 77	逆エビに反る足先 (大塚)
E 78	両手吊りのお仕置 (絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻 (梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像 (大塚)
E 81	食卓上の縛り人形 (大塚)
E 82	むしられる下着 (大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り (梨花)
E 84	寝台上的の若妻狂態 (関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り (東浦)
E 86	種姿後手縛り吊り (東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒 (関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図 (大塚)
E 89	令嬢後手高手小手 (絹川)
E 90	脐部乳房強調緊縛 (東浦)
E 91	責衣にくるまれて (東浦)
E 92	全裸逆エビ責め (水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ (梨花)
E 94	全裸後手縛り閨晒 (関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ (関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ (東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り (梨花)
E 98	全裸正坐縛り狼轡 (関谷)
E 99	豆しぼりの狼轡 (絹川)
E 100	強烈縛り脐いじめ (東浦)

連載小説

はなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへび

花

と

蛇

続篇（第八回）

團
鬼
六

美女と木馬

小夜子は、柱より外されたが、後手に縛しめられた縄は解かれず、眼の前に引き出された木馬の上に、いよいよまたがせられようとしている。きらめくように白い光沢のある小夜子の肩のあたりに、ちんぴら達は、ごくりと生唾をのみこみながら手をかけて、木馬に乗上げるべく引き起そうと始めたが、小夜子はそれにさからって、激しく首を振って泣きじゃくりながら、木馬の足のあたりに猿のようになちぢかんでしまふのだった。

「ああ、お願い、許して、許して頂戴！」
小夜子はぴったりと腿をすり合わすようにし、身をちぢませ、キリキリと齒を噛み鳴らして鳴咽する。

何という残忍な人間共であろうか。深窓に育った気品のある美しい令嬢を、生まれたままの姿にするだけではあき足らず、塩水などを無理やり飲ませて生理の限界に追いこみ、更にその身をおぞましい木馬の上に乗せ上げて、美女の苦悶する姿態を眺め、酒のさかなにしようとするのである。

「う、うう——」

小夜子は、美しい額に脂汗をにじませて、木馬の下で生理の苦痛と戦っている。ふと氣をゆるませれば、死ぬより辛い落花微塵のまじめな浅ましい姿を、これら悪鬼達の眼にさらさなければならなくなるのだ。

小夜子は、獣のようにうめき、頭を床にすりつけるようにして、悶えつづけている。

「ふふふ、そんな所でもじもじするより、木馬にまたがってもじもじしなよ。さあ、立ちな、お嬢さん」

朱美は、ちんぴら達と一緒にあって、うしろから小夜子の肩をつかみ、有無をいわせず

立ち上らせる。

「あ、ああ、きらい、きらい！」

小夜子は絶叫したが、ちんぴら達は笠にかかったよう手とり足とり小夜子を横抱きにして木馬に乗せ上げようとするのだ。

「誰か、ああ、誰か助けて！」

小夜子の悲鳴を悪鬼達は心地良く聞きながら、遂に彼女を木馬へ乗せあげる。

「しっかり股を開いて、ちゃんと乗らなきゃ駄目じゃないか」

ズベ公達は、クスクス笑い合う。

ちんぴら達に木馬の上へ追い上げられたものの、かたくなに足を閉ざし、全身、石のように硬直させて、火のように熱くなった顔を振りつづける小夜子をズベ公達は木馬の下からはやし立てるのだった。

「普通、拷問用に使う木馬の背は、けずってとがらせてあるものだよ。そんなスベスベした丸い背に乗せてもらえるなんて、幸せじゃないか。さあ、ちゃんとまたがるんだ」

小夜子と一緒に木馬の背に飛び乗ったちんぴら達は、狂乱の小夜子をようやく木馬にまたがらせ、ほっとして木馬からとびおりる。「いいスタイルね。美しい令嬢の乗馬姿ってのは、仲々いかすわ」

ズベ公達は陶然としたように木馬の上の小夜子を眺めるのだった。

雪白の美肌を麻縄で後手に縛りあげられ、木馬の上に堂々とまたがった小夜子の美しい姿態。

何よりもズベ公やちんぴら達の眼を見はらせたのは、その光沢のある美女の肌と、均整のとれた姿態である。麻縄にその上下を固くしめあげられた、ふっくらとした形のいい乳房。ウエストからヒップに至るまでの見事な曲線。木馬の背の上で左右に割れてすらりと伸びた足の線も美しい。

そして、木馬に乗った美女の全身からは、艶めかしい香料が四囲にひろがっていくようである。ズベ公もちんぴら達も、小夜子のそんな美しさにただ眼を見はるばかりであったが、木馬の上の美女は、自分のそうした美しめな姿態に恥しさを覚える余裕も、もうないようであった。全身を火柱のように熱くさせながら、必死になり、ただ一途に、耐えつづけているのである。

「ああ、も、も、ううー」

美しい顔を伏せたり、のけぞらせたりして悶えている。八の字になっている形のいい白い足が海草のようにゆれ動くのだ。

「ふふふ、木馬の上でもじもしし始めたよ、この御令嬢」

悦子が笑い出す。

「川田兄貴達がもどってくるまで、がまんしなきゃ駄目よ。木馬の背を汚したりしちゃう知れないからね」

つづいて義子が、

「木馬を足でしっかりはさんで、しめてみな。そうすりゃ少しは楽になるさ。ふふふ」
そんな揶揄を受けながら、木馬の上の小夜子は、もう悲鳴をあげる気分も失せたかのように、がっくりと首を落とし、義子がいうように自然に両肢で木馬の背を固くしめ始める。だが、いよいよどうしようもない限界に達したのだろう。小夜子は、キリキリ歯をかみ鳴らしながら深く垂れていた首を大きくうしろえのぞらせた。固く閉ざした瞳からは幾筋もの涙が美しい頬を伝わって流れ落ちるのだった。

毒婦の恋

さて、鬼源の調教室では——静子夫人と京子の熱演を眺めている銀子の顔が次第に硬張り、眼までつり上っていくのである。二人の美女が鬼源に強制され、演じ始めた事を見て

いるうち、最初のうちは、銀子も倒錯したサジスチックな悦びと、妙に身内が燃えはじめ一種の快感に、陶然とした気分浸っていたのであるが、次第に静子夫人と京子が一切を忘れたよう没我の境地に入つて、お互いを責め始めた様子を見ているうち、嫉妬めいたものが、胸をキリキリしめつけ出したのである。美しいものに対する憎悪も裏返せば嫉妬になる。

それにしても、鬼源と共謀して、二人の美女にそういう行為を強制させ、我を忘れて、そういう行為にしたらせるべく、努力しながら、実際に二人の美女が思い通りのコンビになればなったで、それを嫉妬するとは——全く銀子という女は、どこまでも変質的に出来ているのだろう。

「どうしたい。銀子姐さん」

鬼源は、茶わん酒をあふりながら、妙に青ざめた表情になつて、美女のプレイを眺めている銀子にいった。

銀子は、それには答えず、鬼源に強制されるまま、何度目の頂上を極めて、ぐったりとなり、しかし、その余韻を楽しむかのよううっとり眼を閉じ、ぴったりと唇を合わせ合っている二人の美女に、ガラガラする瞳を

向けているのだ。

鬼源はニヤニヤしながら、動かなくなった二人の美女に近ずき、小腰をかがめて、「こりゃすげえや。待ってな。今、その汗をふいてやるからな」

鬼源に始末をされ始めると、静子夫人も京子も、ふと我に返つたよう真っ赤になった美しい顔を互いにそむけ合い、自意識がもどつてたまらない屈辱に、わなわな体を震わせるのだった。

「さあ、さっぱりしたところでもう一度——」

鬼源が口元を歪めてそういった時、銀子が吐き出すように、

「もういいわよ。それ位にしておきよ」といった。

「何だ、もういいのかい。俺はあんたがどうしても、三回以上、プレイさせてくれというもんだから——」

「もういいわよ。たくさんだ」

銀子は、白眼をむくようにして夫人と京子の間に立つ。

「ふん、いい気なもんだ。遠山財閥の令夫人が、……嬉し泣きなんかしてさ」

銀子は、眼を伏せ、顔をそむけている静子夫人に向つて憎々しげにいう。

「あたいわね。奥さんの近寄りがない美しさや気品の高さってものに、あこがれたし、ひがんでもいたのさ。可愛さあまって、憎さが百倍、だからずいぶんとひどい目にもあわしたんだよ。ところが何だい、今のさまは。笑わせるんじゃないよ」

それを聞く鬼源も、ゲラゲラ笑いながら、奇妙な声を出す。

「ねえ、京子さん、静子、静子、どうしたらいいの、なんて全く可愛い事をおっしゃったぜ。桂子に聞かせてえぐれえだ」

すると、銀子ニヤリと口を歪めて、

「そうだわ。桂子や美津子にも、そろそろこういう事を教えなきゃならないわね。じゃ静子夫人、明日は、貴女に桂子の稽古台になってもらう事にしようじゃないの」

それを聞いた静子夫人は、はっとしたように伏せていた顔を上へあげ、おびえた美しい瞳を銀子に向けるのだった。

桂子の稽古台——何という恐ろしい銀子の着想であろう。自分の本当の娘ではないにしても、夫、遠山隆義の先妻の娘、桂子、その桂子が、つまり、継母になる自分と、そんな事を——。静子夫人はくらくらと眼まいが起りそうになった。

「後、後生です。銀子さん、それだけは、それだけは——かんにんして」

静子夫人は激しく肩を震わせて泣きじゃくる。一層、舌でもかみ切りたい気持だった。

「何いってんのよ。ママが優しくリードして教えてあげる方が、娘としても、一番よく理解出来るってものじゃないの。桂子の成長ぶりをたしかめるためにも、それが一番いい方法だと思わ」

銀子は小気味良さそうに、そういうと気遣いじみた笑い方をするのだった。

「鬼、鬼よ、貴女達は！」

京子も歯を喰いしばったような表情して、銀子の顔を見上げていう。葉桜団ズベ公達の常軌をいっした残忍さに、京子はわなわなと体を震わせ、憎悪のこもった瞳を向けたのだが、いきなり、銀子に頬を平手打ちされ、京子は、あっと声をあげ、その場につんのめってしまふ。

「生意気な口をきくんじゃないよ。毎日、楽しい思いをさせてもらってるくせに何だよ、そのいい草は。そうだ。美津子の稽古は、お前さんにつけさせてやろうよ。そんなら文句はないだろう」

そして、銀子は鬼源に向い、

「今、いったように、桂子は静子夫人、美津子は京子に指導させる事にするからね。一つよろしく頼むよ。明日までに、そういうコンビにびったりの道具を作ってやっておくれ」
よかろう、と鬼源は、相変わらず、茶わん酒を口へ運びながら、

「俺は、田代社長から、たんまり礼金を貰う事になってるんだ。礼さえ頂けりゃ、こちとらも好きな道さ。お前さん達が望む事を何でもやってやるぜ」

と銀子にいうのだった。

「そうかい、頼もしい事をいつてくれるじゃないか」

と銀子は顔をくずす。

「いくら本当の姉と妹とはいえ、とにかく、二人とも女であることにや違えねえ。女の体ってものは不思議なものさ。ま、一つ俺の腕前を見せてやるさ」

鬼源がそういった途端、ヒィーと京子は悲鳴に似た泣声をあげ、床にうずくまり、深く、首を落してしまった。

この狂気じみた悪魔達に対し、夫人も京子も、反抗的な言葉一つ、投げかける気力とてもなかったのである。

「さあ、今夜はこの位にしておいてやろう。」

二人とも自分のねぐらに戻ったら、どんな風に桂子や美津子を指導すりゃいいか、よく考えておく事ね」

静子夫人は、柱に固定された体は離されたが、後手に縛り上げられている縄は解かれず銀子に縄尻をとられ、尻を足で押されながらふらふらと歩み出す。京子は鬼源に引き立てられるのだ。

三階の調教室から一階へ、そして、廊下の隅の上げ板を外して、二人の美女は地下室へ押し立てられて行く。

物置を改造して作られた幾つかの牢舎の一番奥へ静子夫人を銀子は引き立て、その中へ押しこむと自分も一緒にになって、もぐりこむのだった。

静子夫人の押しこめられた隣の牢舎には、京子が鬼源に押しこまれている。

「御苦労だったな。ゆっくり休むがいいぜ」

鬼源は、そういうながら縄を解いてやる。

京子は、自由になった両手で本能的に乳房を抱き、冷たい土間の上に小さくちぢこまってしまふのだ。薄いせんべい布団が土間の中央に敷かれてある。

この屋敷は、全室くまなく暖房がきいている。裸でいたって風邪はひきこないから心配

するな、という意味の事を鬼源はいい、手にしていた徳利の酒をラッパ飲みすると、

「さあ、もういいだろう。両手を前へ出して頂こうか」

鬼源は壊から手錠をとり出すのだった。もう反抗する気力もない京子は、従順に、胸を抱いていた両手を解いて前へ差し出し、顔を伏せる。

ガチャリと両手に手錠をかけた鬼源は、のっそりと立ち上り、

「用を足したくなりや隅に洗面器があるからな。じゃ、お休み」

鬼源は、京子を閉じこめた牢舎から出て、カギをかけたが、ふと、隣の牢舎から流れてくる話声に気づき、そっとのぞき見るのだった。

静子夫人のとじこめられた牢舎の中では、奇妙な光景が展開している。銀子がしきりと静子夫人を口説いているのだ。

後手に縛られたまま、せんべい布団の上にびったり立膝をして坐っている静子夫人の横に銀子ににじり寄るようにして、盛んにかき口説いているのだが、夫人は美しい顔を紅潮させて嫌々と拒否しつづけているのである。鬼源は面白くなってきて、足音を忍ばせ、

牢格子の間から顔をのぞかせて、中を盗み見する。

「ねえ奥さん、あたね、始めて、奥さんを見た時、世の中にこんな美しい人がいるものなのかと、びっくりしたのよ。」と同時に、何だかねたましくなってきた、あたね達とはまるで月とスッポンの上流社会に育ち、榮耀贅沢して暮している奥さんが憎らしくてたまらなくなつたのよ。あたね達なんか鼻もひっかけてもらえない高原に咲く美しい花を、泥田の中へ引きずりこんで無茶苦茶にしてやれという気持になって、まず、川田兄貴のおもちやにさせ、浣腸をはじめ、色々と手を尽して貴女をひどい目にあわせたわ。美しいものにくたない泥水をかぶせて、あたね達は溜飲を下げようとしたのよ。だけど、どんなに泥水をかぶせても、奥さんは天性の美しさを失わない。あたね達、てこずるというより、参ったという気分になっちゃった。今の京子とのプレイを見ても、肉体的に成長してきた奥さんは、ますます魅力的に、あたねの眼に映るのだもの」

そして、銀子は、静子夫人の柔軟なしろい肩に手をかけ、背後より、そのすべすべした白臘の背に顔をすりつけ始めるのだった。

「もう京子なんかと、あんな真似はさせないわ。だから、ねえ、奥さん、銀子のものになっておくれよ」

静子夫人の身も心もズタズタにするまで責めさいなんだもののは実は、天性の美しさを失わず、気高い貞淑な心根を持ちつづける令夫人を、前々から思慕し、心の中では悶々としていたのである事を、銀子は自ら告白し、つまり、誘惑し始めたのである。

「ねえ、貴女があたねのものになってくれるなら、こんな暗い狭い牢舎から、今すぐにも出してあげる。毎日あたねの部屋で暮し、羽根布団の上で、安らかに眠らせてあげるのよ。貴女のその美貌と肉体美に、あたねがうんとみがきをかけてあげる」

銀子はさかんに静子夫人をかき口説くのであった。

「そりゃ貴女はもう森田組の完全な所有物だから、秘密ショーや秘密写真では大いに稼いでもらわなけりゃこまるけど、そんなことでつかれた貴女の体や心を、これからあたねが優しくいたわってあげるわ。悪いようにはしない。ね、奥さん、はつきり私の愛を受ける」と約束して頂だい」

そんな風に銀子は、静子夫人にいい寄るの

だったが、夫人は、眼をとじ、物悲しげな表情でじっと、うつ向いたきりなのだ。

「いいわね、奥さん」

銀子は前へ回って、再び夫人の両肩に手をかけ、返事をうながすように、ゆすりはじめる。

「わ、わたしを死ぬより辛い目にあわせ、その上、京子さんと二人であんなことまでさせてなぶり抜きながら、この上まだ私に赤恥をかかせようというのですか。貴女達がどう解釈し、さげすもうと勝手ですが、京子さんも

私も、あのような事を強要されているうち、気持の上でも本当に離れられない関係になっ
てしまいました。それは、貴女達の望んでいらっしやった事じゃございませんか。でも、私達は貴女達に報復する意味で、そういうつ
ながりになったのよ」

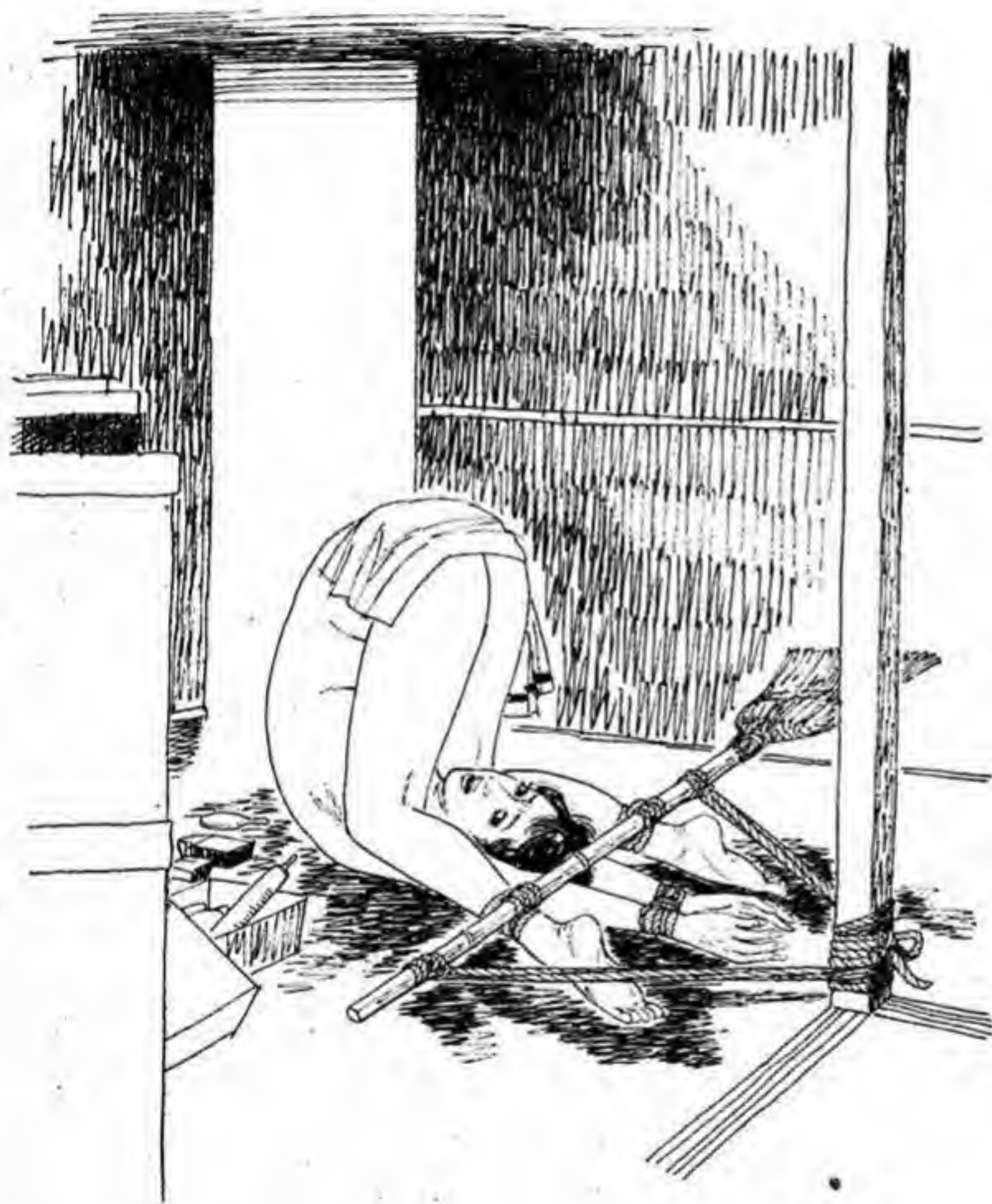
静子夫人は、うろたえ気味に、ふと、美しい瞳を開いて銀子を見たが、すぐに視線をそらせ、恥かしげに顔をそむける。

「ねえ、奥さん、貴女、まさか、あたいに恥をかかせようってのじゃないだろうね」

銀子の眼はきらりと光り、残忍なものをうかべた。

「——銀子さん、あ、あんまりです。あんまりです」

静子夫人は、急に身を震わせ、たまらなくなつたように嗚咽し始めるのだった。



静子夫人は、涙にうるんだ切れ長の美しい瞳を銀子に向け、口惜しげに唇をかみしめる。

静子夫人は、銀子の邪恋の誘惑を、きっぱりとはねのけたのだ。

「そうかい。よくわかったよ」

銀子は青ざめた顔つきになって、はじき出すようにいう。怒りのためにこめかみのあたりがピクピクけいれんするのだった。

「よ、よくも、あたいに赤恥をかかせてくれたわね。こう見えたってあたかも女、女のあたいが見

栄も体裁も忘れて、真心を尽して話したのに、それを仇で返しやがった。どうするか覚えとくがいいさ」

憤まんやる方なしといった銀子は、かんしやくを起したのか、いきなり静子夫人の頬を激しく平手うちし、悲鳴をあげた夫人の腰のあたりを足蹴にして、その場へ横転させてしまふ。

横倒しになった静子夫人は、後手に縛られているため立上ることは出来ず、その場へ海老のように伏せてしまふのだったが、量感のある夫人の尻を銀子は狂ったように足で蹴りまくるのだ。それを格子の外から見ていた鬼源は、あわてて、中へとびこみ、狂乱の銀子を抱きとめる。

「まあ、おめえの気持もよくわかるが、この令夫人は商売ものだ。それに、ショーの日も迫ってる。こんなきれいな身体に生傷でもつけちゃ大変だ。俺の責任になる事だからな。まあ、それ位にしといてくんねえ」

銀子は、静子夫人をかき口説いていた光景をこの鬼源にも目撃されたのだと気づくと、一層、猛り出し、夫人の尻を踏んづけようとするのだが、鬼源に押さえられ、なだめられ、すると今度は子供のように、わーと手離

しで泣き出し、鬼源にしがみつくのだった。「みっともねえぜ。葉桜団の団長がよ。たかが女にふられた事ぐらいで、そんなに泣くのはよしな」

鬼源は、ゲラゲラわらいながら、銀子の眉をかるくたたく。

銀子は、急に、きつとした顔つきになって顔をあげると、何時もの調子にもどって、激しい口調になって鬼源にいうのだった。

「鬼源さん、あんたの調教、少し、手ぬるいようじゃないか。泣く子も黙る浅草の鬼源も少し、もうろくしたんじゃないかい」

ええ？ と鬼源は眼をパチパチさせて銀子を見る。

「あと、ショーまで何日もないんだろう。もっと、ピッチをあげてびしびしおやりよ。これからあたかも調教の時には立会って、手をかす事にするよ」

と、ペラペラ早口でしゃべり始め、わざとらしい無表情をつくって、

「美津子や桂子だって、遊ばせておくことはない。コンビにして、出演させなきゃ駄目だよ。そのためにも、さっきもいったよう、かなり上達してきた静子と京子に、二人の稽古をつけさせるのさ。明日は、早速それにかか

っておくれよ」

鬼源は、ニヤニヤしながら、わかった、わかった、と大きくうなづき、

「じゃ、美津子と桂子のサイズを計って、早速、作らなきゃならねえな。やれやれ何だかんだと忙がしいことだ」

土間に海老のように体を曲げて、横臥している静子夫人は、背中の中程に縛り合わされている両手首を震わせながら、激しく泣きじやくるのだった。

嵐に立つ小夜子

散々な目に会った田代、森田、川田、吉沢の四人は、その翌日の昼頃、不気嫌極まる表情で田代邸へ引き揚げて来た。

「御苦労だったわね」

「また、そのうち、いい事があるわよ」

男達の気分をさっして、ズベ公達は、しきりと慰める。

逃げる途中で、車が塀におつかったりして吉沢などは全身に打撲傷を受け、川田に背負われて帰着するという哀れさだ。

吉沢を寝室に運び、ちんぴら達に傷の手当てなどさせてから、川田、田代、森田の三人は浮かぬ顔つきで、二階のホームバーに入り

銀子や朱美の酌でウイスキーを飲み始めた。

「ああ畜生、おもしろくねえ。思いだしてもむしやくしゃする。久しぶりで大金にお眼にかかると、わくわくしていたのにな」

森田は、朱美の酌で、ウイスキーを投げ込むように口へ流しこみながら、酸っぱい顔をしていうのだった。

「こうなりや村瀬の息子も娘も、かまう事はねえ。ショーのスターとして徹底的に仕込みあげるんだ。幸い小夜子っていう娘は、静子夫人や美津子達に負けずおとらずの器量よしで、雪白美人ときてやがる。俺達に相当稼がせてくれる事と思いますよ。ねえ、社長」

森田は、田代の顔を上目使いにうかがうように見ている。

「よし、じゃ、鬼源さん。一つ荷がふえたつてものだが、何しろ、あれだけの美人だ。一つよろしく調教を頼むぜ」

田代は、カウンターの一審、隅に坐って、ちびりちびりウイスキーをなめている鬼源に向いそういうのだった。

「へえ、大家のお嬢さんだけに、ちと骨が折れるとは思いますが、ベストを尽して仕こんでみますよ」

などと鬼源はいい、いやらしく口を曲げて

へっへへと出歯をむき出して笑うのだった。

「ところで、小夜子嬢の方はどうなんだ。昨夜はおとなしくしていたかい」

田代は朱美の方を見ている。

朱美は、川田の酌を受けて、ウイスキーをうまそうに飲みこむと、

「昨夜、川田兄さんからの電話で、小夜子の家の者達が山崎探偵に連絡をとって網をはったっていうでしょう。あたいは、かっ頭にきちやってね。あの娘だけは特別にあつかってやろうと思ってたんですが、坊主憎けりや袈裟まで憎いってな気分になっちゃったのですよ」

朱美は、笑いながら小夜子を裸にして、木馬に乗せた事を報告する。どれ位、辛抱が出来るものかテストをしたのだという朱美の話を知ると、田代も森田も声をあげて笑うのだった。

「なるほど、そいつは面白かっただろうな。あの気品のある令嬢が木馬にまたがって、モジモジする姿は俺も見たかったよ」

田代は、別段、朱美が小夜子に対してとった行為を叱ろうともせず、しきりに笑いつづけているのだ。

「ところで、お嬢さん、今朝まで辛抱したの

かい」

「そりや無理ですよ。ほとんどまる一日、行かせて貰えなかった上に、塩水まで飲まされたんですもの。——でも感心に、木馬に乗せられてから二、三時間は辛抱したわね。だけど、あけ方、近くには、とうとうやっちゃったわ。フッフ」

朱美は、煙草に火をつけて、煙の輪を吹き出しながら、

「若い衆が小踊りして喜こんじゃってね。でも、見せしめのためだから、社長達がお帰りになるまで、そのままの姿で木馬に乗せてあるんですよ。どうです。一寸、ごらんになりますか」

粗相をしたみじめな姿を田代や森田の眼にさせるべく、小夜子をそのままの姿で木馬に乗せつづけていると朱美はいうのだ。

「そいつは、ぜひとも拝見させてもらおうじやないか」

田代も森田も、楽しそうにいうのだった。昨日、山崎探偵等に煮湯を飲まされた不快な気分は大分薄らいできたらしく、酒にほてった顔をなぜながら上気嫌になっている。

「じゃ、あたいは一足先に行つて、小夜子の様子を見て来ますよ。居眠りなんかしてやが

「たら、どやしつけてやります」

朱美は、そういつて、廊下へ出て、階下の木馬に乗った小夜子のいる部屋へ向うのだった。

木馬に乗ったまま、そういうみじめな姿をさらけ出し、地獄の羞恥に眼を吊り、齒を噛み鳴らしてがたがた震えつつける小夜子を盛んに揶揄しまくったちんぴら達も、夜明けともなれば、さすがに騒ぎ疲れたのである。あちらこちらに丸太棒を投げ出したような恰好で、だらしないびきをかいている。

だが、勿論、木馬の上の小夜子はねむるどころではなかった。白い頬を充血させ、毛穴から血でも吹き出すばかりの屈辱感に悶え泣きつつけているのである。

「どう、お嬢さん、御気分は？」

そっとドアを押して入って来た朱美は、ニヤリと顔をくずして、木馬の上の小夜子を見上げる。

小夜子に、はっとしたように、火のように熱くなった美しい顔を横へ伏せて、再び、激しく声を立てて泣き出すのであった。

「まあ、まるで洪水のようじゃないの。すこいわ」

朱美は、木馬の下に床に眼をやる。そこに

は、大きな水溜りが出来ているのだ。

「きれいにみがいてある床をこんなにして、一体、どうしてくれるのさ」

朱美は、口をとがらせるようにして、木馬に乗っている美女にいうのだった。

木馬の背から、左右に垂れ下がっている小夜子の白い美しい曲線をもつ両肢、時折、それをゆるやかに伝わって流れる水滴が、ポチャリと水溜りの上に落下する。その都度、小夜子は、たまらなく羞しい衝動に打れたように、真赤になった顔を苦しげにのけぞらせるのだ。

「フッフ、ちゃんと後始末をしてあげたいんだけど、一度、こういう結果になった事を、社長や親分に報告して、とくと見て頂こうと思うのよ」

朱美は、木馬の背に、ふと手をかけようとして、わざとらしく大仰に手をひっこめる。「あら嫌だ。木馬の背中も全部水びたしだわ。貴女、前も後もところかまわずまき散らしたのね。ずいぶんと器用な事が出来るじゃないの。お嬢さん」

朱美は声をあげて笑うのだ。

木馬の上の小夜子は、あまりの屈辱に狂ったように首を振り、房々とした絹のような感

触の艶のある黒髪をゆさぶるようにして、泣きじやくるのであったが、その時、廊下の方で男達の賑々しい話声、つづいて、ドアをノックする音。

「朱美、入ってもいいかい」

という声は、小夜子にも聞き覚えのある、この屋敷の主人、魔王のような男の田代なのだ。

朱美は、薄笑いを浮かべて、小夜子を見上げ、

「社長のお出しましたよ。その傑作な恰好をじっくり見て頂いて粗相をしたお仕置を考えてもらうんだね」

そして、朱美は、ドアの方に向って、

「社長、どうぞ、遠慮なさらずお入りになって下さい。小夜子嬢も先程から社長のお越しをお待ち兼ねなんですからね」

田代、森田、川田、それに鬼源までが加わった四人が、何か高笑いしながら、どやどやと入って来たのである。

小夜子は、恐しい四人の悪鬼達の出現に、恐怖のあまり、強烈な電気に感電したかの如く、身体全部を石のように硬化させ、首をのけぞらせるのであった。これから、この四人は、朱美と一緒に、地獄の羞恥に泣く小夜子

に對し、どのようにからかい、どのようになぶる気なのであろう。小夜子は生きた心地もなかった。

「ほほう、こりや、ずいぶんと派手にやらかしたものだな」

四人の男の眼は、一せいに木馬の下の水溜り向けられる。

森田は、その辺に、ごろごろ寝ころがっているちんぴら達を見ると舌打ちして、

「手前達、社長がお帰りでというのに、何時まで寝ころがってやがるんだ」

と大声でとなり、足で踏みつけて廻る。

ちんぴら達が飛び起き、眼の前の親分と社長に気がつく、うろたえて、ペコペコ頭を下げ、隅の方へ一かたまりになって、ちぢこまってしまふのだ。

田代は、そんな事には頓着なく、さかんに木馬にまたがっている小夜子に向い、からかいつづけているのだ。

「ハッハハ、お嬢さん、一日溜めこんでいたものを、一時にすましてしまったわけなんだね。それにしても、木馬に乗ったまますませるってのはどうだい。さぞ、いい気持だったろうね」

これから何時も、その時の都度、木馬に乗

せてやったらどうです、川田がいったので田代も森田も口をあけて笑うのだった。

「朱美から聞いたろうが、あんたの親父さんは約束を破って、俺達に煮湯を飲ませたんだよ。だから、俺達としては、その復しゅうという意味もあるので、不本意ながら、お嬢さんを、秘密ショーのスターとして、みがき上げる事にきめたんだ。おんば日傘で育った大家のお嬢さんを、そういうスターに仕上げるのは可哀そうなんだが、ま、恨むんなら裏切った親父さんを恨むことだな」

川田が煙草をすいながら、木馬の上の美女に向って因果を含めるようにいう。

「それにしても、顔といい、スタイルといい全くケチのつけようのねえお嬢さんじゃありませんか。これで、静子夫人、京子、美津子桂子、それにこの深窓の御令嬢小夜子に加わったんで計五人だ。飛び抜けた美人を五人揃えたとありや、全国のこんな稼業の渡世人が束になってかかってきたって、こっちやびくともするもんじゃありませんよ。昨日、まんまと一杯喰わされた大金だって、すぐ取り戻すことが出来るってものです」

森田は、泥エビスのような顔つきになって田代にいう。

「まあ、難をいやあ、五人とも揃って、育ちのいいズブの素人ってことですが、それも、鬼源さんの調教一つで、どうともなるってものですよ。現に、あのおしとやかで慎しみ深い静子令夫人が、鬼源さんの努力が実のつて男勝りで気性の激しかった京子と、ああいうプレイを本心から悦び合っているようなちまたのですからね」

川田も森田に調子を合わせるようにして、そんな事を田代にいうのだった。

フムフム、田代は愉快そうにうなづきながら、木馬にまたがった美女をガラガラする眼で見上げていたが、何かに憑かれたように木馬のまわりをぐるぐる歩きながら、美女のなめらかな雪肌を仔細に観察し始める。

木馬にまたがっている小夜子の一方の足を手にし、胫から膝小僧、そして、大腿と、そのゆるやかな曲線を楽しむかのように手でさすり、色の白さに眼を見張り、肉づきの良さに感心し、大腿に頬ずりなどしていたが、やがて、田代の手は、足首をつかみ、薄いピンクのペディキュアがほどこされている足の指の一つ一つを押し開けるようにして見入っているのだ。

木馬の上の美女は、固く眼を閉じ、眉をし

かめて、この屈辱に耐えている。

「社長、余程、この御令嬢がお氣に召したようですね」

森田が田代のそうした姿態を眺めて、くすくす笑い出した。

「どうだい、親分。この柔かい温かい肉、いっそ食べてしまいたい気分になるよ」

田代は、次に、手をのばして、木馬の上でんと坐っている美女の尻の肉を軽くつまんだり、さすったりしているのだ。

「お嬢さん、あんた、いくつになるんだい」
田代は、小夜子の尻の上を軽く手でたたきながら質問する。

小夜子は、固く唇を噛みしめ、首を深く垂れつつけたままである。

小夜子が田代の質問に答えないのに腹を立てた朱美が、ついと田代の横に立ち、

「何時までも大家のお嬢さんぶってやがると承知しないよ。おまえは、今日から、森田組の持物なんだからね。静子夫人や京子達に負けないよう、しっかり働くのさ。さあ、社長の質問に答えるんだ！」

小夜子は、その返事のかわりに、声をあげて泣き出す。

「泣けといったんじやないよ。今年いくつに

なるかと社長さんは聞いてられるんだ」

朱美は、田代の上衣のポケットから、シャープペンシルを抜き取って、いきなり、小夜子の尻の肉へ突き立てた。

「あっ」

小夜子は木馬の上で狂ったように悶え始める。

「さ、答えるんだ。さもないと、今度は、とんでもない所へ突き入れるわよ」

小夜子は、激しくすすり上げながら

「——二十——二十二です」

田代は、満足げにうなずく。

「そうか、女になるのに一番適当な年だな。」

静子夫人が二十六、京子が二十三、桂子が二十一、美津子が十八、年令においても、それぞれ異なり、それだけにバラエティにとんで面白い、と川田は田代に話しかけるのだった。

「一応、お嬢さんの事について、こっちとしても予備知識をつけておきたいのだよ」

朱美は、小夜子から、彼女自身の二十二才に至るまでの略歴を聞きとろうとするのだ。

シャープペンシルの先をつかつて、おどしながら、朱美は小夜子の口から彼女自身の大体の予備知識を得たのである。

やはり、朱美が想像していた通り、小夜子は昔なれば貴族階級の者しか行けなかった青葉学院を出、花嫁修業にいそむかたわら、

ピアノのレッスンに励み、去年は、父親の取引先の会社がスポンサーしているミス宝石の美人コンテストに無理やり口説かれて、参加したところ、これが一位に入賞、つづいて、音楽コンクールにも、在学中の教師に懇望されて参加し、ピアノの部で一位入賞の輝かしい栄光を持っている。

「すばらしいわね。二十二の若さで、それだけの栄光を受けたんだもの。もう思い残すことはないってわけだわ。ここじゃね。ピアノで、ショパンやシューベルトなんかをひく必要は全くないのよ。大いに活躍して頂かなきゃならないのは、貴女のその美しい身体よ。わるでしよ」

朱美は、そういつて、ニヤリと笑い、紙と鉛筆を用意して、

「それじゃ、これからは、ここで必要な事をお聞きするわ。まず、バストやヒップなんかのサイズをいってごらん」

小夜子は、再び、顔を紅潮させて、うっむいてしまうのだ。すると、朱美は、ペンシルを指でいじり出し、小夜子の太腿のあたり

をチクチク突つく。

「痛い目に合うのは嫌でしょ」

小夜子は小刻みに震えながら、朱美の質問に小さな声で答えていくのだ。

朱美は、事務的にメモしていきながら、

「そう、じゃ最後に、そのサイズは？」

小夜子は、涙でキラキラ光る美しい黒眼を開いて、ふと、朱美の指さすところを見たが、あまりの事に、かっと頭に血がのぼり、反射的に顔をそむけて、身体を硬化させた。のど元に熱っぽいものがこみあがり、たまらない屈辱感にわなわたと雪白の全身を震わせるのだった。

「おっと、ごめんなさい。お嬢さんは、ここへ来ただけだったわね。でもショーのスターとして一番肝心なところだから、あとで鬼源さんに、くわ

しく計ってもらわなきゃ駄目よ」

朱美は、そういつて笑い、

「それから、念のために聞いておくけど、お嬢さん、あんた、まだ男は知らないでしょうね。」

男と寝たことがあるかって聞いてるんだよと川田が横から口を出す。

小夜子は、すすりあげながら、激しく首を振りつづけた。

「それでしようね。その方が、やっぱり女として値うちがつくってものよ。でも、何時までも娘のまんまだと、やはり調教が本格的になると、具合が悪い事があるのよ。だから、なるだけ、早い目に、ここにいる人達と相談して女にしてあげるわ」

小夜子は、朱美のそうした恐ろしい言葉に身も心もくたくたにされてしまった。

「それから、お嬢さん、あんたの生理日は何時なの」

小夜子は、もう抵抗する気力も失せ、朱美の発する屈辱的な質問に対し、すすり上げながら答



えるのであった。

「そう、じゃ、その日だけは、調教はお休みという事にしてあげる。つまり、世間で言う生理休暇ってやつよ」

じゃ、これから、宣誓式をやるう、と川田がいい出し、ようやく小夜子は、木馬から、降ろされることとなった。

川田と鬼源の二人に、かかえられるようにして木馬からやっとの事で降ろされた小夜子であるが、長時間、おぞましい木馬にまたがっていたため、太腿のつけ根あたりの筋肉がひきつったように痛み、まともに床の上に立つ事が出来ず、腰がくれたように、その場へ、くずれ折れてしまうのであった。

朱美が田代にいった。

「ねえ、社長、今ちよつと気づいたんだけど、このお嬢さん、映画スターの鰐淵晴子によく似てるね。たしか、社長もファンだといっていましたわね」

「そうさ。俺の好みにぴったり合う美女が転がりこんで来たっていうわけだ。一日も早く立派なスターに仕込みあげてくれよな。鬼源さん」

田代は舌なめずりをしながら、鬼源にいい木馬の足もとに、くずれ泣いている小夜子の

スベスベした雪白の肌を唾を呑みこんで見つめるのだった。

「さ、お嬢さん、今から、森田組のショーのスターとして出発する事になった、あんたの宣誓式をやるのよ。しやんと立って——」

朱美はそういつつ、鬼源に眼くばせし、二人で、くずれ泣いている小夜子の両側に身をかめると、乳白色の艶やかな肩に手をかけて引き起しにかかるのである。

ふらふらとして、足もともおぼつかなく、身体をくの字に曲げる小夜子を朱美と鬼源はがむしやりに縄尻をとり、背をつついて押し立て、部屋の隅の柱に正面を向けさせて、押しつけ、新しく用意した麻縄で、ひしひしと立縛りに仕上げていく。

川田は、テーブルの上に白い紙を置くと、森田と相談しながら、筆をつかって、しきりに何かを書いている。

小夜子を、柱を背にさせて立たせ、がっちり縄がけをした朱美と鬼源は、紙に筆を走らせている川田に向かって、

「宣誓文に出来ましたかね、川田兄貴」

つまり、川田は、小夜子自身の口から読み上げさせる宣誓文の作成を森田と二人でやっていたのだ。

さて、出来たぜ、と川田は紙を手にして立上り、立縛りにされている小夜子に近づく。

小夜子は、正面に立った川田から、うろたえ気味に視線をそらせる。おぞましい木馬にまたがせられた気の狂うばかりの羞しい姿を長時間、野卑な男達の眼にさらした小夜子は今、その白磁の麗身を真正面から、あます所なく、卑劣漢のにこった眼にさらさねばならないのだ。

「たまらねえな。いい体をしてやがる」

川田も、森田も、田代も、そんな姿にされている小夜子の前に立ちはだかるようにして酒やウイスキーによんだギラギラする眼で上半身を眺めつつけるのだった。

日本舞踊やバレエなどで鍛練されたのである。小夜子のスタイルのいい肢は、太腿のあたりの肉づきがきりきりとしまり、眺める男達をやるせないばかりの思いにさせ、また上下を麻縄に固くしめつけられてはいるが、その発達した胸の隆起、羞恥のため波打っている腰の周辺など、男達を陶酔の境地にさそいこんでいくのだった。

川田は、よだれを流すような表情で、しばらく見とれていたが。ふと我に返ったように手にしていた紙、つまり、宣誓文なるものを

小夜子の気品のある鼻先へ押しつけるようにする。

「さあ、お嬢さん、この宣誓文を大きな声で読むんだ。」

小夜子は鼻先へ押しつけられたその紙を、涙でうるむ美しいエキゾチックな瞳をふと開いて見たが、その屈辱的な文字を見た途端、思わず身体を震わせて、顔を伏せてしまう。

「何をもちたしているんだよ。いい家庭に育って、これまでうんと楽しい日を送ってきたんじゃないか。もう思い残すことなんかないだろう。さあ、大きな声をあげて、しっかり音読するんだ。ぐずぐずしやがると、承知しないよ」

朱美は、テーブルの上のペンをとって来ると、むっちり肉のしまった小夜子の太腿のあたりへそれを突き立てる。

「あっ、あっ」

小夜子は、けたたましい悲鳴をあげて、大きく身を悶えさせた。

「あんまり、手こずらせると、口じやいえねえ羞しい責めにかけるぜ」

川田は、小夜子の形のいいあごに手をかけて、美しい顔をぐいと上へこじ上げ、朱美は川田の作った宣誓文を開けて、小夜子の眼の

前へ押しつけるようにする。

小夜子は、もう抵抗する事の空しさを思い知ったよう再び、キラキラ涙で光る美しい黒眼を開いて、それへ向けるのだった。そして齒をカチカチ噛み鳴らすようにしながら、このいまわし宣誓文を声を震わせて読み始めたのである。川田が森田と、相談し、半分はふざけて作った宣誓文には、大体、このような事が書いてあたのである。

——村瀬小夜子、二十二才は、これまでの実生活とはいさぎよく訣別し、本日より森田組の完全な所有物となり、秘密シヨートのスター——として、秘密映画、実演、写真等に出演する事を確約致します。なお、実習期間中は森田組幹部及び葉桜団幹部の許可があるまでこの屋敷内において、全裸、または、揮姿で日常を過ごし、幹部の要求ある時は、体内の臓物一切さらけ出すが如き羞しい行為も喜んでなす事を誓います——

このような、おぞましい文章をどうして小夜子が、まして、世の中のけがれを知らぬ深窓に育った麗人が声をあげて読む事が出来るよう。少し読んでは、すすりあげ、また少し読んでは号泣する小夜子であったが、朱美は意地悪く、小夜子がためらい出すと、ペン先

で体のあちこちを突つき出し、とうとう最後まで小夜子に音読させてしまったのである。

さて、と川田は、その奇妙な宣誓文を立縛りにされている小夜子の足元に開けて置くと「署名捺印をして頂きましょう。だが、両手が使えないのだから仕方がねえ。足で間に合わせようじゃないか」

川田は、筆にたっぷり墨をつけると、身をかがめて、小夜子の右の足首をつかみあげ、そのピンクのペダキュアーがどこかさわてある可愛い指と指の間へ、筆をはさみ、自分も手伝ってやりながら、文章の末尾に、村瀬小夜子と署名させるのだった。

「へっへへ、お嬢さん、足でサインしたってのは始めてだろ。だが、そのうち、この筆をもっと変ったところにはさんでサイン出来るようになるぜ。ま、それは鬼源さんに教えてもらうことだよ」

川田は、次に、ポケットから、印肉をとり出して、小夜子の足の拇指の裏に朱肉をぬり小夜子の署名に奇妙な方法の捺印を無理やりにさせるのだった。

「さあ、いいかい、お嬢さん。お前さんは、ちやんとこの宣誓文に自分で署名捺印したん

だ。約束を破っちや困るぜ」

川田は、再び、その奇妙な宣誓文を小夜子の顔の前へ開けて押しつけ、田代にそれを渡す。

田代は、ニヤニヤしながらそれに眼をやったが、足で署名捺印させるとは、川田も仲々面白い事を考えつくじやないかと笑うのだ。「だが、俺なら、もう少し、色っぽい方法を考えるな。宣誓文にもっと迫力を持たせる意味で署名の下へ、この美しいお嬢さんのパーマのあたった髪の毛を二三本はりつけておくつてのは、どうだい」

その意味がわかって、川田は、顔をくずし「なるほど、やっぱり社長の考える事は、俺達とは違うぜ」

と、大きく口を開けて笑うのだ。

朱美も笑いながら、隅の机のひき出しを開け、小さな鉄を持ち出してくる。

「ちよっと二三本、つみ取らせて頂くよ」

精も根も尽き果てたように、がっくり首を落して、すすりあげていた小夜子であるが、朱美がしようとしている事の意味がわかると「な、なにをするのです！」

思わず、生返ったように大声を出し、均整のとれた両肢を激しく揺り動かせるのだっ

た。

朱美は、頓狂な顔なつきになって、笑いながら、

「まあ、この御令嬢、ずいぶんとケチね。いいじやないの、二、三本ぐらい。」

朱美が再び近寄ろうとすると、小夜子は、逆上したように身悶えする。小夜子のきらめくような美しい肌をゆわえつけている麻縄が柱にこすれて、ギイギイと重苦しい音をたてるのだ。

川田は、くすくす笑いながら、鬼源に眼で合図し、テーブルの下に束ねてある麻縄の一本を手にして、狂乱の小夜子に近づくのだ。

「あっ、嫌、嫌っ」

鬼源がいきなり、タックルでもするように小夜子の両肢に抱きつき、馬鹿力を發揮して、その両方をびったり揃えさせて柱に押しつけ、そこをすかさず川田が麻縄をつかってキリキリ柱に巻きつけ、遂に、小夜子は上半身、下半身とも身動きのとれぬように縛りつけられてしまったのである。

「へっへ、こうなっちゃ、どうしようもあるめえ。暴れた罰だ。少し、よけいめにつみ取らせてもらうぜ」

川田は、朱美から鉄を受けとって身を沈ま

せる。

「ああー」

小夜子は、背のびをするように、美しい顔を大きくうしろのけぞらせ、真珠のような光沢のある歯を見せて、いい——と歯ぎしりする。

「艶があって、全く見事を髪の毛だ。それに多からず、少なからず、鳥の濡れ羽色ってのは、この事だな」

川田は、勝手な事をいいながら、鉄を使っている。

「やいやい夢中になって、丸坊主にしちゃうんじやねえぞ」

森田が、のぞきこみながら笑っているのだ。

「ついでだ。俺も、くわしく測量させてもらうとするか」

鬼源は、懷から巻尺をとり出し、川田に並んで身を低める。

小夜子は、切なげに眼を閉じ、眉をしかめて、屈辱と羞恥の呻きをあげながら、甘ずっぱい女の体臭をまき散らすように緊縛されたどうしようもない全身を、ゆるやかにうねらせているだけだった。

(つづく)

限定版
写真集

美しき縛しめ

第三集 略号「美3」
頒価一〇〇〇円（送共）

美人モデルの縄にあえぐ姿態が、両面特アート紙にギッシリとグラビヤで印刷されて、皆様のお求めを心からお待ち申しております。内容は次に掲げた百二十態の写真で、いずれも今まで一回も発表されたことのない、とっておきの秘蔵品ばかりです。何卒未見の方は、今すぐお申込み下さるよう、お待ちします。

◎緊縛女体百二十態 〔本誌優秀モデル総登場の写真集〕

樹間にさらされる（絹川）	美貌を踏みつける（絹川）	顔枷の装着中（四方）	被虐のマゾ女性（東浦）	首吊りのプレイ（大塚）
豆しほりの猿ぐつわ（絹川）	悦虐の園にさまよう（水本）	鼻孔ゼムピン責め（絹川）	大きな猿ぐつわ（竹野）	後手縛り猿ぐつわ（絹川）
縄目と裸身の羞らい（長野）	若肌に襲う白ロープ（若原）	鼻孔から薬液注入（大塚）	可愛い足首（絹川）	電光に肌は映えて（梨花）
後手首に喰込む縄目（梨花）	蚊群の襲うにまかせ（絹川）	豊胸にまつわる黒縄（若原）	黒髪なぶり（大塚）	噛まされる猿轡（東浦）
荷造り縛り人形（大塚）	きびしき縄目に喘ぐ（加茂）	ピンクカパーと豆絞（絹川）	喰い込む柔肌に縄（大塚）	柔肌高手小手（梨花）
バンド着用しほり（遠藤）	麗しき裸身の縄目（絹川）	斬首処刑フォト（新宮）	裸身に投げたタオル（加茂）	高手背高しほり（水本）
替ゴム猿ぐつわ虐め（東浦）	猿ぐつわ黒フン縛り（愛川）	両手首吊りさらし（大塚）	緊縛の優美ポーズ（絹川）	後手小手股間縛り（絹川）
ゴム布に包まれて（梨花）	あえぐゴム布嵌口（大塚）	後手足首逆エビ縛り（梨花）	くわえた赤い花（絹川）	柱後手縛りにて（山路）
椅子利用エビ縛り（東浦）	美しい顔をなぶる（梨花）	丈なす黒髪（大塚）	エビしほり正面（梨花）	下げられたズロース（梨花）
敵しき胴絞（絹川）	飛び出す双丘と後手（長野）	貴衣からのぞく乳房（大塚）	美貌美身の緊縛（大塚）	十文字しほり（桜井）
輝く白肌をさらして（関谷）	首縄胴縛り股間縛り（絹川）	美貌放心の表情（梨花）	首を締めるくさり（絹川）	木洩れ陽に白き肌（絹川）
荒縄黒皮フンドシ（大塚）	被虐に耐えた表情（水本）	後手強烈しほり（梨花）	手吊りのけぞり姿態（桜井）	叫ぶ捕われの乙女（大塚）
野性的な緊縛模様（絹川）	生首フォト（新宮）	従順なるマゾの発散（竹野）	乳首に咬みつく蛇（大塚）	汗まみれの被虐（梨花）
全裸のいましめ（愛川）	祭壇のささげもの（大塚）	手錠足錠首くさり（四方）	後手縛りと臀部（絹川）	洋服タンスに吊る（大塚）
白晒六尺フンドシ（遠藤）	越中フンドシ緊縛（大塚）	白晒六尺フンドシ（大塚）	ピンクの腰巻さらし（東浦）	全裸にてもだえる（関谷）
百CC浣腸器責め（大塚）	飛びだした双丘（加茂）	ガンジガラメの縄目（絹川）	重圧に耐える表情（大塚）	黒縄地獄（四方）
荒縄のトゲに喘ぐ（大塚）	塩水を無理に飲ます（大塚）	首縄胴絞め股間縛（桜井）	強烈アグラしほり（絹川）	るせつの裸身（梨花）
両手吊りさらし（桜井）	胸部と臍窩の魅力（遠藤）	引き回される裸身（絹川）	ポリウムの誇り（桜井）	セーラー服を縛る（梨花）
M女性の本領発揮（梨花）	臍窩を狙う蛇の舌（梨花）	豊胸を彩る茶の縄（大塚）	鏡にうつす裸しほり（山路）	首縄から膝縄まで（大塚）
足錠をつけられる（四方）		捕われの女学生（竹花）	惜しみなく晒す裸身（大塚）	高々と上った後手（梨花）
			ゴム帽子麗身晒し（梨花）	くびれた胸と腹部（大塚）
			首絞めに苦しむ（大塚）	カクテルドレスの女（絹川）
			麗身をもたえさす（絹川）	浣腸責め（大塚）
			猿ぐつわの苦悶（加茂）	首のくさりに悶える（絹川）
			黒縄にもだえて（大塚）	黒のズロース（絹川）
			全裸の手吊り責め（大塚）	破られたズボン（梨花）
			ゴムの猿ぐつわ（絹川）	正面立姿全身縛り（大塚）
			汚れた縄と輝く白肌（絹川）	くさりに捕縛される（山路）
			手首足首椅子しほり（梨花）	亀甲型股間しほり（大塚）
			あえぐ夫人の表情（関谷）	長襦袢と腰巻（館）



悪書と悪映画

— 佐藤論文によせて —

山口 広

四月号にも、編集部存続への苦悩がせつせつと書かれていた。如何にすれば内容を落さないで法の弾圧にかからないか。正確に云えば「東京都青少年健全育成条例」にかかることを避けられるかに懸念であることがひしひしと察しられた。同種の条例は北海道や神奈川県など二十一の道府県が持っている（朝日ジャーナル No. 33）そうであるが、映画評論家の佐藤忠男氏の「映倫に責任を転嫁するな」と云う四頁の論文を読んで私なりの感想をまとめてみた。

佐藤氏は同論文（朝日ジャーナル No. 33、昭和三十九年八月一六日号一〇六一—一〇九頁）の中に次の様な事を述べられている。（前略）この条例は、映画、出版物、広告、がん具を対象としたもので、都の審議会によって、「性的感情をいちじるしく刺激する」とか、「残虐性をもつ」と指定されたものを、青少年に見せたり売ったりした場合、都が警告を発し、さらに罰金を科することができるといふものである。（中略）それがそうならず権力による押えつけを要望する。

という形になるところに、人々の、ぬきがたく、そして危険な官尊民卑の習性を思わざるを得ない。

ともあれ、東京都の「青少年健全育成条例」は、PTAなどの世論の要望にこたえる。という形を踏んで出来上った。

その土台には、近年における非行青少年の激増という事情があるのは言うまでもなく、しかも青少年の非行化は、俗悪マスコミの影響によるものだ、という古くからの観念があることも明らかである。（中略）私

はまず、この観念自体を、教育学者、心理学者、犯罪学者などの協力を得て詳細に検討する必要があると思う。

東京都家庭裁判所主任調査官の大塚雅彦という人の書いた「非行少年」（昭和三八年、星書房）という本は、少年非行の具体例が豊富で、示唆に富む興味深い研究であるが、この本によれば、「映画やテレビなどと非行との因果関係をハッキリ示せる研究資料は少ないのが実情である」という。

しかし著者の印象としては、「一般に学者、評論家の方達はこの影響を過小評価しがちであり、これに対して実務家殊に司法関係者や警察の方達などは過大評価しがちな傾向があるのかもしれない」そうである。（中略）非行少年が好む映画とは、普通、毒にも薬にもならぬ通俗娯楽映画とされているもののうちの、義理人情、チャンバラ系統や痛快アクション系のものということである。映画が少年非行の原因であると真剣に憂える人たちは、たぶん、「甘さ、庶民的大衆性、肩のこらないのびやかさ等の属性、その属性を活用した浪花節的な義理人情物語」を法で取締ってくれ、などとはいわないであろう。（中略）カニはおのれの甲羅に似せて穴を掘

るというが、映画が少年非行の原因になると考える人たちが悪徳映画として思いうかべるのは、おとなであるかれ自身にとって邪悪と思われるところの、アブノーマルなセックスや嗜虐的残酷味を含んだ映画のことなのである。

ところが非行少年たちにはまた非行少年なりのモラリッシュな慾求があるので、かれらは、義理人情や痛快アクションのヒロイズムにこそ共感するものの、おとながアブノーマルと感ずるものは、かれらにとっても、やはりアブノーマルで、とくに見たいとは思わなものである。（中略）むろん中学生や高校生などで、セックスを売りものにした映画に、強烈な関心をもつ者は多いはずである。

思春期である以上、それは当然である。（中略）難解な芸術作品や学術書を、そこに部分的に描きこまれていくセックスへの強烈な好奇心によって無理やりに理解しようと努め、結果として人間性の深奥な部分に目を開かれてゆくのも、この時期ならではのことである。その意味では、この時期におけるまじめなセックスの追及は、魂の成長の一つの重大なポイントであるといえる。私にとってそうだったたぶん、あなたにもおぼえがあるだ

ろう。

まず、マスコミのアブノーマルなセックスや残酷ものの刺激があり、それによって少年が悪の道にさそわれる、という世間の常識は年令的に誤差があり、相当に見当違いであるのではないか。（中略）

かくして「エロか芸術か？」などというキヤッチフレーズをうたいこんだ映画館の中に残るのは、非行とは無縁の欲求不満の成人した青年とおとなたち、という結果になる。評判につられて、そこへまぎれこんできた非行青少年がいるとしても、義理人情映画の単純さや、痛快アクション的なスカッとした明朗さのない内容や表現にへキエキして、あぐく映倫通過のエロチシズムなど、せせら笑ってしまうのが落ちである。

かくして、青少年善導のよき意志をもって映画館にいく都の調査官に追いまわされるのは、実質的には、セックスの問題ではんもん中の、非行とは無縁の気の弱い少年だけ、ということになりはしまいか。（中略）

私が憂えるのは、むしろ映画や出版物を権力で取締ってくれ、と叫ぶことが、青少年健全育成になると信じるPTA的感觉そのものであり、そういうマトはずれの努力で、青少

年問題の本質に盲目になってしまふことである。

そしてもう一つ、私は青年期におけるまじめなセックスの考察は魂の成長の一つの重要なポイントであり、一般に心配されている非行とは無縁であると説いたが、きわめて残念なこと、日本の風俗取締官たちは、その種の特別にまじめなセックスの考察だけを、わざと慎重に選り出して犯罪行為とときめつけるはなはだ困った実績を、ごく近い過去のチャタレー裁判とサド裁判にもっていることである。(中略)少年非行と映画の関係についてなど、もっと実証的な調査研究を推進して、審査基準の裏づけとして、人々に示せるよう努力すべきであった。

しかしこの点は、映倫だけを責めるわけにはいかない。教育学などの立ちおくれにも責任があるし、映画の論評でメシを食っているわれわれ映画研究者が、率先してやるべきでもあった。

人々は良識ある審査員の誠実な困惑よりも根拠薄弱でも気にいらぬものはパッサリやっつけてくれる権力を愛するのだろうか。その方が安心なのだろうか。(中略)検閲を受けたほうが法の保護の下に安心していられる

ことになるわけである。この種の検閲待望の心理に同調してはならない。(以上)

これは主として白日夢などの性或は残酷映画に関して映倫という民間団体に対する不信と不安から、都条例という権力によって、青少年が非行に走る原因を取締ろうとする、「科学的根拠の薄弱な」「PTA的感觉を持った」一部の良識あると「称する」人々の動きに対する「映画を愛し」「映画によって糧を得て」おられる佐藤氏の反駁文である。職業がら氏の意見は映画には甘いのかも知れない、しかしこの文が「インテリの週刊誌」として認められている朝日ジャーナルに載せられたところに着目したい。私の知人もその一人であるが、朝日ジャーナルの編集部員の中に「これは我々と同意見である」と思わないながらも、少くとも「この文は掲載して世の反響を聞きたい」と考えた人が過半数は居たのではないか。

ということである。私は不勉強にも、佐藤氏の論文に対する世の反響は見えていない。十人十色で氏に賛成の人も反対の人も居るであろう。少くとも一部の「良識ある」人々は、まだ精神的に困っていない成長過程の青少年は、エロを見聞きすればエロに走り、残虐を

見れば残虐に走る「おそれがある」と考えられるだけの、仮定の上での論拠から、都条例を作り上げたのであろう。

省略したが、佐藤氏は「私など、思春期はちょうど戦争中であつたので、こんにちのよきな性風俗のはんらんはなかったが、たしか文部省発行かなにかの、しちむずかしい『古事記』を図書館の古語辞典を頼りに解読することでもムキ出しのエロをむさぼったものである。」と記され、私も戦後直ぐに、旧制高校の夏休をつぶして、ヴァンデベルデの『完全な結婚』を原著で独和辞典を片手に、性に対する異常な好奇心から読破したことがあつた。これは独乙語の学力を急増した利点以外に何らの缺点も私自身の上に及ぼさなかつた。

佐藤氏の論文中にも、「『非行少年』という本には『処刑の部屋』という映画を見て睡眠薬入りコーヒで強姦した事件とか、『警視庁物語』の自動車強盗殺人場面に刺激されて強盗をした少年とか、映画の悪影響を重大視する世間の常識を裏づけるような例ものっており、もっと慎重かつ実証的な研究が進められる必要があるが、現在の段階では、それらは例外的突発的な現象といえるであろう。」と述べられている。ここにあげられた二つの

映画、特に後者は、「成人向き」と指定されていたという記憶はないが、（私のおぼろげな感じであるが）その映画を見た青少年のうちで、それをまねたのは何%いるであろうか。何万人に一人ではなかったか。むしろ少年非行の原因は映画や出版物ではなくて、家庭の不和、学校教育の偏向の方が遥かに重大であろう。子弟に対する愛情という名を借りて、一流有名校（と称される学校）への入学を無理強いする父兄、自己の成績や評判のみを気にして、進学する生徒のみの受験教育に走り、就職する生徒を放任するばかりか、邪魔物扱いにする教師、などの方が少年非行に拍車をかけているのではないか。また世間一般にも、「この曲の題名は何であるか」とか「小春とは十月の呼び名である」というようなくだらない知識を少し知っている、或は流行歌を少しく歌えるだけで、大学院を出て学位すら持っている若い研究者の月収と比較にならない高額な賞金を手にする事の出来る、いわゆるクイズ番組の方が、額に汗しないで金を得て、金さえあれば何でもできるかの様な感じを与える世間一般の風潮の方が青少年の正しい成長を歪ませるものであることに気がつけば、都条例などはそれらの取締の

方にこそ力を注ぐべきではなからうか。しかし本当にそうなってしまうと、テレビ（も早や一般庶民の生活の一部にとけ込んだ）の番組の殆んど全部は消えてしまい、当惑するのは、善良な庶民だけという事になってしまうであろう。

「性的感情をいちじるしく刺激する」、「残酷性をもつ」と指定するのは、これこれの映画であり、これこれの出版物である。と指定すること自体の方が、知らないでいる人に知らせるという恰好の宣伝となり逆効果すら招くことに気づかないのであろうか。

いわゆる悪映画を見、悪書を読んだから、かくかくの非行をしたときめつけるのは全く非科学的な考え方であり、むしろそのような非行をする人は、周囲の環境から、本人の心的発達の程度から、悪映画や悪書に接しなくても非行に走るのだと考える方がより妥当な科学的な考え方であろう。

本誌は不幸にして「良識ある」団体から、「悪書である」ときめつけられている。私は、五月号に発表した「本誌の存在価値」の中で指摘したように、私たちの内部に存在する多くの、奥深いストレスを解消するため、一歩ゆずっても存在してはならない書物

であるとは考えていない。本誌は大人の本である。事実、私は機会は少ないが、書店の店頭で、本誌を手にとっている人は一見すれば服装も整った温厚そうな成人が、きまり悪そうに見えているだけしか目にしていない。非行を働きそうな服装の荒れた（見かけだけで評価してはならないが）青少年がたかっているのを見た事は極めて少ない。

それよりも彼等と同年輩の芸能人たちの、かけ離れた生活を誇示するような芸能雑誌に集中されている。それが羨望、嫉妬、そして社会への不適応となって、非行が現れる場合が多く報ぜられている。

朝日ジャーナルが、佐藤論文を取上げたのは、そういう青少年非行の原因は、「良識ある人々」が頭の中で迷想した「悪映画や悪書にある」と考えたことに対する批判と、権力でそれらを取締ろうとする思想が、自由な出版やひいては学問思想に対する弾圧のきっかけであるとの危惧からであったと思われる。

最近の「三矢研究事件」にも見られる様に官憲の思想弾圧が再び私たちの上に来ないとは云えない。例えばヒトラーの科学的根拠のないユダヤ人排斥がアウシュビッツを実現させ、思想的にも笑いごとである様な、メンデ

ルスゾーンがユダヤ系であったと云う理由から、ヴァイオリン協奏曲を、「ホ短調」とのみ呼んで「メンデルスゾーン」の名を口にさせなかったナンセンスに思想的に通ずるものがないと云えない。

東京は我国人口の一割が住む出版や興行には最大の市場であり、そこでこの様なナンセンスな都条例が可決され、発効していることは、本誌の編集者に大きな傷手であろうが、本誌はあくまでも「大人のストレス解消」の本として存続してほしいと、読者の一人とし

て、善良な社会人として、インテリの一人として認められている筆者も切に希望している。如何に本誌が、都条例が迷妄であると訴えても「盗人ただけだけしい」と怒鳴りつけられるのが落ちであろう。がここ数カ月本誌のとして来た低姿勢と共に、大塚雅彦氏の「非行少年」など青少年非行のまじめな研究の数多くの文献を紹介して世の「良識ある人々」の啓蒙にも数ページずつを割く努力を重ねられる事が必要なのではないか。その努力こそが本誌の「堂々たる存続」を勝ち得る道では

ないかと考えられる。販売方法や内容の構成に工夫を重ねられる必要も無視することはできないが「文献誌」と自負する本誌のプライドからも、この機会を有効に利用される様に、一読者として編集者をお願いします。その意味からは、白表紙時代の、沼正三氏の「マゾヒズム雑考」などの文献味ゆたかな作品が見られないのは淋しい事ではなからうか。

読者の方々の御意見を承りたいと希望して脱稿します。

(終)



「芳野眉美氏のファンとしてのことと、

自分のことと、そして、自分自身

のための、CM」

(三枚と二分の一)

葉山 啓

○ 私と本誌の、つきあいも、かれこれ、十年になる。十年間、——ふり返って見て、いろんなことがあったようだが、なにも、なかったと、いえば、いえないこともない。

本誌にしても、そうである。

多くの、難事、迂余曲折も、過ぎてしまえば、なにも、なかったようなものだ。と同時に、華やかだった、最盛期(?)にしても、夢のまた夢ということが出来るだろう。

ここ、二、三カ月の、本誌の、あり方にしても、又、過ぎてしまえば、同じことかも知れないが、私のような、ヘソマガリは、ひとり秘かに、祝盃をあげ、拍手を送り、ホクソ笑んだ。

そして、とうとう、自分で、紙を汚す気持になって、ペンを持った。

辻村隆、芳野眉美、とやまかずひと氏等、好道者を中心にした、同人誌的傾向が、いわゆる、不特定多数を対象にした、商業公刊誌的傾向よりは、はるかに、私にとっては、秘儀的、密室的で、そして、魅力的に感じられるのだ。

私自身の性向について云えば、それは、いわゆる、デテイルにおいては、多少の差異

こそあれ、本質的には、芳野眉美・とやまかずひと両氏に変わるところはない。

しかし、私は、これを余り外部に堂々と宣したくはない。

きわめて、秘儀的、密室的に——ということとは、よりプライベートに、宣したい——

本当のことを云って、私の、こういう、願いに、近くなったのが、ここ、二、三カ月の本誌なのだ。

このような、編集が続くなら、私も、同人にさせて頂こう……同人雑誌——それは、自分で金を出して、作る雑誌に近く、好きなイメージ、好きな、たわごとを、書くことの出来るものだからである。

芳野眉美、とやまかずひと両氏の、ファンの一人としても、私は、ここ、二、三カ月の本誌の編集を嬉しく思う。

今日、殆どの雑誌が、視覚的編集(見る雑誌)の方向へ向っている時、本誌のみが一人、逆行するかのような観があるけれども、それも又、過ぎてしまえば、どうということもあるまいし、本質を深めることこそあれ、失うものは、なにもないはずである。

御健闘を祈る。

○ 私は、いつも、芳野眉美氏の文章に接して本当に、うまいと感心する。私には、とうてい書けない文章である。

殊に、私は、フィルム(映画)の演出をやっている関係から、映像による表現、については、多少の自信は持っているつもりだが、芳野氏の文章の表現力と、イメージの豊かさは、チャチな、映像の比ではない。

同封の、シナリオは、近日中に、映画にしたいと思っているものの、中の一編であるけれど、タレント、その他の関係で、なかなか実現しそうもない。

勿論、十六ミリによる、プライベート・フィルムになってしまおうが、美也子役をやってみたいと仰云る女性があれば、御一報頂きたい。

そのうち、芳野眉美氏の「悪魔の酒」なども、映像化してみたいと思っている。

○ どうですか？ 芳野氏———なにか、いい、脚本を、お書きになりませんか——？

○ 「編集部注」この文章は来月号の奇クサロンに掲載する予定でしたが、内容からして早く発表した方がよいと考えましたので特に今月号に回しました。シナリオ「いちぢくの実を持つ女」は次号に予定しております。

嗜虐の歴史 (一)

嗜虐の歴史

私は、サイゴンに滞在中、機会を得て、隣国のカンボジア王国に足を延ばし、エジプトのピラミッド、スフィンクス等と並んで、有名な世界の七不思議の一つとして普く知られているアンコール・ワットを訪れた事があった。

この旅行は、前稿「ラ・ムール・デスクラヴァージュ」の中でお伝えした様な経緯から私を奴隷として入手するに至った、イタリアのパドローナソフィア嬢との関係が、遂に征服と隷属の当初の関係を保ち得なくなり、いわば兩人の間に芽生えかけた愛情の若芽を我と我が手でつみとる為の別離の旅行であったという意味でも忘れ難い思い出を残す事となったのであるが、その時の複雑な感情を、アンコール・ワットで体験した謎の暗黒物語が

三 原 寛

更に強烈な印象を伴って胸に灼きつけたのである。

御承知の様に、アンコール・ワットの歴史も、征服と隷属の絶え間ない繰返しである。

アンコール・ワットの歴史は西暦一千年を前後して数百年に亘り築かれたもので、カンボジアの奥地グランラックと称される大きな湖の畔に繁栄を誇った一大宗教都市が一夜にして忽然と滅亡し、人っ子一人影をとどめぬ廢墟と化して密林の中に埋もれてしまったのである。それが、フランスの探險家に偶然に見される迄、美人の都市として眠り続けて来た謎はシェムリアプのグランドホテルから、強烈な太陽をさえぎってうっそうと茂る密林の中を延々とドライブして、それが、忽然と眼界が開けて目前に黒々とした石造りの巨大

な廢墟をつきつけられた時、殆んど愕然とする程のショックに襲われる。しかし、ここでは紀行文が目的でもなく、又詳しい人名、地名も殆んど記憶に残って居ないので、以上の背景のみを予備知識として頂き、そこから繰り広げられる幻想に暫く浸ってみたい。

アンコール・ワットの回廊の石壁は一面の彫刻で埋っている。この回廊は一辺約百米の正方形で、ここには、先ず、軍隊の出陣、戦鬪の光景、凱旋、捕虜の虐待という場面が彫刻されて居り、中で、捕虜虐待の場面が、その一辺を占め百米に亘って刻明に彫り込まれているのである。アンコール・ワット最繁栄時のこの国の支配者はペン女王といって類い稀な美女であったと伝えられて居るが、壁画が物語る絶え間ない他部族との鬪争時代に、これだけの栄華を築き上げたのであるから、ペン女王の統治者としての腕も卓越したものであったと判断される。

非常に権勢欲の強い女性であった事はアンコール・ワット城郭随所に自身の像を彫刻させてある事よりも、アンコール・ワットそのものの、この巨大な石材による構築物を当時の奴隷力だけによって完成させたという事実が、はっきりと証明していると思う。彫刻か

らみると、ペン女王は非常に整った顔立ちの大柄の肢体の持主であった様だ。ここに、ペン女王の軍隊に破れて捕虜としてアンコール・ワットに連れて来られたソバイという男の記録が残って居るので、それによって、当時の捕虜が如何様な扱いを受けたかを探ってみたいと思う。

フランス統治時代に建てられたという天井の高い、このグランドホテルの一室にも西陽が差し、暮色が濃くなって来た。ベッドが二つ。そして私はそのベッドの一つに腰を下し、フランス語で書かれたソバイの記録に読みふける。ソフィア嬢に私が奴隷として譲り渡り渡された当時、彼女とベッドを並べる等と、凡そ考えてみる事も出来なかった事である。犬の様に床の上に寝かされたものだった。そして鞭で追廻され、文字通り家畜同様にこき使われる身分だったのに、今から考えてみると、おそらく、彼女の様な行為は彼女がサディストだった所以ではない様に思われる。いくら淑やかな女性でも、馬が鞭打たれるのを目撃しても別にそれをサディスティックな関連には結びつけないだろうし、サディストでなくとも犬になら足を舐めさせて何とも感じないであろう。

彼女は私を、全く同じ人間であるとは考え得なかったのであって、人語を解する家畜だ位の考えしかなく又私もその様に仕向けたのである。だからこそ、彼女は全く私の人格を無視して、家事に酷使し、更には、揚句の果人間が今一人の人間を完全に自己の支配下におき、如何なる行為も許されるとなった時に試みてみたいと誰しもを持つ欲望の捌け口として、凡そ考えつく限りの人間性を蹂躪した屈辱的行為を私に強制したものだ。

天性のサディスティン、男を虐げ苦痛を与える事によってのみ性的な興奮を覚える所謂変態女性こそ、私の如きマゾヒストにとって神の配合した理想のクイーンという事が出来る。しかし、このケースの様に、本人は全く正常な女性が、ただ相手が自分とは一段劣ったクラスのいわば、家畜の一種である。つまり嘗ての南部の貴婦人が黒人奴隷に対していた如き感情で対処して来る場合も、無上のマゾの法悦に浸る事が出来る。前者はプレイであり後者は畜化そのものである。

しかし乍ら、後者の場合、女性が、相手に対し、その人間価値を見出した時、も早隸属関係はあり得ないし、まして、この場合相手に対して、その価値を認めたという事は妥協

の萌芽に直結する可能性が強い。東洋人蔑視という事は、これは西欧人が先天的に有する觀念で、この潜在意識はどの様にしても拭い去れるものではない。それだけに、彼女は悩み抜き、又、私の側からみれば、彼女も早神通力を失したというべきで、かねて彼女の望んでいたアンコール・ワット旅行を契機として、二人の關係にピリオドを打つ事としたのである。

「まだ起きて読んでるの？ もう遅いから明日にしたら？」

「シ・パドローナ」

「いやよ、パドローナ（女主人様）は止してっていったでしょう。ソフィアといって頂戴、せめてこの旅行中だけでも、ヒロシに対する私の愛を想い出として、残したいの」

しかし、その夜も、現実には私に対する態度を急にあらためる事は出来ず、結局、彼女の満足は私の舌のみによって得られ、私は彼女の洗礼を浴びるというルーチンワークに終わったのである。

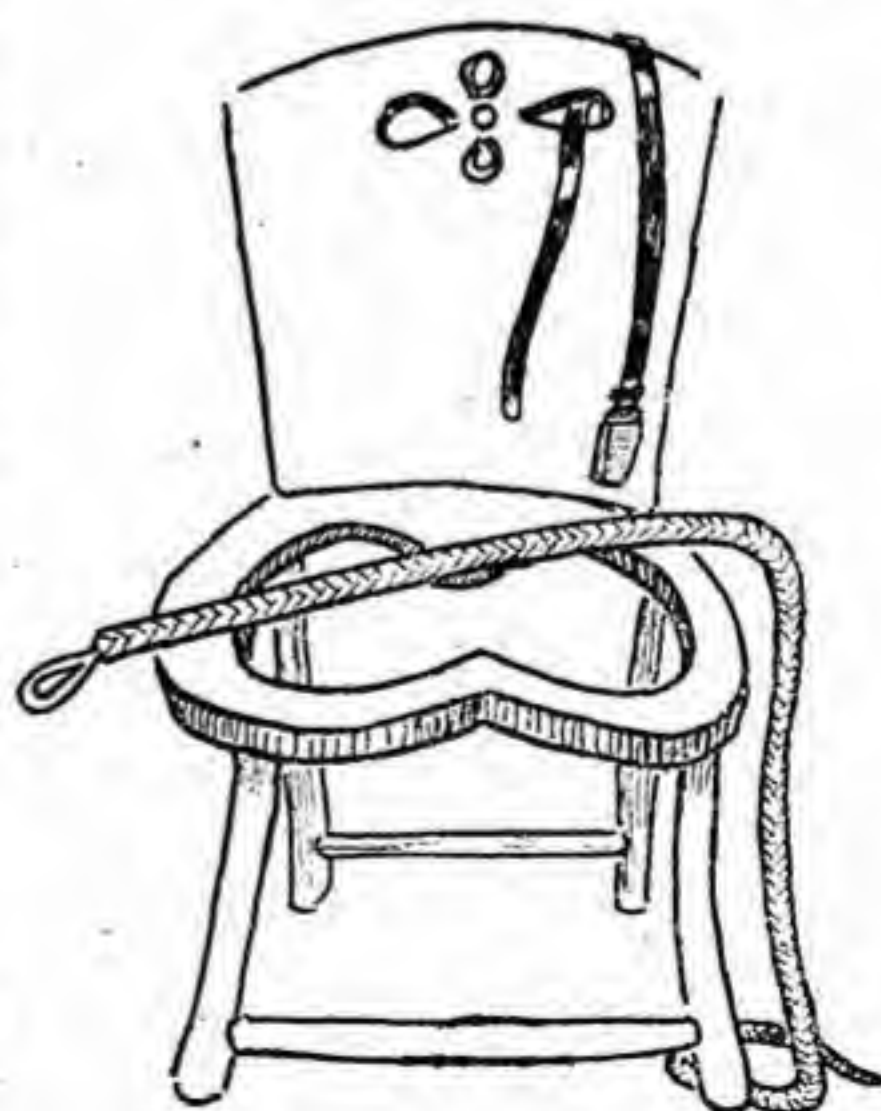
話がすっかり脇道にそれたが、ソバイの記録は今も、こうして大事に持帰って来て居るので、これを少し宛暇をみて翻訳し発表させて頂きたいと考えている。

(未完)

婦人警官シュザンヌ・シャラ

心傷たむ遍歴 〓第十章そのかみのこと(十)〓

西条 操



春四月初めの或る朝、シュザンヌ・シャラは胸張って、パリ警視庁の玄関に入った。彼女は当年二十四才、去年の秋に警察官学校を優秀な成績で卒業した婦人警官。北第一署での実務見習を終え、警視庁捜査第二課へ転属の辞令を受けて紺の制服姿も颯爽と胸ふくらませての初出勤だった。直属上司のミグレ警部は直立不動の着任申告を受け、微笑を浮かべてシュザンヌを眺めた。

「まあ掛け給え。警官には勿体ない程に綺麗だね、君は。聞きしに勝る美人だ。いや、こ

れは冗談々々。警官でも美人の方がいいよ。えーと、御両親は亡くなったんだね？」
「はい。父は戦時中レジスタンス運動をやってナチスに殺されましたの。射ったのは若い娘でしたわ。」

シュザンヌの頬が怒りで燃える。

「ああ、あの事件だったね。お気の毒だった。それでと……お兄さん一人と妹さん一人か。」

話して居ると男が入って来て、警部と何か打合わせた。部下の刑事らしい。済まなそう

にシュザンヌを見て、はにかむ様にまばいた眼は深く澄んで翳りのある青い瞳。口どもり勝ちだが誠実そうな声にシュザンヌは好感を持てた。

「紹介するよ。いずれ歓迎パーティーをやらなきゃならんがね。こちら、シュザンヌ・シャラ嬢、今春わが課に配属された唯一人の女性。この男はアルベール・マストロ君。老けて見えるが未だ卅五、いや六かい？ 勿論独身だよ。」

シュザンヌと握手したアルベールは、そそ

くさと出て行った。見送る背広の背に少ししわが寄り、快い哀愁がいぶし銀の様に滲んで居た。

「彼は二年前に来たんだが、頼りなさそうに見えてなかなかやるよ。時々、人間味を出し過ぎて、しくじることなきにしもあらずだがね。父親が伊太利人なんだ。君と同じで両親も居ないし、彼には兄弟もないんだ。」

メグレ警部は自分で淹れたコーヒーを二人分持ってきた。

「ところで君のことだがね、当分内勤してくれ給え。捜査の第一線は大変だよ。君なら大丈夫。しかしまあ、最初はいろいろと勉強して貰うことが多いさ。失踪人探しや少年係りの様な訳には行かないぜ。聞く所によると、君はジュードーが強いんだってねえ。」

シュザンヌはまつげを伏せて頬を染めた。

「これから私服にし給え。私服手当が出るから、靴下位は買えるさ。ハ、ハ、ハ。今まで制服で出入りしてたのならアパートを替え給え。近所の人にも身分を知られない方がいいからね。」

「はい」

警部がサインして渡してくれた装備品請求伝票を受け取った彼女は、踵を鳴らして室を

出た。

(丈夫なショルダーバッグを買わなきゃ。ドレスにこれじゃ、ごつ過ぎるわ)

庶務課で受取った装備品を制式バッグに納めながら、シュザンヌは思ったことだった。

小型だが強力な六連発オートマチック拳銃一挺。予備挿弾子二個、それに実包三十発。

黒光りする拳銃を掌に載せて、彼女は身も引き締まる心地だった。細いが頗る強靱な革紐一束、手錠二対、其の鍵を二個。

「あら、二つもくれるの？」

新品の手錠の工合を調べて環をクルクル回しながら、シュザンヌはそう云い、指先の油を拭いつつ刻印ナンバーを確認した。

「ええ、捜査課は二対支給ですわ。けど、皆さん、大抵は一つしか持って歩いてない様ですわね。」

装備品係りの事務服の娘は、そう云って、憧れと羨望の色を浮べる。

「これ、要らないでしょうけど……」

「そうね、でも貰っとくわ。」

シュザンヌは渡された革サックを受け取り、鍵は念入りにポケットに納め、最後に渡された呼子笛と共に一切合財をバッグにほうり込んで留め金を鳴らした。肩に吊るとずし

りと重い。身分証明書は庶務課長の手から姿勢を正して受領した。これで彼女は全警察官憧れの的のパリ警視庁捜査課所属の婦人警官だ。ロッカーに自分の名が既にあるのも嬉しかった。制服はこのロッカーへ置くことにした。明日からは私服で出勤するのだ。自分のデスクに坐ってあたりを見回わしたシュザンヌは、新たな感激と緊張を覚えた。

(早く一人前になって、お母様の仇を取ってやらなくちゃ。悪い奴等を片端から捕えてやるんだわ)

非業の最期を遂げた父母を偲びつつ、彼女は襟から外したバッジに見入るのだった。

シュザンヌは会社員と云う触れ込みで、ベルナール五番街のアパートに居を移した。

大勢の課員は居ても、それぞれ飛び出してデスクは殆んど毎日空だ。書類やカードの整理索引、内外至る所との連絡、しつこい新聞記者との応待、内勤とは云え眼の回る激務だった。先輩や同僚とも漸く顔馴染となったし、広い庁内の勝手も略々分った。二課にはシュザンヌを入れて六名の婦人警官が居た。危険な捜査活動の第一線に身を挺して出勤して行く先輩婦警達の姿を見ると、シュザンヌの胸はうずうずする思いだった。

今日も朝早く飛び出して行ったレイモンド婦警が、ひる過ぎに若い男をしょっ引いて戻って来た。

「名は何て云うの？ 住所は？ 忙しいんだから手間取らせないでね。年は、と訊ねてるのよッ」

シュザンヌより五つ年上、結婚して既に子供もあると云うレイモンド婦警が、張りのある声でビシビシ訊問を初める。

「ちゃんと立ってることが出来ないの？ これッ」

ビシッと叱りつけたレイモンドが手錠の革紐を矢庭に引きおろし、愚連隊風の男は顔をしかめた。

「あ、婦人房？ スジイ・コンスタンタンを調べ室へ入れて下さいな。室番号知らせてね。」

シュザンヌが耳に当てた受話器の向うで、分ってるわよ、と云う気配がして電話が切れた。

受話器をおきながら眺めると、レイモンドの左手に巻いたハンカチに血が滲んで居る。男を留置場係り警官に引き渡したレイモンドは、忌々しげに薬品箱を取り下ろした。

「どうなさったんですの？ 医務室へいらし

た方がよくはありません？」

近寄ったシュザンヌに繃帯を巻いて貰い乍らレイモンド婦警は苦笑いして頭を振り、くわえた煙草に片手で器用にマッチをすった。

「喧嘩よ。私達の出る幕じゃないんだけど、所轄の連中はおそいし、相手に重傷負わせて刃物振り回してるし……。それにね、ちよ

っとピンと来たことがあるの。今うちでやってるアヌーク事件に、どこかでつながってる男だと睨んだもんだから引張って来たのよ。

こんな怪我なんかしちゃって、ほんとに恥かしいわ、ありがと。」

シュザンヌは畏敬の念をこめて先輩を眺めたのだった。

シュザンヌのアパートに、彼女の室と隣合って若い男が住んで居た。名はフェラール・ダンテス、見受けた所平凡な勤め人風に見える彼とは、朝夕会えばそこらまで肩を並べて行く仲だった。初夏五月の半ば、日曜の朝寝

を楽しんだシュザンヌは、起きた所をフェラールに誘われた。

「やっとお眼覚めかい。僕の所へ来てコーヒーでもお飲みよ。」

「そうね、ありがと。いつも御馳走になるばかりねえ。」

「なに、いいんだよ。君はいつも忙しいんだなあ、夜もおそい日が多いし、会社で何してるの？ 秘書かい。」

「ウフン。まあそんな所かもね。眠いわ。」

シュザンヌを迎え入れていそいそと支度するフェラールは嬉しげだ。そんな彼をソファで眺め、シュザンヌは擦ぐったかった。決して尊敬する気にはなれない男だが、何となく憎めない。部屋着姿のシュザンヌをまともに

は見詰め得ない風情でそわそわして居る。(年は二十八だと云ったかしら。私の職業を知ったら吃驚することね。どうやら私に気があるらしいけど、困っちゃうわ)

何度か忘れ物をして台所へ行ったり来たりした末、漸く彼もテーブルに坐った。

「ねえ、シュザンヌ。君、ひとりなの？ 淋しくないのかい。」

「ううん。そんなでもないわ。時々故郷から兄や妹が訪ねて来るし。」

シュザンヌはコーヒーを啜った。払えども払えども胸に切なく浮んで来るのは初恋の男の面影。彼女より八つ年上の其の男は、悪い仲間に巻き込まれて罪を犯し、不起訴にはな

ったものの、自ら身を退いて彼女から去って行ったのだった。

（もう、五年になるわ、早いものねえ。どこに居るのかしら。若し逢ったら、私、……）

思い悩んで茶碗を弄ぶ彼女の胸をよぎるのは、あのアルベール・マストロの姿と声。

（どこことなく似通ってるのよ。でも、私って馬鹿ねえ、彼にはわざとツンケンしたりするんだもの）

音を立ててコーヒーを啜ったフェラールが陽気に云う。

「そうかい。けど、淋しくなったら、いつでも僕を誘ってくれていいよ。」

（まあ、しよってること）

シュザンヌに見詰められた彼はあわてて眼をそらし、コーヒーにむせてこぼした。

「ね、今日、一緒に出掛けないか。マロニエも芽を吹いたし、セーヌの岸を散歩したら素晴らしいと思うけどなあ。」

「そうね。けど、私疲れてるの。悪いけど又今度にしてね。」

「そうかい。残念だなあ。もう、これで三回も断わられてるんだよ、僕。」

「そうだったわね。悪いと思うわ。」

彼は口をとがらせて立ち上った。すぐに後片付けに取りかかる所は、中々几帳面な男でもある。

「手伝うわ」

「いいよ。いいったら。疲れてるんだろ。」

それでも嬉しげにあわてた彼の手から茶碗が落ちて割れた。台所で吹く彼の口笛を聞きながら、シュザンヌは何となく室内を歩き回った。

（ちよっと趣味が軽薄ね。でも、なかなかよく揃えてるわ。案外稼ぎはいいのね、ああ見えても）

調度品を眺めて居ると、半ば開いた衣裳棚の中が見えた。何気なく覗き込んだ彼女は、立去りかけてふと不審に思った。独身男の彼にはふさわしくない物が隅にかけてあったのだ。ミンクのコート!! それも、贈物にするには、どうかと思われる掛け方だ。職業柄、調べたくもなる。それに彼女はミンクを持って居ない。

（おかしいわね。けど、素晴らしい品だわ）

もう一度、今度は少し念入りに見て、彼女はハッとした。婦人警官シュザンヌは忽ち思い出す。数日前、中央署から回付されて来た盗難品リストの中に、確かこれと同じ特徴のコートがあった。シュザンヌも矢張り女性、衣裳に関する注意力では、メグレ警部と云えども敵わない。眼をキラキラさせた彼女

は、思わず引張り出して調べ初めた。

「何してるんだい? ラジオでもつけたらいいのに。」

声と共にフェラールがやって来て、彼女はコートを抱いたままうろたえた。

（私、やはり未だ新米だわ。どうすればいいのかしら）

「おや、何してるの?」

「扉が開いたの。素晴らしいミンクが見えたものだから、つい……ごめんなさいね。」

「なあに、いいよ。どう? 凄いいコートだろ。」（落着いてるわ。思い過ごしかしら）

彼女は何故かホッとしてコートを戻した。

「けど、こんなものどうするの? あなたの持物?」

「そうさ。安く手に入れたんだ。故郷の女にやるんだ」

そう云ってフェラールは顔をしかめる。

「実はね、白状しちゃうよ。お袋の決めた娘が故郷に居るんだ。それで僕困ってるんだ。今……」

「そうなの!! 素敵じゃない? それとも其のひとのこと、嫌いな?」

「ウーン。嫌いじゃないんだけど……」

フェラールは妙に熱っぽい眼でシュザンヌ

を見詰めて口ごもる。危いとシュザンヌは思
い、話題を変えた。

「テレビないのね」

「買おうと思えば買えるさ。でも、あんなの
愚劣だよ」

「あら、わりかし高邁なこと。」

シュザンヌは部屋着の襟を掻き合わせて自
室に戻ったのだった。

翌朝、彼女はコートのことをメグレ警部に
報告した。

「少しお調べになった方が、いいと思うん
ですけど」

「じゃ、調べたまえ」

「は？」

傍で聞いて居たシンシア婦警が、小鼻を寄
せて小馬鹿にした様だ。

「君が調べるんだよ。今、うちで抱え込んで
る事件を知ってるだろ？ 事件、事件、そし
て又事件、事件!! そんなコソ泥は後回わし
だ。とても手は割けないよ。君ひとりで当
て見給え。」

警部はいつになく、イライラした口調でそ
う云った。

考えて見ると、シュザンヌは段々に不審が
募って来た。第一、フェラールがどこに勤め

て居るのか聞いたこともないし、云おうとも
しないのだ。それに出勤時刻が一定せず、朝
夕一緒になることがあっても、彼の出掛けて
行く方向や帰って来る方角が、まちまちなの
だ。

（でも、夜は先ず部屋に居る様ね。しかし、
矢張りおかしいわよ。ひよっとすると……）

大窃盗団の一斉検挙を空想して、シュザン
ヌは胸が躍るのだった。内勤の仕事をやりく
りして、彼女は二日続けてフェラールを尾行
した。そして、二日共忽ちにして見失ってし
まい、唇を噛んで地団駄を踏んだ。中一日を
おいて鋭気を養った彼女は、朝のおそい彼を
ジリジリして待った末、眼をキラキラさせて
室を滑り出た。バッジと拳銃を秘めたショル
ダーバッグ、その外ポケットにはすぐ取り出
せる様に手錠を入れて、シュザンヌは懸命に
あとを尾ける。フェラールは一日中のんびり
とパリの街を歩き回わり、映画を眺めストリ
ップを覗き、時々カフェで落ち合った人と話
し込み、そしてぶらぶらとアパートに戻って
仕舞った。何も犯罪の匂いすら感じられない。
（捜査って難しいわね。やっとまかせない様
に尾行できたと思ったのに。私、駄目なのか
しら。でも、聞き取れなかったけど、あのヒ

ソヒソ話が怪しいわ。相手の男はどれも眼が
鋭かったし……）

隣室の壁を覗んでシュザンヌは、がっかり
して足を揉んだ。翌日、もう一日だけと思っ
て尾けて居ると、今度は遂にフェラールに見
付かってしまった。場末の劇場街の角あたり
だった。

「シュザンヌじゃないか。ここで逢うなんて
嬉しいなあ」

フェラールは無邪気に笑って何の疑いも示
さない。

「私、ちよっと用があってこんな所へ来たん
ですけど……」

「そうかい。僕も仕事なんだ。」

「あなた、会社はどこなの？ 何してるの？
聞かせてよ。今日は私が御馳走するわ」

感激したフェラールはカフェのテーブルで
揉み手しながら明るく云った。

「僕はね、セールスをやってるんだ。それも
万々の会社のね。歩き回るのが仕事さ。」

シュザンヌは不審の解けた思いだった。疑
ぐって済まなかったとさえ思えた。

「フェラール・ダンテスのことですけど……
彼は結局白でしたわ。」

翌朝、シュザンヌは警部にそう報告した。

「そうかい。フフフ。じゃ、例のコートの入手先を洗うか。君が表に立つ訳にも行かないから、所轄署にやらせよう。しかし、名目がないな。まあ何とかやるだろうて。」

警部は鉛筆で額を叩いて居たが、考えて居ることは既に他のことだった。

翌日曜日の朝、シュザンヌはフェラールを自室に誘ってお茶を淹れた。一晩考えた末、勤務の合間々々にもう少し当って見ようと決心した彼女だった。

「ほんとに嬉しいなあ。君にこんな風にして貰えるなんて。」

フェラールは憧憬の色を浮べた眼でシュザンヌをまぶしげに眺めた。今朝は特に念入りに化粧をしたシュザンヌだった。

「ねえ、この間のミンクコートだけど。私も安く手に入れたいのよ。どこで買えるの？ 教えて頂戴」

「ああ、あれなら未だあるよ。欲しけりゃ上げる、いや、君には別の新品を手に入れてあげるよ。」

「凄いのね。でも、そんなのいけないわ。故郷のペアトリーヌさんに悪いじゃないの。ね、あれを今日一日だけ貸してくれない？ 着て歩いて見たいのよ。」

そう云ってシュザンヌは口を押えたが、おそかった。

「へーえ？ だってもう夏だぜ。着るの？」

「あーら、私って馬鹿ねえ。ほんとに。つい嬉しくなっちゃって」

「そんなに喜んでくれるなら嬉しいよ。ね、シュザンヌ。宝石だって安く手に入れることが出来るんだぜ。」

「まあ、凄いわね」

シュザンヌの瞳がキラッと光り男の眸は更に歓心を買おうとして生き生きと輝き燃える。

「ねえ、今度どえらい取引があるんだ。そしたら……」

「取引って宝石？」

「うん、まあ、そうだよ。それがうまく行ったら、ねえ、僕と結婚してくれないか？ 欲しい物は何でも買ってあげるよ。家もドレスも、旅行もしよう。」

「……」

シュザンヌは言葉に窮した。いつもなら軽くあしらうのだが、男の言葉や態度に真実を感じた今は、其の男を尻にかけようとして居る自分が恥かしい気持だった。

「ねえ、いいだろう？」

接吻を迫る男を辛ううじてかわして、彼女は喘ぎ喘ぎ云った。

「駄目よ。ペアトリーヌさんを、どうするつもりなの？」

「手紙で断わるよ。彼女のこと嫌いじゃないけど、君を知ってからには有難迷惑なんだ。」

「だって悪いわ。ねえ、あんまり急なんだから、もう少し待って頂戴。考えるわ。」

其の日は辛ううじて何とか済んだが、彼に対する疑惑の念が、シュザンヌの胸に再び黒くひろがり初めた。

(悪いひとじゃないと思うけど。でも、ああ見えてもポイントでは中々口を割らないし、ほんとの大悪人と云うのは、あんな風なのかも知れないわ。ひよっとすると、案外首領かもね……でも、まさか)

確答を迫る彼の熱心さに、シュザンヌの心はともすればほだされて、疑惑の追求どころではない、三、四日が過ぎた。所轄署は未だ何の動きも示さず、そして突然、故郷からペアトリーヌがやって来た。垣間見たペアトリーヌは想像通り純真な、小柄で愛らしい娘だったが、許婚者のフェラールに冷たくされて泣き出しそうな風情だ。隣室の気配をあとに出動したシュザンヌは、帰るのが心重くて、

同僚の夜勤の交替を買って出たのだった。翌日の夜、そっと戻って見ると、隣室から明るい笑い声が洩れて居た。

(よかったわ)

ホッとした反面、複雑な女心の陰翳が胸をよぎり、シュザンヌは溜息をついて長いことソファに沈んで居た。

「帰ってたのかい」

フェラールが其の憎めない顔を覗かせた。

「ええ」

「疲れているんだなあ。所で僕、やはりペアトリーヌと結婚することにしたよ。怒らないでくれよね」

「怒りやしないわ。よかったわね。その方がいいことよ。可愛い娘さんじゃないの。私なんかよりずっと初々しくて綺麗だわ」

「うん。見たの？ 君が賞めてくれて嬉しいなあ。それでさ、明日は日曜だろう。おひるに招待するから会ってやってくれないかい」

「ええ、いいわ」

其の夜、シュザンヌは決心した。

(ペアトリーヌのためにも、明日は必ず結着をつけよう。もし、私の身分がバレた所で、引越せばいいんだから。でも、確証を掴んだ時にはどうしようかしら。所轄署へ応援頼ん

だら、レイモンドさんなんか笑われちゃうわね)

眼覚めたシュザンヌは朝の自室で武者振いした。拳銃を素早く擬して逮捕する動作を独りで繰返した末、彼女は心配になった。

(仲間が来るかも知れないわ。そう、其の仲間も捕まえずにちやならないし、ともかく私独りじゃ無理よ。連絡して誰かに来て貰わなくちゃ……)

招待された食卓では、ペアトリーヌが世にも倅わせな顔をして居た。

(私の取越苦勞であります様に。フェラールがまっとうなセールスマンであります様に) 楽しい二人を眺めて、シュザンヌは何度も祈ったことだった。

(けど、どうして切り出そうかしら)

昨夜いろいろと練った作戦も中々に踏み切れないで食事も済み、そしてフェラールは煙草を切らして出て行った。先ず五分間は戻って来ない。隙を見て調べると、ミンクコートは未だ衣裳棚にあった。

「ねえ、私達、今夜故郷に帰りますの。又、出て来ますけど」

エプロンを前に締め乍らペアトリーヌが云った。

「あら、そうお。」

「フェラールは黙ってると云うのですけど、何故かしら？ でも、お隣りなんですもの、黙って行っちゃ悪いですわねえ。けれど、今日は行けなくなるかも知れませんか。それで黙ってると云うのかしら」

「何故行けなくなるの？」

「夕方あの箱を取引先へ届けるんですって。取引がうまく行けばいいけど、うまく行かないと……あら」

ペアトリーヌは、口を押えて泣き顔になった。

「箱って、どの箱？ ああ、あれね。フェラールはいい腕なのよ。心配しなくともうまく行くわ」

「ええ、そうだといいいんだけど。凄い金額の取引なんですって。宝石もくれると云ってましたし、旅行して回わるんだって……」

「そう。いいわねえ。」

ペアトリーヌは台所に消え、管理人の小母さんが仏頂面を覗かせた。

「おや、ダンテスさんは？ 今、電話でことづけがあったよ。名前も云わずにさ。都合が悪くから延期するって。連絡するまで待て、とさ。そう云えば分るとさ。いいかえ。」

「分りましたわ。伝えます。」

シュザンヌの心は決まり、扉を内側から閉めた。そして、小机の上に無造作におかれた紙包を、注意して開き初めた。紙箱の中に、更に柔かな紙にくるんで十数個の指環!! 大きな宝石の輝やく其の見るからに豪華な指環の数々に、シュザンヌの頭に刻まれて居る盗難貴金属類のリストがピタリと符合した。

(ああ。矢張り……。もう間違いないわ)

シュザンヌは震える指先で紙包みを元に戻した。台所からは食器の音と共にハミングが聞える。

(可哀想に。でも、仕方ないわ)

緊張に顔を引き締め眉上げて、シュザンヌは電話へ急いだ。廊下でフェラールとすれ違う。

「どこへ行くの?」

ネクタイをゆるめ乍らフェラールは相変らず無邪気な顔、却ってシュザンヌの方が胸をドキドキさせて答えた。

「ちよっと友達の所へ電話するのよ」

ダイアルを回す先はメグレ警部の私宅。

「うん。それで?」

警部の声は未だ眠そうだ。

「やはり、そうでしたわ。証拠を掴みました

の。一度は欺まされましたけど、間違いありません。」

「それで?」

「ですから、誰かすぐ寄越して頂きたいんです。それに此の場ですぐ逮捕していいものかどうか。少し泳がせといった方が……」

「仲間のことか。君はまだそんな小細工を考える柄にはなっていない筈だ。」

「は、はい」

「そんな男ならすぐに泥を吐く。構わんからすぐ逮捕し給え。」

「だったら誰か寄越して下さら……」

「君が逮捕するんだ。拳銃は、あるんだろう?」

「はい」

「バッジは?」

「あります」

「手錠は?」

「持ってます」

「それなら、君ひとりで沢山だ。奴は居るんだな? すぐ行き給え。殿方をあまり長く待たせるもんじゃないぜ。」

「はい。でも……」

「それとも所轄に手伝って貰って、あとでボヤかれるか。何ならパトカーを呼ぶか。番号

は一一〇番だよ」

「は、はい。でも、あの……逮捕状が……」

「馬鹿ッ。緊急逮捕だ。確証があるんだらう? 旅行に出る恐れがあるんだらう? しっかりし給えッ」

ガチャリと電話は切れ、シュザンヌは受話器を握りしめた。シュザンヌを早く一人前にしてやろうと、メグレ警部は心を鬼にして、わざとすげなく突き放したのだ。その心は、電線を通してシュザンヌの胸にも暖かくきびしく伝わった。初めて自分の責任に於いて容疑者を逮捕するのだ。

(ようし、いいわ。おしまいまで、自分ひとりでやるわ)

シュザンヌは意を決した。しかし、最初の逮捕の相手があんな男で、隣りに住む人間だとは。それに何も知らずに嬉しげなペアトリイヌも居るし、故郷には彼の母も……。

自室に戻ったシュザンヌは溜息と共に準備した。バッジを襟裏に拳銃を胸許に、手錠はスカートの裏に自分で作ったポケットへ納め、其の鍵は襟裏の隠しポケットに押し込む。それに小銭を少し。バッジと拳銃と手錠を身につけると、職業意識に身が引き締まった。シュザンヌは緊張して再び隣室を訪れ

た。何も知らないフェラールは台所の扉越しにペアトリーヌと大声でやりとりし、笑み崩れながらシュザンヌを迎えた。可哀想に。包みを調べられたのには未だ気付いて居ないらしい。

「先刻、ことづけがあったわ。誰か知らないけど、今日は都合が悪くなったんですって。連絡するから待ってる様になって。」

彼の視線が包みに飛び、落胆の表情が浮んだ。シュザンヌは何度か立ち上がろうとしては、ためらった。台所から明るく洩れるペアトリーヌの声が、その度にシュザンヌの腰を押えつけるのだ。緊張の余り額と腋下に汗が滲む。フェラールが不審がった。

「何をもじもじしてるの？ コーヒーが冷めるよ。煙草どうだい？」

ペアトリーヌがエプロンを脱ぎ乍ら台所から現われた。

「ちよっと買物に行きたいんだけど。夏の手袋が欲しいの。どこのお店がいいかしら？」

ホッとしたシュザンヌは、かなり遠い店を教えてやった。ペアトリーヌが胸弾ませて去り、婦人警官シュザンヌは決然と立ち上がって唇を舐めた。

「フェラール・ダンテス。窃盗容疑であなた

を逮捕します。」

胸許に差し入れて拳銃を握り締める掌が汗ばんだが漸く口火を切って彼女は冷静を取り戻した。

（最初とは云いながら、少しだらしがないわね、私。声が震えてたもの。けど、あまり云い易いセリフじゃないわねえ）

ポカンとしたフェラールは、旅行案内書を取り落とし、暫く口をあけて居た。

「き、きみは!!」

「そう。私は警官なの。」

彼女はスーツの襟を返して、バッジを示した。

「そうだったのかい」

彼は溜息をついて肩をすくめ、弱々しく笑った。

「覚えあるでしょう？ さあ行きましょう。立ちなさい」

抜き出した拳銃を擬し彼女は真正面に回わって促がした。そうだ身体検査をやらなくちゃいけないのだ。彼は素直だった。

「行くよ。悪いことだろうとは考えてたよ。いつかは捕まるかも知れないとは思ってた。」

「なら、何故盗みなんか働いたりしたの？ 馬鹿ね。」

「ああ？ 僕泥棒なんかしてないよ。」

「じゃ、あの包みの中の物は何？ どうしたの？」

「調べたんだね。預かり物なんだよ。買ってくれる所を僕、知ってるんだ。」

「ああ、そうお。そうだったの。じゃ、贓品を扱ってたのね。」

彼女はホッとした。幾分でも罪が軽いのだ。

（それに思いつかないなんて、私はやっぱり新米なのね。警部はもう分ってたのかも知れないわ）

「贓品で何だい？」

彼はのろのろと立ち上がりつつ訊ねた。

「盗んだ物のことよ。手をあげて」

「盗んだ物かどうかは知らないよ。多分そうだろうとは思うけど。あのミンクのコートだって……」

「それは行ってから、ゆっくり訊くわ。うしろ向きなさい」

「僕何も持ってやしないったら。そんな拳銃なんかこわいから納っておくれよ。おとなしくするよ。」

「それは分ってるわ。さあ、こっち向いて」シュザンヌは拳銃を胸許に戻し、左手で男

の右手を掴み、右の手をスカートの下へ差し込んだ。決して強く掴んだつもりはないが訓練の賜物は大きなものだ。手首の急所を握られた男は顔をしかめ、そして嬉しげな表情を一瞬微かに走らせた。

「ねえ、シュザンヌ。お願いだからペアトリーヌに逢わせてくれないか。さよならを云いたいんだよ。」

彼女に右手を預けたまま、彼は呟やく様に云った。そんなには悲しげな声でないだけに、却って哀れさが一しお増す。

「そうね。もう帰って来る頃ね。さよならを云ったら、おとなしく来る？ 誓うわね？」

「誓うよ」

シュザンヌは男の手を放してやり、右手をスカートの裏から抜き出した。嬉しげに腰をおろしたフェラールは、シュザンヌを見上げてまじまじと見詰めた。

「僕を捕まえようと一生懸命だったんだね。けど、僕だってぶらぶらしてる様に見えても一生懸命だったんだよ。少しでも高く売ってお金を儲けたかったものね。」

「今度は善いことで一生懸命になるのね。ああ、そうそう。ペアトリーヌにはこう云いましょう、ちよっと用があるから、二、三時間

二人で外出するって。」

「うん。そうだね、その方がいいね。」

シュザンヌは男を見下ろしたまま考えるのだった。

（この男、ほんとに少し足りないんじゃないのかしら。それとも、そう装おって居るだけなのかしら？ とにかく、何かの才能があるのね。それを悪い奴等に利用されたのよ。あつ、そうだわ。此のひと私に求婚したのよねえ。まだ、私を見詰めてるわ。）

「シュザンヌ。君は本当に綺麗だ。一生懸命になってる君は惚々するよ。僕が手向うかと思つて、先刻は一生懸命だったんだね。心配しなくていいんだよ。おとなしくするよ。君に捕まるんだものね」

「そう。ありがと。そうしてね」

油断なく見守りながら、シュザンヌは苦笑いした。

ペアトリーヌは、明るくはしゃぎながら戻つて来た。

「とっても素敵なのがあったわ。」

ペアトリーヌは、包みを解くのもどかしげに、白レースの長手袋を夢中になって手に通す。

「ねえ、見てよ。」

「ほんと、とっても素敵よ。よく似合うわ。貴婦人みたい。」

ペアトリーヌは嬉しさに頬を更に染めた。

「ペアトリーヌ」

フェラールが呼び、甘い声が返って来る。

「なあに？」

「僕ね、シュザンヌさんと一緒に出掛ける用が出来たんだ。留守を頼むよ。」

「そうお。夕方には帰って来るんでしよう？ 今夜発てるの？ 晩御飯はどうするの？」

「う、うーん。今日は発てなくなったんだ。じゃ、ちよっと行って来るからね。」

フェラールは立ち上がり、シュザンヌは例の包みを小脇に抱えた。

「ペアトリーヌ。悪いけど、ちよっと用が出来たの。詰まらないことだけど。」

「いいわ。シュザンヌさんなら、いいのよ。」

ペアトリーヌは愛くるしい顔に露ほどの疑いも浮べず、いそいそと男に新しいハンカチを手渡して指をからませる。シュザンヌは右手を胸許に差し入れたまま男の右側に寄り添い、扉をあけてくれたペアトリーヌが二人を見送った。フェラールは曲角で願つて最後の一べつをペアトリーヌに投げ、シュザンヌは思わず見逃してやりたいと云う気持に駆ら

れた。階段の踊り場で、シュザンヌは男の右腕を引き寄せて立ち止まった。どうせ明日になれば、ペアトリーヌの口から身分はバレるに違いない。此のアパートからも引越した。

(因果な商売なこと)

シュザンヌはスカートの裏ポケットから手錠を取り出して男の顔を眺めやった。有無を云わさず利腕の手首に叩き込む様訓練されて来た彼女だったが、此の男にそう云う仕打ちをするには忍びない気持だった。

「気の毒だけど手錠かけるわ。手を出しなさい」

「嫌だなあ、僕。約束通りおとなしくしたじやないか。決して逃げたりしないよ。」

世にも悲しげな彼の顔を見て、彼女は思わず手錠を元に戻しそうになった。

「駄目よ。そりゃ私だって、こんなことしたくはないけど、仕方ないわ。」

引込めかける男の右手を掴んだシュザンヌは、其の手首に鋼鉄環を押しつけた。

「そっちょもよ」

フェラールはおとなしく左手を寄せた。婦人警官が容疑者を逮捕連行する場合には、相手の男女老若を問わず、両手に手錠をかけるのが規則だ。

「袖で隠したら、分りやないわ」

両方の環を押えて軽く縮めたシュザンヌはそう云って、体の緊張がゆるむのを感じた。

「うん。そうだね。」

彼は素直にうなずいて袖を引張り、シュザンヌは包みを抱え直した。革ロープをつけるのは可哀想だし、其の必要もないだろう。それに彼女は初めから革ロープを準備して居ない。

「もがくと痛いだけよ。さ……」

シュザンヌは男の右腕を抱えて少し斜め前を歩いてやりながら、誰にも見付からない様に願った。幸い日曜日の午後のアパートは閑散として居た。

「パトカーを呼ばないのかい？」

「ええ、その方がいいでしょう」

拾って乗ったタクシーの運転手は、二人が警視庁前で降りた時に初めて男の手錠に気付き、シュザンヌの顔を、まじまじと見て口笛を吹いた。警部に連絡をし、包みを庶務係に預けたシュザンヌは、がらんとした課のデスクで型通りの訊問を初めた。訊問と云っても、姓名と生まれた場所と年月日、住所に家族、そして職業と経歴位のこと。本格的取調べは警部か警部補の仕事だ。見習いとして

少年係りをして居た時、補導した非行少年少

女を訊問したことがあるので、少しは物馴れた口調も出来る。フェラールは許しもなくデスクの向うに腰掛けた。レイモンド婦警だったら、平手打ちが飛ぶ所だろうが、シュザンヌは黙ってカードを取出した。

「名前かい？ 分ってる癖に何故訊くの？」

「いいから、答えるのよ」

「フェラール・ダンテス。早く手錠外しておくれよ。」

「済んだら外したげるわ。生まれはどこ？」

記入を終え、留置者カードに署名した彼女は電話器を取り上げた。日曜のせいか、係りの警官はなかなか来ない。

「煙草喫わせてくれないかい？」

「そうね、いいわ」

火をつけて貰った煙草を、彼はゆっくりと吸った。一緒に持ち上げねばならない両手の不自由さが哀れだった。

「やあ、初めてのお手柄だね。此奴は幸せ者だよ」

やっと現われた留置場係りの警官は菓子とパンを手に口をモグモグさせ、鍵を取出すシュザンヌに片眼をつぶって見せた。

「さあ来い。来るんだ。掛けさせてなんか貰

ってやがって。立て、此の野郎」

嗚りつけた警官はフェラールの手から煙草をむしり取り、荒々しく腕を掴み上げた。泣きそうな顔で振り返りつつ、曳かれて去るフェラールを見送り、シュザンヌは初めて煙草をくわえて椅子にもたれた。暫くは放心した様に火もつけず、まだ鍵を突込んだままデスクにはうり出してある手錠をボンヤリと眺める。

（これが最初の逮捕と云う訳ね。疲れたわ。けど、ホシがあんな男じゃ張合いがなくて何だか佗しくなっちゃうわね。それにお隣りに住んでる男だなんて。住所を訊いた時には吹き出しそうになっちゃった）

シュザンヌはペアトリーヌのことを思っ心重かった。彼の郷里には息子の結婚を待つ母も居るのだ。

（どう云って慰さめようかしら。私のこと憎

むでしょうね、きっと）

ペアトリーヌは何も知らずに、今頃は足音に耳を澄ませて居ることだろう。

（可哀想にフェラールは、もう今頃は、鉄の檻の中へ入れられてるのね）

やり切れない思いをやっと整理し割り切つて、意を決した彼女が警視庁の玄関を出ると外はもう仄かに黄昏れて居た。

◎本誌二〇〇号突破記念◎ ▲原稿募集▽

▽内 容△

一、特異なる風俗文献誌を標榜する本誌にふさわしい内容の力作をお待ちします。

一、見る雑誌より読む雑誌として脱皮するため、後世に残しておきたい文献的価値のある資料は、長短に拘らず歓迎します。

一、SMの他、フェテツシュ、切腹、女斗美、女相撲などは勿論のこと、新しく登場した生首狂崇、妊婦嗜好などの例にみる新分野の開拓を大いに期待します。

一、形式は創作、小説などのフィクションも結構ですし、自らの体験をお持ちの方は告白も大いに結構です。更に論説、意見、感想、手紙、随筆、シナリオなど、最も効果を發揮できるものを、お選び下さい。

一、内容については、今後毎月課題を出したいと思っております。

▽規 定△

一、作品はすべて未発表の自作品に限ります。引用部分の出処は明記願います。

一、枚数は一切御自由です。

一、締切日は別に定めません。優秀なる作品は、最近号に掲載いたします。

一、採用原稿に対しては、作品相当の稿料をお支払い致します。

一、御送稿は開封第五種便（五〇グラム毎に十円）にてお願い致します。

○以上の内容規定にて、奮て御応募下さらんことをお待ち申し上げます。

▲奇ク編集部▽

ペアトリーヌは泣いては諦め、又しても泣きじゃくって悲しんだ末、フェラールには会いもしないで翌日去って行った。

シュザンヌは、メグレ警部から賞めて貰った。フェラールの自供によって、何名かの窃盗犯と故買犯とを検挙できたのだった。しかしシュザンヌは賞めて貰っても、何かうら淋しかった。そして、フェラールの室を整理してやった彼女は自分も居を引き払って新しいアパートへ移った。強いてそんなことをする必要もなかったのだが、新任婦人警官の彼女は、メグレ警部の言葉や服務規程の細部に亘って、その頃は末だ忠実なものだった。そして又、いくら思い返して考えて見ても、最初の逮捕の初めから終いまで、拳銃の安全装置を外した覚えは遂にないのだった。

ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし

芳野眉美

A 遊び

バーの客に、

「面白いバーを紹介して下さいよ」
とよく云われます。

「面白いバーですか」

私はいつもこう答えます。

「知っていますよ。でも、私が面白くても、

貴方が面白いかどうか分かりませんよ」

私の云った意味が理解出来ない方が意外に

多いのに驚きます。

他人が面白ければ自分も面白いだろうと単純に思っているらしい。

二人でバーに行ったとします。

Aはむずかしい顔をして、むずかしい話を
して、面白くもないという顔でビールを飲んで
います。Bは適当に横に座った女の子のオッパイを
さわり、頬にキスし、キアキア云わせないで
ビールを飲んでいます。(これは例え話

です)

バーから出ると、Aは、

「つまらないバーだな」

と云い、Bは、

「俺は楽しかった」

と云う。

同じバーでありながら、まるで反対のことを
云っている。Bはいつもニコニコしているから、女の子
にキスしても、ブラウスの上からでなく胸に

手を入れてジカにオッパイをサワっても、女の子はオコラナイ。かえって、

「Bさんって、憎めないわ」

とか、

「何処かに連れて行って」

なんて誘われている。

ところが、Aが不意にそんなことすると、

「いやらしい」

とくる。

同じ女の子のオッパイをさわるにしても、

「憎めない」と、「いやらしい」という感情

にわかれてしまう。

Aは自分から楽しむ、面白く遊ぶということとを知らないのです。だから、何処に遊びに行ってもAはつまらない。

つまらないのは自分のせいなのに、それに気がつかない。面白いバーは知りませんか、と云われても、Aには紹介しようがない。ど

っちみち自分でつまらなくしてしまうのを知っていますから。

また、こういう人に限って、理由をすべて他人のせいにしてしまうものです。

遊びが下手なんです。

奇クの読者が心掛けているSMプレイにしても同じことだと思います。

空想ばかりで、女を責めたり、女に責められたりしていて、それでサジストだ、マゾヒストだなんて云っているのはナンセンスだとは思いませんか。

空想なんて、誰だって出来るんです。どんなことだって考えることが出来る。

いくら精神分析的に、いわゆる学術的なSM文献をひっくりかえして知識を豊富にしたところで、現実的に御自分がサジストであるか、マゾヒストであるかということとは関係が無い。

SM関係の本を読むことは、そして空想を楽しむことは、SMに関係なく誰だって出来るんです。

奇クの読者の八割までは、SMに関係なく空想を楽しんでいる、いわゆるノーマルな方だと思えます。

誤解、というより、錯覚していらっしゃる方が多いように思われます。

だから、夫婦生活にSMプレイを取り入れたり、御自分のSEXにSMプレイの相手を見つけて、その人なりに楽しんでいられる方を除いては、本の上だけの、空想だけのSMと自称しているということになりますね。

そして、こういった方々に、この頃の奇ク

は面白くないとか、つまらないとか、そんな不満を聞く様に思われます。

面白い面白くないかは、その人の受け取り方で違ってくるものでしょう。

たとえばやさやかな記事であっても、受け取り方によっては面白い記事にする事が出来るし、つまらない記事になってしまうことも出来る。中には、どうしようもない作品もありまされど、これは問題外。

東奔西走して神酒を求む。だから私は楽しいし、奇クに贋作を書いて読んで下さる方からお手紙をいただく。だから私は楽しい。

楽しむ、面白くさせるって、こんなものでしょう。

バーで飲むにしても、SMプレイをするにしても、要は御自分が面白く楽しむことですよ。

「あのバーはつまらない」

「トルコなんて面白くない」

という客に、私はただ、

「そうですか」

と答えるだけです。

説明してもしようがないし、反対しても仕方ありませんから。

とにかく、私は楽しいし、いつでも不満を

持っていらっしゃる方の気が知れません。

私が不満なのは、生まれつき力ネモウケが下手で、遊びの経済的余力がともなわないというただけです。

だから、私は、私の経済力の範囲でせつせと女の子をクドイテいます。できないことは始めからしないほうがいいのです。

自分の出来る範囲内で遊びを楽しむ、それも自分から遊びを面白くさせるというのが、私の遊びのルールです。

B 連続

三月廿四日

Y氏とM氏（三月号「濡れにぞ濡れし」のE参照）来店

M氏、Y氏の紹介で、神酒を直接に飲んできたらしい。直接——ですよ。

「だから、ビールがいいな」

そうでしょう、そうでしょう。神酒を拝受したあとのビールは、さぞおいしいことでしょう。

さっそく、Y氏にその美女を紹介していた。閉店後、友達とバーを二軒廻ってから午前一時頃、あわてて美女に電話する。

「Y氏がM氏、知っている」

梨花悠紀子逆吊り写真特集

大中判印画紙焼付
各集五枚一組 一〇〇〇円

第一集 略号（さか）

両足首括り逆吊り

足首を揃えて括られた縄を滑車に連結されて、足を上に逆さに吊り下げられた美女梨花悠紀子は、両手を背中後手に縛られ胸には乳房がつぶれんばかりの縄目が肌に喰い入っている。全体重を両足首の縄で支えて痛さを耐えている梨花悠紀子。

第二集 略号（させ）

逆吊りの女体折檻

逆さ吊りにあえぐ梨花悠紀子に対して、更にあくなき暴虐の手は、情容赦なく竹の棒にて女体のあらゆるところを叩き、こじ入れ、踏みつけ激しい折檻を加える。美しい眉をひそめて必死に耐える美貌の彼女の凄絶にして、しかも美しい吊責めフォト。

第三集 略号（さと）

手足逆宙吊り

両足首と両後手首を括った縄を滑車に連結して、じりじりと宙に吊り上げてゆく。顔胸、腹を下にして、足首と背中を上にして宙に浮いてゆく梨花悠紀子。柔肌には恐ろしい程縄がうずまっで、吊責めの真価が鮮明な印画紙焼付によって発揮される。

「ええ」

「飲ませてくれる」

「いいわ」

「じゃ、今から行くよ」

「待っているわ」

話の早いこと。

美女に会うと、

「Mさんから聞いているわ」

M氏、宣伝しておいてくれたらしい。だから先輩は持つものだよ。

美女、ロッカーから紐を取りだして、

「縛る」

とおっしやった。

惚れた、惚れた。ネ。

ただちに、美女より神酒通飲。

大本営発表—神酒戦線異常有り。すみやかに戦線を縮小し転進すべし。

春は女性が美しい。

C 野中芳久氏

三月廿七日

野中氏（五月号の奇クサロン「女身変貌の妖夢」参照）来店、

通信にも「事業面では果敢と実行力をうたわれ、外見上は男らしい私ですが」とある通り、水商売の女性に父性愛を感じさせるほど

の中年の紳士です。やさしい方ですよ。

その野中氏が何故女身変貌を夢見るか、不思議とも奇妙に思われるでしょうが、そこがSEXの複雑性で空想に限度はありません。

といって、野中氏がゲイボーイに興味があるわけではなく、女装愛好家とも、婦人下着マニヤとも違います。

私の場合も「女体に変身した私は、貴婦人の寝室の奴隷として飼育され」たい感情は持っているのですが、野中氏と考え方は違うでしょうが、その根本に流れるものは、マザーコンプレックスであり、母性愛憧憬といってもいいのです。

わかりやすく云えば、「甘え」ですね。誰でも持っている感情の一進行形でもあるわけです。

何はともあれ、ずばずばSMに関しての話が出来るのは楽しいことです。

野中氏からお話を聞いた中で、私の興味を強く引いたのは、ある温泉の芸妓さんたちの「ヴィタセクスアリス」です。

姐さん株の芸妓から女をしこまれる娘の話なのですが、それによると、その娘は、十代を過ぎたばかりで姐さんに同衾を命じられ、姐芸妓の指さえ受け入れなければならなかつ

たそうです。

指から秘具、そして男との快楽の肢態と、姐芸妓は娘に手取り足取り教え込んでいます。そして、姐芸妓は自分の快楽の道具にさえその娘を使っているのです。

教育しながら自分の快楽に奉仕させる。女の同性愛は残酷なほど美しい。

D 断章

△人生の目的▽

人間の生活には、目的なんかないのです。人間は動物の一種ですから、食って、寝て、性交して、寿命がくれば死ぬだけの話です。

× ×

わたしたちのすべてが求めているのは、欲望の満ちたりた状態です。わたしたちすべてが実現したいと望んでいるのは、満ちたりた生活であります。欲望を満たそうとする努力こそ、人間が生きている以上避けて通ることのできない人生の目標だともいえましょう。

△現実原則▽ △快楽原則▽

きびしい現実生活に適應するために、社会的な配慮により、快楽を求める本能的な欲求をコントロールする心の動きを、フロイトの精神分析学では「現実原則」と呼びます。人

間は「現実原則」に従うことによって、あきらめを知り、理性を発達させ、法律や道徳や秩序や、その他のあらゆる精神文化を築いてきたのだともいえます。

× ×

空想の世界は、心のなかでただひとつ取り残された「快楽原則」の全面的に支配する世界です。すべての人が心の深い奥底で「現実原則」の支配する社会をわずらわしく思い、逆に「快楽原則」の自由な解放を願っているからです。

△幸福と快楽▽

幸福とは、あくまで「現実原則」に拘束された欲望の満足なので、持続的ではあっても激しさに欠け、さらに個人のせまい主観や信仰の色めがねによってながめられることが多い。そしてほとんどの場合、即座の満足を避けて、ひきのばされた満足を求める消極的な傾向である。

× ×

自分でつくり出す快楽、実践のうちからつかみ取る快楽こそ、ほんとうの魅力があるのではないでしょうが、ワイルドは「自分は大作家ではない。しかし大生活者だ」と豪語しておりました。幸福などというけちなものを

頭から軽蔑し、つねに新しい快楽を求めると
いう心意気こそ、ほんとうの生活だと彼は理
解していたのです。

幸福より、快楽を。——これこそ、男らし
い、粋でダンディな生活の信条というべきで
ありましょう。

自分の限界を破り、自分の能力をどんどん
広げていくのが、快楽主義的な人間というも
のでしょう。

△自然▽

エピクロス哲学（快楽主義）も、ストア哲
学（禁欲主義）も、自然と一致して生きるこ
とをモットーにしていたのです。自然と調和
して生き、なにものにもわずらわされない平
静な心の状態、すなわち、アトラクシアに達
することを求めていたのです、ストア哲学に
とっては「自然と一致する」とは、外界に対
する一種の緊張を意味し、エピクロス哲学に
とっては、一種の緊張緩和（リラックス）を
意味します。

目的とするところは、いずれの場合も同じ
であって、人間の本能、人間の欲望に忠実で

あるということです。けちくさい形式的な道
徳や、空虚な理想論などにまどわされず、す
いすいと快楽の海を走っていく軽快な舟の姿
を想像して下さい。古めかしい道徳は暗礁で
す。こんなものに乗らなければたいへんだ。
欲望という、美しい灯台の光だけを目標にし
ていけばよい。

△退屈▽

死の克服と同じくらいむずかしいのが、退
屈の克服です。ことに現代のサラリーマンや
BGはもう夢中になって、日々の退屈からの
がれようと右往左往している。

退屈は人間だけがもっている特権的な感情
です。歴史や文化を推進させる力となるもの
は、安易なしあわせであるよりも、むしろ不
満足に近い退屈の感情ではないでしょうか。
進歩や発展のない生活は、みるべき快楽もも
たないですから。

△質▽

量より質がたいせつなので、一回のオルガ
ムスのうちに、どれだけ高度の快感をくみと
ることができるかということが根本です。い
わば美学の問題といってもよいでしょう。

△乱交▽

性のユートピアには、いっぽうの極に情死
があり、もういっぽうの極に乱交がある。乱
交は個人の快楽と全体の快楽とが一致する。
この極端なセックスの混淆には哲学的な意味
があります。所有権の廃止、および、階級観
念の否定につながるのです。

神聖にして侵すべからざるものとだれもが
考えている権利を愚弄したり無視したりする
ことは、みずからつくった社会的束縛（これ
をタブーといいます）にがんじがらめにされ
ている人間たちに、強壮剤的效果を与えるの
です。

乱交の制度を完全な形で永久的に実現しよ
うとするならば、どうしても所有権の基礎で
ある家庭を破壊しなければならなくなるでし
ょう。家庭という単位を破壊しなければ、私
有財産制や一夫一婦制は廃止されるはずがあ
りませんから。

△性感帯▽

サドのセックスの哲学は、要するに、肉体
のアナーキズム（無政府主義）に基礎をおい
たものでした。性感帯はほんらい、肉体全体
に押し広げべきなのです。そうして肉体全

体がエロス化されてこそ、真の意味で人類の快楽が増大したといえるのです。

△アンチ・ヒューマニズム▽

快楽主義は、一口にいつて、アンチヒューマニズム（反人間主義）と呼ばれるべきものだと思ひます。「人間の限界をつきやぶり、人間を人間以上に存在にする」ということです。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎増加中です

毎月確実に二十五日発売!

○本誌は現在地方にては、非常に入手が困難な状態だと思われまゝです。確実に毎月御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願いいたします。

○直接御予約下されるのには、天星社宛に（阿倍野局私書箱第十四号）予約購読料をお込み下さい。

○本誌の送料、包装代などは総べて当社にて負担いたしますから、誌代のみ御送金下さい。

○本誌の誌代は、一部三〇〇円です。従つて、予約購読料は一月一冊三〇〇円、三ヶ月分三冊九〇〇円、半年分六冊一、八〇〇円、一年分一二冊三、六〇〇円です。今後誌代の改訂は当分の間しない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重

以上、光文社カッパブックス「快楽主義の哲学」渋沢竜彦より。「現代人の生き甲斐を探索する」奇巧の読者に、心から推薦致します。一度はかならずお読み下さい。読んだその日から人生が楽しくなつてきます。

E 終りの言葉

最近、小説らしい小説を読んだと思つたの

包装の上、お送りいたします。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代三〇〇円を、なるべく十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約者の分と一齊に発送できます。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何月号分とお書き願ひます。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたします。お留意願ひます。

○予約金が切れまゝしたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印いたします。それから、継続お申込み願ひます。その際、継続でも何月号からとお書き添え下さい。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局（特定郵便局でも結構です）と受取人のお名前とお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願ひます。局での留置期間は十日間です。その間にお受取りにならないときは、発送人に返されます。

は、石坂洋次郎「水で書かれた物語」小説新潮（三月号・五月号）で、主人公の母との不倫、異母妹との結婚という近親相姦をモチーフにしたものですが、全く、石坂先生はタイヘンな作家だと感心してしまいます。

近親相姦に関係なく、小説の好きな方に一読をおすすめします。

小説はでだしの言葉と、完結文に気をつかうものですが、ついです。この小説の最後の文章を紹介しておきましょう。

「ゆみ子（主人公の妻）はいまごろ、トイレで液体の用をすませて、備えつけの巻紙であと始末をしているところかしら……。あれだけは、男にくらべて、女の身体は手間がかかるように出来ていますね」

面白いでしょう。

主人公は自殺するのですが、その文中、「終りが近づくにつれて、人間の下腹部や原始的な生理の話がたびたび出てくることをお許し下さい。そして、その事は、原始の世界にかえっていく人間の心理の当然の過程ではないでしょうか」とあります。

F 市川高夫氏への手紙

五月号奇クサロン「パンティマニヤの方々」に「拝見致しました。」

「女性の汚れたパンティに異常な執着を持つフェチマニヤであります。女性のそうしたパンティさえあれば、他に何も要らないとさえ思っている程です」

という告白も立派であれば、「結婚して最初に素晴らしいと思ったのは、仮令それが自分の妻の物だとはいえ、憧れのパンティを思うが尽に何枚でも自由に出来ると云う事でありました」

という告白も、なんと素晴らしいものではありませんか。そして、

「洗濯は毎夜欠かさず、私がやる事にしていきます」

と、幸福な結婚生活が眼に見える様です。その絶対な夫婦愛が、

「妻の洗濯前のパンティを心からプレゼント致し度いと存じます」

という信じられないような寛大な心に、市川氏を導いたものと思われまします。

「汚れたまま、たっぷりと体臭を吸込んだまままで……」

嗚呼

「二十四才になる妻は幸いにも十人並以上の

器量を持っていってくれます。(中略)スタイルの方も先ずは、まあまあだと満足しております」

とあれば、健康な若々しい美しい新妻が彷彿としてくるではありませんか。そして、

「それだけに、私が教育する迄もなく、下着は相当凝る方で、七色のパンティなどは、それこそ幾組もあって、その中でも刺繍もありフリルもついた少し小さ目の真紅のナイロンパンティなどは、妻の最も好んで着用する所です」

とくれば、

「間違いなく、お送りする事を、お約束致します」

というお言葉に甘えてみたくなるのも無理はないでしょう。特に、

「どんな奴か一度顔を見てやりたい様ね」

とか、

「思い切り汚して差上げるわ」

という市川夫人の言葉が、耳に残るようです。市川高夫様――

私の連絡先は、三月号の読者通信にあります。そちらの住所はお知らせ下さらなくても結構ですから、よろしかったら「プレゼント」をお送り下さいますように。

そのとき、奥様のS的な手紙をいただけるとうれしいのですが。しかし、欲は申しません。「プレゼント」だけでも結構です。

G 立川流陰陽道

五月号奇クサロン久我庄一氏の「真言宗立川流について」は大変参考になりました。

柴田鍊三郎の「人間勝負」を読んでいて興味を持ったのですが柴鍊先生の筆を借りれば「多摩川沿いの密林の中に、ものものしい構えを出現させた道場では、夜のみならず、昼に於ても、無智な男女が、経文をとえながら、素裸で抱きあう光景を、くりひろげていた」

ということになります。

「男女陰陽の交会をもって、即身成仏の秘法となす」

これが立川流陰陽道の秘法。

乱交ですね。

「祭壇には――全裸にされた女が、文殊菩薩のように、唐獅子の上に、据えられていたのである」

柴鍊先生の名調子。まるで黒ミサだ。

この秘法、現代に生きているとは思いません。

M資料分譲品一覧

○新人S女性出現○

遅ましき股に挟まる

大手札四枚一組 一〇〇〇円
略号(あと)

素足の脂がべっとり

大手札五枚一組 一二〇〇円
略号(あて)

縛った男をムチで料理

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(あさ)

女王様の人間便器になる

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(あす)

蠟涙の雨を全身に浴びる

大手札四枚一組 一〇〇〇円
略号(あせ)

尻の下につぶされた男

大手札二枚一組 六〇〇円
略号(あた)

エビ責めに弄ぶ女

大手札六枚一組 一四〇〇円
略号(あそ)

神酒を与える女神

大手札六枚一組 一四〇〇円
略号(あち)

咽喉輪を股責極楽

大手札四枚一組 一〇〇〇円
略号(あつ)

素足の足舐と嗅香

大手札五枚一組 一二〇〇円
略号(あこ)

顔面に女の尻が乗る

大手札七枚一組 一五〇〇円
略号(あう)

人間犬の芸仕込み

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(あえ)

女の尻に顔がつぶれる

大手札三枚一組 八〇〇円
略号(あく)

足指に挟んだ菓子

大手札二枚一組 六〇〇円
略号(あの)

男を縛って弄ぶ女

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(あに)

尻責めと股責め

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(あぬ)

大男の訓練風景

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(みら)

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(みむ)

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(みう)

女の足下にうごめく顔

大手札六枚一組 一四〇〇円
略号(みれ)

汚物を戴く男

大手札六枚一組 一四〇〇円
略号(みわ)

男を馬にする美女

大手札五枚一組 一二〇〇円
略号(みか)

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 一二〇〇円
略号(みお)

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 一〇〇〇円
略号(みた)

浣腸器で男を弄ぶ女

大手札三枚一組 八〇〇円
略号(みつ)

股で絞められる首

大手札三枚一組 八〇〇円
略号(みね)

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 六〇〇円
略号(みな)

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まの)

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まわ)

股責めにあう男の顔

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(また)

女に縛られて弄られる

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まひ)

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まな)

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まは)

男を縛って玩具にする

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まで)

首を太股で絞めあげる

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まや)



〔SM時評〕

奇クは読者の声の花ざかり

— 新刊五月号を見て —

橘 行 司 子

東西、東西、天下御免はSM時評、さてどんな言葉が飛出すか、新しい風俗文献誌「奇譚クラブ」の五月号は、読者の声は花ざかり、について。片や、軽い調子でいつもホントなどとしやれのめす「濡れにぞ濡れし」の芳野眉美さんが「我、奇クを愛す」と、珍しく大上段にペンをかざせば、これ又、片や「美しいヌード」をと「四月号を読んで」の

瀬沼四郎さんが、やたらに着物を着せさえすればよい、というような取締りにたいして、不満をもらす。また「読者通信欄」からも特に東京都八泰生さんが「……さて、半年振りに手にした四月号、グラビヤはなくても、どうです。この素晴らしさ。」と、本文の充実さをよるこび、あれこれと内容についての感想を述べる。

「本誌の存在価値に対する一私見」の山口広さんは「私の文章に御意見のある方はどしどし発表下さるようお願いする。」と意気盛んなところを見せるなど……。また、また、また「高級なる遊戯精神について」の久我庄一さんの、耽美派流は八方破れ「静」のかまえてか。等々まことに、このところ奇クも、にぎやかになってきた。これは「奇クサロン」

の「編集部たより」の、「ここ二、三カ月は長文ものも入って充実しかかってきたところだし」という言葉をまつまでもなく、小説陣の充実、奇クサロンのパラティイにもなつて、読者の声が、大いに上がる——。それは当り前のことで、まず奇クの大発展を裏付ける意味で、御同慶にたえない。さて、勝った、負けたでなく、この行司子の軍配は、いつも中間を指している。久我庄一さんの言葉じやないが、「あなたも、私も、みんな奇クのために」という時点だ。ただし、技のオセツカイは、さしてもらう。ズバリ、ピリツと辛い？ SM時評のはじまり、はじまりだ。（手当り次第にバツタ、バツタとやっっちゃうか。）

芳野さんの、「我、奇クを愛す」で、「高級」ということは、どういうことなのでしょう。精神分析学的に、哲学的に、文学的に、芸術的にすることなのですか。「これについて一言。芳野さんは、ムズカシイ言葉を使って得意になり、難解な文章が高級だと思ったり、哲学的、芸術的空論をふりまわすのが好きな方は、全く救いようがないですよ」と、言いたいために、この冒頭の言葉を出したわけでしょうが。これだけでは、チョット親切

気がないように思うんですがネ。ホント、私ならば、だれにも（奇クの読者を対象）ナックのいくような、精神分析学的手段をもって、SM的文章を書くのはよいだろう。それも一つの方法だから。ただし、これが全部ではない。としたいものです。哲学的芸術的空論でなく、消化できないお人が書くから、そうなるんでしょうが。ただし、夫婦のSMプレイについては、高級であることは、大賛成です。

さて、ここで高級とは何か？、という問題が出てきましたネ。ヤサシクやりましょう。

生活に密着しようが、しまいが、人間が在る——ということで、観念的であれ、空想的であれ、そんなことはかまわないと考えるんだが。ともあれ、（人間不在の作品はありませんからネ）本当のSMマニヤのSM的な作品。これが、高級という意味だと信じます。だから、「神酒」についても、作者が、本当のマニヤなら、書く作品は高級でしょうネ。高橋鉄大先生？が、フェティシズムを、変痴崇物症と訳し、スカタロジイを排泄物狂崇と訳していることで、芳野さんは、「何事か。」と、大分オカムリのようなのですが、大人気ない。大先生？は、SMマニヤではなく

研究家ですから。私なら、変痴崇物症を「聖痴崇物症」とシヤレますね。排泄物狂崇は、「神秘物聖崇」とか。または「排泄物聖崇。」山口広さんの、「グラビヤも挿絵も廃止せよ」との御意見は本誌に早く「大人の雑誌」になれとしての忠告として編集者は耳を傾けられるべきではなからうか」について一言。奇譚クラブがいついまでも存続し続けるために——という願いを前提として、これらの言葉が吐かれたことは、判ッティマス。だが挿絵と文章が、どのように両者一体となつて、より効果を上げるか、とくに、風俗文献誌にあっては——。また（グラビヤの問題については、いまはふれない）。制約下にあつて、挿絵をなくして「何んとか発行を、つづけよう」——ということと「何んとか、挿絵画家もよくガンバツテ、制限内で、より効果的な挿絵を書こう、ケイサイしよう」と、どちらがよいだろうか。という考え方が生じるわけだが——。

私は挿絵がホシイんだ。「挿絵のない形式で出版されている所が巧みに世の「識者」の目を逃れている一つの理由であり」というけれど、コソコソはいやだ！ まだ、挿絵を全廃せよとは、関係筋からも、申し出てないと

思う？、気が早すぎると考える。現在の段階では、制限内で、より、SM的な妖しき魅力をも、如何に出せるか——という点が、必要ではないでしょうか。ギリギリのところカットと挿絵だけは守りたい。それが、風俗文藝誌のプライドじゃないでしょうか。視点を変えよう。現代は、中央公論社から、「世界の文学」という挿絵入りの全集本が出たのを口火として、まさに、各種挿絵入り全集の流行時代——。(何も、軽薄に、ナンデモ流行に合わせるな——というわけではないが、改めて挿絵の重要さが再評価されているとき、文藝誌に於てはと、言いたいのだ。) 山田風太郎も、柴錬も主にはじめは、オール読物とかに作品が発表され、それから、単行本化されるので、「挿絵のない出版形式」うんぬんはドウカト思ふネ。例えば、谷崎潤一郎の小説も「鍵」とか挿絵入り「現代の文学全集」(河出書房新社刊)で、けっこう識者の好評？をはくしている。挿絵と悪書の結び付けよりは、坊主憎けりやケサまで憎いという、無理解な世間さまの奇クに対する風当たりという時点で論すべきではないでしょうか——。

久我庄一さんの「大東亜戦争とサディズム、マゾヒズムを壮麗なと形容する、その勇

ましさに正直いってオドロイタ」について一言。SM的な世界のマニヤとして、死の残酷さに、あまりにも悲惨な戦争の事実、詩とロマンを結び付けることに、たえられないというお気持は判るんだが。それはあくまでも、自分本位。例外もあるという点までも述べてもらいたかった。幸い「奇クサロン」の巻頭「硝煙けふる空高く」の編集子が「転戦した戦争体験者として一入SMに関心を持つ者達の意見はどうだろうか。」と、穴うめしているようですが、久我さんの、このエッセイは、さぞかし、芳野さんその他あたりから、感想文が、投稿されている？ かと思うので私はあまりふれない。

東京都八泰生Vさんの読者通信は「四月号を見て」という感想文としても、本文の真中あたりに独立 Кейサイ されるべきもの。——これについて一言。よく、この方は熱心に奇クをよまれたことを、私は文章からよみ取れる。努力賞というところだ。文体も素直であり、ゴムリゴモットモ。カミつくこともないネ。ただ、投稿者も、このような方がいられることは書く、発表するという点で張合いがあると、敬意を表したい。このへんで「奇クサロン」の種々の言葉について見てみよう。

小川曉さんの「二葉の写真に寄せて」のところで、最初、あれほど嫌がっておりました妻も、いまでは貴誌のグラビア写真を私に見せながら「こんな縛り方はどうかしら……」はウレシクナル。これこそ久我さんの提唱する「高級なる遊戯精神」の裏付けだ。浜浣好さんの「目に入った最近の浣腸記事」は、文藝的な意味で、評価したい。「短歌」後藤図子さんののは、僅かなスペースに発表されているけれど、誌面に、詩情を流すことで、楽しい。特に「黒髪をふり乱している我が妻の齒にひとすじの毛の残りおり」がまことに鋭い感覚でうたい上げている。

「サロン楽我記」の辻村隆さんよ。どうぞ御身体御大切に。毎号、このレンサイは楽屋話なども、おきかせ願えることで興味深く拝見しています。室井亜砂路さんの「僕のイメージ画集」より、は「僕はSM世界のロマンチズムを求めているのです」に注目。数少ないSM的なロマンチズムによるイメージ画を書ける人として、支持したい——。

東西、東西ではじまった天下御免のSM時評も、アノ人、コノ人と、ケン、ケン、ガク、ガク。いやはや、おにぎやかになった。

奇クの五月号を見て、よーおし、われも人の子、SMの子と、まかり出たわけですが、は

たして、とんだ珍評になったやら、ならない

ともあれ、パチ、パチと拍子木鳴って、これで幕。

「花と蛇」画集

大中判五枚一組 一〇〇〇円
略号(えに)

京子に芸を仕込む鬼源

椅子の上に立縛りにされた京子は、坐りもならず歩きもならず中腰のまま鬼源に美しい鼻を摘ままれて可愛い口を開けた。

静子令夫人の汚辱

豊かに脂づいた輝く裸身を床の上にじかに投げた静子の顔に嘗ての使用人であった川田の汚れた足がべったりと掩い、高い鼻を足の指で弄ぶのだった。

操り責めにあう美津子

両手を揃えて吊られた美津子は腋の下を男の目の前にさらけ出して、ハケでそろりそろりと操られる全身燃え上るような操られたさ。

片足挙げ縛りにされる桂子

鉄平石を敷いた冷やかな土間に身動きもできぬ厳しい後手の高縛りで片足を挙げさせられた桂子は、さっきからたまらない激しい尿意と必死に戦っていた。

粗相を強要される京子

恥しいオシメカパーをはかせられた京子は、その中へ粗相をせよといたぶられる。限界まできた排泄を耐えている京子の苦悶。

女体吊責め特集

大中判五枚一組 一〇〇〇円
略号(えほ)

弓吊りローソク責め

両手と両足をそれぞれ左右に振り分けて弓なりに反するように吊られた女体の背中には、数本の火のついた蠟燭が立てられている。

エビ縛りの吊り

揃えて括られた両足首が顎にくほど折り曲ったエビ縛りのままだらと鼻の先とで宙高く吊り下げられた女体の嗜虐的な美しさ。

股間縛り吊り

一本の棒のように頭から足首までガンジガラメに縛られた女体のタテに掛った股間縛りの縄で高々と吊り上げた素晴らしい吊責め。

舌の先吊り

炭火がカンカンにおこった石油缶の上に両手を吊られた美女の舌の先を挟んでじりじりと吊り上げてゆく。上と下が同時に責められて、尚美しさを失わぬ女性。

鼻孔吊り

太いシュロ縄で後手首股間縛りで吊られた美女の鼻孔に通した素晴しいシーン。

浣腸と排泄画集

大中判五枚一組 一〇〇〇円
略号(えい)

恐怖の浣腸台

身動きもできぬように四肢を固定することのできる浣腸台に据えられた美女は恐怖の眼を大きく見ひらいて、目の前に釣ってあるイリガートルをにらんだ。

浣腸のあとの楽しみ

たっぷり浣腸液の御馳走を与えた上で、両足をいっぱいひろげて吊られた美女。男はそこにあの楽しみでわくわくとしていた。

百CCの浣腸

ガラスのシリンダーでグリセリンを注入した男は、床の上に敷いたビニール布の上に美女をかまてて時の経つのを待った。

塩水をヤカンで飲ます

後手に縛られた美女は、只男たちのなすがままだった。鼻をつままれ、開けた口には塩水がヤカンから無理矢理注ぎこまれた。

排便を耐える美女

両手を万才の恰好で吊られていないので、もうどうすることも出来ない。煮えくりかえるような便秘が彼女の全身をふるえさせる。

美貌汚辱と鼻責

大中判五枚一組 一〇〇〇円
略号(えは)

鼻をなぶる

自由のきかない美女の顔を左手で抱え込んで、右手の指で女の鼻を粘土細工のように弄ぶ。

鼻毛を抜く

美しい女の鼻の穴を上向けさせて一本一本鼻毛を抜く。これで五本だ。あ、あと何本抜けるか。

口中をほじくる

可愛い子だ、おとなしくして美女の口中をさぐる。可愛い舌に真白い歯。咽喉の奥まで老人の触手は隅なく腔中をほじくる。

泥絵具の顔

お前の美しい顔は、俺のキャンパスだ。白いすべすべした女の命のある顔面に、男の手にしたチューブから赤の泥絵具がべったりとつけられる。鼻から口へかけて。

ラーメンを食わす

仰向けに縛られた美女の顔の上に、男は箸にはさんだラーメンをのせる。口から溢れて鼻の穴へまで入りこんでゆく。



おヘソと死刑マニヤ

△死刑と女の考察▽

黒 田 寿

南方さんを始めとするおヘソマニヤの皆さん。私はしばしば掲載の榮に浴したこともある死刑マニヤです。ひとつ私にもおヘソについて書かせてください。

最近アメリカ映画でも、一流スターがおヘソをみせてくれるのは良い傾向です。ナタリー・ウッド、シャーリー・マクレーンが、その例ですが、今度キム・ノバクが仲間入りをします。

新作キスミー・ステュピットにおける彼女の役は、ネバタ沙漠にある「おなかのポタン」という酒場のウェイトレス。小さなブラ

ジャーと、デニムの吊スカートだけのいでたちで、勿論形のよいおヘソはまるだし。そこに見事なダイヤがはめこんであるのです。

ほかに同じ恰好の美女たちも何人か登場しますが、彼女らはなんといっても脇役の悲しさ、おヘソのダイヤはイミテーションのと……これは余計な話。

南方さんたちはこれで御満足でしょうが、私はどうしても彼女たちを殺さなくては気がすまないのです。

昨年八月号の親友佐出須登の「十三人の女死刑囚」で、キムという女性が皮膚をはぎと

られ、おヘソに宝石をはめこんでスタンドの笠になる話がありました。これこそ私の望むものです。

さて、私の好みによって自由勝手な話を作ってみましょう。

二十二才のブロード美女のキムは、酒場にたとめる給仕女だが、その実、女性ばかりで編成している強盗団の首領であることは誰も知らない。

しかし、遂にその正体のあらわれる時がきた。仲間の一人が捕えられたのだ。

その一人とは近くの商店で評判の美女十九才のナタリーである。彼女が強盗団員とは：皆があきれかえったほどで、仲間の名を追求されたがなかなか口を割らず、遂に拷問にかけられた。

ナタリーを全裸にして四肢を大きくひろげて縛り、そのかわいいおヘソに濃硫酸を一滴ポタリとおとす。

さすがのナタリーも悲鳴をあげた。白い煙がすうっとたちのぼり、いやな臭がたちこめる。もがきあばれるのもかまわず、一滴また一滴とおとしてゆく。

やがて皮膚を破り、硫酸は腹腔へ侵入してゆく。内臓が強酸に侵されて焼けただれるのだ。遂に彼女は参ってしまい。仲間たちの名をもらしてしまった。

「そうだったのか、ありがとう」

残りの硫酸をザブリとナタリーの顔にぶっかけると、刑吏たちは外にとびだした。

「絞首刑にしとけ」と言いのこして。

刑吏たちは彼女たちの家を襲ったが、早くもこれを察したのか戸は固くとざされ、ようやく押し破って入った時はすでにキム以下の

姿はなく、わずかにアンを捕えただけ。

病院の看護婦が本職の二十一才のアンは、自ら犠牲となって仲間を逃がしたのだが、その結果リンチに処せられたのは当然だろう。

アンもまた全裸にされ、女体のすべてに油脂をたっぷりぬりこんで、おヘソにローソクをつつたてた。覚悟はしていてもせいぜい絞首と思っていた彼女は、意外な刑に驚いたがもうおそい。十分、二十分。身もだえする美女をよそにローソクは次第に短くなり、あと二センチ、一センチ……そしておヘソのくぼみに入りこむ。

ちよつと焰がまたたき、とたんに全身にぬられた油脂に燃えうつり、おヘソを中心として焰がさつと上下四方に走り、アンの全身はたちまち火につつまれた。わずかにもぞもぞと動いていたが長くはなかった。

灰となったアンをあとに、刑吏たちは逃げ去った女たちのあとを追う。とある丘の下でその一人、ショーにでていた二十才のデビーがおヘソを槍で地上に達するほど刺しとめられている。四肢をバタバタとふるわせている姿は、ちようどピン止めされた昆虫を思わせる。

苦しい息の下からデビーの語ったことによれば、逃走中インデアンに捕まってこの運命となった。もう助かりっこないから、さっさと首を刎ねるなり吊すなりしてくれと願う。

傍にモデルをやっていたピアが死体となっていた。立木に縛られ全身ハリネズミのように矢をうちこまれて。勿論おヘソにも……。

ピアはおヘソを目標としての、射撃練習的にされたのだ。三十何本目かによくや命中したが、息を引きとったのは、そのちよつと前だという。

「ねえ」早く殺して。インデアンはわたしが死んだころみはからって、頭髮をはぎとると言っていたわ。

刑吏は冷笑した。

「これこそ天罰さ」

それでも一片の慈悲心はあったのか、間もなくその場をはなれた刑吏たちの腰に、ふたつの美しい生首がさげられていた。

キムたち四人は遂に追いつめられ、どうせ死刑以上の罪はないからと、簡単にあきらめて降伏した。

フランソアーズは、それでもすきをみて逃げようとしたが失敗、即座に処刑された。

「可愛い女中」フランソアーズのおヘソに拳銃の銃口を、十分にめりこませて引鉄を引く。にぶい銃声と共に彼女は目を大きくひらき、なにかをつかまえようとでもするように両手をのばしたが、間もなくズルズルとくずれおちた。

腹の傷は必ず死ぬし、放置しておいても、もうのがれられぬ。

「明日、首をとりこよう」

もがき苦しむフランソアーズを、そのままに刑吏たちはほかの三人を引ったててゆく。

良家の子女ミレーヌ、いまさら絞首された身体を大勢の人目に曝したくないと、途中で殺してくれるように願った。刑吏たちは喜んで承知し、電気刑に処すことにした。

ミレーヌは例によって四肢を大の字にひろげて縛られる。電極の一端を少しとがらせておヘソにさしこみ、他の一極は四本に分け、両手両足に結びつけた。普通の電気イス処刑なら、頭と両脚に極をつけるのだが……。

スイッチがおされると、おヘソを中心として電流が四肢を走り、ミレーヌの全身がピンと強直した。それ程電圧は強くなかったがシヨックもあったのか、ブロンドの頭髮が逆立

ってパチパチ火花が散った。

圧を次第にあげてゆくうちミレーヌは悲鳴ひとつあげずにこらえていたが、千五百ボルトに達すると同時に、その心臓がピタリと止まった。そのまま二度と動かない。

絶命をたしかめ圧は一挙に三千ボルトにあげられた。パツと白光がきらめき、ミレーヌの雪白の身体の中の五力所、両の手首足首とおヘソがみるみるうちに黒く変った。

「これがスペードの5さ」

クローは銀行の窓口娘、襲撃の手引きは彼女の役目で群衆の恨みはすべて彼女にむけられ、正式の裁判前にリンチに処せられた。引きづられてゆく先にはギロチン台がそびえている。

「首を斬られるだけか、それなら、まだよかった」

こう思ったクローは抵抗をやめ、おちつきはらった。またふてくされた態度で首を斧の下においた。

しかし刑吏はクローをおおむけにすると、ズルズルと引きあげ、ちょうど斧の下におヘソがくるようにした。なんと斬首でなく断胴の刑、それもおヘソから両断しようといううら

しい。

あまりに思いがけぬことなので、驚きあばれるクローを冷く見ながら刑吏がてこをひくと、巨大な斧がおりてくる。落下したのでなく、静かにおヘソの上におりてきたのだ。

斧は重い。それ自体の重さで刃はおヘソに食いこみ、皮膚を肉を、そして骨まで徐々に両断してゆく。

「ギャア！ ウァア……」

悲鳴はかなり長くつづき、それが絶えたときクローの美しい肉体は、おヘソだけでなく胴体もまたふたつになっていた。おびただしい血汐と共に内臓もドロリとこぼれだし、さんたんたる光景であった。

クローの死体は上半身が別々に、それぞれ斬口を下にして、手首下首で吊され晒しものとなった。

かくして最後に残ったのはキムである。本来なら火あぶり、ハリツケ、股裂きの極刑に処せられる罪でもあるのに、正式の裁判をうけたことが幸いし、判決は意外にも全く軽く絞首刑であった。

キムは最後の願として生れたままの姿、それにおヘソにダイヤをはめこんだまま刑をう

けたいと希望し、満場一致で許可された。

キムは一糸まとわぬ姿を絞首台上に曝す。

キラキラと輝くブロードを朝日がてらしているが、それよりもおへソにさんせんと輝くダイヤは群衆すべての目を集めた。

合図と共に踏板がおち、キムの身体は首を

絞められたまま宙に浮いた。絞首刑執行である。

十五分後、キムのおへソにはめこまれたダイヤがポロリとおちた。同時は傍に立っていた検死官が絶命を宣し、ダイヤのぬけたあとに鋭いナイフをズブリと柄まで刺しこんだ。

これが止めなのか、勿論キムの身体はピクとも動かない。

キムの死体は首を吊られたまま、おへソにナイフを刺しこまれ、尚も三日の間晒ものとなり、一味の女たちの生首も、その下に作られた獄門台に梟けられた。

山原清子 対抗 女相撲 女斗美 女斗場面

女相撲連続写真

相撲着用、四つ相撲
大手札 十枚一組 略号一〇〇〇円

互いがぶつかり、四つに組み合った二女は、上手下手の両方、手を充分にとり合って、上手投げ、下手投げ、内掛け、外掛け、刻々の変化を、躍動する女体の筋肉がよくキャッチされている逸品。

女相撲連続写真

相撲着用、投げ術
大手札 十枚一組 略号一〇〇〇円

はい、よい機熟して、投げ術の応酬は、さばりから高々と吊り上げられてゆく。激しい女相撲が展開されてゆく。投げのきまつた瞬間、マニヤの方々の眼を、どのよう

女相撲連続写真

女斗美 女斗場面

相撲着用、投げ合い
大手札 十二枚一組 略号一二〇〇円

首投げ、下手投げ、出し投げ、内掛け、外掛け、小股すくい、等を重ね、その激しい投げの打ち合い、ど、優美な筋肉美の躍動する女相撲が、二人の肉体美、女性性によって、所狭ましとくりひろげられてゆく十二枚の組写真。

女斗美 立業

黒フン白フン着用
大手札 十枚一組 略号一〇〇〇円

黒フン白フン二人の裸女が、激しく締め込んだ二人の裸女が、激しく両手で組み合い、ヘッドロックから、腕の逆とり、首絞め、片足どり、腕後手固めと、白い裸身をからめあつて縦横無尽に暴れまわる二人。躍動するメトマーズの美しさをくらんださい。

女斗美 寝業

黒フン白フン着用

大手札 十枚一組 略号一〇〇〇円

立業の激しい斗争から寝業に入つた二人のメトマーズは、しなやかな真白い四肢に渾身の力をこめて、相手を屈伏させようと必死になつて押さえ込む。手と足と、足と手とが、悩ましくも妖しく交錯するメトミのエロシズム。

女斗美 固め業

黒フン白フン着用
大手札 十二枚一組 略号一二〇〇円

激しくも悩ましい寝業の激闘を経て、ここに優秀の位置がはつきりしてくると、相手のメトマーズに最後の止めを刺す固め業に入つてくる。しかし、押え込まれた方も、むざむざと敵の軍門に降る筈はない、苦痛に歯を喰いついて、反撃のチャンスを狙って、悶え、もがきまわる。

女斗場面 (白、黒)

髪のかみ合い
大手札 十枚一組 略号一〇〇〇円

これはルールも何もない女と女の憎悪をむきだしにした斗争である。

押さえ込み合い
大手札 十枚一組 略号一〇〇〇円

髪を掴み合い、馬乗りになり、操りあい、揮一本の裸身のあるかぎりの力を奮って、只相手を痛めつけようという争い。

女斗場面 (黒、白)

相手をお互い自分の膝下に組み敷いて降参させようと、二つの裸身がうごめきあう筋肉と筋肉の交りあう美しさ。

女子レスリング

首絞めの業
大手札 十二枚一組 略号一二〇〇円

肉づきのよい太股で、或はふくよかな腕で相手の首を絞めつけ、オールしようとする女レス。

女子レスリング

押え込みの業
大手札 十二枚一組 略号一二〇〇円

豊かで美しい裸身が、ねじれ合い、からみ合い、互いに押さえ込み、女体相搏つ女レス。

代理部分讓品一覽

○妊婦女体資料の部○

臨月腹ヌード	大手札二枚一組 三〇〇円	安原さゆり 略号「りく」
臨月腹アップ	大手札二枚一組 三〇〇円	安原さゆり 略号「りと」
臨月妊婦の全身	大手札二枚一組 三〇〇円	安原さゆり 略号「りせ」
臨月腹の側面	大手札三枚一組 四〇〇円	安原さゆり 略号「りそ」
臨月腹の背面	大手札二枚一組 三〇〇円	安原さゆり 略号「りも」
臨月垂れ腹	大手札三枚一組 四〇〇円	安原さゆり 略号「りみ」
妊婦ヌード	大手札三枚一組 三〇〇円	安原さゆり 略号「やま」
妊婦しぼり	大手札三枚一組 三〇〇円	安原さゆり 略号「やむ」
臨月妊婦三態	大手札三枚一組 三〇〇円	安原さゆり 略号「よむ」
産み月のお腹	大手札三枚一組 三〇〇円	安原さゆり 略号「よま」
動物的な腹部	大手札三枚一組 三〇〇円	

妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 四〇〇円	安原さゆり 略号「よみ」
妊婦八カ月の緊縛	大手札三枚一組 四〇〇円	児玉 昌子 略号「には」
妊娠五カ月の緊縛	大手札三枚一組 三〇〇円	児玉 昌子 略号「にあ」
妊娠初期の緊縛	大手札三枚一組 三〇〇円	児玉 昌子 略号「にこ」
妊婦前裸縛り	大手札三枚一組 三〇〇円	児玉 昌子 略号「まさ」
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 四〇〇円	児玉 昌子 略号「ぬろ」
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 三〇〇円	児玉 昌子 略号「にふ」
分娩後縛り	大手札三枚一組 三〇〇円	児玉 昌子 略号「にと」
分娩後股間縛り	大手札三枚一組 三〇〇円	児玉 昌子 略号「につ」
分娩後股間縛り	大手札三枚一組 三〇〇円	児玉 昌子 略号「にて」

○女体緊縛資料の部○

鼻の穴責め	大手札三枚一組 三〇〇円	大塚 啓子 略号「なく」
鼻なぶり	大手札三枚一組 三〇〇円	大塚 啓子 略号「ない」
鼻責めの陶酔	大手札三枚一組 三〇〇円	大塚 啓子 略号「なは」
苦悶の裸身	大手札四枚一組 四〇〇円	関谷富佐子 略号「くせ」
裸身の晒し	大手札三枚一組 三〇〇円	関谷富佐子 略号「わあ」
全裸股間縛り	大手札四枚一組 四〇〇円	関谷富佐子 略号「せら」
強烈エビ責め	大手札三枚一組 三〇〇円	大塚 啓子 略号「えり」
蒲団に悶ゆ	大手札三枚一組 三〇〇円	関谷富佐子 略号「なき」
悦虐の果て	大手札三枚一組 三〇〇円	関谷富佐子 略号「なみ」
椅子エビ責め	大手札三枚一組 三〇〇円	東浦ひかる 略号「おき」
六尺縛り	大手札三枚一組 三〇〇円	東浦ひかる 略号「ろは」
弓吊り責め	大手札二枚一組 二五〇円	梨花悠紀子 略号「つき」

手足宙吊り	大手札三枚一組 三〇〇円	梨花悠紀子 略号「つた」
オムツの股間縛り	大手札四枚一組 四〇〇円	東浦ひかる 略号「むく」
強烈責、被虐の果	大手札五枚一組 五〇〇円	梨花悠紀子 略号「りお」
乳房いじめ	大手札二枚一組 二五〇円	大塚 啓子 略号「とお」
激痛ノ逆エビ責め	大手札四枚一組 四〇〇円	大塚 啓子 略号「きえ」
美貌の裸身に縄目	大手札三枚一組 三〇〇円	絹川 文代 略号「きん」
腰元吊り責め	大手札二枚一組 二五〇円	村井知可子 略号「こり」
腰元間諜の拷問	大手札四枚一組 四〇〇円	村井知可子 略号「こく」
強烈エビ縛り	大手札三枚一組 三〇〇円	関谷富佐子 略号「もい」
乳房責の苦悶	大手札二枚一組 二〇〇円	関谷富佐子 略号「もろ」
全裸ムチ打ち	大手札四枚一組 四〇〇円	関谷富佐子 略号「もた」
強打に泣く裸身	大手札四枚一組 四〇〇円	関谷富佐子 略号「むち」

<p>踊り子 緊縛 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 絹川 文代 略号「りこ」</p>	<p>股間縛法悦境 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 絹川 文代 略号「ぬこ」</p>	<p>吊り打ち 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 関谷富佐子 略号「やり」</p>	<p>足挙げ椅子責め 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる 略号「うる」</p>	<p>二つ折りエビ責め 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる 略号「うら」</p>	<p>後手吊り足挙縛り 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる 略号「うら」</p>	<p>夫人の表情 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 関谷富佐子 略号「せや」</p>	<p>バンド責め 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる 略号「はん」</p>	<p>バンド開股 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「はこ」</p>	<p>ゴム衣緊縛 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 水本 茂美 略号「みす」</p>	<p>強烈エビ責め 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 水本 茂美 略号「えひ」</p>	<p>狙われた和装の娘 大手札十二枚一組 略号「一〇〇〇円」 愛川 悦子 略号「ねい」</p>
<p>六尺 輝 開股 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 細川アヤ子 略号「ふは」</p>	<p>変形 六尺 輝 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 細川アヤ子 略号「ふい」</p>	<p>相撲 輝を締め込む 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 遠藤百合子 略号「すい」</p>	<p>黒 輝 の 女 (背面) 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子 略号「くう」</p>	<p>黒 輝 の 女 (正面) 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子 略号「くま」</p>	<p>白 晒 六尺 輝 (背面) 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 遠藤百合子 略号「しろ」</p>	<p>白 晒 六尺 輝 (正面) 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 遠藤百合子 略号「しは」</p>	<p>〇フェチ資料の部〇</p>	<p>緊縛 女体撮影風景 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚 啓子 略号「むら」</p>	<p>足 挙 開股 責 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 梨花悠紀子 略号「あけ」</p>	<p>猪 吊り 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 梨花悠紀子 略号「いの」</p>	<p>責め 衣 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 大塚 啓子 略号「せめ」</p>
<p>六尺 フンドシ 大手札五枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる 略号「ろい」</p>	<p>六尺 輝 の 女性像 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 関谷富佐子 略号「くろ」</p>	<p>レインコートの拘束 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚 啓子 略号「いろ」</p>	<p>ゴム フェチ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 梨花悠紀子 略号「こま」</p>	<p>バンドを脱ぐ女 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子 略号「ゆお」</p>	<p>月経 帯縛り 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子 略号「ゆす」</p>	<p>相撲 輝 着用 大手札十一枚一組 略号「一〇〇〇円」 大塚 啓子 略号「すま」</p>	<p>股に喰い込む黒フンドシ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「とし」</p>	<p>股を開いた黒フンドシ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「とひ」</p>	<p>バンド 晒し 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「はと」</p>	<p>バンド 足挙げ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「はそ」</p>	<p>バンド 見せ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「はぬ」</p>
<p>白 フンドシ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚 啓子 略号「ふん」</p>	<p>黒 フンドシ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚 啓子 略号「くふ」</p>	<p>ゴム ぐるみ人形 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる 略号「こみ」</p>	<p>ゴム 包みの束縛 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる 略号「こは」</p>	<p>ゴムと女体アップ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる 略号「こあ」</p>	<p>パリス バンド前開き 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「おい」</p>	<p>パリス バンド縛り 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「おは」</p>	<p>携帯用白バンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「おか」</p>	<p>サカエ 軽便型バンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「おた」</p>	<p>パリス SS バンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「おこ」</p>	<p>パピ アバンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「おし」</p>	<p>サカエ バンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「おえ」</p>

○臨月腹妊婦資料の部

臨月腹妊婦緊縛 大手札三枚一組 略号(にち) 四〇〇円 田中美佐子	臨月腹開陳 大手札四枚一組 略号(にし) 五〇〇円 田中美佐子	臨月腹開陳 大手札三枚一組 略号(にり) 五〇〇円 田中美佐子	柱縛りの妊婦 大手札二枚一組 略号(にや) 三〇〇円 田中美佐子	臨月のヌード 大手札三枚一組 略号(にわ) 四〇〇円 田中美佐子	妊婦の裸身像 大手札二枚一組 略号(にた) 三〇〇円 田中美佐子	縛られた妊婦 大手札二枚一組 略号(にる) 三〇〇円 田中美佐子	臨月の裸身像 大手札三枚一組 略号(にお) 四〇〇円 田中美佐子	臨月の裸身像 大手札三枚一組 略号(にぬ) 四〇〇円 田中美佐子	突き出した臨月腹 大手札三枚一組 略号(にい) 四〇〇円 田中美佐子
---	---------------------------------------	---------------------------------------	--	--	--	--	--	--	--

○刺青女体資料の部

入墨の高手小手 大手札三枚一組 略号(いち) 三〇〇円 山原 清子	縄に悶える入墨 大手札三枚一組 略号(いへ) 三〇〇円 山原 清子	足吊り三態 大手札三枚一組 略号(いと) 三〇〇円 山原 清子	剃れた腰巻 大手札三枚一組 略号(いは) 三〇〇円 山原 清子	女一匹御意見無用 大手札三枚一組 略号(いお) 三〇〇円 山原 清子	玉取姫が凄む 大手札三枚一組 略号(いる) 三〇〇円 山原 清子	全裸緊縛立像 大手札三枚一組 略号(いに) 三〇〇円 山原 清子	入墨ヌード 大手札三枚一組 略号(いよ) 三〇〇円 山原 清子	後手吊りの構図 大手札三枚一組 略号(いほ) 三〇〇円 山原 清子	黒細帯の裸身 大手札三枚一組 略号(いわ) 三〇〇円 山原 清子	黒褌を誇る 大手札三枚一組 略号(いか) 三〇〇円 山原 清子
---	---	---------------------------------------	---------------------------------------	--	--	--	---------------------------------------	---	--	---------------------------------------

入墨自慢 大手札三枚一組 略号(いり) 三〇〇円 山原 清子	黒ふんどし入墨姿 大手札三枚一組 略号(くの) 三〇〇円 山原 清子	黒ふん媚態の魅力 大手札五枚一組 略号(くな) 五〇〇円 山原 清子	黒褌背面模様 大手札三枚一組 略号(くこ) 三〇〇円 山原 清子	黒ふん手吊り責め 大手札三枚一組 略号(くり) 三〇〇円 山原 清子	全裸入墨姿態 大手札三枚一組 略号(いれ) 三〇〇円 山原 清子	晒六尺ふんどし 大手札三枚一組 略号(ろと) 三〇〇円 山原 清子	白六尺褌一本の姿 大手札三枚一組 略号(ろに) 三〇〇円 山原 清子	白褌後手高手小手 大手札三枚一組 略号(ろし) 三〇〇円 山原 清子	日本髪全裸強烈縛り 大手札三枚一組 略号(いら) 四〇〇円 山原 清子	洋髪全裸強烈縛り 大手札三枚一組 略号(いこ) 四〇〇円 山原 清子	日本髪全裸股間縛り 大手札三枚一組 略号(ほき) 三〇〇円 山原 清子
--------------------------------------	--	--	--	--	--	---	--	--	---	--	---

山原 清子 略号(いさ) 可憐島田鬚全裸縛り 大手札三枚一組 略号(いみ) 四〇〇円 山原 清子	黒フン高手小手縛り 大手札八枚一組 略号(ひろ) 八〇〇円 山原 清子	入墨女体全裸像 大手札十枚一組 略号(ひへ) 一〇〇〇円 山原 清子	黒褌刺青女体美 大手札十枚一組 略号(ひね) 一〇〇〇円 山原 清子	六尺褌をするまで 連続二十ポーズ組写真 大手札二十枚一組 略号(ひは) 二〇〇〇円 山原 清子	白ふんどし脇差切腹 大手札十枚一組 略号(ひに) 一〇〇〇円 山原 清子	白ふんどし短刀切腹 大手札十枚一組 略号(ひぬ) 一〇〇〇円 山原 清子	刺青姐御腹巻脇差 大手札十枚一組 略号(ひほ) 一〇〇〇円 山原 清子	刺青姐御腹巻短刀 大手札十枚一組 略号(ひり) 一〇〇〇円 山原 清子	入墨女体海老責姿態 大手札三枚一組 略号(ほか) 三〇〇円 山原 清子	文身女体股間縛り 大手札三枚一組 略号(ほき) 三〇〇円 山原 清子
--	---	--	--	--	--	--	---	---	---	--

「最新版」 女体悦虐写真集印画紙版

G組百姿集

大手札型印画紙(9×13種) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

G 1	顔面から全身嚴重縛	(東浦)
G 2	アグラで縛られる	(玉田)
G 3	豊臀と足首と後手縛	(玉田)
G 4	一糸まとわぬ晒し者	(玉田)
G 5	敷布に悶える白い肌	(玉田)
G 6	縄に羞らう裸しぱり	(長野)
G 7	煙草責と荒縄緊縛	(大塚)
G 8	全身ガンジガラメ	(大塚)
G 9	手吊り全裸さらし	(玉田)
G 10	恐怖のいたぶり	(新井)
G 11	浣腸器に脅びえる女	(玉田)
G 12	全裸しぱりと浣腸器	(玉田)

G 13	踏みつけられる美貌	(大塚)
G 14	美しき全裸強調縛り	(大塚)
G 15	そりかえる鼻の頭	(大塚)
G 16	黒フンで縛られる女	(玉田)
G 17	責写真に埋れた緊縛	(大塚)
G 18	諦観の後手しぱり	(玉田)
G 19	椅子に縛られた全裸	(玉田)
G 20	足首と後手首と	(玉田)
G 21	二つの乳房アップ	(長野)
G 22	縛られて鼻を任す	(大塚)
G 23	後手縛全裸椅子跨ぎ	(東浦)
G 24	豊胸に黒紐の輝やき	(長野)
G 25	肌に刺さる荒縄	(大塚)
G 26	机の脚に縛られる	(新井)
G 27	革の猿轡で責める	(新井)
G 28	白肌は縄にくびれて	(大塚)
G 29	緊縛裸身を誇る足	(長野)
G 30	逆エビと浣腸器	(大塚)
G 31	肥り肉を晒らす女	(東浦)
G 32	踊子の緊縛ポーズ	(絹川)
G 33	足でなぶられる鼻	(大塚)
G 34	典型的な股間しぱり	(大塚)
G 35	美貌と豊胸を誇る女	(長野)
G 36	写真に埋れた全裸姿	(大塚)
G 37	裸を誇りの椅子縛り	(玉田)
G 38	柔肌は縄にくびれて	(玉田)

G 39	全裸の肌は縄まかせ	(玉田)
G 40	女囚哀歎	(宇治)
G 41	女囚縛られ姿	(宇治)
G 42	オシメカバー縛り	(大塚)
G 43	庭の見える部屋にて	(大塚)
G 44	トイレを前にして	(大塚)
G 45	荒縄と豆絞りの猿轡	(大塚)
G 46	裸身の美を誇る縛り	(長野)
G 47	後手逆エビ強烈鼻責	(大塚)
G 48	股間縛り全裸重量感	(大塚)
G 49	嚴重荷造縛りの全裸	(玉田)
G 50	全裸正面強烈亀甲縛	(木村)
G 51	全裸胸絞め首縄猿轡	(木村)
G 52	後手首縄膝頭一括縛	(木村)
G 53	全裸後手吊り晒し	(玉田)
G 54	後手吊り全裸の美	(玉田)
G 55	椅子に跨がされた女	(新井)
G 56	後手縛りで寝室へ	(絹川)
G 57	色魔に脱がされる	(新井)
G 58	不安定な台上股間縛	(大塚)
G 59	無抵抗の裸いじめ	(大塚)
G 60	両手吊りの猿ぐつわ	(新井)
G 61	可憐ないじめられ様	(大塚)
G 62	責めぬかれた表情美	(大塚)
G 63	強奪されたパンティ	(大塚)
G 64	後手縛全裸の美しさ	(大塚)
G 65	猿ぐつわの婉な表情	(新井)
G 66	手吊り足縛り仰臥	(新井)
G 67	目かくしのハリッケ	(大塚)
G 68	首枷のさらしもの	(大塚)
G 69	木馬責め斜め後姿	(大塚)

G 70	木馬責め斜め前姿	(大塚)
G 71	革全頭マスクと手錠	(大塚)
G 72	火あぶりにあう女	(大塚)
G 73	長髪垂らし全裸縛り	(長野)
G 74	豊満を誇る露出癖	(長野)
G 75	白肌で縄にうそぶく	(長野)
G 76	縄にもだえる美女	(絹川)
G 77	美貌をいためつける	(絹川)
G 78	首吊りの責め	(新井)
G 79	両手開き吊り顔虐め	(新井)
G 80	全裸後手足首連繋縛	(玉田)
G 81	蒲団上に転がった女	(遠藤)
G 82	首縄開股強烈縛り	(木村)
G 83	巨大な臀部全裸後手	(大塚)
G 84	膨隆見事な乳房責め	(長野)
G 85	ヤンチャ娘開股縛り	(長野)
G 86	全裸でしやがむ後手	(玉田)
G 87	豊満裸身を誇る緊縛	(玉田)
G 88	美麗の全裸に嚴重縛	(玉田)
G 89	後手縛り裸立姿晒し	(木村)
G 90	奴隷の裸身を捧げる	(木村)
G 91	白布の猿轡と白肌責	(木村)
G 92	六尺権巨大臀部虐め	(大塚)
G 93	裸身を晒す両手縛り	(大塚)
G 94	全裸アグラ坐り縛り	(玉田)
G 95	白肌に映える光の縞	(玉田)
G 96	膺乳房強調喰込む縄	(大塚)
G 97	股間縛り全裸の膝立	(大塚)
G 98	台上的緊縛裸身像	(長野)
G 99	反りかえる緊縛裸身	(長野)
G 100	膨大な臀部を眼前に	(大塚)

〔代理部新版分譲品一覽〕

腸露出無念腹切腹

大手札十枚一組 八〇〇円
大塚啓子 略号 (せ10)

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚啓子 略号 (ひた) 1

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚啓子 略号 (ひと) 2

マニヤの切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
甘木春子 略号 (まに)

女子斗争場面写真

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚、玉田 略号 (のわ)

二女格斗場面写真

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚、玉田 略号 (のか)

全裸正面切腹姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (のみ)

切腹に悶える裸身

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (のそ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号 (のけ)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (のけ)

玉田美佐子 略号 (ねむ)

後手首の高縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
玉田美佐子 略号 (ねへ)

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 三〇〇円
玉田美佐子 略号 (ねと)

血紅切腹決定版

大手札十枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号 (れは)

血紅切腹凄惨姿態

大手札十枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号 (れみ)

黒いフンドンを誇る

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号 (くわ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (むろ)

全裸脚拳姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号 (てい)

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号 (てへ)

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号 (てほ)

六尺揮の変形姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号 (てに)

蹲踞と拍手

大手札二枚一組 二〇〇円
長野良子 略号 (てり)

鬼面と接吻する

大手札二枚一組 二〇〇円
長野良子 略号 (てち)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号 (まと)

裸身に羞らう

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号 (まつ)

女賊捕縛

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (へい)

女賊処刑

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (へは)

全裸緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号 (ゆり)

鼻をいたぶる

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号 (ゆは)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号 (ゆか)

バンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号 (ゆお)

絞首刑

大手札二枚一組 三〇〇円
新宮夫人 略号 (るく)

引回しと晒

大手札二枚一組 三〇〇円
新宮夫人 略号 (るに)

磔 (はりつけ)

大手札三枚一組 三〇〇円
新宮夫人 略号 (はみ)

晒 (さらし)

大手札三枚一組 三〇〇円
新宮夫人 略号 (さら)

絞首刑

大手札三枚一組 三〇〇円
新宮夫人 略号 (こけ)

晒台の生首

大手札三枚一組 三〇〇円
新宮夫人 略号 (のく)

斬首の瞬間

大手札三枚一組 三〇〇円
新宮夫人 略号 (のき)

斬首処刑場面

大手札三枚一組 三〇〇円
新宮夫人 略号 (くし)

月経帯のまま縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 遠藤百合子 略号(ゆす)	豊満を切り裂く刃 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(ほふ)	鎌腹を切られる女 大手札二枚一組 三〇〇円 愛川悦子、田中芳代 略号(らく)	咽喉笛を刺される女 大手札二枚一組 三〇〇円 愛川悦子、田中芳代 略号(らみ)	血紅使用 斬られる女 大手札七枚一組 七〇〇円 絹川文代 略号(らふ)	雲斎の相撲フンドシ姿 大手札三枚一組 三〇〇円 東浦ひかる 略号(ろみ)	凄んだ女賊スタイル 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(へに)	バンド、ゴム見せ 大手札五枚一組 五〇〇円 東浦ひかる 略号(へみ)	浣腸を施される女 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(ちら)	煙草責めの裸身 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(たく)	淫らな長髪の乱れ 大手札四枚一組 四〇〇円
大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(ろも)	ふり乱す長髪の悶え 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(ろめ)	縄目に悶える夫人 大手札三枚一組 三〇〇円 関谷富佐子 略号(ほく)	髪を引き回される夫人 大手札三枚一組 三〇〇円 関谷富佐子 略号(ほむ)	自ら施す浣腸 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(ちめ)	浣腸器を弄ぶ女 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(ちり)	写真の中に悶える 大手札四枚一組 四〇〇円 大塚啓子 略号(けよ)	写真に埋れた裸女 大手札四枚一組 四〇〇円 大塚啓子 略号(けお)	フンドシ姿の魅力 大手札三枚一組 三〇〇円 細川アヤ子 略号(ふの)	フンドシ姿の羞らい 大手札三枚一組 三〇〇円 栗本ミチ 略号(ふへ)	フンドシの前後左右 大手札四枚一組 四〇〇円
栗本ミチ 略号(ふな)	フンドシの変わった姿 大手札三枚一組 三〇〇円 栗本ミチ 略号(ふに)	前開き、ゴムオシメカバー 大手札十二枚一組 一〇〇〇円 大塚啓子 略号(しま)	前開き布製防水オシメカバー 大手札十二枚一組 一〇〇〇円 大塚啓子 略号(しな)	全裸の切腹悦楽(1) 大手札四枚一組 四〇〇円 大塚啓子 略号(ひた)	全裸の切腹悦楽(2) 大手札四枚一組 四〇〇円 大塚啓子 略号(ひと)	乳房しばり 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(うは)	鼻責めと緊縛 大手札五枚一組 五〇〇円 大塚啓子 略号(うい)	木馬責三態 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(もく)	椅子責めの果て 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(いす)	哀婉血紅切腹 大手札五枚一組 五〇〇円 大塚啓子 略号(るな)
双胸の強調縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(そう)	動感海老責地獄 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(とう)	色禪の開股縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(いふ)	鼻責めのアップ 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(はす)	膨満正面縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(へな)	血紅切腹絶命態 大手札三枚一組 三〇〇円 絹川文代 略号(ちの)	血紅美女の切腹 大手札三枚一組 三〇〇円 絹川文代 略号(ちた)	オムツ着用フオート 大手札七枚一組 七〇〇円 大塚啓子 略号(むね)	バンド着用開股ポーズ 大手札三枚一組 三〇〇円 東浦ひかる 略号(うん)	マニヤ全裸緊縛フオート 大手札三枚一組 三〇〇円 栗本ミチ 略号(いな)	



大阪の山村幸子様、貴女の読者通信を拝見しまして、とても嬉しく思いました。私はアルバイトしながら学んでいる二十五才の一青年ですが、いつも貴女のような女性の友人が居たらなあと思っていたのです。私も数年前から偶然「奇ク」を愛読するようになったのですが、実際の体験は少ししかありません。私、自身現在SMを楽しむという事より、そういうことを或る程度理解し、関心を持ってもらえる貴女のような方と、

友人としておつき合いして行きたいのです。貴女の「通信」を拝見して、恋人に会ったような気がして思わず私も生れて初めての読者通信を書きました。アルバイト生ですが、幸い時間的にはゆっくりしており、まず、呑気者です。から、閑と金(?)を持て余しています。お互いに同じ市内ですし、境遇、年令も似かよっているので気楽に、いつまでもおつき合いできたらと思っています。こんな私でもよかったら、御交際願えませんか。私のこの「通信」が五月号に載りましたら四月一日〜十日までの間に、大阪市阿倍野苗代田郵便局止メ田中良宛で一度お便り下さい。そしてお便りの中に貴女との連絡方法、連絡場所または電話番号でも書いておいて下さい。とにかく一度お会いすれば、お互いに生活を乱さず、信頼に足る人かどうか判ると思いますから。貴女のおきお便りをお待ちしております。(大阪市八田中良)

編集室の皆様方今日は。何時もごころうさんです。当誌には、二三年来のお付き合いになります。それ以来、別世界が現実の夢のように私の頭を駆けめぐり、人間もこ

んな世界があるんだなあと、改めて人生、人間について、色々違った見方が考えられ、毎日楽しく暮しております。当誌四月号の読者通信に投稿の兵庫県有馬郡の杉田静子さん、大阪市山村幸子さん如何ですか？ 取り合えず私の所へ神戸市長田区西代郵便局止にお手紙下さいませんか？ そうすれば相互の住所が解り直接文通出来ます。当誌愛読の女性の方大歓迎です。杉田静子さん出来すれば神有電鉄湊川駅(神戸)で私の通信が当誌に記載されたその日から毎日曜日午後二時〜三時頃までお待ちしております。楽しい交際出来る日を楽しみに期待しております。私は二十六才一・六米色白メガネ、ポケットに手を入れております故、私の前を二、三回通って下さい。そうすれば声をかけます。よろしく。愛読者の皆さんくれぐれもお体を大切に、さよなら(神戸市長田区八大国弘)

おしめカバーおよび生理バンドマニヤ諸氏に告ぐ。最近これらのゴム製おしめカバーや生ゴム使用の生理バンドなどが市場より姿を消してゆくことは、諸氏同様に残念でなりません。さいわい私は住

友ゴム製、ニシキ製などの総ゴムおしめカバーや黄色い生ゴムを使用している開放T型(東浦ひかる嬢着用フオートと同製品)や前開型などの現在市場では入手出来にくい生理バンドなどの手持ち(いざれも新品)が十分ありプレイにはこと欠きませんが、諸氏の入手困難との誌上報に接し、手持ち品の一部をおゆすりしてもよろしく御希望の方は数量にも限りがありますので至急、愛知県枇杷島大和郵便局止め伊藤まで、御一報下さい。また、地方の方で現在市販されている製品で入手困難なものがありませんら、私の出来る範囲で協力いたしたく御連絡下さい。(名古屋AG生)

過日は早速に御送付頂き有難う御座いました。「ひり」と大塚さんの「みむ」とは一段と素晴らしき場面があり大変楽しく見る事が出来ました。ここで御参考までに少し申し上げ度いと思ひます。短刀をギリギリと逆手に引き抜いた場面、片膝ついて短刀の柄に手をかけた場面など、非常に素晴らしいのですが何れも下を向いて居る目の付けところが悪いので折角の良いポーズもムードが出ません。目

がポイントになりますから上を覗んだ方がよろしい。髪型の型をまげにかんざしがあれば申し分無いのですが、何しろ揮一本の素裸です。髪型が非常に大切だと思ひます。次に晒が短いように思ひます。乳房の下までギリギリと厚くきっちり巻き込んだ方がよろしい。五メートル位のものを使用して下さい。次に表情が悪いフェイスが足りない。大塚さんの「みむ」の如くキリッとした凄味が出て居りません。自分が本当に姐御になりきって真剣に演技を御願ひ致します。揮の醍醐味、特に女性の場合は、その豊満な太股に深く晒が喰い込んだ姿であり、もう少し大胆なポーズにより素晴らしい演技の開拓を期待して居ります。尚、清子さんの素晴らしい刺青も充分拝見しましたので他のモデル嬢により姐御スタイルのシリーズものとして御作成の程御願ひします。次に六尺揮をするまでですが大変、期待がはずれました。今までに晒の六尺揮ものはなかったので作成願えればと思つて居りましたが今回の発表で「ひは」を見ましたが物足りない感じ。女だてらに晒の六尺揮を締め込む勇ましい姿ですから姐御らしいキリッ

とした表情、髪型、メーカーキャップなど、大切だと思ひます。これも五米位の晒を使用し乳房の下までギリギリと厚く巻き込むのが魅力的です。アクセサリとして白鞘の短刀が晒と一緒に置いてあればムードが出ます。揮を締めるのは喧嘩仕度であり最後に乳房の間に短刀をぐっと差し込むオマケがほしいです。何うか姐御スタイルの素晴らしい凄艶限りの作品の発表を期待して居ります。(岡山県八姐御ファン)

私は田舎に住む一青年ですが、過日都会へ買物に出て初めて書店にて貴誌を拝見、一見してびっくり、度胆を抜かれる思いで、何故もっと早く発見しなかったのかと悔んでも悔みきれません。私は学校(中学校)時代成績も非常によく、都会へ出たいとは思ひましたが、家庭の都合で家業をつぎ、一年中、殆ど山の中で暮して居ります。別に淋しいとは思ひませんが、やはり読書が唯一の楽しみでいろいろと知識を吸収する糧として居ります。貴誌にはいたく興味をおぼえ、今のところ一月号、二月号、三月号と三冊拝見したただけの新参ですが、自分ではファンの

つもりでおります。つきましては在庫している旧号全部お送りいただきたく送金しました故、右よろしく御配慮願うものです。(和歌山県八姐御三)

分譲Mフォトに就いて、昨年十二月号以来、一月号、二月号、三月号と画期的なMフォトを発表され早速、買いましたところ、今までにはない迫力のあるものなので、大変喜んで居る次第であります

四馬孝画

時代風女体切腹画

大中判印画紙焼付
五枚一組 一〇〇〇円
略号(ゆい)

一、座敷牢の美女

無実の罪によって座敷牢に押し込められた美女が、男の見て居る前で牢内に白布を敷きつめ双肌ぬぎになるや、短刀で下腹を切りさばき左の乳下に止めの一刺し。

二、介錯される美女

上半身の豊かな肉づきもあらわに庭に端坐して、左脇腹から臍下に掛けて、脇差できりりと切れれば介錯の刃が一閃、麗わしの細首にさっと散る血しぶき。

三、駕籠の中の姫君

駕籠で送られる美女が氣にそまぬ縁談をいとい、腰巻一つの裸身となつて覚悟の切腹。守刀で臍下を十分に切つた上、更に鳩尾へかけて凄絶な十文字切腹。

四、果てる男装の美女

小姓姿に身を変えた男装の美女が、豊かな乳房もむきたしに前をくつろげて、その下腹に突き刺す小刀の切先。深夜の御殿にくりひろげられた倒錯美の絵巻。

五、裸身の切腹

も早や逃れぬと覚悟した美しい腰元は死んで操を守りぬこうと、輝くように白い肌をすべてさらけだし、守刀の短刀で下腹を一文字に切つた上、咽喉笛にひと突き。

でMフォトが誌面を賑わすようになるのが楽しみです。三月号、芳野眉美氏の贗作悩ましのサディズム、東様の虹のあじさい、とやまかずひこ氏の雑誌帳などほんとに面白く拝見致しました。御三方とも今後どうかずっと続けて下さいますよう、お願いします。また「花と蛇」にも美少年文夫が登場し美少女の前で辱しめられる場面がありましたので、どうなる事かと一気に読みました。どうか、この小説も我等M党にも興味あるようズベ公達に辱しめられたり、美津子に愛そづかしをさせるため、文夫を辱しめるよう強制するとか筋の運びになってくるとまた一段と面白いのですが、特に美津子の便器として文夫を利用することに、より、愛する人への羞恥心と申訳なさで、美津子の苦しさ如何ばかり、これはSM両方共ゆけるのではないかと思ひます。(富山県八高岡七夫V)

○ 奇ク編集部の方々には御壮健にて編集に取材に御奮闘被下れて居られる事と拝察申し上げます。私は貴誌を去る五年程以前ある書店に発見、取り敢えず購入、以来ずっと愛読致して居ります。小生の

M・S精神は生れつきといって良いでしよう。奇ク発刊以前の昔からです。独身生活から夫婦生活に至り今猶益々盛んに研究、時を見では実行致して参りました。今までは独りで独創実践して居りましたが、最近盛んに夫婦プレイのお便り、記事が出て居りますので一筆御仲間入りさせて頂き度くペンを取りました。夫婦プレイ同好の皆様には色々と思われた方々が多いように見受けられますが、小生は皆様と相反して経済的にも住居も間借り故に不便を感じて居ります。カメラも最新型の物は無く古いカメラを大事に保管致して居りますが、現像焼付器具は持たず今までも数十本のフィルムに妻とのプレイ写真を収録しましたが、そのまま放置せざるを得ず残念です。同好の方で現像焼付御引受け被下れる方が有りましたら御便り下さい。経費は実費お払い致します。また京都、奈良、大阪、神戸方面の夫婦同好の方または真面目に御相談御相手に成って下さる淑女の方便り頂けませんか。小生は三十八才、SM芸術を夢見る男です。只縛る事を楽しみとするので無く、それによって生れる美を発見する事に意味が有ると信ずる者

木村洋子

完全逆さ吊りフォト

分譲

大中判印画紙焼付三枚一組 一〇〇〇円 略号(さつり)

です。何卒、良き理解者のお便りの有る事を願って居ります。また御夫婦でプレイなさって居られる方……一月号誌上でのSMプレイ夫婦の長谷川好志男様、貴男の御住所は分りませんが若しお近くでしたら、御交換プレイをして見たいと思ひます。妻は年増女の四十三才です。色々拙い文書にて皆様には判読頂けなかった事と存じますが、私としましては勇気を出して奇ク誌上をお借り致し理解者若しくは協力者の御方の御力をお借りしたい計りにペンを取りました。読者皆様の御健康と奇クの発展を祈りペンを置きます。(京都市八S・T生V)

○ 陽光の照りはえる候となりました。その後、読者の皆様如何ですか。本誌も諸般の状況に鑑み色々内容の変化と充実改進を計って居る事は誠にうれしく存じます。なお之に伴い本欄もいよいよ親近感を満たすよい交友の広場にしようでは有りませんか。色々な好み

を各自の立場から投稿された文面には常に独り悦楽の境地にひたつて居ります。私本来愛好の女闘もさる事ながら、その他女性刺青、黒禪、肥大美女などへの追慕は一段と興味をそえられる分野として探求して居ります。これら趣好を同じくする各地諸兄の御意見や御便りを頂きたいと思つて居ります。私もいささかながら此ら嗜好の参考資料代りに写真など保存して居りますので文通出来ることと信じます。禪に就いては四月号に松原氏の告白が載つて居りましたが、私の手元には禪に関する興味有る古書が保有されて居りますので現代感覚に訳して他日本誌に発表したい考へです。さて最近女性の方々が色々とお便りを本欄へお寄せ下さるのは潤い有る事と喜ばしい限りです。ことに大阪の山村幸子姉差支えなくば御手紙を頂きたいものです。また有馬郡の杉田静子姉も同様御暇な折は御来信下さい。次に宮城県佐藤けい子姉には、特に興味と好感を憶えまし

四馬孝画

倒錯美緊縛画集

大中判印画紙焼付

五枚一組 一〇〇〇円

略号(えと)

(美女のいけにえ)

一、女体解剖台

黒くて冷たいレザー張りの台上に逆エビ縛り首縄姿で載せられてゐるのは、齡二十才の美女。身体前面をむきだしにして、台の上にころがされたのに対して、これから加えられようとする嗜虐のかずかずを暗示する恐ろしい道具が彼女を冷たく見下している。

二、嫉妬の鬼

絶世の美貌の妻を持った平凡な男は、あらぬ嫉妬に悩まされるものだが、自分は醜い容貌でありしかも、妻はホステスのナンパワゴンであつてみれば、嫉妬の鬼となるのも又当然であらう。これは若くして美しい妻を持つ夫が、その閨房に於て浮気の相手を白状させるシーンである。

三、鼻料理プレー

顔は女性の生命であるが、鼻は又、その大切な顔の中心に位して女性変貌の中心をなすもので、男

心をそそのかる中心でもある。美しい女性の鼻をいたぶるのは、これ又Sマニヤの醍醐味である。大事な鼻をツンと突き出して、身動きもできないように手足を拘束された美女が、今やその鼻、鼻孔を男の手によって、思うままに料理されようとしているのだ。

四、涙を舐める男

ぱっちりとした瞳いたつぷらな瞳。房々とした丈なす黒髪は、色白の肌によくマッチしている。乳房や腰部には、むくりと肉がのびた身体ながら、全体にはほっそりとした身体つき。その華奢な裸身をくびるように掛けられた麻縄、そして身体を真二つにするばかりに締めつけた革紐の首縄、股間縛。今や皮ムチの鞭打にあつて、苦渋に流した大粒の涙を、男はペロペロと如何にもうまそうに舐め続けるのだ。

五、山小屋の一夜

リュックを担いで楽しい山登りの一日が終つて、山小屋で一夜の宿泊を求めた乙女。山のけがれを知らぬ清純な空気に同じく、彼女も又、山の美しさに憧れた十九になる清純な処女であつた。しかし山小屋の一夜は、彼女にとって怖しい悪夢の一夜であつた。その受難のいまわしい悪夢のページが、ここに展開されている。

た。御自分で卑下される事は無いと思います。私の知人に肥った女性達が有りますが皆はがらからで元気に過し、ある人はよい主婦となり母となつて居る人達ばかりです。御近況など御便り下さる事を心から御待ちして居ります。(神戸市八増田トシロー)

○

四月号の読者通信で、宮城県佐藤けい子さんの感想文を読みまして。私のイメージにピッタリの人なようです。と申しますのは、私はもう七年来の奇クファンで毎号読者通信を刻明に読むことによつて同好の心の友を知り、孤独のひそやかな慰めとして全国に少なからぬ共通の心の広場を持つ方々の健在に、意を強くいたしております。妊娠腹の記事は一昨年に多く散見されたようですが、強く惹かれるものを常々感じております。私が筋肉質の痩せ型だから、反対のタイプの人に好意を持ち、円い腹のふくらみに潜在的なコンプレックスと憧れを感じるからでしようか。しかし、私は別にとくに細いというほどの身体つきでもありません。いま四十才ですが、兵隊も繰り上げ早期徴兵検査で甲種合格でした。ただ、背がとても高く

現在の二十才台の人でしたら大いに自慢も出来たでしょうが、私の年輩では却つて目障りなくらいでちようど六尺あります。体重はあなたと同じ十八貫、背が高過ぎますのでかなり細く見えます。家内は五尺二寸、十二貫、事情あつて一昨年離婚いたしました。目下独身です。私は公務員ですが、民生関係のケース・ワーカーを永年つとめて参りまして、必然的に心理学を研究し、奇クが現代人のそれぞれ個人としての心の中に、秘められた特定対象への興味、好奇心、探索の意欲、或いは楽しみ、喜びといった本当は大切なそれらのことにフットライトを当て、文章、絵画、写真などで表現している意欲的な活動を続けていることに心からなる敬意を表する一人です。冷静な研究も行わずして、全くの無理解な人達による圧力から奇クを悪書の一ツに数えようとしている為政者に対し、私は「もっとよく大衆、殊に現代人の心理の裏側を研究し、理解してもらいたい」と常々思つております。個々の静かな、ひそやかな楽しみは決して社会全般に悪影響を及ぼすどころか、実は或る場合それが大きい救いになっていることを私はよ

く知っております。『女性切腹』の悲壮なクライマックス・シーンに、映画やテレビで、或いは文書で、現代人は殆んどの人達が緊張し、興奮し、息を詰め、目を瞞って固唾を飲む。その凝視の瞬間、そこには刹那の迫力を伴った芸術があり、美が生れ、感激が生ずるのです。そして心理の裏側には無意識の憧憬、さらに期待があります。理屈っぽくなりませんでしたからペンを擱きませんが、私のイメージに合った人、佐藤けい子さんに、素人としての奇ク芸術論語り合いたいと思います。私は趣味としても絵も描きます、是非、御交際を賜わりますよう、お願い申し上げます。(滋賀県八牧健一郎)

初めてお便りいたします。奇クを友人から紹介されて読み始めて一年程になりますが、グラフィアが廃止されてからは内容的に以前より一歩前進したように思え、充実しつつある奇クに満足しております。特に奇クサロンは読者の直接の意見が盛りこまれて、編集者と読者の交流が一層緊密になったものと喜んでおります。私も緊縛のプレーの経験はありますが、皆様と比較しますと、まるで子供の遊

戯みたいで発表する勇氣すらないのを残念に思うと共に、皆様の豊かな実行力に感心いたします。仕事事が自由業であるためか陽気な毎日、満喫しています。その反面規則正しい生活がなく、もう一つ充実感がなく何が原因かを思索しているところです。時々奇ク愛読者の人と文通でもして交際できたら楽しいのではないと思っています。ですが、どなたか女性の方で暇のある方は便りを下さいませんか。私は別にSとかMとかははっきりとした自覚はないけれども、どちらかといえはS的傾向があるのではないかと疑問視しています。(大阪市八景成昭)

兵庫県の杉田静子様。貴女の通信を三月号で拝見。私と同じ気持ちで毎日すごされている事に思わず筆を取りました。私は香川県高松市にいます。KK誌は五年程前から愛読しております。女性の縛めなどを見ますと非常に興味がわき一度でいいから実際に女性を緊縛出来る日を夢みつつ空想の世界を楽しんでおります。不思議な事に反面、女性から縛しめられる事を心の片隅で願っております。S・Mが八・二程度でないかと思っております。

「今月の新版Mフォト」

二人の女性からの責

山原清子嬢と他に一名の新人女性との組合せにより、ここに初めて二人の女性から責められるMフォトを作成しました。サド役としてその迫真の熱のこもった演技でMファン待望の傑作写真をもつて登場しました。二人に責められた男性モデルは、今までの経験でこんな素晴らしい思い出はなかった。しかし二人の責められるという大きな精神的にも肉体的にも、大きな負担だったと語っています。

男が屈伏するまで

大手札印画紙焼付
十二枚一組 三〇〇〇円
略号(ふそ)

臀の下に呻吟

大手札印画紙焼付
十二枚一組 三〇〇〇円
略号(ふれ)

二人の女性の暴虐の嵐はとどまるところを知らず、手足を押さえつけられて、仰向けに男の顔の上には、大きなお尻をデーンと据えられ、窒息寸前の連続写真。

二人になぶられる

大手札印画紙焼付
十二枚一組 三〇〇〇円
略号(ふた)

刺青を見事に散らした逞ましい尻で咽喉を潰されて苦しむ男を冷やかに眺める女。足を舐めつけられ、顔を眺める女。股間を嗅がれ、二人の女になぶられつくす場面ばかりの点景フォト

二女の股責地獄

大手札印画紙焼付
十二枚一組 三〇〇〇円
略号(ふぬ)

山原清子嬢一人の股責めでも、その迫力に圧倒されたファンからの絶賛を浴びましたが、これは二人の女性による股責め、責め責め、その素直さは筆舌に尽くし難いものがあります。

逆エビとムチ打

大手札印画紙焼付
十二枚一組 三〇〇〇円
略号(ふち)

二人の乱暴な女に狙われた男は、後手に厳しく縛られ、あげられた上、逆エビに締めつけられ、ムチ打ちを加えられ、ええと叫ぶところを馬乗りになつて押さえつけられる。

○

○

20

1

二人の女の足で顔を踏みつけられ、足の指や足の裏を舐めさせられても、唯々諾々と応じているM男の生體。

まで押し進めた時、理想像として決定づけられるのは、一種の権勢美を兼ね備えた逞しく肥え太った女性だからです。私はそのような女性を人生の伴侶として迎えたいと、常々想っていました。ところが、求めても、私の前に現われるのは、いずれも年配の女性で、私を慰さるものにはかたがた、私ので失望するばかりでした。そこへ、普通ならば太っている事を辱ずかしがる筈の若い貴女が、公開の場に自己を主張なされたのには驚き、またその強い意志に敬服するばかりです。そして私の伴侶として貴女をおいて無いと決意して筆をとった次第です。申し遅れましたが、私は身長一・六三センチ、体重六五キロ、年令三十五才のサラリーマンで、学生の頃、野球部に籍をおいたスポーツマンです。尚、私は写真を専攻しましたので、貴女の御希望に充分お答え出来ると確信しております。東京と宮城に離れてはいますが、千里の道も遠しとせず、貴女のもとにまいる所存であります。(東京都中央区八田中啓文)

した。それにつけても是と同じような型式で「鼻責めに微笑む娘」「目責め……」「唇責め……」と顔面指頭流浪の旅物語を御願い出来ませんか。小生はK・K誌に時々掲載される鼻責自虐は全然、興味無く、むしろ嫌厭すら覚えるのですが、矢張、美の破壊をテーマにした美貌翻弄にあこがれる者です。グラビヤが影をひそめた昨今、せめて、そうした傾向の記事を、我々、鼻責めファンに御恵み下さい。あのグラビヤ華かなりし頃の梨花、絹川、大塚、諸嬢の鼻責め、今いずこ。荒城の月のメロディが耳朶をうつようです。四月の新版「はた」頂戴しました。今更ながら、梨花、絹川、遠藤さん達がなつかしい。どうぞ、こうしたスターの鼻責特写分譲品をドシドシ御願ひ致します。(東京八墨堤生)

しくてなりません。一生に一度だけでも自分の手でM女性を後手高小手。海老縛り。くすぐり責。ムチ打。吊り責。その他、色々と思縛し、写真に撮って見たいと思っています。毎日悩み苦しみ味気ない人生を過しています。奇ク愛読者のM女性で男性に責められて見たいなと悩んでおられる方もいる事と思います。秘密、条件はかならず守りますが、どなたか私の夢をかなえて下さる女性はいませんか。せめてM女性と文通だけでも、のぞみをかなえて下さい。お便り下さる時は男名前を下さい。身長一・七〇、体重六〇キロ、二十三才の男性です。(西宮市甲子園八小野清)

女相撲と女斗美	
モデル 木村洋子、大塚啓子	
女相撲組打ち	大手札八枚一組 略号(すか) 八〇〇円
相撲マワシ着用	大手札八枚一組 略号(すね) 八〇〇円
女相撲投げ業	大手札五枚一組 略号(めん) 五〇〇円
相撲マワシ着用	大手札五枚一組 略号(めき) 五〇〇円
白晒六尺着用	大手札四枚一組 略号(えく) 四〇〇円
白晒六尺着用	大手札四枚一組 略号(すは) 四〇〇円
女相撲四十八手	大手札六枚一組 略号(すむ) 八〇〇円
女相撲四十八手	大手札六枚一組 略号(すち) 八〇〇円
女斗立業の応酬	大手札六枚一組 略号(すた) 八〇〇円
立業の攻撃場面	大手札六枚一組 略号(すほ) 八〇〇円
寝業の女レス	大手札九枚一組 略号(すく) 九〇〇円
女斗連続場面	

A組五十集 大手札判印画紙（9×13 糎）焼付

A 4	A 3	A 2	A 1	
全裸正面柱しばり	ハリツケ猿ぐつわ	手吊り乳房責め	フミツケ汚辱縛り	
(遠藤)	(新井)	(五月)	(新井)	
五十組五十枚	四十組四十枚	三十組三十枚	二十組二十枚	十組十枚
四、	三、	二、	一、	
〇〇〇円	二〇〇円	五〇〇円	七〇〇円	九〇〇円
				五〇〇円
				一五〇円
				一組一枚

A 16	A 15	A 14	A 13	A 12	A 11	A 10	A 9	A 8	A 7	A 6	A 5
裸自慢縛りヌード	正面縛蛙股ひらき	色褌の開股しばり	うねる緊縛裸身	全裸正面強烈縛り	膨隆臀部さらし	全裸後手高手小手	鼻責鼻朶いたぶり	乳房責め股間縛り	豊満乳房いじめ	全裸手吊りムチ打	亀甲強烈乳房縛り
(長野)	(長野)	(長野)	(長野)	(長野)	(長野)	(遠藤)	(遠藤)	(遠藤)	(遠藤)	(遠藤)	(遠藤)

正面 アグラし ばり	正面 大の字開 股縛	逗まし き裸し ばり	荒縄縛 豆絞 り猿轡	両手前 縛り髪 首絞	両手吊 り股間 吊り	両手膝 下し ばり	疼れん する裸 身像	両股縄 掛け開 股縛	正面裸 身強烈 本縄	乳房晒 し肉体 自慢	責衣に はみ出 る肌	投げ出 した全 裸縛	捕われ の全裸 緊縛	羞らい の両股 縛り	猿轡乳 房いた ぶり	荒縄全 身縛り 豆絞
(長野)	(長野)	(長野)	(大塚)	(大塚)	(桜井)	(関谷)	(関谷)	(大塚)	(梨花)	(長野)	(東浦)	(長野)	(梨花)	(大塚)	(遠藤)	(大塚)

盛り上る乳房縄目	亀甲本縄鼻いじめ	ムチ打悶えポーズ	椅子またぎ汚辱責	縦縄股間縛り正面	ゴム猿ぐつわ全身	くさり乳房責め	強制片足挙げ責め	正面乳房くびり縛	鴨居正面ハリツケ	手吊りパンティ落	白バンド後手吊り	豆絞り高小手呻	裸縛り鼻いじめ	ガンジガラメ立縛	亀甲本縄股間縛り	立木縛竹棒責め
(長野)	(大塚)	(関谷)	(東浦)	(関谷)	(大塚)	(長野)	(大塚)	(関谷)	(梨花)	(絹川)	(東浦)	(絹川)	(梨花)	(愛川)	(絹川)	(桜井)

いただきたいものです。但し、女性の方、当方二十八才の男性、会社外交員。お返事の方は奇ク誌上で結構です。最後に北陸地方にも少くとも、奇ク誌、読者がおられる事と思われれますが、奇ク誌、読者通信によって皆さんの仲間入りされる事を望みます。そうする事に依って、我々マニヤ達の明日への生活が見出させるかも知れません。ではよろしく。
 (石川県金沢市八長谷川仁郎▽)

でした。小さい頃から映画や本を見て女性の縛られ姿を見ると心臓の鼓動が激しくなるのでした。その頃はサドとかマゾとかいうようなレッキとした言葉があるとは知りませんでした。奇クを発見してからというものは自分がSである事を自覚しました。しかし、こういう事を考えていてはいけなさと幾度となく自分の心を押えようと思いましたが一度心に芽ばえたものは、どのようにしても消す事が出来ない事を最近になってさとりました。奇クフアンの皆さんも恐らく一度は僕のような時を過さ

れた事と思います。女性の方は特別にお悩みの事と思います。それなら、いっそ、自分の悩みを十分理解してくれるS又はMを妻とし夫として一生を悔いのないように終りたいものです。私はS、従ってMの女性を求めています。M女性の方、私と結婚を前提として交際していただけませんか。(山口県八小野田正)

○

大阪市にお住いの山村幸子様。四月号誌上のお便りを拝見し、何か心を惹かれるものを感じお呼びかけ致します。小生は現在三十六

才で二児の父親です。本誌を愛読しはじめてより、はや十年近くに
もなりますが、この間、生来の筆
不精のため、一度も本誌にお便り
したことがありません。常々、本
誌に關した色々なことを、心をゆ
るして話し合える人があればと思
っておりまして、この間、妻は
全然、本誌をみようともせず話も
いたしません。誌上でお見掛けす
る御夫婦で本誌を中心に幸福にお
暮しの方達の模様を知り羨ましく
思っております。山村様。いかが
でしょう。そう若くもない小生で
すが一度話し相手になっていただ
けませんか。その結果がよろしけ
れば文通なり御交際願うなりし、
又お氣に召さねばそれ以後決して
御迷惑はお掛け致しません。お会
い願えるなれば、小生は日時を問
いませんから、御都合よろしき日
時、場所、目じるし等お知らせ下
さい。必ずお待ち申しておいま
す。末尾ながら本誌の一層の発展
を祈ろうではありませんか。(大
阪市八西川定夫)

松田静子様。KK誌にて貴女様
のお便りを拝見致しました。小生
もKK誌を愛読するようになって
から十四年にもなりますが、今

はじめて読者通信を致しました。
小生も一度は女性の方を縛って見
たいと常々思っておりましてが世
間体もあり、又、勇気もありませ
んでしたが貴女の御住所が小生の
近くであり今後、文通、交際願え
れば時間的にも非常に便利である
ように思われます。小生は本年三
十八才です。男としては、ハンサ
ムではありませんが好男子的な処
が幾分かあると自負致しております。
もし御交際願えれば次号読者
通信欄にて御返事を下さい。な
お、御面会出来ますれば小生より
目印又は日時、場所を指定致しま
すれば末長く、SMプレイを致し
たく思っております。是非、御返
事下さい。御願ひ申し上げます。
(兵庫県西宮市八森本達夫)

春まだ寒い日々が毎日続いてま
す。奇ク読者のゴムニヤの皆々様
四月号の読者通信に出てます織田
信さんの社でつくっておられるメ
ンスバンド、オシメカーバーの種
類だのと出てますけれど、奇クの
方で発売されたらいかがなもので
しょうかしら。私もそうとうメン
スバンドをあつめましたけど、も
っとほしいとおもいます。出来ま
したら、種類のついたパンフレッ

☆女体切腹資料の部☆

- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|--|--|---|--|--|---|---|---|--|--|---|--|--|
| 血紅女体切腹腸露出
大手札十二枚一組 一〇〇〇円
大塚 啓子 略号(せい12) | 血紅切腹絶命ポーズ
大手札四枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(せん) | 血紅切腹祭壇の女体
大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(せぬ) | 禪裸女血紅切腹 (大塚)
大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(おお) | 血紅使用苦悶悦楽表情
大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(くえ) | 肉体美全裸女体切腹
大手札五枚一組 五〇〇円
長野 良子 略号(なせ) | 瘦身女体切腹姿態
大手札二枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねは) | 瘦身女体自刃姿態
大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねに) | 血紅切腹血塗れ下腹
大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わい) | 殿中の女性切腹
大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(わこ) | 切腹美態から絶命へ
大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わは) | 豊満の下腹を切る
大手札五枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(えん) | 女体介添切腹
大手札四枚一組 四〇〇円
甘木 春子 略号(あか) | 下腹を切り裂く
大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やい) | 下腹に刺す氷の刃
大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やお) | 柔肌を切り裂く女
大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やえ) |
|---|---|---|--|--|---|--|--|---|---|---|--|--|---|--|--|

トを送って下さい。私たちゴムマ
ニヤの者には大変たすかりますけ
ど、じつは私は生ゴムのパンティ
ーはございませんので是非ともお
ねがいします。また大西良子先生
のように生ゴムのパンティーが欲
しくて住所をおたのみしましたけ
ど、まだなので毎日まっています
うちに四月号になってしまいました
た。また私のねがいは御無理かと
もうしますけど是非とも一つ御願
い致します。大西先生のゴムにつ
つまれてる体を思っただけでたま
りません。どうかこの私の願ひお

かなえて下さい。(愛知県八橋村
花代V)

先日「日本女性拷問刑罰集」求めましたところ実に本格的な責写真で満足しております。これからもどしどしこのような作品を価格

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

女体浣腸ブレイ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

さが我々の望むところですよ。一、この種、責写真には体につけるものは、二布の腰巻だけが絶対によろしく、一寸動くところとあちこちが露出するところに魅力があります。一、又、腰等の線もよく出ます。一、苦しみの表情は顔だけでなく、体全体に出して欲しいと思います。

(不自然でなく)一、折角、一組三枚ですから同方向の写真はなるべくさけて正面、側面、背面等に撮していただくとよいと思います(われわれは、なるべく全部の姿が見たいと思うものですから)一、責め手の方は仲々よいと思います。右、御笑読有難う御座います。先ずは御礼迄。(広島県八杉原伍郎V)

①北海道にお住いの「深井たかし」さん。三月下旬、局止め郵便を受け取りに行った私は、「千歳」局の消印で奇ク一月号を受け取りました。私には貴兄としか寄贈者を想像する事が出来ません。本年一月上京の折、投宿先から手紙をくれましたが、余り余裕のないスケジュールだとみえて、上総屋へ連絡した時は既に不在との事、また、宿帳にも北海道の住所の記入がないとの返事で、結局文通すら

不可能でした。今度の謎めいた贈り物の主が若し貴兄であり、何か相談事があるのでしたら、再び連絡して下さい。②佐藤けい子さん四月号の貴女のおびかけに、五月号では二人の男性から応答がありましたね。嬉しいでしょう。ところで、私も貴女に興味をもつ一人として名のりを上げます。これからは気候も良くなり、屋外の撮影も苦にならなくなります。貴女の体軀をカメラのファインダーを通して賞翫させてもらえれば幸甚です。「兵隊やくざ」でクロース・アップした「酔酒」などしながら花に浮かれて楽しむのも一興と思っております。どうぞ、お返事を。③河村隆子さん。若いのに、いろいろ苦勞なさっておられる貴女にお便りするのが、果して慰める事になるかどうか判りません。でも、貴女の望むお話し相手になれたらと思ってお便りします。現在、私は小さな軽印刷の会社を経営しております。貴女が簡単な事務や仕事の手伝いをして下されば、今後の生活の事も併せて考えてみて、一石二鳥のお誘いという事にはなりません。詳しくはお便り下さった折お返事させて頂きます。④欲ばっているいろいろ書きましたが、

S・Mプレイに強い関心をお持ちの方、大いに交歓しましょう。貸し出しはお断りしますが、資料や記録は協力出来る範囲で見せします。(東京都八中田明)

神戸の志村善子様、尼崎の松岡です。三月二十八日は胸をおどらせながら、阪急三宮駅西口へ二時少し前に着きました。一時間待ちました。然し、貴女は来られませんでした。きつと来て下さると思つてたのに残念でした。然し余り日がなかったたので、貴女が五月号を読んでおられなかったか、或いは他に用事があったか、都合が悪かったのかもしれませんが。然し私はあきらめません。何故ならば貴女は私が始めて奇クを通じて呼びかけた女性です。いわば初恋の女性です。どうでしょう。いきなりお逢いしてプレイするのめどうかを思いますので、一度お便り頂けませんか。文通でお逢いする日を決めましょう。私宅は家庭がきびしいので直接のお便りはこまりません。そこで、尼崎市園田森郵便局止松岡寛宛差し出して下さい。五月の七日に局へ受けに行きますから、それまでに着くようお便り下さい。待っております。(尼崎

市八松岡生)

本誌には女人の切腹を男子が見聞したり介錯したりの記事や、女性に叙述するものが、実話であると擬態であるとを問わず、大部分である。創作なお、かつ然りである。然し、折角、瀬川泰子氏や山田久仁子氏など、女流も少くないのだから、せめて創作でも、男らしい壮烈な切腹を女主人公がどう見るのか、試みがあつてもよいのではなからうか。両女史をはじめ、女流の一見識を期待する所以である。(波良桐太郎)

拝啓、花らん漫の陽春の候も、間近くなりましたが、圧力下にも拘らずなにかと御健闘の段、感激の至りに存じます。偕て毎々身勝手な読通を貴重なる誌面を割愛されて御掲載下され有難く感謝致します。神戸の刑部典子嬢、その後もお変わりもなくお店のお勤めにお励みの御事と存じます。五月号にも掲載のごとく二月二十一日、元町まで出向きましたが、お目にかかれず残念でしたがお差えなかつたら、一度、拝眉をお願い致します。度々御文通下さいませんか。小生現在両耳朶に各七カ所と目の頂上

〔今月の新版分譲品〕

鼻責め万華鏡

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円

モデル

MS役 山原 清子
略号(はた)

山原清子のペットである新しいモデルの鈴木晃子は、彫の深い可愛い顔立ちの従順な娘である。この可愛い晃子の鼻を清子が「鼻責めマニヤ」のために存分にいじめ抜いたところをアップで三十六枚の連続撮影をした中から選びだした八枚の組写真である。晃子の背後に回った清子が晃子の鼻や鼻孔に対して、どのような責め方をするかお楽しみ下さい。

黒禪奔放姿態

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

モデル 刑部 典子
略号(ろち)

女体フンドシ・マニヤの中でも特に黒禪がきりりと双丘に割り込んで白い肌と黒い布との鮮烈なコントラストに強い興味を抱かれる方が多いのですが、カモシカのようににすらりと伸びた若々しい刑部典子の肢体に黒ふんどしを締めつけて奔放なポーズを開陳しました。どのような裸身に禪が映えるか見て

のお楽しみにして下さい。

白禪奔放姿態

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

モデル 刑部 典子
略号(ろち)

清潔な晒の白ふんどしを野性的な若々しい女体にきりきりと締めつけた姿は、フンドシ・マニヤならずとも、その魅力にひかれるのであるが、禪一本の瑞々しい女体をあらさまに晒して、布の喰い込んだ双丘を誇示し四股を踏み、禪着用の全身をあますところなく、皆様の目前にお目にかけます。

碧玉裸身緊縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 刑部 典子
略号(のん)

辻村隆のカメラ・ハントで始めて、その姿をあらわした刑部典子の裸身の高手小手縛りである。お茶目のノンコが厳しい縄目に対してどのような反応を示したか、とくにとらん下さい。

入墨を踏みにじる

大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円

モデル 山原 清子
略号(いつ)

年少からSとMとに鍛えられて

一カ所、穿孔しており追々と穿孔をふやして両方で三十カ所にしたいと希望しておりますので今まで、全部自分の手で穿孔しました。が、お願い出来ますれば、一度御店主賞欄さんに穿孔して頂き度いと思っておりますので宜敷くお願い申し上げます。宛名は京都市北区紫野西野町佐々木治一郎差出人京都市左京区下鴨北園町稲波光三郎でお願い申し上げます。(京都八佐々木耳環生)

K誌社の皆様、日夜の気苦勞を何時も感謝致しております。最近号の読者等の意見や激励通信等を拝読する度に、益々その感を深く致しております。K誌の善良な読者のため、今後ともに、一層の苦勞がある事かと思ひますが、関係者、皆様の御奮闘を大切に御願ひ申し上げますと共にその発展を陰ながら祈っております。尚、一読者として御注文というより御願ひがあります。前号にも一寸申し上げたように、最近号だけを見て感じた事です。流腸ファンが愛読する記事が非常に少なく全然、何んの魅力も無い殺生を主にした空想的な記事が非常に多くなった、嫌になつて仕舞います。私個

人だけの希望では旧発刊の流腸記事を、どんどん載せて欲しいのです。恐らくK誌の発刊初号からの読者は大反対か知りませんが、途中から、読者になった私のような読者は、最近号も数年前の旧刊号も、全然、問題にならないのです。内容が自分の好みに合えば大満足なのです。何んとか、このような希望を善処出来る方法は、出来ないものでしょうか？(兵庫県八高砂浣好生)

K・F両誌が自肅して写真内容、さし絵などがおもしろくなくなったと、読者のうわさである。K誌は写真ページを廃止した。アブ雑誌は写真で売れているとさえいわれるが、活字だけの魅力は、ごく一部の人以上は少ないのではないか。K誌十余年の読者は、こいういったが、活字の魅力は、文、表現によつて写真以上の迫力を感じるのである。アブ読者は普通の読者ではなく、それぞれのアブリストであり、ツーといえればカー式で、一行の文章でも写真の数十倍の興奮を感じると思う——全裸の就縛でうける鞭、熱火のローソク、吊り責め。六尺一本で女サジに責められる愉悅は活字にしても

全裸麻縄強烈縛

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

モデル 山原 清子

略号(いね)

その何れにも極めて深い趣向と経験を持つている山原清子嬢が、自らその全裸身を投げだして、力のかぎりの強烈な麻縄しほりを望み背中いちめんに彫った玉取姫を男の足で、めちやくちやに踏みこみじられ、顔を足で踏みこみじられて歓喜の声を挙げる場面をスナップした中の八枚です。

裸女レスリング

大手札印画紙焼付

四十枚一組 三五〇〇円

モデル 山原清子、大塚啓子

略号(れす)

二人ともパンツ一枚の外は何にも身につけないという素裸で、あられもなく格闘を続けるところを早いシャッターで次々とシャッターを切つていった動きのある女性レスリングの場面の中、迫真力があつて且つ鮮明なものばかり四十ポーズを選びました。若々しい二つの女体が組んずほぐれつ、美しく躍動してエロチシズムの中に女だけの醸し出す明るいサドとマゾが画面に満ちています。プロレスのファンであるという肉体派の二人が真剣に力のありたけを出し合つて、実演したレスリング・Mフォトです。の方もSの方も御一見をおすすめていたします。

極上の美であらう。女性マゾ、サジの数には少ないだろうし、誌上に名のつて出る人もないようだし、男性でも結構、マゾ、サジの方々と胸襟を開いて語り、責め、責められたりしたい。小生は若くはないが、年令に差別なく、男女マゾ、サジの方々と、おたがいに秘

密厳守、交友したく、書面を待つものである。(東京都渋谷局止八中村一雄)

三月二十七日、春特有の砂あらし、しかも、今日は、冬型の気圧配置ということで北風が吹き荒れ、最高気温十二度とのこと、雨

四馬孝画廊

浣腸美媚態

△女体浣腸の極美▽

大中判(13×18) 印画紙焼付

三枚一組 六〇〇円

略号(のゆ)

- 一、美しい令嬢の浣腸
- 二、女事務員の浣腸の場
- 三、女学生の浣腸私刑

女体切腹図絵

△時代物女性切腹▽

大中判(13×18) 印画紙焼付

五枚一組 一〇〇〇円

略号(しせ)

- 一、若き姫君の切腹
- 二、介錯を受ける娘
- 三、娘切腹落城の哀史
- 四、夫の前で若妻切腹
- 五、愛人の娘を介錯

浣腸責め図譜

△強制浣腸五態▽

大中判(13×18) 印画紙焼付

五枚一組 一〇〇〇円

略号(しえ)

- 一、片足吊りの美女浣腸
- 二、いちじくの恐怖
- 三、高圧浣腸に喘ぐ美女
- 四、硝子ポンプ乱舞す
- 五、イルリの大量浣腸

浣腸責め図譜

△浣腸緊縛五態▽

大中判(13×18) 印画紙焼付

五枚一組 一〇〇〇円

略号(しえ)

- 一、踊子のイルリ浣腸
- 二、ヒマシ油強制下剤

- 三、迸しり出る浣腸液
- 四、女体浣腸用責衣
- 五、両足吊りイルリ浣腸

羞恥責め絵巻

△異色責め五態▽

大中判(13×18) 印画紙焼付

五枚一組 一〇〇〇円

略号(しい)

- 一、灌水による人工妊婦
- 二、浴槽の女神を責める
- 三、三角木馬の責め
- 四、全裸の柱抱き責め
- 五、女体洗滌

戸もしめて電気スタンドの青色の灯をたよりに便箋に向っているところ。側ではこの春だというのに、石油ストーブが真赤になつて、ヤカンがゴトゴト鳴り、耳もとでは、ナショナル・パナソニックから、FM放送のモーツァルトのケッヘル二十九番が流れて来て、ふす間をしめ切ったこの四畳半は、まさに、夢幻の世界に浸るうとしている私の為備えられているような構図です。申しおくれましたが、編集部の皆様、又、その他、代理部等の方々も御清栄のことと存じます。五月号の表紙はよ

かったのですネ。みどりと橙の美事なコントラストで、中央の絵も一段とすばらしく見えます。最高の出来ですネ。と同時に、あまりにも目を引きすぎるのじゃないかと心配にもなりました。ところでこの頃、気がつく、私が奇クを買うのは、大体二軒のうちどちらかに決っているのですが、そのうちの二軒で奇クを見ていると必ず、一人は、この書店に奇クを見にやってきました。読者が意外に多いことにまず驚きました。彼等は、書店で読むだけで、買っているのではないようです。保存にこまる為

か、財力がないのか、その辺はよくわかりませんが、彼等が奇クを買ったら相当、貴社も楽になるだろうに等と、くだらないことを考えております。もう一つ驚くことは彼等が、ほとんど困りを気にしないことです。彼等はスーッと入って来て、他の物には、目もくれず、奇クのおいてあるところに来て、さっと手をのばし、或者は「花と蛇」の頁をペラペラとめくりあて、そこだけを読んで、帰ってしまふようですし、又、或者は目次を見て、興味のあるものだけを読んで帰ってしまうといった具合

合です。彼等の大胆さには本当に驚かされます。私等、まだ日は浅いにしても、まだまだビクビクしながら買っている始末です。さて五月号では、久我庄一氏の書かれた物が一番、印象に残りました。これから、誌上で、大いに啓蒙して下さいますようお願い致します。私はよく知らないのですが、西条操氏はじめ、多くの方が御意見を述べられたようですが察するところでは、私も大いに、その多くの意見に賛成です。要は、まず自己の確立を目ざし、あやふやな衝動的な言動をつつしむようにす

べきだということだと思ひます。読者通信も、もっと高級(?)なものにすべきなのかもしれせん。では、今回はこの辺で、お体を大切にさようなら。(東京都八泰生V)

○

日一日と春らしき氣候になつて参りました。奇々五月号、昨日求めました。奇々は小生が一番好きな雑誌ですが、編集部の方にお願ひがあります。小生は、M・S傾向の告白、小説共に大好きですが、特に、男性の奴れい志願者が女王様の前で恥かしめを受けているような告白、小説を多くして頂きたいのです。例えば数年前の平伏人氏のもの、数カ月前の「虹のあじさい」などは、非常に好きです。この外、五月号の「直腸鏡検査の事など」おもしろい。さうなのような、特殊診察、手術を受けた記事は好きです。次に、グラビヤは無い方が良く、中のフォトは、愛読者のものも素人でしょうが、苦心した後がよくわかり、投稿写真もすばらしいので、是非、多く載せて下さい。写真は、やせ型の女性であれば、四十才位の年齢の方でも、良いものです。自分勝手な事ばかり、お願いしました

が、編集部の方々も、是非、小生の希望もかなえて下さい。よろしく。(静岡八藤井正好V)

○

五月号の発行もややおくれ一寸心配させられました。森田氏の奇々サロン、文章ともに気に入りましたが、前の森田氏の絵と同巧異曲なものと、大名の奥に仕える老女の岩藤にしては衣裳が少々変なのが(芸者のようです)残念です。森田氏の麗筆で斬られて断末魔の苦悶でめづっているところなど御願ひしたいと思ひます。女斗美八景も良かったのですが、挿絵やカットもなく、物足りませんでした。他にカットの良いのがあっただけにこの点の充実も編集者に宜敷く御願ひしたいものです。伝統芸術の歌舞伎が、凄惨な殺しの場面を美化し、背景、衣裳等を出来る限り美しく、対比させている精神こそ我々女斗美ファン目的でもあります。それから洋画の「ギロチンの二人」スチール等に生首ファンにとって見のがせないものがあります封切を楽しみにしております。(中屋敷真)

川崎市、中村優子様「K誌」五

月号の読者通信を拝見し、お便り致します。私は二十七才になる男性です。今では毎日いそがしい仕事に追われながら、毎月買った何十冊という「K誌」や分譲写真を引っぱり出し、空想にふける時が唯一の楽しみになっております。今まで私も、プレイは勿論、このような事を話し合う友達もおりませんでしたが、五月号の貴女の読者通信を何回となく読ませていただき、貴女なら私の趣味とあうのではないかと、かつてながら想像し筆をとった次第でございます。私もS・M両方に興味があり(Sの傾向がいくらか強いようです)といつても、Sの場合もMの場合も、やはり相手は女性に限られますが、もう十年も愛読しているK誌の影響で、縛り、責め等に対し私なりに色々なアイデアを持っております。私の縛り、責め等のアイデアは、プレイの経験が無い為、非常に幼稚なものかも知れませんが、貴女のような女性とプレイとまではいかなくとも、私の考えたアヌス責め、乳房責め等に對し、いろいろ意見を交換する事が出来たら、どんなにすばらしい事かと思ひます。幸い、私は狛江に住んでおりますので、貴女が

川崎市のどこにお住いかは解りませんが地理的には非常に近いのではないかと思われ、もし御指定いただければ、どこへでも出向いて参ります。ただ某団体で事務をとられてゐる貴女も同様かと思ひますが、自分で商売をしておりますので、休みの日曜日以外はほとんどいそがしく、出来る事なら、土曜日の夜か、日曜日にお会いいただけたらと思ひます。貴女は、特に女性の方をお望みだったようですが、あまりに興味があいそうなので、地理的にも近く、私には友達をつくる又とない機会に思われましてので、敢てお便り申し上げた次第でございます。(北多摩郡狛江町八阿部彰V)

○

待ちに待った五月号を早速、購入し胸を躍らせて読んでおります。世間の強い風当たりを真ッ向に受け刊行を続けておられる苦心の程、充分推察しております。永年奇々を愛読し、内容を熟知している固定のファンは、生半可な写真や絵がなくとも全く痛痒は感じないと思ひます。公開を危惧される写真、絵画等は、特別分譲にして、その代り思い切った企画で発表していただきたいと思います。本誌

の方は精々内容の方で、盛り上げていただければ活字の羅列でも結構です。もっともこれでは新規の愛読者が増えないかも知れませんがね。私、個人の意見は右のような次第ですが、五月号も一読したところ、大変淋しく感じました事は、私の強く期待し待望しております、女性S、或いは男性Mものの、コクのある連載編ものが一向に登場しない事です。今回もこの点で失望致しました。色々差支えもあることと思いますが、この点もう少し考慮して戴きたいと思ひます。私は東京に住居を持ち、地方各地へ出張しておりますが、Mフォトの男性モデル募集の項で時間の都合上、京阪神地区在住に限るとの事、前回のMフォトを拝見するに及び、大阪方面に住む人が、うらやましくてやり切れません。関東方面では永遠にこのような機会に恵まれないのでしょうか。今回、発表の新作Mフォトのモデルが、山原清子さんとのこと前回のフォトの出来映にひかれいかなる傑作かと、胸を躍らせております。一気に欲しいものの全部を御願ひしたいのですが、目下、小使い逼迫の有様、差し当って次の通り送っていただきたく御願ひ

致します。余裕が出来次第、順次追加を御願ひ致します。猶、前にも書きました通り自分も一度は実際にMフォトのモデルのように体験してみたいという願望が強くこれが出来ない不満をMフォトのモデルの男性を自分に置換え得心しているわけです。いつもMフォトを得て思う事は、作為的な解説文でも結構ですから撮影当時の経過をつけて戴けなければ一層感激です。色々好き勝手な事を書き並べましたが一フアンの声として留意願えれば幸甚です。(秋田県八原井弘)

五月号奇クサロンの、新田さんへ。十三頁下段の写真は実に素晴らしかったと思ひます。思わず見とれましたね。縛りだとか切腹などには全く興味を持たぬ私ですがあれを見たら何だか縛りの良さが少しは解ったような気が致しました。写真その物の出来は別としても構図がいい。デフォルメされたお尻に縄が又とない素晴らしいアクセサリーとなつて、背景の点で聊か物足らぬ所はあつても、髪型もいいし、全裸でなくパンティが準主役となつた所など格別ですよ。それに縄のコブも利いている。全

春川ナミオ画

女体下敷力作M画決定版

分譲用秘蔵版 大判判画紙鮮明焼付 七枚一組 三〇〇〇円 略号(ぬけ)

益々凄くなつてきた春川ナミオの傑作M画

M派マニヤなら、先ずこの一組を!

- 一、女の股間で圧死する
- 二、行水の美女の尻敷き
- 三、見事な美女の臀部
- 四、人間ハンモックの男
- 五、人間椅子尻に喘ぐ
- 六、逆エビの背に蠟燭責
- 七、臀部に埋れた法悦境

くの所「美」を感じましたね。芳野氏ではないが、あの一枚だけで参百円中の半分位の価値が私にはあります。見事でした。御夫妻の御多幸をいのります。(細田隆)

初めて御便りをさせていただきまず。随分色々考えた末に筆を取った次第です。私はサド性の強い女性です。昨年の十二月に都内の映画館に私一人にて映画見物に行った時の事です。私が二階の一審あとの方で、見ていたら四十才位の男の人が私の横に座りお茶にさそわれました。その後、初めて奇クを見せられ私に顔の上に座るようにたのむので、私も面白半分には座ってやると、私にネクタール

をのませてくれというので、私も初めはイヤダといったのですが、あまりたのむのでのませてあげた事が有りました。それから内緒で貴誌を買い、見るように成りました。私は若い男の奴隷には興味がありません。私のお尻の下になりたい人、又、私のトイレになりたい四十才以上の人は私の所に返事を出さない。家庭では妻子があり、職場では人の上に立っていはって居るような人、私が恥かしめてあげます。身分の分らない人、職場でも下位にいる人は御断り。志願者がいたら返事をしなさい。連絡の場所等を書き身分書も書きなさい。本当に、私に忠節を心から願う人だけ待っております。

(東京都立川市八太田恵子)

四月も近いというのに当地ではまだ雪が降っています。四、五月号を拝見しましたが、私としてはグラビヤのなくなったことは却ってさっぱりした感じです。『女斗美八景』も完結し、佐藤様には是非続編をお願いしたいところ。私のごひいき女優も次々に首になり満足しましたが、四月号のアマゾン軍尖兵隊長として十朱幸代を登場させてもらいたかった。彼女の生首もみごたえのあるものでしょう。日本の女軍といえは義仲のそれ位しか知りません。彼女たちも討死の瞬間には充分の満足を得つつ首をとられたものでしょう。生

きながらえた巴や山吹よりも美しい生首を梟木に晒された葵の方が最も幸福であったかも知れませんが。死後三日を経ても美しさは変らなかったといえますし、決してそれ以上、老い朽ちることはないのですから。尚、続編の場合、外国物はやはり外国女優の配役の方がおもしろいと思います。五月号ではこの村松英子こと静御前の生首のほか、『見世物放浪記』でも挿絵に二つの生首がありました。しかし、三人目への刃はどうして頸すじに加えられないのか。首のとぶ瞬間の絵も何とか法にふれるでしょうか。これが生首マニヤにはものたりないのです。せめて分譲の方をお願いします。そういえ

ば、前川様がこの頃、不作です。お変わりありませんか。山田風太郎氏が某週刊誌に愉快な忍法小説を書いています。戦国時代に登場する英雄美人が一堂に会し、敵も味方も実際の勝敗もメチャメチャで今後どうなるのか見当もつかないのですが、これにヒントを得て、古今東西の女死刑囚を集める話を想像しています。私も短篇の方はチョイチョイ採用になるのです。が、四十枚以上の作品となると佐出須登氏のノートを借用しているのにすべて没。前回、書くのはもう止めたといいましたが、今月号で『絞首刑にされる女』が採用になったのでまた書くことにしました。この点『啓子散華』でアント

ワネット、ジャンヌ・ダーク、楊貴妃らが登場したのは私の希望と一致し、つぎを期待したのですが、休みとは残念。六月号がまた来ます。例により、とりとめないことになりました。ではお元気で(宮城県八黒田寿)

○ 芳野兄、内容の反省も文字の推敲もせずに書きなぐった私の一月号の告白文を、入念に読んで頂いて恐縮致しております。兄の「悩ましのサジイズム」は完結を控えて枯淡な麗筆がますます冴え、被虐と錯倒の妖しい美しさをまざまざと示して読む者を恍惚とさせてしまします。正に「花と蛇」と共に奇クの文芸作品の双璧をなすも

四馬孝秘蔵版画集

口絵を廃止したために髀肉の嘆をかこっていた四馬孝氏が、特に分譲品用として登場の女主人公をすべて全裸に剥いで、美しくも目ざましい嗜虐絵巻を完成して下さいました。大中判の極めて鮮明な印画紙焼付により、秘蔵版の素晴らしい責絵巻を皆様の座右にコレクション下さい。

△責められる美女波津子の痴態▽

大中判(13×18) 印画紙焼付 五枚一組 一〇〇〇円 略号(しお)

白く輝くような肌に、どす黒い縄が無惨にも喰い込んでいます。

- 一、恐怖の浣腸責め
- 二、柱アグラ抱き責め

- 三、庭のハダカ責め
- 四、チエン・ブロック
- 五、荒縄の股間縛り

△可憐な少女加奈子の羞恥責め▽

大中判(13×18) 印画紙焼付 五枚一組 一〇〇〇円 略号(しる)

捕われた美少女加奈子に襲いかかる男たちの嗜虐的な眼。

- 一、ローソクの火責め
- 二、裸のヨチヨチ歩き

- 三、逆エビの柱吊り
- 四、股間縛り被虐の絶叫
- 五、緊縛美体の鑑賞

のでして、関連したマゾ絵、マゾ写真と共に一本にまとめた臨時増刊が発行されるのを期待していますのは、私一人ではございますまい。さて、五月号で兄がショール・ホウエルに触れて（ムゾカシイことが好きだったのは、その頃だけで）といっておられますが、その主著「意志と表象としての世界」を彼が要請したように最初の一行から最後の一行まで二度お読みになったのでしょうか。タイランの格率に従って正確に論じ、しかも詩の光茫を放っているあの浩瀚な書物を入念にお読みになっておられたのなら、彼がマゾヒズムや切腹などについて深い省察をした人であったのにお気づきにならないかったです。わたくしは文学とその周辺の人文科学については全く気配なディレッタントに過ぎず、つねづねその道の方に教えられることを願っている者です。過日、編集部へ「淪落した悪女の手紙」と題する拙作を送付いたしました。掲載されましたときは是非、兄のご高評を賜りたいと存じます。（福田久文）

○ はじめてお便りをします。貴誌は、五年程前から愛読しております。

す。いままでにも何度かお便りしようと思いつながら、やめてしまいました。今回は勇気を出してペンをとった次第です。二十七才の独身でS・M浣腸に興味を持つ者です。いずれも責める方ですが、いまだに相手にめぐり逢うことが出来ず空想でしかありません。しかし、もしプレイの対象にM女性とめぐり逢うことができたなら、まず裸にして後手高手小手に縛り、両足首を縛り、乳房責めや、浣腸責めなどでお互いに満足するまで責めたいなどと想像しています。S・Mプレイに興味を持ちながら、その相手にめぐまれず人しれず悩んでおられる女性の数はかなりいるものと思われれます。特に都内及び近郊のM女性で責められたいと思いつながら相手が見つめられず悩んでいらつしやる方は、一度勇気を出してお便り下さい。またプレイする勇氣はまだでないが興味をお待ちの方でも結構です。話し合いだけでも致しましょう。それから全国のM女性の皆さんお便り交換しましょう。たとえばプレイできなくとも文通による精神的プレイも楽しいではありませんか。お便りをお待ちしております。（千葉八小島敬二）

○ 編集部の皆様、そして愛読者のみな様、御元気ですか？ 苦難の多いつまらない人生ではありませんが、こんなブロックがあるので人生も一層楽しいものです。「ああ生きていて良かった」という生の喜びを発見し得たことに人知れずしみじみと感謝する次第であります。私はもうすでに六十才になりますがMでSの女性の方で私の顔の上に、お尻や股を押しつけたりして虐めて下さるお方がおありでしょう。年令は問いません。その他のことも服従致します。どうぞ宜敷御願ひ申し上げます。編集部のお方にお願ひします。誌上通信欄では（滋賀県八池田春夫）として下さい。では成る可く六月号に出して頂き度く思います。（滋賀県八池田春夫）

○ 美柳輪生さん。貴方の五月号「箱詰めされたドレイ青年」を拝見しました。私もこのような姿でフォトに収められたいものです。私も実を申し上げますと、犬の首輪をはめ、鎖を垂らし、両手首と両足首に小犬用の首輪をはめ、パントリー一枚の裸体で、自室の畳の上を、四つ這いになり、あちこち

這い廻り、洗面器に入れた残飯を両手を後に自縛して、食ったり、畳にこぼしたミルクを、犬のようにペチャペチャ音をたてて飲む等Mプレイを時々行っている者ですが、ある日プレイ際中に、ふと詩めいたものを作ったことがあるので次に記してみます。「裸になれ、なにもかも、脱いで裸になるんだ。お前はドレイになったんだ。いや犬畜生になり下ったんだ。首輪をはめろ、鎖を垂らすんだ。鞭だ、鞭で思い切り背中を打つんだ。打つんだ。ピシッ。ピシッ。思い切り尻を打つんだ。打つんだ。四つ這いになって、歩け、床をなめるんだ。地べたをなめる、ゴミ箱の中に首を突込んで、ガッガッ食え。お前はドレイだ。犬畜生だ。お前は人間じゃない。ドレイだ。犬畜生だ。それを忘れるな。まあ、こんな、愚作ですが、実際に私はこの詩をポスター用の白紙にマジックインキで大書し、部屋の壁にはりつけ、プレイを行いました。この詩を声を出しながら幾度もくり返していると思ふに、摂氏三度か四度という室内の寒さを忘れて、夢中になって自分で自分の背中や尻を鏡に写しながら、思い切り、鞭打

残部僅少！お申込みはお早く

○左記一覽表の中、価格の記してあります分は、只今でしたら在庫しておりますから、御送金次第急送申し上げます。

○送料は当社にて負担いたしますが、定価一五〇円の雑誌のみは送料を含めてお申込み願います。

既刊号在庫案内

昭和35年6月号（定価三〇〇円）
昭和35年7月号（売切）
昭和35年8月号（売切）
昭和35年9月号（売切）

昭和35年10月号	昭和35年11月号	昭和35年12月号	昭和36年1月号	昭和36年2月号	昭和36年3月号	昭和36年4月号	昭和36年5月号	昭和36年6月号	昭和36年7月号	昭和36年8月号	昭和36年9月号	昭和36年10月号	昭和36年11月号	昭和36年12月号	昭和37年1月号
(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(送共一七〇円)	(売切)	(送共一七〇円)	(売切)	(送共一七〇円)	(売切)	(売切)	(売切)	(定価二〇〇円)	(定価二〇〇円)	(売切)	(売切)

[illegible]

昭和38年12月号	昭和38年12月号	昭和39年1月号	昭和39年2月号	昭和39年3月号	昭和39年4月号	昭和39年5月号	昭和39年6月号	昭和39年7月号	昭和39年8月号	昭和39年9月号	昭和39年10月号	昭和39年11月号	昭和39年12月号	昭和40年1月号	昭和40年2月号	昭和40年3月号	昭和40年4月号	昭和40年5月号
(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価二五〇円)	(定価三〇〇円)

○極めて在庫の僅少な分がございますので、第二希望品がありません。
 たらお書き添え願います。

ちました。連作とありますから来
 月号に又、載ることでしょうが、
 出来ればフォトを四、五枚譲って
 頂けませんか。誌上にて、御返事
 を御待ちします。(宮城県八ミ
 ター奴隷生V)

読者の皆さん、長らく御無沙汰しました。時々この欄にもお仲間入りさせていただいた私ですが、一身の都合でちよつと国へ帰って

おりましたため、心ならずも御無沙汰してしまいました。今度ふたび大阪へ出てまいりましたので、またよろしくお願いします。以前より成長しました私の姿をもう一度緊縛写真にとっていたかどうかと思います。それに、私の故郷での生活のことなども拙い筆ながら書いてみたいと思いますが、今まで書いた文章がほとんど没になっていきますので、気のりはしません。

それでも書きたい事柄は沢山経験してまいりました。本誌に私の記事をのせていただいてから、もう大分になります。その間に読者の同好者の方とプレイをしたり、結婚生活をしたり、いろいろの体験をしてきました。それでも、縛られたいという気持は変わりません。どのような境遇が変化したって私の気持って変らないのですわね。一時はカメラの前に立つのはいや

になつた私ですが、春めいてきま
すと、思いきりきつく縛られて写
真に撮つて貰いたい氣持がわいて
くるのです。それに縛りだけでは
なしに、攪り責めや浣腸責め……
こんなことを考える私つて、変で
すわね。これからは、もうどこへ
も行きませんから、どうか、こん
な私を可愛いがって下さいませ。
(大阪／東浦ひかるV)

 \dot{O}

女性モデル募集

○本誌では、口絵写真並に限定版用或は分譲写真用の女性モデルの方を募っております。

○誌上発表支障の方は、限定版又は分譲用フォトに出演していただきます。又、助手介添若しくはプレイのみ出演御希望の方でも結構です。

○出演或は参加御希望の方は、編集部宛御照会下されば、報酬その他詳細お返事の上、お打合せいたします。応募の方の秘密

は厳守いたしますから御安心のうえ応募下さい。

○緊縛写真御希望者は勿論のこと女相撲、女斗美、切腹、流腸などを初めとして、Mフォトのサジスチンとして出演ご希望の方など特に歓迎します。

○本誌の充実のため何卒奮ってご応募下さい。余暇を利用してのご参加でも差支えありません。特に妊婦フォト撮影可能の方は遠近に拘らずご連絡下さい。

天星社編集部

私は東京に住んでおり永年に亘り貴誌の熱心な愛読者です。グラフィックがなくなったのはやむを得ないですが、誌面に映画演劇で美女の縛られた場面が出る題目とストーリーの紹介を是非多くして下さい。出来れば白表紙の時の如く、映画演劇の写真を載せて下さい。

二月青木順子ショーのあった月光館（貴誌四月号記載）へ二度行きましたが、右ショーは全く普通のストリップだけであつかりました。同館の人にいつやるのかと聞きましたが見込み立たずとの事であつかりました。青木順子の

出演する劇場も貴誌の発行を見て見られる様予告して下さい。（東京八愛読生V）

愛読者の皆さん、今日は。四月にはほんとうに天からとび下りるような気持で、ペンを持つ手もふるえながら、ポストへ手紙へ入れるときも、身体中が、がたがたふるえるように仕方ありませんでした。それが、こんなに沢山のお友達と親しくなれて、自分はひとりぼっちではなかったと、今は幸せな気持でいっぱいです。こんなんだつたらなせもっと早くお便りを

出さなかつたんだろうとそんなことさえ考える今日この頃でございます。毎日の仕事さえ張り合いができ、自然に笑い顔になってきます。どっちかといえば、映画を見たり、劇場へ行ったりするよりもひとりで読書する方が好きな私ですが、これからは、うんとお手紙を書き文通や交際も楽しみたいと思います。先輩の方々のお便りにより私も大分啓発されました。お手紙をたくさん下さいました読者の皆様や通信をお寄せ下さいました編集部の方々に厚く御礼申し上げます。職場でもたった一人、家へ帰ってもお友達もなく、淋しかった私に、こんなにたくさんのお友達を下さったのですもの、ほんとうに嬉しくてたまりません。どうか、これからも、よろしくお願ひいたします。（大阪市八山村幸子V）

クラブの皆さん、お変わりありませんか。小生七年前から愛読者です。小生お恥しい話ですが、八年前に離婚しました。原因は妻の不貞です。急な腹痛のため帰宅した小生は妻の不貞を目の前に見て、思わず頭が狂いそうになりました。相手の名前と素性を言わすた

め一晚中責めてみました。しかしとうとう妻は白状しませんでしたので、それから責めているうちに妻は密通者と逃げてしまいました。誌上で申し上げるとよいのですが、それも出来ません。責めにきょうみをお持ちのお方がありましたら、お便り下さい。小生の不貞妻に対する責めをくわしくお話し致します。（福井県敦賀市八T M生V）

奇く愛読者女性の皆さんはじめまして。四月号「読者投稿写真」小林宏さんの作品を拝見し、一愛読者として意見をのべ女性の方々の御意見、体験談を語り合いたいと思ひペンを取った次第です。「縛られた若妻」という題名でしたがポーズ、顔の表情、用具、等は申し分ありませんでした。しかし服装に難点が見えるような気がします。このプレイの場合、男性の白Yシャツというのは若妻を襲う印象が出ていないと思います。又女性の方は洋服でなく和服の方が良かったと感じたのは僕一人でしょうか。全国のプレイファンの女性の方僕にお便り下さいませんか。互いにプレイに付て語り合おうではありませんか。（東京都八

小川博▽

川崎市の中村優子様。貴女にお手紙したくペンをとりました。現在私は横浜市に住み働いております。がKクラブ愛読二年余、初めて隣の川崎市のような身近かに貴女のような理想の女性がおられる事を知り初めてペンを取りました。大学中退後、現在会社に勤務しております。私は二十五才男性でスポーツは水泳、柔道、野球が得意です。読者通信を毎号の楽しみとして希望を持っておりましたが、ペンを持つこと無く現在になつてしまいました。私は自分がS八分M二分の割合ではないかなども考えますが、やはりS傾向の方が強度の興味を持っております。貴女はS四分M六分程度とか、バランスのとれた意見の交換、交際が願えるのではないかと思います。私はまだプレイの経験は皆無ですが、色々机上のプランは考えております。女性の羞恥心を利用した責、アヌス責等最高の責ではないでしょうか。自由を奪った若い女性に浣腸責など考えるだけで

胸が高鳴ります。まだまだ未熟な現在ですが、十分研究し勉強し満足な友として交際出来るよう努力いたします。時には、美歌夫人に成った貴女に古城真に成った私を責められる事も希望します。(横浜市八山本和雄▽)

満二十四才、マニアの男子。同好の女性との文通、出来れば結婚を期待しております。私は小学校入学前既に浣腸の味を覚え、それ以来二十年近く、一人秘密の楽しみにふけてまいりました。数年前、本誌を発見し、私以外にも浣腸のお好きな方が、おられることを嬉しく知り、将来必らず同好の女性と結婚しようと思いました。浣腸は施術(する方)も被術(される方)も、どちらも好きです。浣腸以外のアヌスプレイにも興味を持っています。文通交際は年令を問いませんが、結婚は三十才以下の方を希望します。大柄な方でも小柄な方でも、かまいません。尚、私は身長一六九センチ、体重五〇キロ、大学卒です。(東京都△吉田和雄▽)

次号(七月号)は五月二十五日に発売いたします

始めてお便りいたします。大阪富田林市の河村隆子様。貴女のお便りを四月号にて拝読させて頂きました。さぞお一人で淋しい事だろうと思います。私は西宮市内に住む三十三才のサラリーマンです。どうでしょう、私とお友達になつて頂けませんか。想像ですが貴女はきっと、スタイルの良い素晴らしい人だと思えます。貴女のよき人を全裸にむき、後手に縛り上げるそのような事を、日夜思い続けており、仕事も余り手に付きません。私は決して縛った貴女をどうのこうのとするような無分別な事は致しません。一度お便りが頂きたいのです。文通してお互いに人格を認めあつてから、プレイをしたい、かように考えております。私は奇クを八年間程読んでおり、色々古い本を持っています。(例アリスの人生学校等)貴女が望みならば差し上げてかまいません。私の通信が六月号に載りましたら、尼崎市塚口郵便局止、松田明宛お便り下さい。お待ちしております。五月六日に局へ受け取りに行きます。どうか宜ろしくお願い致します。(西宮市鳴尾町△松田明▽)

川崎の中村優子様。小生奇ク五月号より貴女の呼びかけを楽しく読ませていただきました。小生S的傾向の者です。以前から貴女のような方とお話してみたいと思っております。ですから貴女の呼びかけを知った喜びはなんとも言えません。貴女は特に浣腸責めがお好きとのこと、大変うれしく思います。小生二年程前胃の病氣をした時、浣腸をしたことがありました。その時の気持は大変なものでした。現在もガラスの浣腸器を持っています。貴女は女性の方を望まれていますか、小生と一度お会して下さいませんか。貴女の住所をお知らせ下さるだけでも結構です。お互いにSMについて色々とお話したり文通したく思います。小生昨年大学を卒業し、現在家業を営んでおります。年は二十四才です。浅草に住んでおりますが自家用のブルーバード(六四年式)に乗って川崎まで参ります。ぜひお会して下さい。次の日々にかならず、お待ちいたしております。五月十五日、二十九日、夜七時半、川崎さかい屋正面入口。又五月十六日、三十日の午前十時横浜駅西口。(東京八富田道夫▽)

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記▽

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるるのたとえどうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語▽

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月

分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信▽

新聞記事等で関心をお持ちの事項或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作

成の各種フォトを贈呈いたします。

△読者通信▽

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思い出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

△奇クサロン▽

奇クサロン向きの短文、マニヤ通信、写真絵画などを募ります。文章は原稿用紙三枚まで。採用篇には薄謝進呈します。

☆編集後記☆

○今月号でグラビヤ写真、口絵のない号が三カ月続いた。幸い売行きの方も、かえって以前よりよいくらいで喜んでゐる。たしかに、街を歩いても余り見かけなくなつたし、読者からの通信でも入手しにくくなつたことを訴えている。しかし、大都会では探せば買えるので扱っている書店では、案外部数が増えているのではあるまいか。

○中田明氏から、三月号のサロンに載せた編集室だよりの記事に抗議してサロン原稿を寄せられた。是非今月号に載せたい内容だったが、残念ながら一足おそく印刷にかかつていて間に合わなかつた。原稿も豊富になつたの

で、今増頁できるとしたら、先ず奇クサロンのページを倍にしたい。

○読者の声が非常に多い。読者からの苦情や要望も素直にのせたい。内容がくさらないうちに早くと思う。しかし、或る読者の方から同人雑誌的だと云われたときは、正直いってドキッとした。いささかショックだった。

○最近真面目な読者の方からの寄稿や投稿が増えて、嬉しいと思う。笑われるかも知れないが、本誌を紳士の雑誌にしたい。そのために、もっともっと改めねばいけないことや、努力しなければならぬことが沢山あることを自覚している。桜花爛漫の候、誌友の皆さまの健康を祝してペンをおく。

(四〇・四・一〇)

☆本誌御購読の榮☆

一月分(1冊)三〇〇円△送共▽
三月分(3冊)九〇〇円△送共▽
半年分(6冊)一八〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価三〇〇円

六月号 (第十九巻第六号)
(通刊第二〇三号)

昭和四十年五月二十日 印刷
昭和四十年六月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二
大阪阿倍野局私書函第十四号

発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)
(昭和三年四月三日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別取扱承認雑誌第一二二二号)

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に関する各条例に指定されないうよう充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しております関係上、未成年の方には絶対販売下さらないよう、特にくれぐれも、お願い申し上げます。